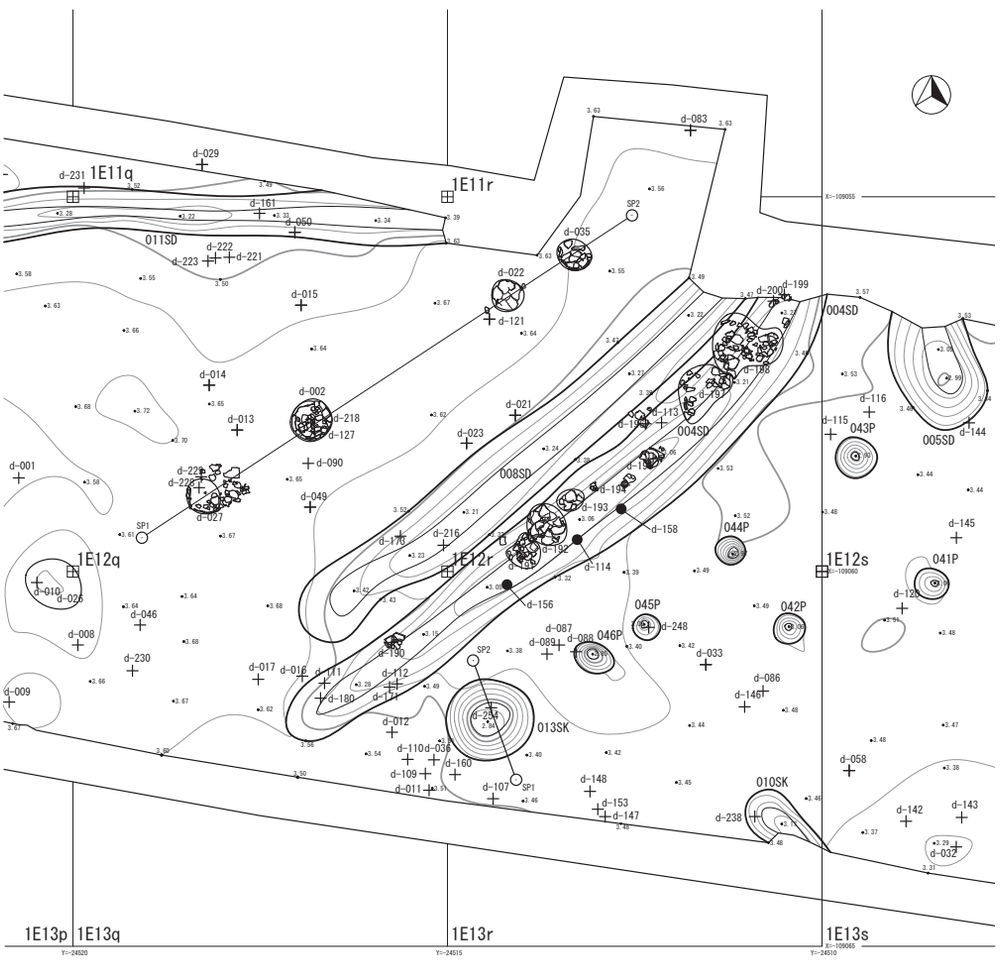
愛知県東海市

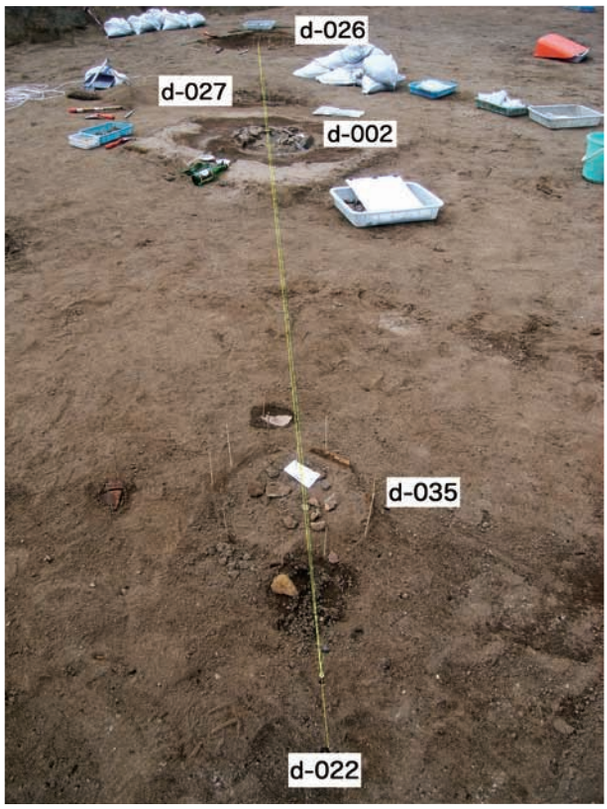
畑間（はたま）・東畑（ひがしはた）・龍雲院（りゅううんいん）遺跡発掘調査報告



２０１３年

愛知県東海市教育委員会

龍雲院遺跡（3 地点）前半区全景と名鉄太田川駅（平成 23 年 11 月 18 日現在）



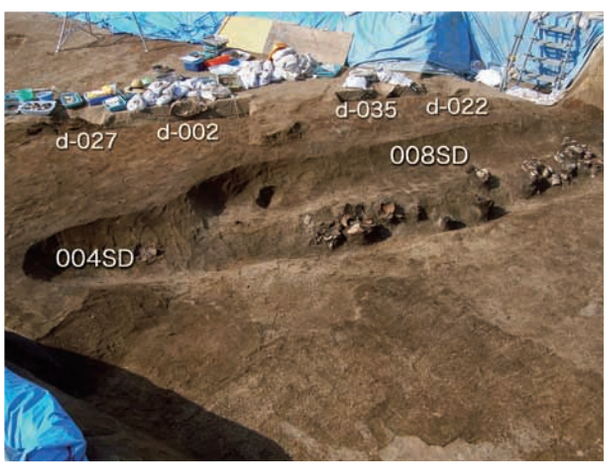
土器棺列見通し

d-002 土器棺断割り

土器棺列東組

土器棺列西組

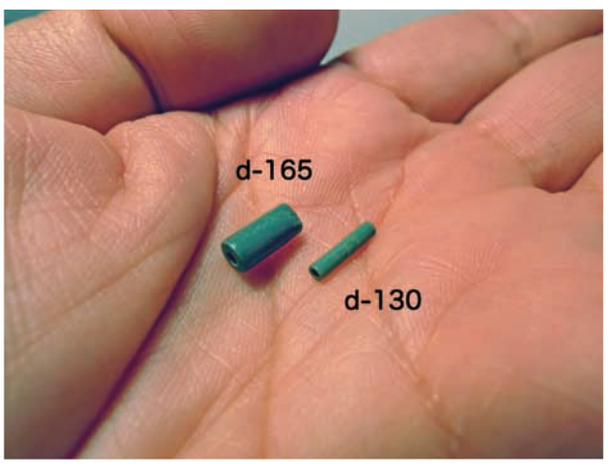
d-156 丸小鉢



土器棺列と溝の様子

001SB 住居址

土器の出土状況



床面出土の管玉

d-237 石鏃

調査区壁面にみられる皿状構造を呈する砂層

4 地点出土の石器

d-002 土器棺

d-027 土器棺

d-035 土器棺

d-022 土器棺

001SU 土器集積出土状況（まじない遺構）

001SU 土器集積全資料（手前右は馬の歯）

圧縮破砕貝層と土管 d-192

土坑墓（副葬品：山皿）

土坑墓（副葬品：短刀）

後半区全景

003SK 土器出土状況

地震による噴砂および液状化痕

3 地点主要出土遺物

加工円盤

中国青磁

d-298 祖母懐銘陶片

高所作業車による撮影風景

調査区全景（4 地点）

弥生期の土坑墓と土坑群（2 地点）

弥生期の土坑墓と副葬品（2 地点）

d-091 杏葉唐草文平瓦（1 地点）

序

愛知県東海市は、かつて万葉集にも歌われた「あゆち潟」に面した知多半島の付け根に位置する市です。現在は沿岸部に工業地帯が展開し、中部国際空港への鉄道路と伊勢湾岸自動車道が交差する交通・流通の結節点として発展を遂げています。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺を市の中心市街地と位置づけ、平成4年度から土地区画整理事業を進めてきました。これに伴い事業区域内に所在する遺跡の発掘調査を平成11年度から行っています。この発掘調査によって、かつて「あゆち潟」と共に生きた太古の人々の暮らしが少しずつ明らかになってきました。

本報告書では平成23年度に実施した調査成果を報告します。本年度の調査では市内では初めての出土例となる弥生時代の土器棺墓が出土するなど弥生時代における集落の様相の一端を知ることができました。今後、本報告書が地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

愛知県東海市教育委員会

教育長　加　藤　朝　夫

例　　言

1. 本書は、愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡、東畑（ひがしはた）遺跡、龍雲院（りゅううんいん）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、名古屋鉄道太田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施工者である東海市より依頼を受け、国際文化財株式会社西日本支店に「畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査業務」として委託し、実施した。
3. 本事業は、現地での発掘調査を平成 23 年 6 月 28 日から平成 24 年 1 月 31 日まで実施し、出土遺物の洗浄および一次整理作業を発掘調査期間の後半に現場事務所でおこなった。出土遺物への注記作業や復元・実測作業、二次整理作業は平成 24 年 4 月 1 日から国際文化財株式会社中部調査室清須事務所に於いて発掘調査報告書の作成作業と同時に実施し、本書の刊行をもって終了した。
   各地点の調査面積は以下の如くである。
   1 地点（畑間遺跡地内、HM11-1）：　149㎡
   2 地点（畑間遺跡地内、HM11-2）：　145㎡
   3 地点（龍雲院遺跡、RI11-3）　：　1,206㎡
   4 地点（東畑遺跡地内、HH11-4）：　369㎡
   5 地点（畑間遺跡地内、HM11-5）：　168㎡
   5 箇所合計調査面積　　：　2,037㎡
4. 現地調査は東海市教育委員会社会教育課主事宮澤浩司の監督の下、国際文化財株式会社中部調査室主任調査員坂野俊哉、測量技師豊島威信および山田敏夫、管理技士黒田忠明が担当した。
5. 調査の実施にあたって、東海市教育委員会、東海市中心街整備事務所、愛知県教育委員会、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、知多古文化研究会、㈱アーキジオ、株式会社島田組など、関係各位の御協力を賜った。
6. 自然科学分析のうち、3 地点出土埋葬人骨の人類学的な鑑定を聖マリアンナ医科大学解剖学講座長岡朋人氏（代表）に、同人骨の放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体分析、同人骨副葬品である短刀の X 線透過撮影および付着木質の樹種同定、鉄滓の分析、4 地点出土土器棺内土壌のプラント・オパール分析を (株) パレオ・ラボに、4 地点出土の管玉 2 点の成分分析を公益財団法人愛知県埋蔵文化財センター堀木真美子氏に依頼した。各地点採取の貝層分析は西野順二（国際文化財株式会社）がおこなった。
7. 調査および報告書作成にあたっては、青山博史、赤塚次郎、秋本雅彦、安部みき子、有馬啓介、伊奈和彦、池田陸介、石川明弘、石黒立人、井上由子、宇佐美守、内田恭司、浦谷斉、大塚正樹、岡田憲久、奥川弘成、奥野絵美、小栗康寛、筧和也、蟹江吉弘、川口洋次郎、鬼頭剛、桐山秀穂、楠部博世、桑野正文、今野和浩、相良茂、桜庭洋、清水正明、下谷雅子、新宅輝久、鈴木正貴、田井洋子、高野裕二、立松彰、辻弘和、辻広志、永井伸明、西村誠治、春本和浩、早川司寿乃、藤井恵美子、松下尚、宮原英明、山下勝年（五十音順）の各氏に御指導・御協力を賜った。
   ここに記して御礼申し上げる次第である。
8. 発掘調査と現場事務所に於ける出土遺物の水洗および一次・二次整理作業は、牟田神東勝男、平野光男、平野武光、斉藤勝亮、藤井恭彦、山本學、加藤雄二、シオネ･ホロプル･カインガ、神野攻一、神野満喜夫、山盛愛子、山崎久生、田中信也、中野真知子、水谷美子、岡本敦子、青山亨、青山宗靖、

秋田博海、西野功らの尽力により為し得たものである。

9. 出土遺物の実測･採拓およびデジタルトレースは加藤豊子氏､花井晶子氏､ナカシャクリエイテブ(株)の協力を得た。
10. 発掘現場および出土遺物の写真撮影は坂野およびナカシャクリエイテブ(株)がおこなった。
11. 今回出土した遺物、作成した図面、写真などの記録および資料はすべて東海市教育委員会で保管している。
12. 本書の執筆は坂野俊哉（国際文化財株式会社）を中心に、第 1 章第 1 節・第 3 節を宮澤浩司（東海市教育委員会）が行った。なお、第 5 章自然科学分析に関しては、各節分析各項目の冒頭に執筆者と所属機関を記してある。
13. 付載 1 では、平成 21 年度調査で東畑遺跡から発見された縄文晩期土器を紹介する。文中に掲載した拓影図の殆どは、立松彰氏によって採取されたものである。
    付載 2 は､畑間遺跡出土の杏葉唐草文の瓦を巡る考察であり､歴史的な報告書である『権現山古窯址』（白菊古文化研究所、1965 年）における久永春男氏による考察の引用を中心にしたものである。加木屋地区周辺に集中する瓦陶兼業窯成立の時代背景がわかりやすく考察されており、現在では入手不可能な調査報告書であることを考慮し、章全体を引用した。
14. 表紙には 4 地点で検出された土器棺列の測量図を使用した。

凡　例

1. 調査記録の方位及び座標は世界測地系の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。メートル =m 単位での表記を基本とするが、文中では必要に応じてセンチメートル =cm を用いている。
2. 標高は全て T.P.= 東京湾平均海面高度による。
3. 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』（2007 年版）を用いた。
4. 本書で使用する遺構番号および遺物番号は、種類種別に関係なく各地点毎に完結した通し番号を与え表記してある。遺構の場合は番号の後にその属性記号を、地点上げ遺物の場合は出土地点を表す d を先に記し、そのあとに通し番号を付した。（例 :d-001、d-123 など）
5. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。遺物の出土分布図に関してはその種類によって縮尺が統一されていない場合もあるが、各図に表示した。
6. 参考文献目録は巻末に一括して掲載した。

目　　次

巻頭図版
例言・凡例
第１章　調査の経緯と遺跡をとりまく環境
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　遺跡の位置と地理的歴史的環境 …… 2
第３節　畑間・東畑遺跡における既往の調査 …… 13
第４節　発掘調査の方法 …… 16
第５節　調査経過 …… 16
第２章　畑間遺跡（1 地点・2 地点・5 地点）の調査
第１節　1 地点の概要と遺跡の構造 …… 23
第２節　主な遺構と出土遺物 …… 23
第３節　1 地点のまとめ …… 33
第４節　2 地点の概要と遺跡の構造 …… 34
第５節　遺構と出土遺物 …… 38
第６節　2 地点のまとめ …… 44
第７節　5 地点の概要と遺跡の構造 …… 44
第８節　遺構と出土遺物 …… 49
第９節　5 地点のまとめ …… 49
第３章　東畑遺跡（4 地点）の調査
第１節　調査の概要と遺跡の構造 …… 51
第２節　主な遺構と出土遺物 …… 55
第３節　4 地点のまとめ …… 68
第４章　龍雲院遺跡（3 地点）の調査
第１節　調査の概要と遺跡の構造 …… 71
第２節　遺構と出土遺物 …… 77
第３節　龍雲院遺跡（3 地点）のまとめ …… 94
第５章　自然科学分析
第１節　貝層分析の結果 …… 96
第２節　東海市龍雲院遺跡から出土した人骨 …… 99
第３節　龍雲院遺跡における人骨の年代測定 …… 105
第４節　炭素・窒素安定同位体分析 …… 107
第５節　龍雲院遺跡出土短刀のＸ線透過撮影および付着木質の樹種同定 …… 109
第６節　東畑遺跡・龍雲院遺跡出土鉄滓の自然科学分析 …… 111
第７節　東畑遺跡で発見された管玉の蛍光Ｘ線分析 …… 113
第８節　東畑遺跡のプラント・オパール分析 …… 115

第６章　まとめ
－大田地区における遺跡の消長について－ …… 117
参考文献 …… 125
付載１　東畑遺跡出土の縄文土器…… 126
付載２　杏葉唐草文軒平瓦小考…… 137

挿図目次

第１図　東海市の位置 ……1
第２図　愛知県周辺の地質図 ……3
第３図　常滑層群の分布状況 ……5
第４図　第四系の地質図 ……5
第５図　周辺の遺跡分布図 ……8
第６図　遺構変遷概念図 …… 14
第７図　既往の調査地 …… 15
第８図　調査区位置図 …… 17
第９図　１地点セクション位置図 …… 23
第 10 図　１地点遺構平面図 …… 24
第 11 図　１地点北セクション図 …… 25
第 12 図　１地点西セクション図 …… 26
第 13 図　001SU 土器集積 …… 27
第 14 図　008SB 住居址様遺構…… 28
第 15 図　１地点主要遺物分布図 …… 29
第 16 図　古銭分布図 …… 31
第 17 図　土師器皿集成図 …… 31
第 18 図　陶丸分布図 …… 32
第 19 図　平成 20 年度調査区との位置関係 …… 34
第 20 図　２地点セクション位置図 …… 35
第 21 図　２地点北セクション図 …… 35
第 22 図　２地点南セクション図 …… 35
第 23 図　２地点西セクション図 …… 36
第 24 図　２地点遺構平面図 …… 37
第 25 図　弥生期の土坑群 …… 39
第 26 図　003SK・004SX 遺構の切り合い…… 40
第 27 図　007SX と付随する周辺の遺構…… 41
第 28 図　006SX・013SK 用途不明の遺構…… 41
第 29 図　036SK と d-004 大甕を伴う掘り込み　42
第 30 図　２地点主要遺物分布図 …… 43
第 31 図　５地点セクション位置図 …… 45
第 32 図　５地点遺構平面図 …… 46
第 33 図　５地点西・東セクション図 …… 47
第 34 図　５地点南セクション図 …… 48
第 35 図　002SK 土坑…… 49
第 36 図　５地点主要遺物・標高分布図 …… 50
第 37 図　４地点セクション位置図 …… 51
第 38 図　４地点遺構平面図 …… 52
第 39 図　４地点西・東・南セクション図 …… 53
第 40 図　４地点南セクション図 …… 54
第 41 図　003SZ 方形周溝墓…… 55
第 42 図　005SD・006SD 方形周溝墓？…… 56
第 43 図　004SD 溝 …… 57
第 44 図　４地点土器棺列 …… 59・60
第 45 図　010SK 土坑…… 61
第 46 図　001SB 住居址…… 62
第 47 図　013SK 土坑…… 63
第 48 図　４地点主要土器出土分布図 …… 64
第 49 図　４地点石器出土分布図 …… 65・66
第 50 図　４地点中世陶器類出土分布図 …… 67
第 51 図　土器棺位置関係図 …… 69
第 52 図　３地点セクション位置図 …… 71
第 53 図　３地点北セクション図１ …… 72
第 54 図　３地点北セクション図２ …… 73
第 55 図　３地点東Ａ・Ｂセクション図 …… 74
第 56 図　３地点遺構平面図 …… 75・76
第 57 図　001SM 貝層 …… 78
第 58 図　015SM・019SM 貝層 …… 78
第 59 図　016・017SX 石組遺構 …… 79
第 60 図　003SK 土坑…… 80
第 61 図　002SZ 土坑墓…… 81
第 62 図　023SZ 土坑墓…… 82
第 63 図　006NR・020SX・021SD・026SD
流路・溝群…… 84
第 64 図　山皿出土分布図 …… 87・88
第 65 図　茶碗類及びその他の製品出土分布図
…… 89・90
第 66 図　加工円盤・加工さいころ出土分布図 … 91
第 67 図　陶丸出土分布図 …… 92
第 68 図　砥石出土分布図 …… 92
第 69 図　鍛冶関連遺物出土分布図 …… 93
第 70 図　人体骨格各部名称 …… 99
第 71 図　炭素・窒素安定同位体比 ……107
第 72 図　短刀のＸ線透過写真・実測図……110
第 73 図　弥生期の多様な墓制 ……119
第 74 図　東海市大田地区遺跡分布図 ……122

付 表 目 次

第 1 表　地質年代表 ……4
第 2 表　東海市の主要寺院 …… 12
第 3 表　貝類個数表 …… 98
第 4 表　023SZ・d-026・d-085 出土人骨の計測値（mm）と示数 ……102
第 5 表　測定試料および処理 ……105
第 6 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 ……106
第 7 表　測定結果 ……107
第 8 表　分析対象一覧 ……111
第 9 表　EDS 分析結果……111
第 10 表　管玉・熔結凝灰岩・チャートの蛍光 X 線分析結果……114
第 11 表　管玉・チャート・熔結凝灰岩の科学組成 ……114
第 12 表　分析資料一覧表 ……115
第 13 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数 ……115
第 14 表　東畑遺跡における植物珪酸体分布 ……115
第 15 表　内海谷における相対的海面変化曲線 …122

写 真 目 次

写真 1　頭蓋の上面観……103
写真 2　第 11 ～ 12 胸椎の左側面観 ……103
写真 3　第 1 ～ 5 腰椎の上面観 ……103
写真 4　左右大腿骨……103
写真 5　年代測定試料……106
写真 6　短刀付着木片（ヒノキ科）の走査型電子顕微鏡写真……110
写真 7　鉄滓の分析画像……112
写真 8　東畑遺跡から産出した植物珪酸体……116

巻頭図版目次

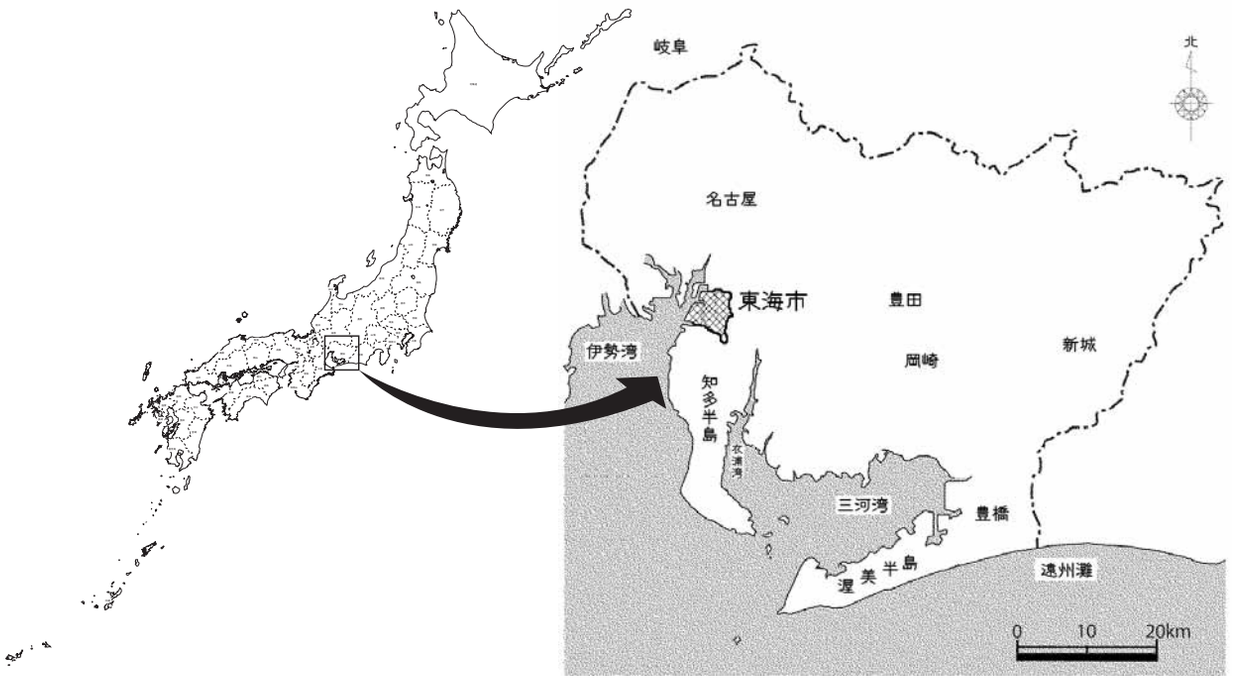
巻頭図版第 1　龍雲院遺跡（3 地点）前半区全景と名鉄太田川駅
巻頭図版第 2　土器棺列見通し
d-002 土器棺断割り
土器棺列東組
土器棺列西組
d-156 丸小鉢
土器棺列と溝の様子
巻頭図版第 3　001SB 住居址
土器の出土状況
床面出土の管玉
d-237 石鏃
調査区壁面にみられる皿状構造を呈する砂層
巻頭図版第 4　4 地点出土の石器
d-002 土器棺
d-027 土器棺
d-035 土器棺
d-022 土器棺
巻頭図版第 5　001SU 土器集積出土状況
001SU 土器集積全資料
巻頭図版第 6　圧縮破砕貝層と土管 d-192
後半区全景
土坑墓（副葬品：山皿）
003SK 土器出土状況
土坑墓（副葬品：短刀）
地震による噴砂および液状化痕
巻頭図版第 7　3 地点主要出土遺物
加工円盤
中国青磁
d-298 祖母懐銘陶片
高所作業車による撮影風景
巻頭図版第 8　調査区全景（4 地点）
弥生期の土坑墓と土坑群（2 地点）
弥生期の土坑墓と副葬品（2 地点）
d-091 杏葉唐草文平瓦（1 地点）

図 版 目 次

図版第 1　1 ～ 5 地点遺構観察表（1）
図版第 2　1 ～ 5 地点遺構観察表（2）
図版第 3　1 地点出土遺物観察表（1）
図版第 4　1 地点出土土器実測図（1/2）（1）
図版第 5　1 地点出土土器実測図（1/2）（2）・瓦実測図（1/3）
図版第 6　1 地点出土土製品（1/2、d-102 のみ 1/1）・土器実測図（1/2、d-002・083 のみ 1/3）（3）
図版第 7　1 地点出土遺物観察表（2）・石器実測図（1/2）
図版第 8　2 地点出土遺物観察表（1）・土器実測図（1/2、d-020・027・028 のみ 1/3）（1）
図版第 9　2 地点出土遺物観察表（2）・土器実測図（1/2）（2）
図版第 10　3 地点出土遺物観察表（1）
図版第 11　3 地点出土遺物観察表（2）
図版第 12　3 地点出土遺物観察表（3）
図版第 13　3 地点出土土器実測図（1/2）（1）
図版第 14　3 地点出土土器実測図（1/2）（2）
図版第 15　3 地点出土土器実測図（1/2）（3）
図版第 16　3 地点出土土器実測図（1/2）（4）
図版第 17　3 地点出土土器実測図（1/3）（5）・瓦実測図（1/3）・土製品実測図（1/2）（1）
図版第 18　3 地点出土土製品実測図（1/2）（2）
図版第 19　3 地点出土土製品実測図（1/2）（3）
図版第 20　3 地点出土土製品実測図（1/2）（4）
図版第 21　3 地点出土鉄製品実測図（1/2）・羽口実測図（1/2）・土管実測図（1/3）（4）
図版第 22　3 地点出土遺物観察表（2）・石器実測図（1/2）（1）
図版第 23　3 地点出土石器実測図（1/2）（2）
図版第 24　4 地点出土遺物観察表（1）
図版第 25　4 地点出土遺物観察表（2）
図版第 26　4 地点出土土器実測図（1/3）（1）
図版第 27　4 地点出土土器実測図（1/3）（2）
図版第 28　4 地点出土土器実測図（1/3）（3）
図版第 29　4 地点出土土器実測図（1/3）（4）
図版第 30　4 地点出土土器実測図（1/3）（5）
図版第 31　4 地点出土土器実測図（1/3）（6）
図版第 32　4 地点出土土器実測図（1/3）（7）
図版第 33　4 地点出土土器実測図（1/3）（8）
図版第 34　4 地点出土土器実測図（1/2）（9）
図版第 35　4 地点出土土器実測図（1/2）（10）
図版第 36　4 地点出土遺物観察表（3）
図版第 37　4 地点出土石器実測図（1/1）（1）
図版第 38　4 地点出土石器実測図（1/1）（2）
図版第 39　4 地点出土石器実測図（1/1）（3）
図版第 40　4 地点出土石器実測図（1/1）（4）
図版第 41　4 地点出土石器実測図（1/2）（5）
図版第 42　4 地点出土石器実測図（1/2）（6）
図版第 43　4 地点出土石器実測図（1/2）（7）
図版第 44　4 地点出土石器実測図（1/2）（8）、5 地点出土遺物観察表・土器実測図（1/2）
図版第 45　1 地点全景
008SB 住居址様遺構
024SK 出土焼土塊
1 地点主要出土遺物
図版第 46　2 地点全景
007SX 検出状況
006SX 検出状況
2 地点主要出土遺物
図版第 47　4 地点 004SD 出土の弥生土器
4 地点出土の弥生土器
図版第 48　5 地点南北トレンチ
5 地点東西トレンチ
5 地点出土の遠賀川式土器（d-002）
東畑遺跡出土の縄文土器 1
図版第 49　東畑遺跡出土の縄文土器 2
東畑遺跡出土の縄文土器 3
東畑遺跡出土の縄文土器 4
東畑遺跡出土の縄文土器 5
図版第 50　龍雲院遺跡出土の短刀

第 1 章　調査の経緯と遺跡をとりまく環境

第 1 節　調査に至る経緯



第 1 図　東海市の位置

畑間遺跡、東畑遺跡および龍雲院遺跡は愛知県東海市大田町に位置する（第 1 図）。平成 8 年から 10 年にかけて愛知県教育委員会によって実施された詳細分布調査によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての散布地、東畑遺跡は弥生時代から中世にかけての散布地、郷中遺跡は弥生時代から中世にかけての散布地とされている。

本市では名古屋鉄道太田川駅周辺地区を中心市街地として位置づけ、平成 4 年度より土地区画整理事業および連続立体高架事業を実施している。これらの事業に伴い事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するために平成 8 年度に試掘調査を実施した。この調査によって事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することが確認された。この試掘調査の結果に基づき土地区画整理事業担当部局である中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成 11 年度から東海市教育委員会により主に道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成 23 年度末時点での調査済面積は 16,100㎡である。

平成 23 年度は畑間遺跡、東畑遺跡、龍雲院遺跡範囲内の 5 地点 2,000㎡について、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者東海市長より平成 23 年 4 月 7 日付け中第 15 号にて発掘調査依頼があり、現地調査及び一次整理作業について、平成 23 年 5 月 30 日に国際文化財株式会社西日本支店と業務委託契約を締結した。

現地調査は 6 月 28 日より着手し、5 地点、2 地点、1 地点、4 地点、3 地点の順に調査を実施し

た。平成 24 年 1 月 31 日に現地調査は終了し、その後整理作業を実施、3 月 29 日付けで成果品の納入を受けた。

報告書作成については、調査を実施した国際文化財株式会社西日本支店と二次整理作業及び報告書作成業務について、業務委託契約を平成 24 年 5 月 21 日付けで締結し、国際文化財株式会社中部調査室の清須事務所において、2 次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。

第 2 節　遺跡の位置と地理的歴史的環境

畑間遺跡・東畑遺跡・龍雲院遺跡は知多半島西北部に位置する東海市大田町の、伊勢湾に面した同一砂堆上に存在している。

知多半島の地形的特徴は、南端の南知多町域を除き、尾張丘陵部から続くなだらかな丘陵地（標高 10 ～ 30m 前後の知多丘陵）が中央部を貫き、臨海部には数段の段丘面や沖積平野が分布している。

丘陵部の大半は第三紀中新～鮮新世の常滑層群に属し、常滑層群は下位から豊丘累層・河和累層・布土累層に区分され、互いに整合する。

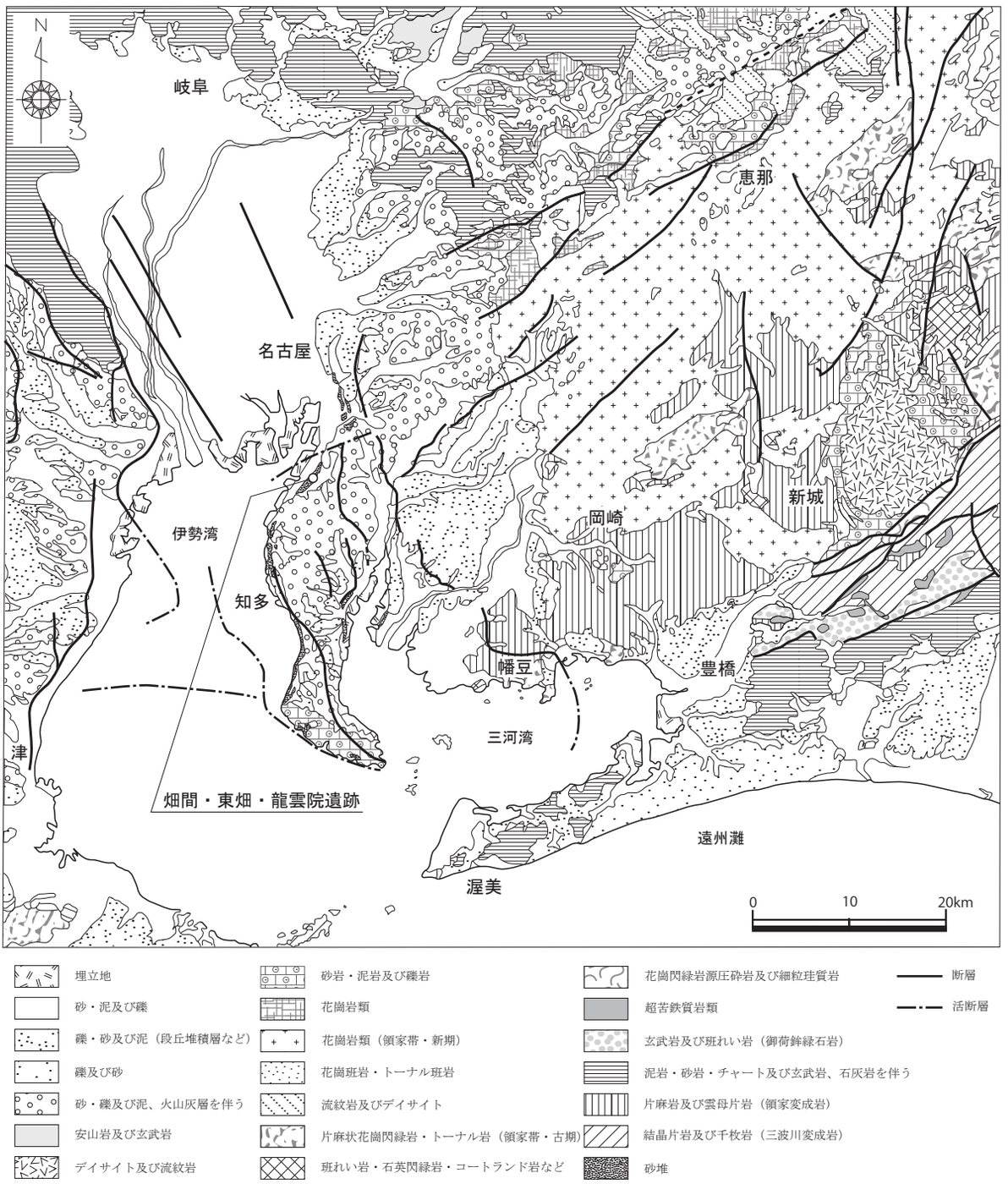
常滑層群は厚さ数メートル程度の粘土層と砂層の互層を中心に、火山灰層や褐炭・亜炭層を含む地層群で、この粘土層が古代末～中世以後現代に至るまで日本最大規模の焼き物の産地を生み出したのである。[註)]

下位の豊丘累層、河和累層は知多半島南端の中新統師崎層群に隣接して比較的狭い地域に露頭分布が認められるが、上位の布土累層は知多半島基部から中部西海岸にかけて広く分布し、大田の谷や横須賀の谷周辺の丘陵地もすべてこの布土累層（上部）に含まれる。布土累層を構成する岩相は砂泥の互層が中心であり、複数の火山灰層（古場、小鈴谷、大谷、佐布里、岡田、横須賀火山灰層など約 10 層）や褐炭層を挟むが、礫層がほとんどみられないのが特徴である。ただし、上部層の一部では濃飛流紋岩の礫が多く含まれることが報告されている。一般に知多半島中部の丘陵地地表にみられる砂礫や礫層の多くは、武豊層（加木屋層）に属するものである。武豊層は下位の常滑層群を不整合に覆い、岩相によって砂礫層、海成粘土を夾むシルト層、砂層などに分類される。なかでも上部礫層を構成するのはチャートと石英斑岩であり、武豊町域を中心とした知多半島中部の衣浦湾側丘陵斜面地表に多く見られる。東海市周辺では大田の谷の最奥部、名和–加木屋断層谷に沿って細長く分布している。

常滑層群を中心とした丘陵部の末端は、東海市荒尾町加家周辺や知多市長浦～日長周辺、常滑市大谷～小鈴谷周辺のように十メートル前後の懸崖を為す部分もあるが、大半はなだらかな段丘面を形成し、所々に深く浸食された開析谷を伴いながら沖積平野に続く。

沖積層は砂層や海成粘土、泥、砂礫などを主体とするもので、多くは砂堆や自然堤防、砂州、ごく小規模な扇状地などとして平野表層部とその周辺を形成している。標高は概ね 3 ～ 5m 以下である。

註）常滑焼の特徴である朱泥製品に関しては、第四紀更新世中期の野間層の再堆積性粘土が原料として利用されている。



第 2 図　愛知県周辺の地質図

知多半島北端、天白川河口部東海市名和周辺には小規模な砂堆や砂州がみられ、今回調査した遺跡群が存在する大田の谷〜横須賀の谷(地元では各沖積平野と周囲の段丘あたりを谷と呼んでいる)には海岸線に並行して複数の砂堆列が発達し、面積規模は知多半島の伊勢湾岸では最大である。

また、隣接する知多市以南にも新舞子・大野谷〜常滑市多屋海岸にかけての地域、知多郡美浜町奥田〜野間谷、南知多町内海谷、そして同町豊浜の谷にも小規模な砂堆が見られる。

一方知多半島南端の南知多町域の地形は、第三紀中新世に属する師崎層群の頁岩・凝灰岩の互層からなるやや険しい山地を中心に常滑層群豊丘累層を伴い、標高は 50 〜 100m ほどである。知多

半島最高峰である高峯山（標高 128m）もこの地域にある。

大田の谷から横須賀の谷周辺にはさまざまな時代の遺跡が点在している。

旧石器時代の遺跡は未発見のため、現在のところ東海市域では縄文時代の遺物が発見されている高ノ御前遺跡[註 1)] が一番古い遺跡ということになる。

高ノ御前遺跡は木田の丘陵が北東に細長く延びた先端部に存在する。現在までに 3 つの地点が調査されており、いずれも小規模な貝層を伴っている。第 1 地点の調査は古く 1952 年に行われており、層位や遺物出土状況などの詳細は不明ながら縄文晩期に属する半截竹管による刺突文を持つ土器や条痕文土器、石鏃、磨製石斧などが発見されている。第 2 地点は 1967 年に露出していた混土貝層が調査され、縄文晩期の本刈谷式土器のほか、石鏃・凹石・礫石錘などが発見されている。1975 年には東海市教育委員会によって試掘調査がおこなわれ、縄文時代前期の清水ノ上 2 式〜 3 式土器を最古に、中期、後期の土器が少量と、晩期本刈谷式土器や各種石器（凹石・磨石・石鏃・石槍・礫石錘・磨製石斧・石錐・石棒・石刀など）が発見されている。知多半島の中南部に比して、縄文遺跡の希薄な東海市域においては、少量且つ断続的乍ら各時期の土器を出土する高ノ御前遺跡は希少な存在であり、報告された資料は後により重要性を増すことになる。[註 2)]

この高ノ御前遺跡のほか、縄文土器が発見されている遺跡としては東海市名和町の菩薩遺跡、塚森遺跡、トドメキ遺跡などがあり、トドメキ遺跡では晩期中葉のドングリ類貯蔵穴が発見されている。

続く弥生時代では、大田の谷周辺地域でも前期の遠賀川式土器や在地系の水神平式土器を出土す

地質時代（万年前）				地層		厚さ（m）	堆積相
第四紀	完新世			沖積層		20 〜 30	上部 : 砂層
							中部 : 海成粘土層
							下部 : 砂層
	更新世	後期	1.5 2	新田層 & 相当層		10	上・基底部 : 礫層
							中部 : 海成層
		中期	13 10	野間層 & 相当層		30	淘汰のよい海浜砂層
			15				厚い粘土層
			20				非海成の砂層
			25				薄い海成粘土層
			30	武豊層 & 相当層（亀崎層）		30	赤褐色表土層（ロース）と漂白された？角礫層
							2 枚の海成粘土層と風化されたクサリ礫層
			50				（中・大礫）との互層
		前期	70 100				
			180				
新第三紀	鮮新世		300	常滑層群	布土累層	450	砂泥互層（湖沼・河川成）
							砂層は礫なども含みやや粗くなる
							火山灰層をはさむ
					河和累層	180	砂泥互層（湖沼・河川成）
							火山灰層をはさむ
			530 600		豊丘累層	80	砂礫層（中・細礫）
	中新世		700				
			1500	師崎層群	内海累層	100	火山灰層をはさむ泥層
					山海・豊浜累層	670	火山灰層・砂泥互層・厚い泥層との互層
					日間賀累層	100	火山灰質の砂泥互層
			2000				

第 1 表　地質年代表

註 1)『横須賀町史』によれば、「ここに小祠があって、人々は高座結神子神社をまつったのではないかと想像されるが（中略）いにしえの木田村が熱田の神領でもあったところからみて、必ずゆかりはあったであろう。小字名の由来は高倉社のおんまえ、すなわち高ノ御前となったのである。」と書かれている。

註 2）これらの出土遺物のうち、縄文晩期の土器に関しては本報告書の付載にて言及する。

第３図　常滑層群の分布状況

第４図　第四系の地質図

（いずれの図も『日本の地質　中部地方２』より）

る遺跡が数カ所確認されている。なかでも横須賀の谷から続く知多市八幡の砂堆周辺に存在する遺跡群（荒古遺跡など）の重要性については、早くから杉崎章氏の指摘するところであった。(『八幡のむらのおいたち』ほか）この荒古遺跡や、同一砂堆南端に位置する細見遺跡では遠賀川式土器が発見されており、その客体的在り方などから伊勢湾西岸地域から直接搬入されたものであることが想像される。過去の畑間遺跡の調査でも遠賀川式土器が検出されており（2009 年報告書)、今回の調査でも畑間遺跡 5 地点から遠賀川式壺の破片が検出されている。極めて断片的な状況ではあるが、大田の谷周辺の砂堆にも八幡の砂堆同様、遠賀川式土器文化が伝播してきたのだろう。知多半島地域ではこの他、半田市岩滑遺跡、美浜町下高田遺跡、南知多町山田遺跡、神明社貝塚などから遠賀川式土器が発見されている。

元来知多半島地域は縄文晩期から続く条痕文土器文化圏に属する地域であり、とりわけ土器の様相は西三河地域との結び付きが強い地域であった。このような状況は各時期で濃淡交えつつも弥生時代を通じた特徴としてたびたび指摘されることであるが、Wikipedia の「知多半島」に関する解説記事中に面白い記述があったのでここに引用しておく。

「律令時代、知多半島は尾張国に所属した。したがって、稲沢市に有ったとされる尾張国の国府に服属していた。

明治維新以後、廃藩置県が行われ、知多半島は尾張藩の後裔の名古屋県ではなく、岡崎市に県庁を置く額田（ぬかた）県に属した。額田県は 1 年程しか続かず、名古屋県から改名した愛知県と合併した。このためか、知多半島の住民性は、額田県民時代の名残りか、尾張国にもかかわらず旧名古屋県地域（旧尾張国から知多半島を除く地域）の住民性と異にする。」

極めて大雑把な記述ではあるが、所謂木曽三川下流地域の濃尾平野部を中心とした尾張の気風とは異質のものが指摘されており、こちらも興味深い歴史的背景である。

また、室町時代を中心に知多半島中部を支配した一色氏の本幹地は三河一色であり、海路を駆使しながら西三河地域から知多半島部へ進出していく過程は、より古い時代の文化伝播経路が踏襲されている可能性もあり、地元出身者の実感として納得できることもあり、興味深い。

『愛知県史資料編 2　考古 2　弥生』においては、中期の様相として、「尾張地域の朝日式土器と貝田町式土器は、知多半島以東の地域へはほとんど広がってはいかなかった。そこでは中期の前半まで岩滑式や続水神平式のような条痕文系の土器が製作され続けている。」と述べられている。

早く前期に遠賀川式土器の搬入を許容した伊勢湾岸の弥生遺跡は、続く中期にかけてその規模を拡大していく傾向がみられる。大田～横須賀の谷周辺の遺跡に限っても、東畑遺跡では方形周溝墓の構築が開始され､同時に居住域と墓域が至近の距離で隣接しつつも分化していく様子が窺われる。また、海岸に近い烏帽子遺跡や法海寺遺跡ばかりではなく、柳ヶ坪遺跡、野崎遺跡、獅子懸遺跡などの内陸側の砂堆周辺にも遺跡の拡散がみられることから、沖積平野における稲作等を中心とした生産力の向上が推測される。

後期に入ると知多半島地域の弥生遺跡は分散を開始し、生活には不便を感じるような丘陵上にまで分布を広げていくが、概ねその規模は小さく、集落と呼ぶに相応しいものは殆ど無い。これら丘陵上の遺跡は概ねそれまでの中心的な居住地であった沖積平野の砂堆を取り囲む位置にあり、ここでは海岸線も含め目視可能な距離関係が意図的に保たれているようにもみえる。大田・横須賀の谷周辺では、標高 40m 近い丘陵上に展開していた中ノ池遺跡（1982)、標高 30m の舌状丘陵上に存

在した大廻間遺跡がその典型である。中ノ池遺跡では後期山中式以後の竪穴住居が 7 棟検出されているが、同時に存在したものは数軒と考えられるので、所謂集落と呼ぶにはほど遠い規模である。大廻間遺跡では舌状丘陵基部を直角に切る溝遺構が発見され、丘陵上に存在したであろう集落周囲の区画溝の一部であると推定されている。[註)] また八幡の谷奥の標高約 30m の丘陵上で発見された楠廻間貝塚（縄文時代早期末の貝塚遺跡）では、上層から大量の後期土器や数棟の住居が発見されている。また名和町のカブト山遺跡も標高 25m 前後の丘陵上で 5 棟ほどの竪穴住居が発見されている。

これらいずれの高所遺跡周辺の低地（沖積平野部など）には、弥生時代前期や中期から続く歴代遺跡が存在しているが、そのいずれからも後期資料が発見されている。量的には中期などに比べてかなり少なくはなるが、完全に低地部での居住が放棄されてしまったわけではないようである。

古墳時代の遺跡としては、前期に属する名和町の兜山古墳（滅失）が特筆すべき存在である。築造年代は 4 世紀後半と推定され、三角縁獣文帯三神三獣鏡、六神鏡、捩文鏡、内行花文鏡、虺龍文鏡など 5 面の鏡をはじめ豊富な副葬品が発見されている。先述したカブト山遺跡とは指呼の距離にあり、カブト山遺跡からは古墳時代前期～中期の遺構や遺物も発見されていることから、その関係が指摘できる。なお、この兜山古墳が存在した丘陵部周辺には名古屋市緑区にかけて、縄文時代晩期からの歴代遺跡が多く点在し、古墳時代の遺物も多く発見されている。天白川河口左岸のこの地域は、熱田神宮摂社であり延喜式内社である氷上姉子神社の存在でも明らかなように、基本的には熱田～笠寺台地周辺の名古屋市南部即ち旧あゆち潟の文化圏（尾張氏の本幹地）に属するものである。大田の谷周辺においては後期に属する古墳しか知られていないが、その多くは現存していない。（王塚古墳・丸根古墳など）

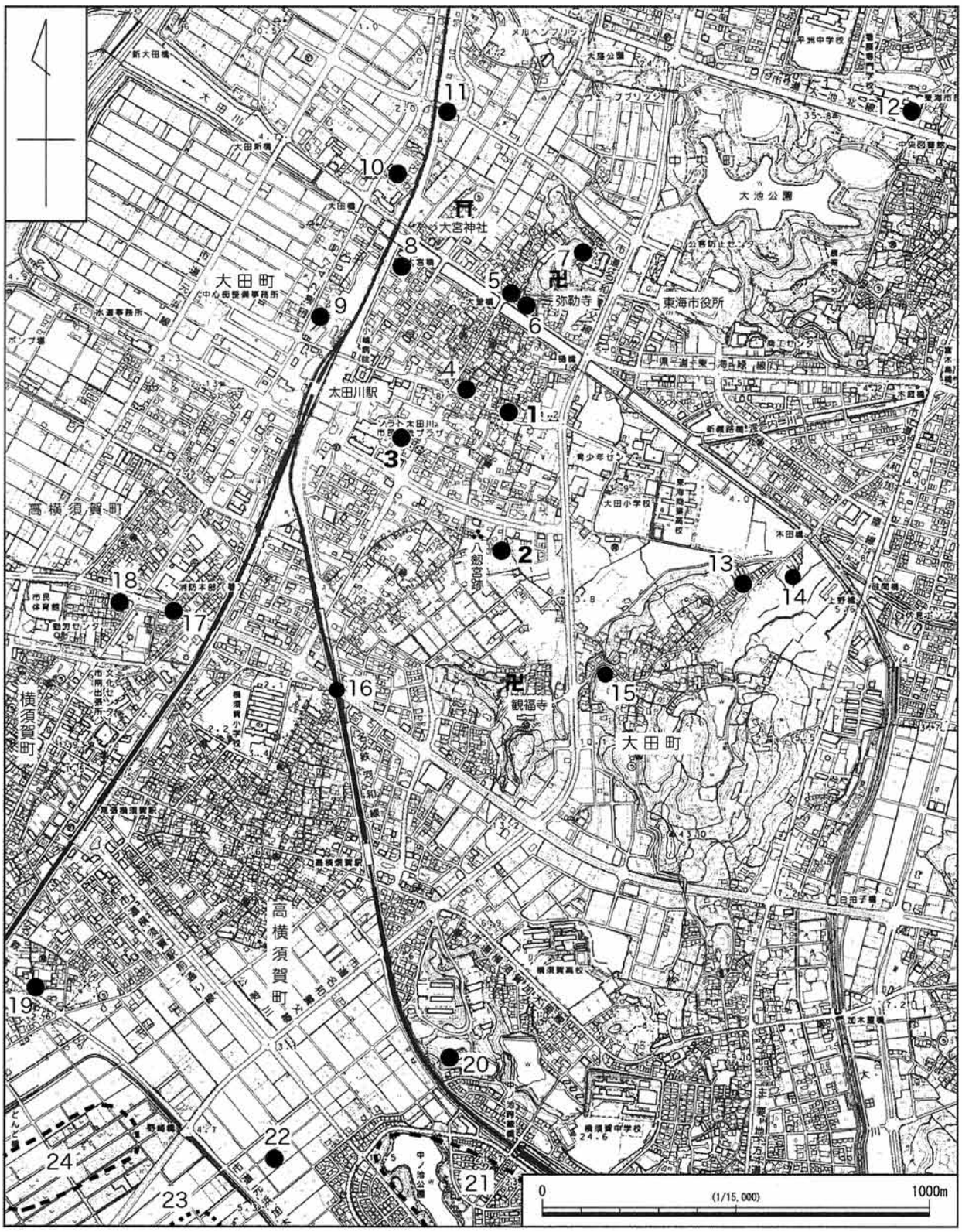
横須賀の谷の丘陵中腹に古くから開口する岩屋口古墳は 6 世紀後半の後期古墳であるが、横穴式石室の規模は知多半島で最大である。主軸は N-28°-E 方向で、沖積地を隔てて中ノ池遺跡の方向を向いているが、中ノ池遺跡 D 地点（標高 9m 前後）からは概期の須恵器が出土している。既にこの頃までには大田・横須賀の谷では安定した生産が確保されていたことを窺わせる。

知多半島に於ける古墳の分布は極めて散漫である。先述した前期の兜山古墳は例外的存在であり、無比の存在であった。この兜山古墳周辺には後期の群集墳もみられる。（三ッ屋古墳群）

一方知多半島南端の島嶼部に群集する後期古墳は、特異な様相である。現在人が居住しているのは篠島・日間賀島・佐久島の三島であるが、地質的には篠島が花崗片麻岩からなり、日間賀島と佐久島は凝灰質泥岩・砂岩・頁岩によって形成されている。岩盤より石材の剥離が比較的容易な日間賀島と佐久島にはそれぞれ 35 基、45 基という数の後期古墳が確認されている。

殆どが比較的小規模な円墳であるが、佐久島の山の神塚古墳は組み合わせ式石棺を持つ中規模の石室が現存している。日間賀島で調査された 8 基の古墳は全て 6 世紀から 7 世紀にかけての円墳で、北九州地方で盛んに造られていた横穴式石室の系譜に類するものもみられた。副葬品は須恵器を中心に、釣り針や石錘などの漁具をはじめ、大刀・鉄鏃などの鉄製品、金環や玉類などの装飾品など豊富な内容であった。一方篠島には三基しか古墳は発見されておらず、他の二島とは際立った対照を見せている。

註）当遺跡から海岸部の砂堆に立地する細見遺跡までの距離は約 670m で、法海寺遺跡までは約 870m あるが、直接目視することはできない。



1: 畑間遺跡　2: 東畑遺跡　3: 龍雲院遺跡　4: 郷中遺跡　5: 神宮前遺跡　6: 王塚古墳
7: 弥勒寺遺跡　8: 後田遺跡　9: 下浜田遺跡　10: 上浜田遺跡　11: 松崎遺跡　12: 丸根古墳
13:高ノ御前遺跡　14: 前畑遺跡　15: 木田城跡　16: 太田川第3踏切貝塚　17: 烏帽子遺跡
18: 尾張藩横須賀御殿跡・横須賀代官所跡　19: 大木之本遺跡　20: 岩屋口古墳　21:中ノ池遺跡群
22: 柳ヶ坪遺跡　23: 野崎遺跡　24: 獅子懸遺跡

第 5 図　周辺の遺跡分布図

これらの群集墳は伊勢湾・三河湾から湾口周辺で活躍していた海人集団の奥津城として構築されたものである。

同じ頃、大田の谷の海辺ではしきりに塩が生産されていた。第 3 砂堆北端に存在する松崎遺跡は代表的な製塩遺跡であり、上浜田・下浜田遺跡とともに大規模な海浜集落の様相を呈していたと考えられる。律令制が布かれて以後、知多半島のほぼ全域は知多郡として尾張国に組み入れられ、都に租税を納めていた。藤原宮や平城宮跡から発見された木簡からはその内容を具体的に知ることができるが、白米・赤米・酒米などの米類の他、軍布（わかめ）や塩のほか、当時は幡豆郡に属していた篠島や佐久島の海部贄として鮫の乾し肉（佐米楚割 = さめすわやり）が進上されているのが特徴的である。

7 世紀半ばになると地方に於いても仏教寺院の建築が開始されるようになった。尾張地方最古の寺院は一宮市千秋町加納馬場の長福寺廃寺や、名古屋市中区の元興寺と言われている。知多半島地域では横須賀から知多市八幡に続く砂堆の南部に存在する法海寺遺跡から、白鳳期の瓦が発見されている。寺伝によれば薬王山法海寺は、天智天皇 7 年（668）新羅国明信王の太子道行上人が開祖とするが、発掘成果は白鳳期の創建を示唆している。名和町のトドメキ遺跡（名和廃寺とも）からも白鳳期の丸瓦や鴟尾（しび）も破片が出土しているが、いずれも概期の遺構は未発見である。

また知多郡美浜町の奥田廃寺からも白鳳期の瓦が発見されているが、上野間から奥田・野間にかけての沖積地一帯は平城宮木簡に見る「冨具郷野間里」に比定されており、海岸沿いの砂堆上からは奥田製塩遺跡を中心に数多くの製塩遺跡がみつかっている。このように、知多半島地域への仏教寺院の進出は白鳳期に北部と南部でほぼ同時に行われたようであり、このような先進的な文化を受容可能な在地勢力が存在していたのであろう。

これら古代寺院の瓦の製作技法は仏教の伝来とともに朝鮮半島から伝わってきたと思われるが、伽藍に使われた瓦などは基本的に現地で焼成されたと考えるべきであろう。

焼き物そのものの生産は既に奈良時代に猿投窯（猿投山西南麓から名古屋市東部丘陵地にかけて広く分布）で始まっており、なかでも灰釉陶器類は全国にも流通し、平安時代に全盛期を迎える。この灰釉陶器窯の系統を受け継ぎ､中世に隆盛を極めたのが常滑窯である。一方渥美半島地域では、湖西から豊橋市南部の古代灰釉陶器窯の影響下で陶器生産が開始された。

両者はともに 12 世紀初頭までには操業が開始され、日用雑器類を中心とする大量の焼き物を日本中に送り出していたが、平安時代末から鎌倉時代にかけての混乱期には経塚で用いられる経筒外容器、三筋壺や寺院で用いられた瓦などといった宗教色が濃厚な特殊器種を多く生産していた。鎌倉時代に入ると瀬戸窯の台頭とともに急激に日常雑器の生産が増えていくのだが、これは積極的に中国製品を模倣し宗教的な色合いを強く帯び且つ美しい釉薬を施した瀬戸製品が原因であろう。更に、比較的似通った器種を製造していた常滑窯と渥美窯であるが、奥州藤原氏の滅亡以後渥美窯は徐々に需要を無くし、より良質な粘土に恵まれていた常滑窯に淘汰吸収されるかたちで 13 世紀後半に消滅してしまう。

東海市域で最古の古窯は加木屋町の社山古窯である。横須賀の谷の奥に位置し、窯本体は発見されていないが 3 基ほどの窯体に伴うと考えられる前庭部と灰原が検出されている（常滑窯編年 1b ～ 3 型式期)。主要器種である瓦類に関しては、京都鳥羽東殿（1131 ～ 1155 年建立)、同法金剛院（1130 年建立）に供給されていたことが解明されている。また、社山古窯から北東へ 2 キロの

地点には権現山古窯（常滑窯編年 3 ～ 4 型式期）が有り、軒丸瓦は社山古窯と同笵であることが確認されている。[註 1)] これらの古窯周辺から大府市にかけての一帯は、平安時代末期の瓦陶兼業窯が多く分布する地域である。

平成 20 年度の調査に続き今回の調査でも発見された杏葉唐草文軒平瓦はこれら両古窯と論田古窯（横須賀町）でも発見されており、その供給地が大里村を睥睨する丘陵上に位置する天台宗の古刹観福寺と熱田神宮寺[註 2)] であることも注目される。

また、社山古窯から南へ 700m の地点には加木屋 1 ～ 3 号窯（常滑窯編年 4 型式期）が存在し、3 号窯では土師器焼成で仕上げられた小皿や壺が出土している。今回の調査では、1 地点に於けるまじない遺構 (001SU) と 3 地点に於ける埋納遺構 (003SK ほか) から土師器焼成された小皿が多く発見されており、土師器焼成の生産地と消費地が至近の距離にあったことを示す発見として重要である。[註 3)]

大田の谷の砂堆上の各地から、平安時代末期に主に加木屋地区で焼成された瓦が出土することは、従来から断片的には知られていた。具体的におおまかな分布が知られるようになって来たのはごく最近のことである。前述した杏葉唐草文軒平瓦に限っても、平成 20 年度の調査で少なくとも 3 個体（いずれも破片からの個数推定。以下同じ）平成 23 年度の調査で 1 個体（今回の報告分)、平成 24 年度の調査でも 3 個体以上の検出が明らかになってきた（調査員の筧氏の御教示による)。また、平成 20 年度の調査では三巴文軒丸瓦も 5 個体発見されており、社山古窯での焼成が類推される資料である。

これらの瓦類は荘園への特注品としての色合いが濃い製品であるが、大田の谷を中心とする知多半島北部の伊勢湾側には、いくつかの荘園や国衙領が存在したことが知られている。荒尾郷、御幣田（ごへいだ、おんべだ）郷、木田郷、大郷（おおさと = 大里）郷、額石保などがそれである。荒尾郷は現在の東海市荒尾町付近に、木田郷は観福寺の存在する木田の丘陵地一帯に、大郷郷は近世の大里村、即ち今回の調査地を含む大田の谷の第 1 砂堆一帯から大田川の旧河道を経て加木屋の谷に至る一帯に比定されている。熱田社領であった御幣田郷は具体的にどこに存在していたかは不明であるが、東海市荒尾町の加家（かけ）地区の古刹観音寺に隣接したところに「御幣土」（ごへいど）の小字が残っており、周囲には神田、仏供田、山王などの地名も見られることから、関連性が類推される。

熱田神宮と当地の関連では、先の杏葉唐草文軒平瓦が熱田神宮寺でも出土していることや、横須賀の集落に熱田神社が存在することの他、今回の調査地でもある東畑地内に嘗て「八劔社」が存在していたことなど、直接間接共にその深さを推測することができる。現在では、大田里組・市場組

註 1）知多半島域の古窯で生産されていた瓦で、供給地の判明したものがいくつかある。大府市吉田 1 号窯→鳥羽東殿、常滑市上白田 1 号窯・濁池南・西古窯→仁和寺南院（1135・1142 年建立)、半田池周辺古窯→平安京神泉苑付近、知多郡美浜町海道田遺跡と打越遺跡→奥田廃寺、同町下平井古窯→野間大坊（大御堂寺）など。なお、鳥羽東殿では知多半島域以外の名古屋市八事裏山一帯の古窯からも多くの瓦が供給されている。

註 2）創建は不明だが宝暦 2 年 (1752)「尾張府志」では聖武天皇の時代に創建とされている。中世には多宝塔や五重塔などの伽藍があったが中世末に荒廃。近世初頭に再興するも、明治の神仏分離令、廃仏毀釈令に応じて廃寺となり今に至る。存在した場所は現在の表参道に重なり、信長塀の南側、御手洗舎・勾玉池の辺り。

註 3）土師器皿に関しては、従来の古窯製品として茶碗と共に焼かれた所謂山皿の形態を持ち、焼成のみが土師器仕上げで焼かれたものの他、「土師皿」と呼ばれるものがある。平成 20 年度の調査でも、今回の 1 地点から北に 50m 離れた地点で、墨書された土師皿を用いたまじない遺構が発見されている。(044SU)

山車蔵脇に石碑のみが残る八劔社であるが、江戸時代の大里村絵図には集落から少し離れた南側に樹木に囲まれた社殿が描かれている。現地は第 1 砂堆南端であり、大田川の旧河道を夾んで観福寺と対峙する位置にある。この東畑地内の調査では、先述したように三巴文軒丸瓦などの古瓦類の他、瓦塔の破片も発見されている。[註 1)] 瓦塔に関しては、猿投窯や渥美窯での生産は知られているが常滑窯では発見されていない特殊な製品である。旧八劔社境内地周辺でこのような遺物が出土する状況は、神社に接して仏堂、若しくは神宮寺に相当する仏教系の施設が存在していた可能性を示唆するものである。[註 2)]『張州雑誌』によれば「祭神熱田八剣宮、摂社牛頭天王、山ノ神、神明里俗云々、往古熱田ノ明神、暫ク此地ニ鎮座在リシ」とあり、殊更熱田神宮との関係の強さが伝承されていたことがわかる。

中世を通じて知多半島地域で殷賑を極めた陶器生産であるが、13 世紀後葉には一気に衰弱してしまう。概期は元寇を契機に鎌倉幕府が異国警護をさらに厳重にし、鎮西探題が設置され、時宗の遊行僧一遍が熱田や甚目寺で教化説教をおこなった時期である。常滑窯衰退の理由はよくわかっていないが、今回の調査に於いても畑間遺跡地内 1 地点ではかなり顕著に、常滑窯製品に取って代わって瀬戸美濃窯製の陶器類が数多く流入した様相が看取できる。『愛知県史別編　中世・近世　常滑系』には、「6a 型式期までの増産体制は 6b 型式期になって急速に衰え、山茶碗工人が半島からいなくなったと思われるほど山茶碗及び片口鉢 1 類の生産が途絶し、知多半島全体の陶器生産は急速に縮小する。この現象は瀬戸窯における山茶碗生産の急速な増大と連動しており、基部・北部の工人が猿投窯の工人の移動とともに瀬戸地域に移った可能性は高く、南部の山茶碗生産も途絶する。この移動と工人組織の再編成を思わせる変化は、工人集団の意思というより瀬戸窯や常滑窯の陶器生産を管掌していた階層の意思が働いていたとみるべきであろう。」と記述されている。

言うまでもなく、当時は工人組織の自律的な意思というものは製品の品質や生産技術に関する創意工夫といったごく内的なもの以外は存在せず、その地域を統括する支配階級の意思がその動向の全てを支配していた。在地領主たちによる寄進地系荘園の増加に加え、東国と西国の境界域に位置する地政学的環境も相俟って、当地方には伊勢神宮領である御薗・御厨が多くみられる。鎌倉幕府成立以後、とりわけ承久の乱以後は関東御家人の直接支配が及ぶようになり、荘園経営に於ける地頭の権限が大きくなっていった。

東海市荒尾町に其の名を残す荒尾氏が文献資料に現れるのは南北朝時代のことで、応安 5 年 (1372) の寄進状には荒尾泰隆が荒尾郷内の田の一部を京都竜翔寺に寄進する旨が書かれている。荒尾氏は鎌倉幕府の御家人として荒尾の他に中島郡にも所領を持ち、後には知多郡以外の地も含め 11 箇所の地頭職を持つ有力な国人となり、守護大名の強大化を妨げる働きをする将軍直属の奉公衆として働いている。

また、鎌倉時代から室町時代の「国内神明帳」には雨尾天神と荒太天神の二社が記載されている。

註 1）平成 21 年度の調査と、平成 24 年度の調査でも出土。後者に関しては調査員の筧氏の御教示による。

註 2）八劔宮は熱田社の別宮と称され、和銅元年（708）元明天皇の勅命によって神剣を作り、納め祀ったことに始まる。社殿の建築様式、年間の祭事・行事もすべて本宮に準じて行われる。延喜式神名帳には八剣神社、国内神名帳には八剣大明神などとあるが、明治 13 年（1880）に別宮・八剣宮と改められた。なお八剣神社は岐阜県美濃地区や愛知県一宮周辺のほか、福岡県にも分布がみられる。東畑地内の八劔社は、境内老樹鬱蒼と茂り、殊に 7 本の樟は近郷に名をうたわれた巨木であったというが、「信徒少なく維持困難」ということで、明治 42 年大宮神社に合祀されたようである。

前者は旧木田村の雨尾神社、後者は旧清水村の荒太神社を指す。

東海市荒尾町稲葉にある荒太（あらぶと）神社は万寿元 (1024) 年の創祀とされ、社伝によれば「熱田大御神の依霊告奉移荒太山為竜神とある。荒太神社という名の「荒」は、荒尾氏の支配下だった地区から来ている。「太」は、伊勢神宮の「太一の旗」から来ている。」とある。御祭神は天照皇大神や素盛之男命の他、建稲種命や宮簀姫命も祀られており、熱田神宮との関係の深さを現している。社伝に言う「太」の由来を伊勢神宮の「太一御用旗」に求めるには直接的な関係が見出せないが、「太」を「おほ」と読めば「多」とも理解出来、即ち古代氏族である多氏に関係した土地であったことの名残りで有る可能性もある。尾張地域に関係した古族多氏の子孫としては、壬申の乱で活躍した小子部連や、尾張北部を支配していた尾張丹波臣などが居る。とまれ荒尾谷を一望できる西丘陵の中腹に位置する立地環境から見ても、古くからの鎮守であったことが推察できる。雨尾天神こと雨尾神社に関してはよくわかっていないが、知多郡内で従二位の神格が与えられていることや、熱田社領であり室町期以後は一色氏・荒尾氏の拠点であった木田に存在することを考慮すれば、由緒正しき神社であった可能性が高い。なお、元文元 (1736) 年の棟札には、慶雲元 (704) 年の創建と記されている。

旧知多郡における式内社としては、「入海神社」「阿久比神社」「羽豆神社」の三社が知られているが、東海市域には無い。至近の式内社は火上姉子神社ということになるが、家下の湊を擁する大田の谷一帯は、熱田神宮勢力範疇と理解されていた上での選定であろう。

大田～横須賀の谷周辺に存在する仏教寺院であるが、天平勝宝元年 (749) 行基による開基という伝説を持つ弥勒寺（真言宗）と、やはり大宝２年 (702) に行基により、開基されたという観福寺（天台宗）[註] がとりわけ古い存在である。この両密教系寺院がいずれも大田の谷を見下ろす丘陵上に立地し、七堂伽藍または多くの僧坊や堂宇とともに言わば山林寺院のような景観を呈し砂堆上の集落や旧河道を往還する船を睥睨監視していたであろうことは容易に想像できる。一方横須賀の砂堆上にも妙乗院という天台寺院が存在するが、こちらは安和元年 (968) の創建と伝えられている。

他の大半の仏教寺院は砂堆上や丘陵裾に立地しており、曹洞宗のものが大半である。

これら寺院の多くは戦国時代末期に悉く兵火に焼かれたと言われており、実際

宗　派	寺　名	所 在 地	創建年代など
真言宗智山派	弥勒寺	大田町寺下	弘仁五年（814）
真言宗智山派	観音寺	荒尾町仏供田	文永３年 (1266)
天台宗	観福寺	大田町天神下の上	大宝２年 (702)
天台宗	妙乗院	養父町字里中	安和年中（968）
天台宗	安楽寺	養父町南堀畑	安和年中（968）
天台宗	常覚院	養父町南堀畑	安楽寺僧院
天台宗	玉泉寺	養父町浅間前	安和年間
浄土宗	宝国寺	荒尾町金山	天正年間（1573）
浄土宗	如意輪寺	荒尾町金山	寛保３年（1743）
浄土宗	西方寺	荒尾町西ノ木戸	永禄年間 (1558)
浄土宗	清水寺	荒尾町西川	西方寺末寺
浄土宗	庚申寺	荒尾町中屋敷	西方寺末寺
西山浄土宗	常蓮寺	大田町畑間	明応２年 (1493)
西山浄土宗	毘沙門寺	大田町的場	貞享４年（1687）
西山浄土宗	源光寺	横須賀町扇島	常蓮寺末寺
真宗高田派	妙法寺	名和町北脇	不明
日蓮宗	大教院	横須賀町三ノ割丁	嘉吉元年 (1441)
曹洞宗（真言）	運得寺	荒尾町西屋敷	天文年間再興 (1532)
曹洞宗	泉柳寺	荒尾町泉	天正５年（1577）
曹洞宗	正音寺	荒尾町東川	長源寺末寺
曹洞宗	慈眼寺	荒尾町峰脇	寛永元年（1624）
曹洞宗	龍雲院	大田町蟹田	大永６年 (1526)　長源寺末寺
曹洞宗	太光寺	大田町上前田	永禄２年（1559）
曹洞宗	宝珠寺	富木島町貴船	正徳３年再建（1713）長源寺末寺
曹洞宗（天台）	神昌寺	富木島町峰畑	寿永元年（1182）
曹洞宗	玄猷寺	富木島町北島	弘安２年 (1279)
曹洞宗	長光寺	名和町榎戸	長源寺末寺
曹洞宗	庚申寺	名和町中屋敷	元庚申堂
曹洞宗	玉林寺	横須賀町二ノ割	安土桃山時代と推定
曹洞宗	天王寺	加木屋町愛敬	寛永 18 年（1641）
曹洞宗	普済寺	加木屋町西郷門	文亀元年（1501）
曹洞宗	長源寺	高横須賀町山屋敷	明応元年 (1492)
曹洞宗	東光寺	高横須賀町戌亥屋敷	永禄年間（1558）長源寺末寺

（ ）内は元の宗派

第２表　東海市の主要寺院

註）行基による開基を伝える所謂「知多三山」の筆頭である。他の二山は常滑市の高讃寺（天台宗）、南知多町の岩屋寺（尾張高野山宗総本山であるが、嘗ては天台宗に属していた）。

に弥勒寺の発掘に於いてもその時期の焼土塊や廃棄土坑が発見されている。

江戸時代に入ると尾張藩第二代藩主徳川光友により横須賀御殿「臨江亭」が造営された（寛文 6 年 =1666）。横須賀[註 1)] の遠浅の海と旧大田川の河口を利用し、御洲浜に池を囲む大規模回遊庭園が築かれ、その間の栗林、畑なども含めて全体を木柵で囲み、内側に松並木もあったと言われている。初めは尾張藩士滝川半斎時成の隠居屋敷であった場所を召し上げて造営とのことだが、名古屋城下町からは堀川を通じて旧あゆち潟に出、天白川の河口を通過して知多の浦辺をしばらく南下すれば、忽ち眼前に横須賀御殿が出現するわけで、名古屋との往来は陸路より遙かに容易であったことが推測できる。

この横須賀御殿造営に伴い、横須賀の集落は小規模ながらも区画が整備され、大きく湾曲していた大田川の流路は弥勒寺の丘陵裾の砂堆が開削され、現在見るような直線的な流路に付け替えられたのである。同時に、長く芦葦の繁茂していた広大な湿地帯[註 2)] は面積を縮小し、徐々に畑地や水田として開拓されていったのだが、大田の谷周辺の微地形や植生の相違など、地表面の繊細な観察や小字地名などを手懸かりに、今でも旧河道の痕跡を辿ることが出来る。

少なくとも中世後期から近世以後の歴史的環境や景観は、基本的に今回の大規模区画整理事業が開始される直前まで保たれていたのだろう。集落内には江戸時代の絵図そのままの往還や路地が残り、昭和時代後期に至るまで、時間によって醸成された独特の雰囲気が集落の至る所に残っていたことを記憶している。

第 3 節　畑間・東畑遺跡における既往の調査

畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡及び龍雲院遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、これまで発掘調査は実施されていなかった。初めて調査されたのは、前述したとおり平成 8 年度に実施された中心街整備事業に先立つ試掘調査である。調査では土地区画整理事業が予定されていた区域内に 20 箇所のトレンチを設定し試掘調査を実施した。この試掘調査によって従前範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが遺跡の範囲を特定することができた。各遺跡の時期については、畑間遺跡については中世から近世の時期、東畑遺跡については弥生時代中期から古墳時代前期の時期と古代から中世の時期であると推測された。龍雲院遺跡については、遺跡範囲内にはトレンチを設定できなかったため、範囲を推定するにとどまっている。

その後、平成 11 年度から中心街整備事業に伴う緊急発掘調査により畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡について発掘調査が行われ、各遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第 4 図に示した通りである。各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗に応じて調査を実施しており、小規模な調査とならざるを得ない。平成 23 年度末の調査済面積は 16,100㎡である。この内平成 11 年度から平成 19 年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については現在報告書刊行に向けて整理作業を実施しているが、概要については報告済みである。

これによれば畑間遺跡を中心とした調査区からは平成 8 年度実施の試掘調査での様相とはやや

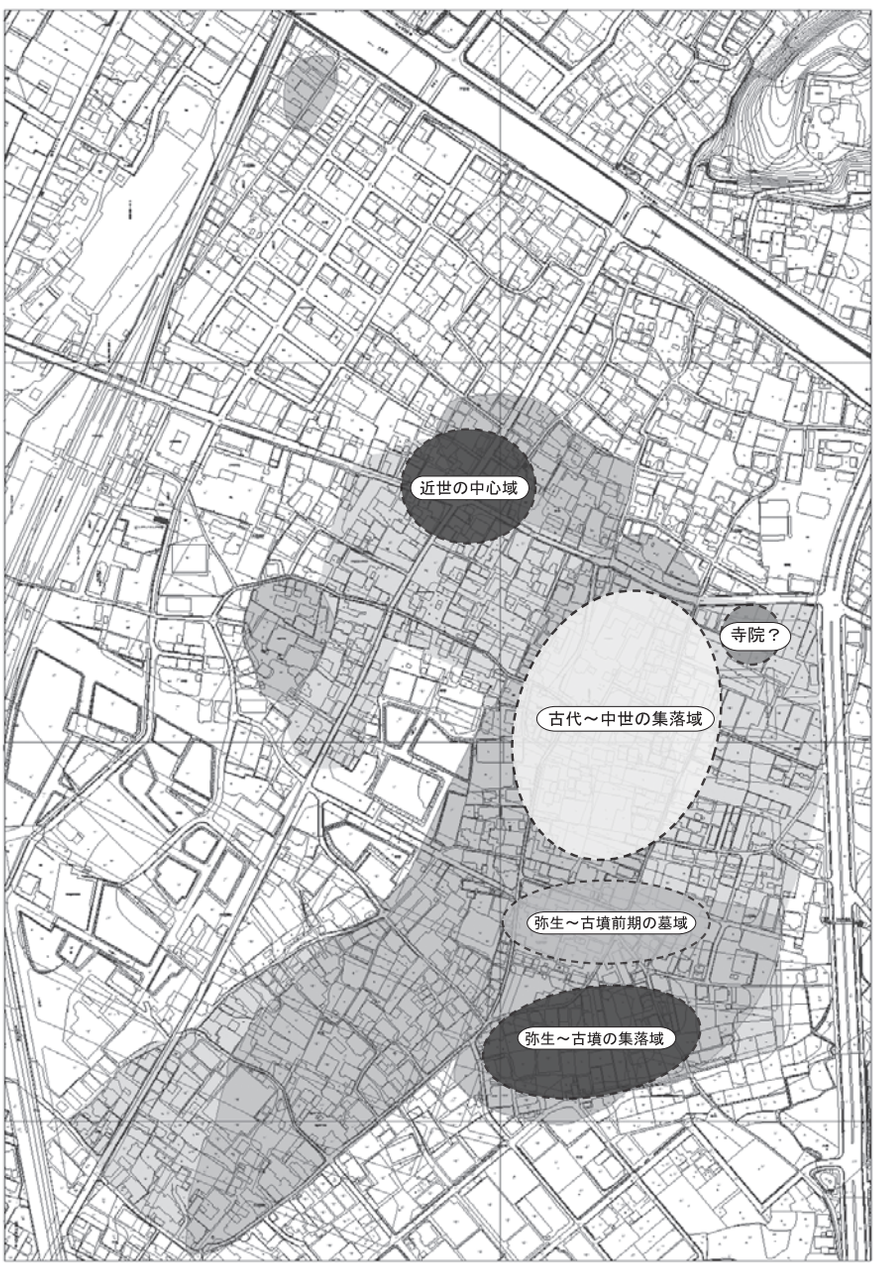
註 1）往時は馬走瀬（馬馳瀬 = まはせ）と呼ぶ小規模な集落であった。

註 2）現在の東海商業高校周辺一帯の低地。いまだに水路脇や休耕田に芦葦繁る様相を見ることが出来る。

異なり、弥生時代から近世にかけての広範な時期の遺構・遺物が出土した。特に砂堆の海側の落ち際にあたる畑間遺跡の西側を中心に遠賀川系土器や条痕文系土器といった弥生時代前期に属する時代の土器が出土しており、明確な弥生時代前期の遺構は確認されていないものの、砂堆の海岸側に弥生時代前期の生活の痕跡が窺える。また、遺跡範囲のほぼ中央部には弥生後期から古墳時代初頭段階の方形周溝墓群を確認している。その範囲は砂堆を横断する東西方向に展開しており、東西方向の幅は 200m、南北方向の幅は 100m 程度の範囲に集中する傾向にある。

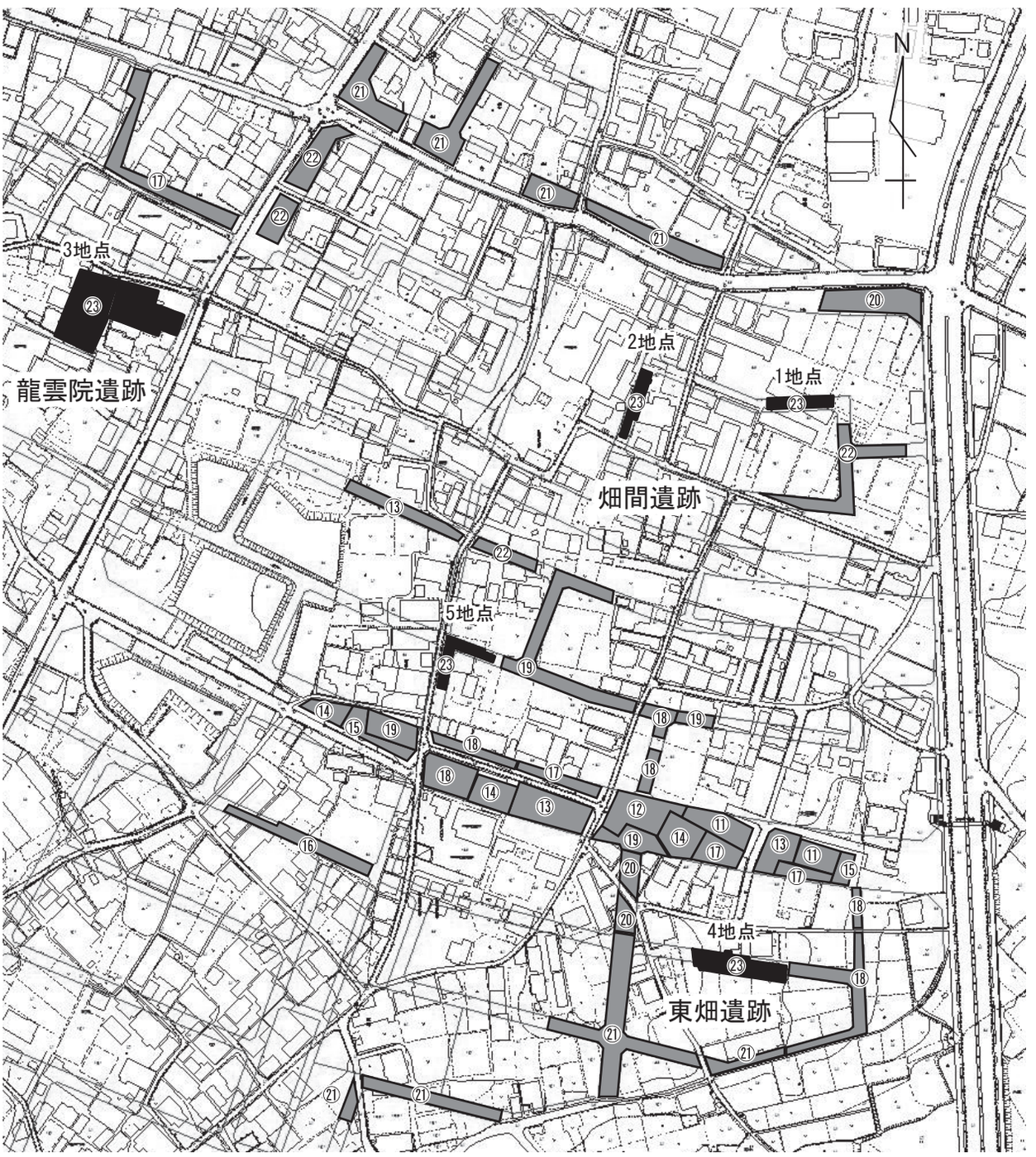
また、東畑遺跡の畑間遺跡と接する北側区域からは平成 21 年度調査において弥生後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡を複数確認している。北側には先述の方形周溝墓群が広がることから、同時期の居住域の中心と考えられる。

他方､畑間遺跡の北半及び郷中遺跡からは弥生時代から古墳時代に属する遺物の出土は稀である。



第 6 図　遺構変遷概念図

この地区での出土遺物の中心は古代から中世、場所によっては近世段階にかけての時期のものであり、時代の変遷に伴い意識的に選地した上での土地利用がなされていることが窺える。また、特筆すべき事項として東畑遺跡の北側、今回報告する 1 地点調査区の北側において平成 20 年度の調査で確認した区画溝がある。周辺からは瓦や墨書土師皿埋納遺構などを確認しており、出土遺物から屋敷地とは考えにくい状況がある。周辺の調査例の増加を待つしかないが、小規模な持仏堂など、仏教に関係した遺構が存在する可能性が考えられよう。なお、龍雲院遺跡についてはこれまで発掘調査が行われておらず、今回の調査に先立ち実施した試掘調査によって中世段階の遺物を含む遺物包含層を確認しているにすぎない。



第 7 図　既往の調査地

第 4 節　発掘調査の方法

今回の発掘調査は土地区画整理に伴う市道建設箇所の発掘調査であり、畑間遺跡地内 3 箇所と東畑遺跡地内 1 箇所、および龍雲院遺跡 1 箇所の 5 つの地点に分かれている。

それぞれの地点に於ける調査用グリッドについては、愛知県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル』に基づき、1 辺 5m の小グリッドを最小単位として設定した。

即ち、世界測地系の平面直角座標第 7 系の座標に基づき、座標の X 軸を座標系原点の子午線に一致する軸とし、Y 軸を X 軸に直交する軸とし、座標系原点から X 軸は真北へ、Y 軸は東へ向かう数値を正とする。これに基づき、1km×1km の大グリッドを設定し、更に 100m×100m の中グリッドを設定し、その中の最小単位として 5m グリッドを設定した。（第 8 図）

実際の発掘調査は、各地点の試掘データや周辺の調査結果を参考に、重機を用い表土及び攪乱土を掘削除去後、人力による掘削を実施した。

遺跡の記号については、畑間遺跡 :HM（1 地点・2 地点・5 地点）　東畑遺跡 :HH（4 地点）　龍雲院遺跡 :RI（3 地点）　とした。例えば HM11-2 は 2011 年度畑間遺跡 2 地点という意味である。

主な遺構の種類は、以下の略号を用いた。

SB: 住居址　SD: 溝　SK: 土坑　SM: 貝塚または貝層　SU: 集積遺構

SX: 不明遺構およびその他　SZ: 墳丘墓　NR: 自然流路

重要遺物や特定の遺物に関しては地点上げ遺物扱いとして各地点毎に d-001 から番号を付し、トータルステーションを用い出土地点を測量した。各地点の d 番号は遺物観察表と実測図でも共通で使用している。

各地点は車両進入が不可能であった 2 地点を除き、高所作業車を用い完掘状況の全景写真を撮影した。

調査終了後は重機を用い掘削土で埋め戻し作業をおこなった。出土遺物の洗浄および一次整理は、調査期間の後半から現場事務所にて調査作業と並行しておこなった。

第 5 節　調査経過

畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査業務委託は平成 23 年 5 月 30 日に契約を締結し、直ちに作業を開始する予定であったが、調査予定地における住民の移転問題や工程等さまざまな調整に約 1 ヶ月を要した。

主な作業工程は以下の如くである。

6 月 28 日に仮設事務所プレハブを 3 地点（龍雲院遺跡地内）に設置。6 月 30 日より、5 地点調査予定地周囲の安全フェンス設置作業および重機による表土掘削を開始。同時に、次に調査予定の 2 地点もフェンス設置作業を開始後、7 月 4 日より 5 地点の調査を開始した。

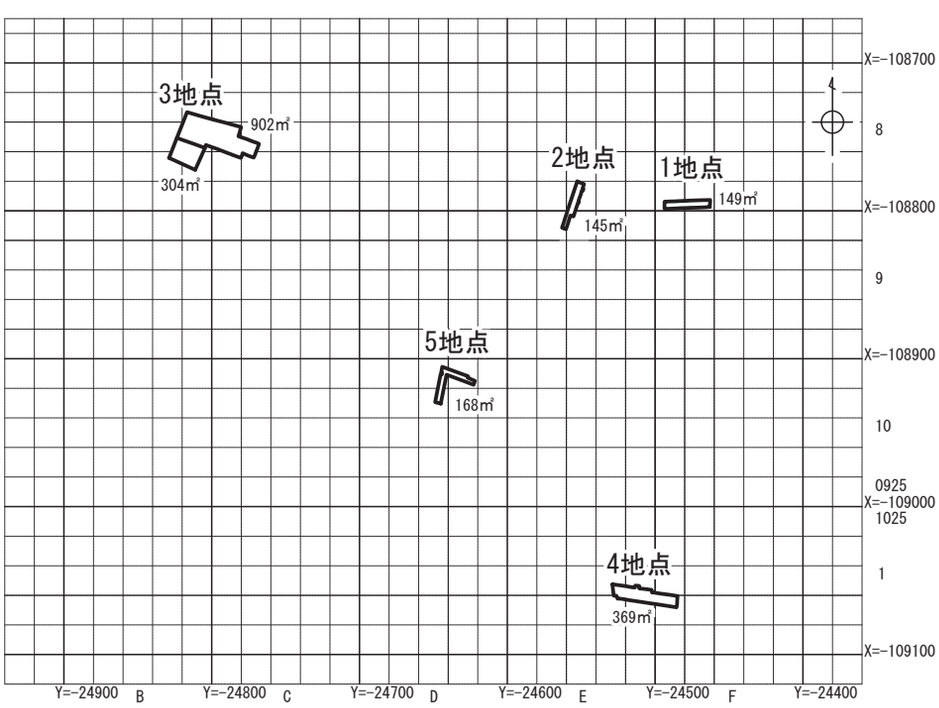
5 地点は遺構・遺物ともに極めて希薄な状況であったが、地山として認識した砂層に接し、周辺の丘陵地より運ばれてきたと思われる明褐色粗砂の堆積層が不規則に存在していた。7 月 13 日には高所作業車にて完掘状況を撮影し、測量後重機で埋め戻し、7 月 14 日に終了した。

2 地点は 7 月 21 日より重機による表土掘削を開始し、7 月 25 日から調査を開始した。つい先

日まで住宅が存在していたこともあり攪乱部分が多く、中世～近代の度重なる地業により遺構検出の難しい地層（砂層）であったが、弥生時代の遺構の残存も確認された。8 月 1 日には完掘し、全景写真を撮影したが、周辺の道路が狭小なため高所作業車が進入できず、やむを得ず三脚梯子の上からの撮影となった。補足の掘削および測量後、8 月 4 日には埋め戻しを完了した。

続く 1 地点は調査計画面積が 190㎡ということであったが、現地を確認したところ実際には 150㎡前後であった。8 月 8 日より表土掘削を開始し、測量班によるグリッド杭の設置や事前準備を経て、8 月 10 日より調査を開始。13 日から 16 日までのお盆休みを挟み、8 月 24 日午前中に完掘し、午後から高所作業車を用い全景写真を撮影した。補足作業完了後、8 月 26 日には埋め戻しを完了した。

4 地点は 8 月 29 日からフェンス設置作業と重機による表土掘削を同時に開始し、8 月 30 日に終了。翌日測量班によるグリッド杭の設置と、調査区の面積計算を行ったところ、本来調査予定であった耕作地部分を避けて設置したため、このままでは調査面積が 304㎡になることが判明。(計画では 350㎡)幸い調査区南側が広く空き地になっており、道路予定地いっぱいまで拡張可能であったため、9 月 1 日よりあらためて重機による拡張掘削を開始。作業工程などを調整後、9 月 7 日より発掘作業を開始した。この地点では既に表土掘削の時点でかなり浅い部分より弥生時代の土器棺が検出されており、弥生時代の遺構が全面に展開していることが予想された。発掘を進めていくと、調査区の東半分は地山面近くまで中世から古代の遺物が分布したが、西半分は表土直下の中世の遺物を含む薄い包含層のすぐ下に、弥生時代の遺構面が良好に存在していることが判明した。なかでも最初に検出された土器棺は、最終的に 4 基の土器棺が一直線上に並ぶ他に類例の無い遺構であることが判明した。またその土器棺列に隣接して、隅丸方形プランの竪穴住居址 1 軒の検出に成功した。一方古代～中世の遺物包含層が掘削された東半部では地山面から方形周溝墓が検出され、弥生期の極めて重要な情報を得ることができた。



第 8 図　調査区位置図

この 4 地点では 9 月 19 日に現地説明会を開催することが決まっていたため、9 月 16 日には準備を完了した。当日は午前 80 名、午後 40 名、合計 120 名の見学者が来訪した。現地説明会終了後も発掘作業を続け、住居址の精査や掘削を続けた結果 10 月 11 日に完掘し、10 月 12 日に高所作業車にて完掘状況を撮影した。各種補足作業や測量は 10 月 14 日までに終了し、10 月 17 日より重機による埋め戻し作業を開始。翌日夕方までに終了した。

最後の調査区である 3 地点は名鉄太田川駅から指呼の距離にある曹洞宗龍雲院に隣接した地域であり、すでに今回の調査開始とともに現場事務所を設置した地点でもある。調査予定面積が 1,200㎡と、今回の調査ではもっとも広大であり、鉄道駅にも近く人や車の往来も激しいところなので、周囲を全面安全フェンスで囲い安全対策を万全に整えてから調査を実施した。調査予定地は、駅に隣接した大型店舗への荷物搬入のための仮設道路として使用されていたため、ほぼ全面に砕石が敷かれ硬く踏み固められていた。よって中型重機では表土掘削がパワー不足であることが予想されたため、大型重機を導入した。砕石舗装の硬化面の懐柔作業は 10 月 20 日より開始したが、排土を場内処理しなければならない関係上、一旦掘削予定範囲を全面懐柔した後、あらためて従来の表土掘削に取り掛からなければならなかった。

排土取り扱いの関係上、表土掘削は調査予定地内の龍雲院側から開始したが、第 1 段階として予定していた約 300㎡のほぼ全面が攪乱であり、更には攪乱土を除去しきらないうちからかなりの湧水があった。このような現状を踏まえ、調査監督員である東海市教育委員会社会教育課の宮澤氏と協議の結果、湧水レベルまでは重機で表土掘削した後、攪乱状況を写真撮影することによって該当部分の調査は終了と見做すという見解を得たので、10 月 21 日・24 日の両日を使い掘削→写真撮影→埋め戻しの一連の作業をおこなった。

※なおこの攪乱部分に関して、周辺住民の証言によれば該当部分には昔小さな沼地のような池があり、少なくとも昭和の後半はゴミ捨て場になっていたということであった。

結果、この 3 地点（龍雲院遺跡）で残された調査面積は約 900㎡となり、排土処理の関係上ほぼ中央で二分割し、前半と後半に分け、即ち打って返し方式で調査することとして作業工程を直ちに組み直した。10 月 25 日には前半区の表土掘削を終了し、翌日にはグリッド杭の設置作業をおこない、10 月 27 日から調査を開始した。当地区では掘削排土の便宜を図るためにベルトコンベアを導入し、常時 3 台から 5 台を使用した。当調査区で主に出土する遺物は中世から近世の焼き物が殆どであったが、かなり大規模な貝層のや小皿を副葬された埋葬人骨や幼児骨 2 体も検出された。また、あるレベルまではその気配すら感じられなかった溝が複数検出され、砂堆に伏流する湧水と相俟って新鮮な発見であった。この前半区は 11 月 17 日に完掘し、翌日高所作業車から完掘状況を撮影した。

11 月 21 日からは前半区の埋め戻しと同時に、後半区の表土掘削を開始した。11 月 24 日夕方までに掘削作業は終了し、新たにベルトコンベアを設置。翌日は測量班によるグリッド杭の設置作業をおこない、11 月 28 日から発掘作業を開始した。前半区で検出された貝層は後半区側にも広がっており、なかには純貝層を為す部分も存在した。この後半区は近世から現代の攪乱が多く、またそれらとは別に地震による液状化の痕跡もみられた。この地震がいつの時代に発生したものであるか正確には特定できなかったが、以前当地に建っていた旧家の土蔵の土台に使用されていた人頭大の礫（ぐり石）を無数に巻き込んでいることなどから、近世である可能性が高い。なお当区でも地山

レベル近くで並行する複数の溝が検出され、プランの状況などからこれらは中世の屋敷周囲に巡らされたものと推定された。同時にこの区画内からは短刀を副葬品とした埋葬人骨も検出され、屋敷の敷地内に営まれた屋敷墓と解釈され、貴重な発見となった。

当調査区は 12 月 29 日から平成 24 年 1 月 4 日までの冬休みを挟み作業を続け、1 月 23 日までに完掘し、翌 24 日に高所作業車にて完掘状況を撮影した。1 月 25 日からは重機による調査区埋め戻しを開始し、27 日に終了。1 月 31 日に仮設事務所プレハブを撤去し、現場での全ての作業を終了した。

《調査日誌抄録》

平成 23 年

6 月 28 日　3 地点（龍雲院遺跡）に仮設事務所プレハブおよび仮設トイレ設置。午後宮澤氏を交え、打合せ会議。
6 月 29 日　清須事務所より道具類搬入。仮設事務所内電気工事。測量班による基準点確認作業。
6 月 30 日　重機、発電機、単管類搬入。新規入場者教育（5 名）。5 地点（畑間遺跡）敷地周囲安全フェンス設置開始。重機による表土掘削開始。
7 月 1 日　5 地点→重機による表土掘削の継続。2 地点→安全フェンス設置開始。
7 月 4 日　5 地点→ステップ設置。表土掘削終了。グリッド杭の設置。2 地点→安全フェンス設置完了。
7 月 5 日　5 地点→調査区内清掃。1 地点に資材を運搬し、調査予定地周辺に安全フェンス設置開始。
7 月 6 日　5 地点→掘削開始。貝層サンプル採取。
7 月 8 日　地業によると思われる堆積層を確認。遺構検出作業。遠賀川式土器（壺破片）の出土。
7 月 11 日　遺構掘削。地山砂堆(砂丘)と明褐色砂礫層の不整合面を検出。砂礫層の掘削は暫定的に湧水レベルまでとする。
7 月 12 日　調査区壁面清掃後、写真撮影。土層注記。
7 月 13 日　高所作業車（スカイマスター）12m から完掘状況撮影。平面測量。
7 月 14 日　東西トレンチ中央 1 箇所、南北トレンチ中央 1 箇所で重機による深掘りを実施。直ちに大量の湧水有り。調査区埋め戻し。
7 月 15 日　安全フェンス撤去作業を開始。資材は 1 地点に運搬し、同時に設置作業をおこなう。重機を 0.4㎥から 0.25㎥に入れ替え、1 地点に回送。
7 月 19 日　台風接近のため作業中止。現場安全パトロール。
7 月 20 日　台風のため作業中止。1 地点冠水。安全パトロール。
7 月 21 日　宮澤氏、永井氏立ち会いの下、2 地点表土掘削開始。
7 月 22 日　グリッド杭の設置。
7 月 25 日　2 地点の遺構検出開始。中世～近世の貝層を数カ所で確認。
7 月 26 日　遺構検出および遺構掘削。ところどころに近世の廃棄土坑や集積がみられる。
7 月 27 日　遺構検出および遺構掘削。アサリ・シオフキを中心とした貝層をサンプリング。東壁の井戸跡断面にみられる液状化の痕跡を確認。
7 月 28 日　遺構検出および遺構掘削。012SK は埋土下半に大量の貝殻を含み、内耳鍋・瓦・茶碗など 18 世紀の陶器類を含む廃棄土坑。
7 月 29 日　遺構検出および遺構掘削。地山面の検出で黒褐色砂の広がる部分が 2 箇所存在し、いずれも弥生時代の墓壙である可能性が高い。
8 月 1 日　2 地点完掘。高所作業車が進入できない状況のため、三脚梯子から全景を撮影。
8 月 2 日　平面測量と同時に弥生時代の墓壙周辺を補足調査し、プラン全体を検出。
8 月 3 日　セクション清掃および写真撮影。南北トレンチ西辺および南辺、北辺を土層注記。
8 月 4 日　重機による調査区埋め戻し。1 地点調査予定地周辺の草刈り作業。
8 月 5 日　2 地点→安全フェンス解体撤去し、4 地点に運搬。4 地点調査予定範囲の草刈り。
1 地点調査範囲の縄張り→計画では 190㎡だが、実際には最大で 150㎡であることが判明。
8 月 8 日　宮澤氏立ち会いの下、1 地点の表土掘削を開始。
8 月 9 日　表土掘削終了後、グリッド杭の設置。測量班→ 3 地点および 4 地点の現状地盤高測量。
8 月 10 日　1 地点→遺構検出のための掘削を開始。強烈な日差しのため日除け用寒冷紗を設置。2 地点出土の遺物袋詰め作業。
8 月 11 日　土器集積を (001SU) を検出。出土状況撮影および、図化用写真撮影。山茶碗・かわらけ焼きの山皿とともに

馬の歯を検出。まじないの遺構か。全面に日除けの天幕を設置。
8 月 12 日　遺構検出のための掘削を継続。001SU 土器集積の遺物取り上げ。明日からのお盆休みに備え、各種養生作業をおこなう。
8 月 13 日～ 16 日お盆休み。毎日 1 回現場パトロールを実施。
8 月 17 日　1 地点→遺構検出のための掘削。東濃系陶器の出土が目立つ。午後、現場事務所にて安全大会。
8 月 18 日　遺構検出のための掘削。古銭（宋銭）、陶丸、東濃系山茶碗や古瀬戸資料の出土が目立つ。
8 月 19 日　遺構検出のための掘削。陶丸、砥石、釘、中国青磁などの特徴的な遺物を検出。調査区東半に住居址が存在する様子。
8 月 22 日　遺構検出作業。地点上げ遺物測量。セクション清掃および分層､撮影。やはり東濃系や瀬戸製品の出土が多い。
8 月 23 日　遺構掘削開始。完掘と同時に測量をおこなう。東側で小型の竪穴住居様遺構を検出。周辺からは陶丸や古銭を検出。工房跡か？
8 月 24 日　調査区周辺の清掃。調査区内清掃に伴い新たに土坑を複数検出し、直ちに掘削。焼土塊が詰め込まれたような土坑もあった。午後、高所作業車から完掘状況の撮影。
8 月 25 日　4 地点の調査予定地にて調査予定範囲の仮縄張りをおこなう。不法耕作部分が調査できない可能性が高まる。
8 月 26 日　1 地点、調査区埋め戻し。
8 月 29 日　1 地点→安全フェンス解体。4 地点→安全フェンス設置と同時に、重機による表土掘削開始。
8 月 30 日　4 地点→表土掘削を継続し、夕方までに終了。現時点でチャート製剥片石器と、土器棺と思われる大型の壺を検出。
8 月 31 日　グリッド杭の設置および調査区外形と面積を測量。不法耕作部分を避けて設置したため調査予定面積が 304㎡に縮小されてしまったため、宮澤氏と協議の結果、調査区を南側に 1m 拡張することを決定。
9 月 1 日　調査区拡張部分を重機で掘削開始。
9 月 2 日・5 日台風接近のため作業中止
9 月 6 日～ 9 日遺構検出のための掘削。
9 月 12 日　遺構検出のための掘削。土器棺が 4 基一直線に並ぶ状況を確認し、写真撮影。
9 月 13 日　遺構検出のための掘削。調査区西部で住居址と思われる遺構を検出。現状ではプラン確定に至らず。
9 月 14 日　遺構検出のための掘削。第 5 の土器棺が存在しないかどうか、北側に特別拡張区を設置して掘削してみたが存在せず。
9 月 15 日　遺構検出のための掘削。地点上げ遺物および土器棺の出土状況を測量。図化用写真を撮影。愛知埋文石黒氏・宮腰氏・永井氏・宇佐美氏ほか、来客集中日。
9 月 16 日　遺構検出のための掘削。午後から現地説明会のための準備作業開始。解説リハーサルをおこなう。
9 月 19 日　現地説明会。午前 10 時からの回は 80 名、午後 1 時からの回は 40 名、合計 120 名の見学客が訪れ、大盛況を呈する。発掘体験コーナーが大好評であった。
9 月 20 日～ 21 日雨のため作業中止。台風接近中。現場安全パトロールを実施。
9 月 22 日・26 日遺構検出のための掘削。
9 月 27 日　遺構検出のための掘削。午後、現場事務所にて安全大会。
9 月 28 日　遺構検出のための掘削。住居址のプランを確定し（1 辺 4.5m 規模で隅丸方形）掘削を開始。トレンチ断面で貝層を確認。遺構面以下にラミナ状の堆積層（砂層）を確認。
9 月 29 日～ 30 日遺構検出のための掘削。住居址床面より大量の土器、および管玉や石器などを検出。調査区東半は西半に比して中世面が十数センチ深く地山面を削平している様子。
10 月 3 日～ 4 日遺構検出のための掘削および遺構掘削。方形周溝墓の溝 002SD、並行する 2 本の溝 004SD・008SD を検出。埋土には大量の土器が含まれている。
10 月 5 日　遺構掘削。中日新聞による取材。降雨により午後の作業は中止。宮澤氏立ち会いの下、3 地点の調査範囲を確認して縄張りをおこなう。
10 月 6 日～ 7 日遺構掘削。ほぼ全面で地山面を確認。東海市副教育長・部長・課長来跡。下谷さん・藤井さん・早川さんボランティア参加。
10 月 11 日　遺構掘削をほぼ終了し、空撮に備えて調査区周辺の清掃を開始。
10 月 12 日　高所作業車から完掘状況を撮影。今回は現場周辺の 3 箇所から全景撮影を実施した。
10 月 13 日　平面測量および調査区西部方面補足調査。西部セクションでは明瞭な皿状構造層を確認。
10 月 14 日　平面測量およびセクション撮影。
10 月 17 日　西部地区のの補足調査を継続しつつ、東部地区から重機による埋め戻しを開始。
10 月 18 日　埋め戻し完了。4 地点周囲の安全フェンスを解体し､3 地点に運搬。同時に 3 地点周囲に安全フェンス設置開始。本日より現場事務所にて出土遺物の水洗を開始。

10 月 19 日　3 地点安全フェンス設置作業。道具類の整備作業。重機回送と同時に、0.45㎥を 0.7㎥に入れ替え。
10 月 20 日　龍雲院および森岡さん宅に作業開始の告知を兼ねて挨拶。（坂野・黒田）　重機による表土掘削開始。東南部分より砕石による簡易舗装面の懐柔作業にとりかかる。その後龍雲院側から表土掘削を開始したが、表土層除去と同時に湧水があった。結局龍雲院側は予定部分の大半が近現代の攪乱と沼地の痕跡であることが判明し、宮澤氏と協議の上、300㎡余りの攪乱地区は表土掘削の写真撮影を以て調査終了と見做し、直ちに埋め戻すことに決定した。
10 月 21 日　夕方までに攪乱区の表土掘削および写真撮影を終了。湧水部分の悪臭が酷いため、ブルーシートで全面を養生しておく。
10 月 24 日　攪乱区約 300㎡部分は埋め戻し、残りの調査予定面積 900㎡は排土処理の関係上（場内処理）前半後半打って返し方式でおこなうことに決定したため、前半部分の表土掘削を開始。
10 月 25 日　前半区の表土掘削を完了。調査区内の広い範囲に貝層の分布がみられる。出土する遺物の様相から、中世末から近世の所産と考えられる。
10 月 26 日　グリッド杭の設置および調査区外形測量。
10 月 27 日　3 地点前半区調査開始。重機 0.7㎥→ 0.45㎥に入れ替え。
10 月 28 日　ベルトコンベアーおよび発電機を搬入し、調査区内に設置。
10 月 31 日　掘削作業、土器洗い作業ともに午前中で終了し、午後安全大会。
11 月 1 日～ 4 日攪乱部分を集中的に掘削除去。
11 月 7 日　攪乱除去と同時に、遺構検出のための掘削をおこなう。貝層周辺からの遺物出土量が多い。また、貝層中に極度に圧縮された破砕貝層による硬化面が確認されたので、その構造を観察すべくサブトレンチの掘削を開始。
11 月 8 日　圧縮破砕貝層のサブトレンチは地山砂層まで掘削完了した結果、層厚は 50㎝前後であることが判明。調査区内に鉄滓が多く出土する部分があり、地点上げ扱いとしてその分布状況を観察することにした。
11 月 9 日　遺構検出のための掘削途中、幼児と思われる人骨を検出し砂ごと取り上げる。圧縮破砕貝層は南北に帯状に存在する様子であったため、調査区東セクションとして構造を把握することとした。001SM 貝層サンプリング。（30㎝）
11 月 10 日　西部方面の掘削は地山面に到達。同時に埋葬人骨 1 体の存在を確認。人骨の残存状態は極めて悪く、山皿 1 点が副葬されていた。東南部では粘土が敷かれた部分が断片的に広がる様相から、江戸期以降の何らかの工房跡の可能性あり。本日より新たに作業員 2 名が参加したので、新規入場者教育をおこなった。
11 月 14 日　遺構検出のための掘削。地点上げ遺物は約 100 点に及ぶ。002SZ 人骨の出土状況を測量。図化用写真撮影後、人骨は取り上げ。
11 月 15 日　ほぼ全面で遺構検出のための掘削を進めた結果、あるレベルに至り湧水を伴う流路（溝）の存在を確認した。
11 月 16 日　遺構掘削。地点上げ遺物測量および、掘削の終了した遺構の測量を開始。
11 月 17 日　空撮に備え、調査区周辺の清掃をおこなう。ベルトコンベアを調査区外に撤去。遺構検出面がほぼ湧水レベルであるため、遺構内はほぼ満水状況を呈する。遺構測量を継続。
11 月 18 日　高所作業車から完掘状況を撮影。セクション撮影。後半区の調査に備え､出入り口の付け替え作業をおこなう。
11 月 21 日　前半区埋め戻し開始。本日より土器洗いに女性 2 名が追加参加し、以後は終了まで基本的に 4 名体勢でおこなうこととした。
11 月 22 日　前半区埋め戻し作業と同時に、後半区の表土掘削を開始。
11 月 24 日　後半区の表土掘削を終了し、ベルトコンベアを設置。土器洗いと同時に、乾燥済み資料の袋詰め作業を開始。
11 月 25 日　グリッド杭の設置および調査区外形の測量。水洗済み人骨の選別作業。
11 月 28 日～ 29 日後半区の調査開始。前半区同様、攪乱部分が多いためその除去と調査区外形の整形、およびトレンチ掘削を同時に進める。
11 月 30 日　午前中は作業。午後から安全大会。
12 月 1 日　攪乱除去と遺構検出のための掘削。
12 月 2 日　雨にて発掘作業は中止。事務所内で遺物の袋詰め作業をおこなう。
12 月 5 日～ 9 日攪乱除去と遺構検出のための掘削。
12 月 12 日～ 16 日攪乱除去と遺構検出のための掘削。噴砂および液状化現象がみられる地帯の写真撮影。液状化地帯には建物土台に使われたと思われるぐり石の巨石が無数に密集しており、それらの除去に難渋する。
12 月 19 日～ 22 日攪乱除去と遺構検出のための掘削。調査区東部の湧水に対応すべく、水中ポンプ用の釜場を整備し排水を開始。貝層で埋積され水流のある流路（区画溝か）や、複数の溝の存在を確認。
12 月 26 日　降雪のため屋外作業は中止。遺物の袋詰め作業をおこなう。
12 月 27 日　調査区ほぼ全面で地山を確認し、流路を中心とした遺構プランを確認。
12 月 28 日　遺構掘削を開始。午後大掃除。年内作業は終了。

平成 24 年
1 月 5 日　　作業再開。遺構掘削。
1 月 6 日　　遺構掘削。新たに埋葬人骨 1 体を検出。(023SZ)
1 月 9 日　　遺構掘削と同時に、埋葬人骨の精査を進める。短刀が副葬されていることを確認。
1 月 10 日　屋敷の区画溝と思われる溝が複数存在する状況が判明。埋葬人骨はその溝の区画内に存在することから、屋敷墓であろう。サンプリングした貝層の洗浄を開始。
1 月 11 日　遺構掘削。地点上げ遺物約 100 点を測量。調査区西部の流路を完掘したため、測量を開始。土器洗い & 貝層洗浄 & 遺物袋詰め作業の同時進行。
1 月 12 日　遺構掘削。調査区全体で地山面を確認。区画溝部分は全て湛水状態となる。埋葬人骨を部位毎に取り上げ。
1 月 13 日　遺構掘削。調査区周辺と壁面保護で使用していたブルーシートおよび土嚢の撤去を開始。洗浄済み遺物コンテナ 14 箱を清須事務所に搬送。
1 月 16 日　主要な遺構掘削をほぼ終了。東セクションおよび北セクション前半部分の清掃と分層をし、写真撮影をおこなう。空撮に備えブルーシートと土嚢の撤去を進める。
1 月 17 日　調査区内よりベルトコンベアーを撤去し、遺構掘削の仕上げ作業と、調査区内清掃作業をおこなう。北セクション後半部分の写真撮影。土器洗い作業の加速要請。
1 月 18 日　平面測量。資材整備作業。
1 月 19 日　平面測量。セクション測量。午後安全大会。
1 月 20 日　土器洗い作業は本日にて終了。
1 月 23 日　遺物袋詰め作業を本格化し増員して続ける。
1 月 24 日　高所作業車から完掘状況を撮影。参加した作業員も上空からの俯瞰を体験する。午後からは部分的に安全フェンスの解体を開始。
1 月 25 日　重機による埋め戻し開始。北側部分は大型車両の進入を予定しているので、重点的に展圧する。遺物袋詰め作業を更に加速。
1 月 26 日　埋め戻し作業を継続。安全フェンスの解体および、各種道具類の洗浄・整備。
1 月 27 日　埋め戻し完了。資材道具類の清須事務所への運搬。(2 往復)　午後は現場事務所で茶話会。
1 月 30 日　各種レンタル資材の運搬。現場事務所備品の搬出。
1 月 31 日　現場仮設事務所プレハブ撤去。産業廃棄物処理。(上野清掃社)　本日にて、現場に於ける全ての作業を完了。
2 月 1 日　　本日より、国際文化財清須事務所にて発掘データの整理作業を開始。(ジェットマーカーによる注記作業は既に 1 月中旬より開始している。)
3 月 29 日　東海市役所にて、平成 23 年度の発掘成果品を納品。
5 月 21 日　東海市役所にて、「畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告書作成業務委託」として発注を受ける。
5 月 22 日　報告書作成業務に着手。国際文化財清須事務所にて作業を開始。
平成 25 年
3 月 29 日　本書刊行

第２章　畑間遺跡（1 地点・２地点・５地点）の調査

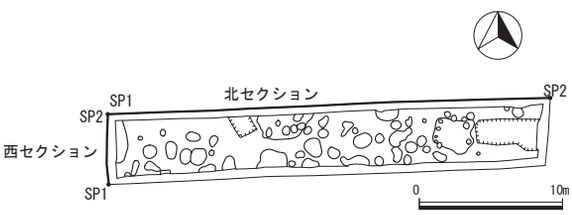
第１節　１地点の概要と遺跡の構造

今回の調査では畑間地内に１地点・２地点・５地点の計３カ所の調査地が存在した。地点の呼称は調査全体の５カ所に即したものであり、また必ずしも番号順に調査されたわけではない。

１地点の位置は平成 22 年度に調査がおこなわれた３地点に続くものである。また平成 20 年度の３地点・４地点の約 50m 南に位置する。

調査面積は 149㎡であった。

基本層序は以下のとおりである。



第９図　１地点セクション位置図

Ⅰ層：表土層。大半は現代の耕作土や盛土で、調査直前まで存在した住宅による攪乱を含む。撹乱層は場所によって地山まで達している。

Ⅱ層：中世～近世の遺物包含層。セクション図における１・２層がこれに相当する。10YR4/4 褐色砂層を上層に伴い、10YR4/3 にぶい黄褐色砂層が中心となる。

Ⅲ層：主に中世遺物の包含層。本調査区には弥生時代の遺物包含層が存在しないため、地山を直接覆う層ということになる。10YR3/2 黒褐色砂で、一部と遺構内の埋土はシルト化している。

調査前の標高は地表面で 4.2m 前後であり、大田の集落が乗る第１砂堆のなかでは高い部分にある。佐渡島のような形状の第１砂堆のほぼ中央、括れた部分の東側に位置し、嘗ては付け替え前の大田川が作り出していた広大な湿地帯に面していた。

第２節　主な遺構と出土遺物

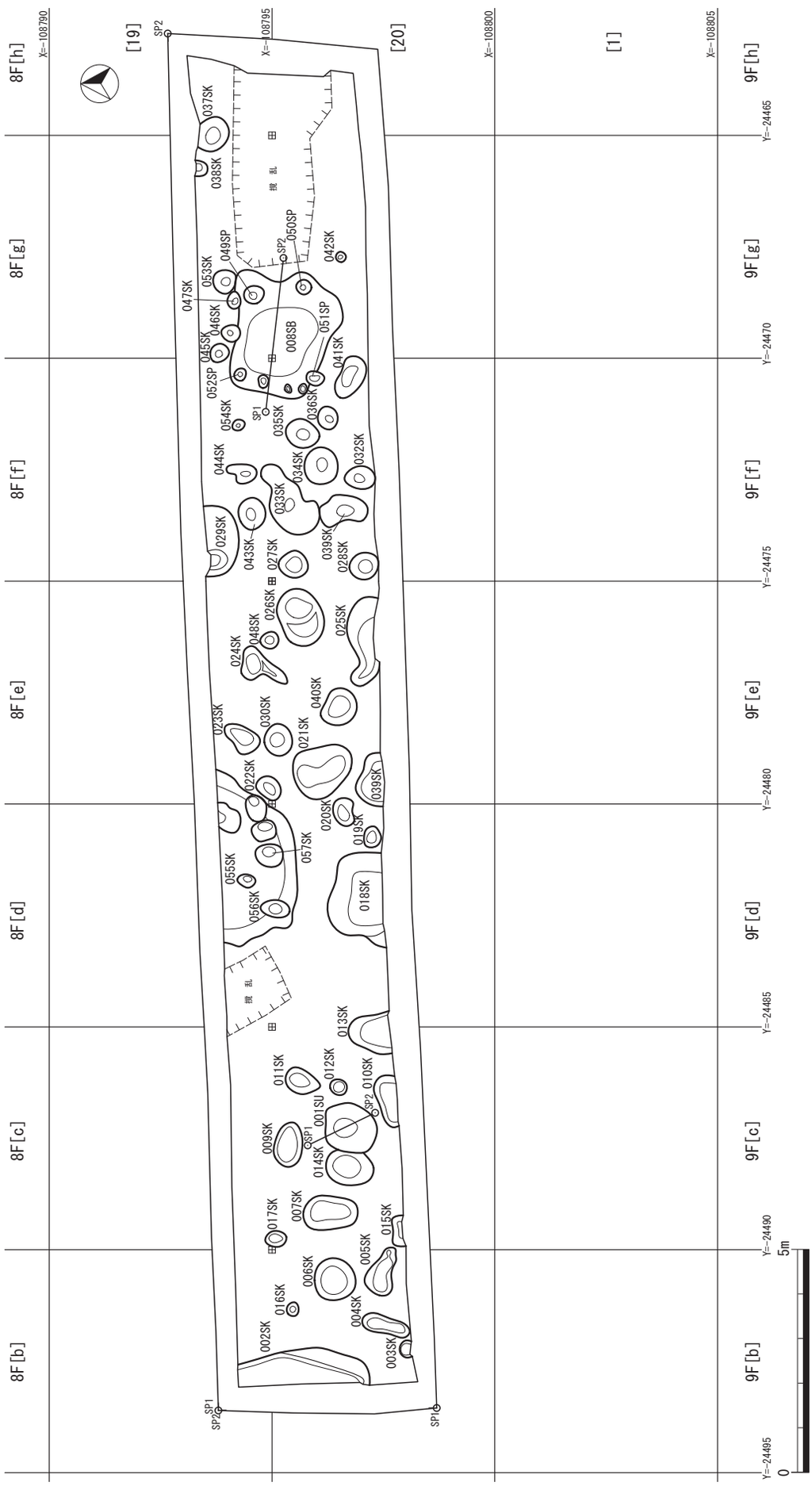
１．遺構

001SU 土器集積（第 13 図、巻頭図版第５）

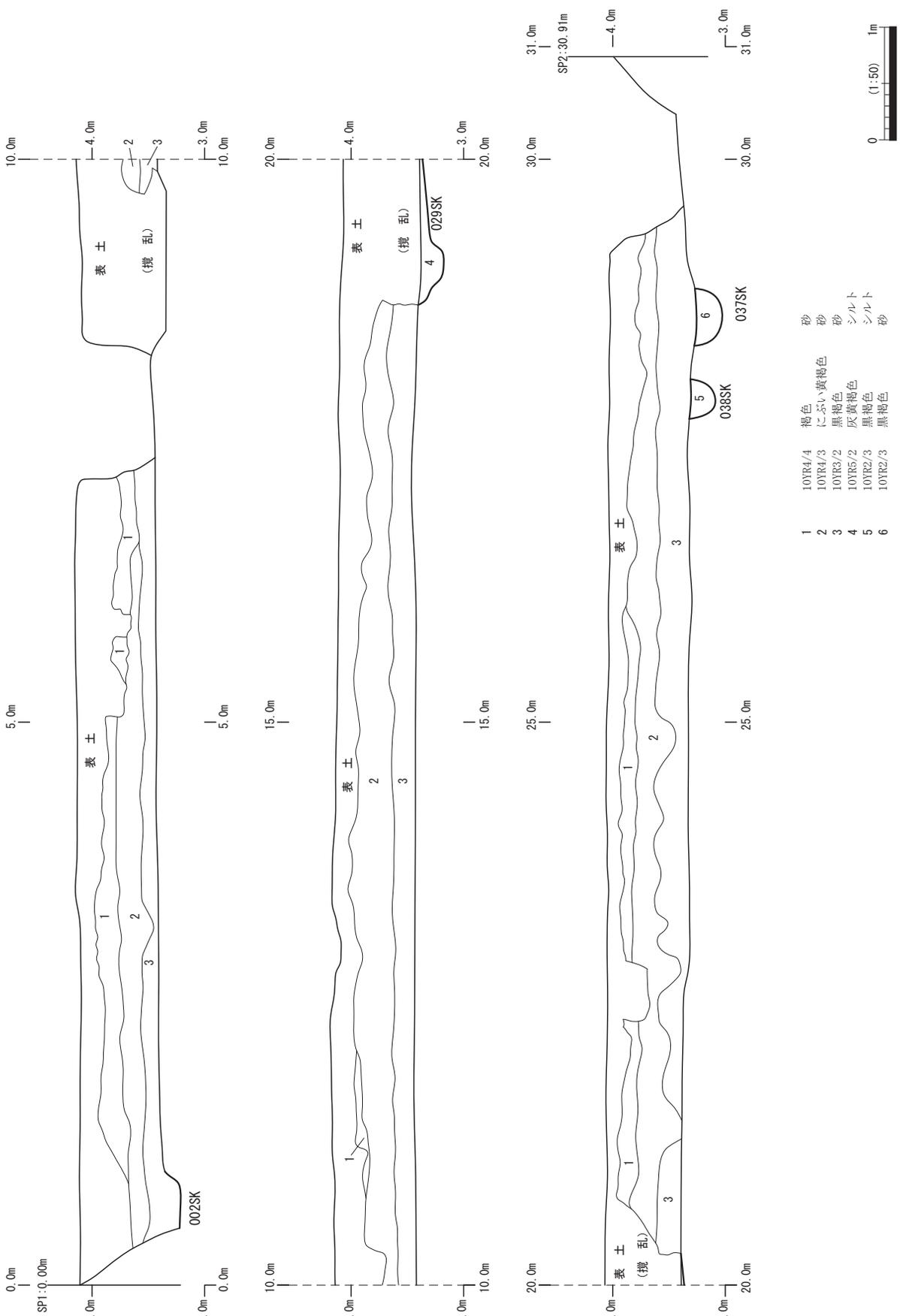
標高 3.5m レベルで最初の山茶碗を検出した。最終的には山茶碗５枚とかわらけ焼き仕上げの小皿 24 枚および、馬の頭部が埋納された直径 1.3m 深さ 20cm ほどの円形土坑である。馬の頭部は実際には歯牙のみの出土であるが、状況から頭骨全体が存在していたものと思われる。

先ず、山茶碗は５枚使われていたが、d-008 と 034 は上向きに、d-006 と 009 は伏せた状態で、d-007 は口を北に向けて直立していた。土坑の円形プランに沿って、ほぼ二等辺三角形を呈する位置にある。小皿は全てかわらけ焼成で、完形品と９割以上の残存状態のもの 10 枚を含む 24 枚で、茶碗・皿ともに概ね常滑窯３～４型式範疇に位置付けられる。（d-022 小皿を除く）完形のものがある一方、中には現地で割られ砕かれたような様相を呈するものもあり、これらの対比が興味深い。

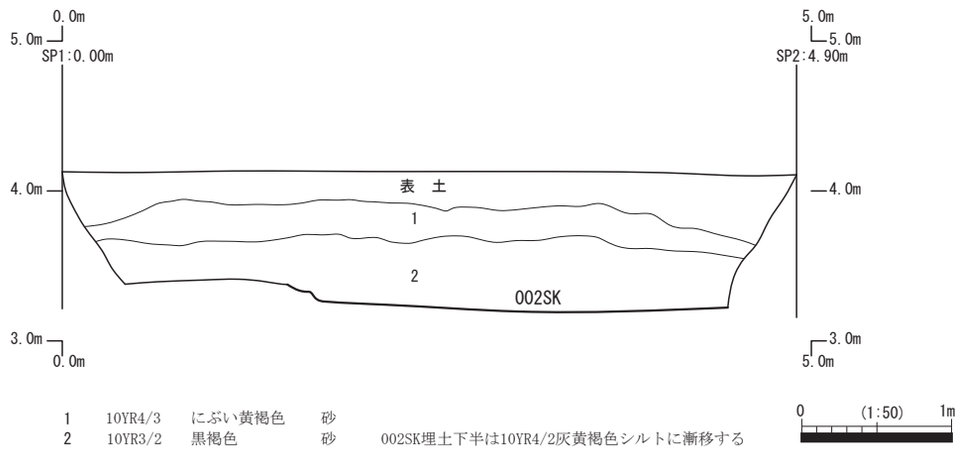
小皿の出土状況はさまざまで、土坑の中心部には少なく、土坑底を取り囲むように円形に配置さ



第１０図　１地点遺構平面図



第 11 図　1 地点北セクション図



第 12 図　1 地点西セクション図

れていた。それぞれの小皿は単独出土のものもあるが、何枚かが積み重ねられていた形跡や、受け皿に対する蓋のように底部を上にして置かれていたものもある。また中には 1 点、小皿 2 枚が山茶碗を夾むように積み置かれたものもあり、多様である。

受け身と蓋の関係で配置されて、検出時にほぼその原形を保っていると考えられるものは [受け身 d-022・蓋 d-021]　[d-011・012・032 の 3 枚・蓋 d-014・013 の 2 枚] である。

次に馬頭についてであるが、歯の出土状況から上顎と下顎は 20cm ほど離れた位置で検出されており、これは恐らく斬首された首を土坑底中央に直立させて埋納されたものが、腐朽や土圧によって分離して落下したものであろう。

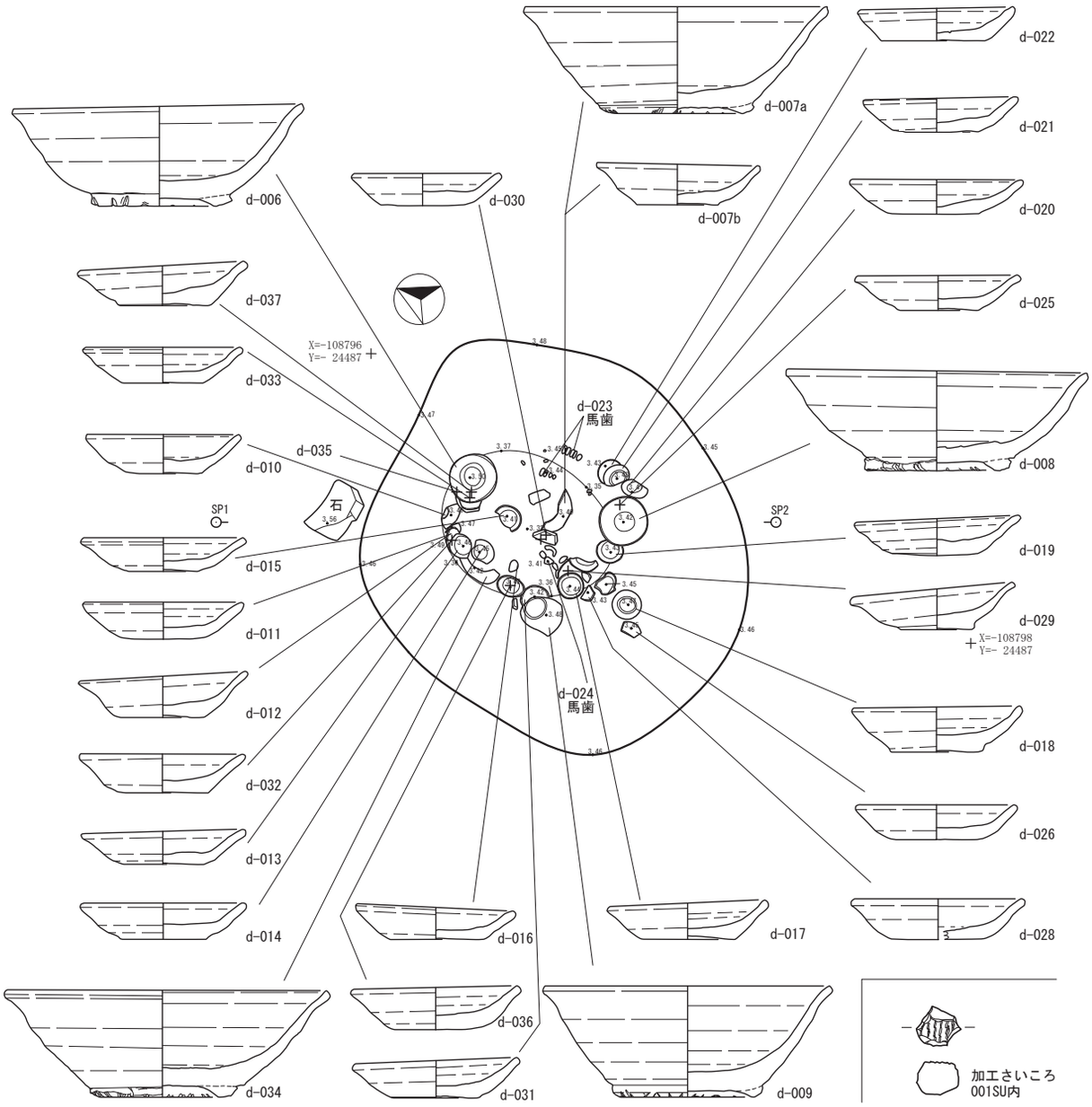
これらの諸状況から、地山砂層を円形に堀り窪めた中央に馬頭を置き、首回りに砂を盛り、その上に小皿を積み置き巡らせ、更に茶碗を置いたものと考えられる。目的は雨乞いなどのまじないであろうが、儀式終了後に何枚かの小皿が割られた上に、土盛りが為されたのかもしれない。なお、001SU 土器集積の土坑に接して重さ 1.2kg ほどの扁平な石が 1 個検出されている。表面に何カ所もハツられた痕跡を有する板状石であるが、石器として使われた様子はみられない。現状では土器集積との関係は希薄と言わざるを得ない。

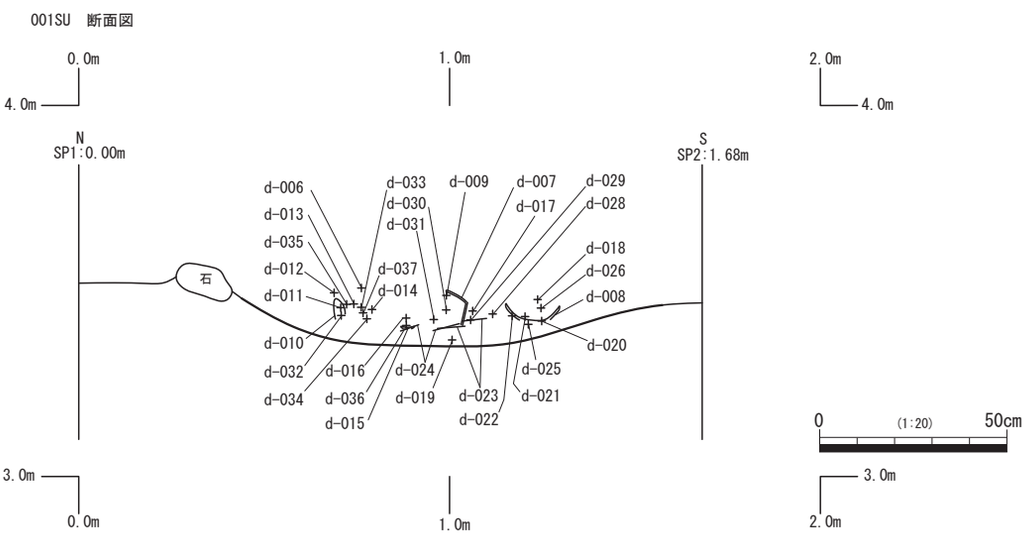
010SK 土坑

001SU のすぐ南側にあり、検出部分は 118×42cm 深さ 14cm ほどの浅い土坑である。埋土は 10YR3/3 暗褐色砂でとりわけ特徴の無い遺構であるが、埋土から斜めに地山に刺さるような状態で杏葉唐草文軒平瓦（d-091）が単独で出土している。

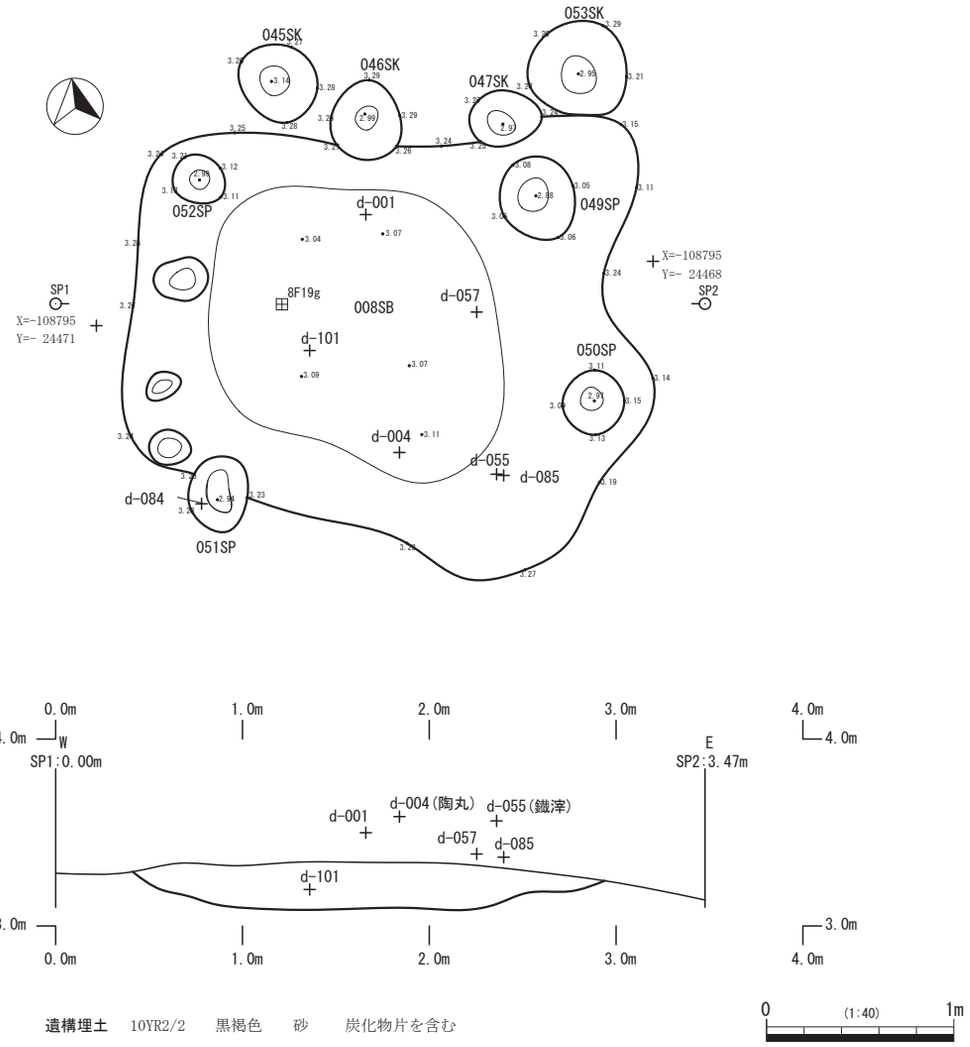
008SB 住居址様遺構（第 14 図、図版第 45）

調査区東端の地山面で検出された遺構である。2.5×2m ほどの不整形な形状で、中央の深さは 25cm ほどあった。埋土は 10YR2/2 黒褐色砂だが、シルト粒子を多く含んでいる。プラン周囲からは柱穴とも考えられるピット群が検出されており、南側以外の部分を取り囲んでいるようにも見える。住居址様遺構としたのは、底面が平坦で柱穴のようなピット群を伴うことからであるが、性格は不明である。この遺構の周辺から出土する遺物は殆どが瀬戸美濃製品であり、同時に周辺の主に西側から砥石 4 個、陶丸 15 個、宋銭 5 枚が出土した。また、遺構の埋土からは中国青磁小片と、





第 13 図　001SU 土器集積



第 14 図　008SB 住居址様遺構

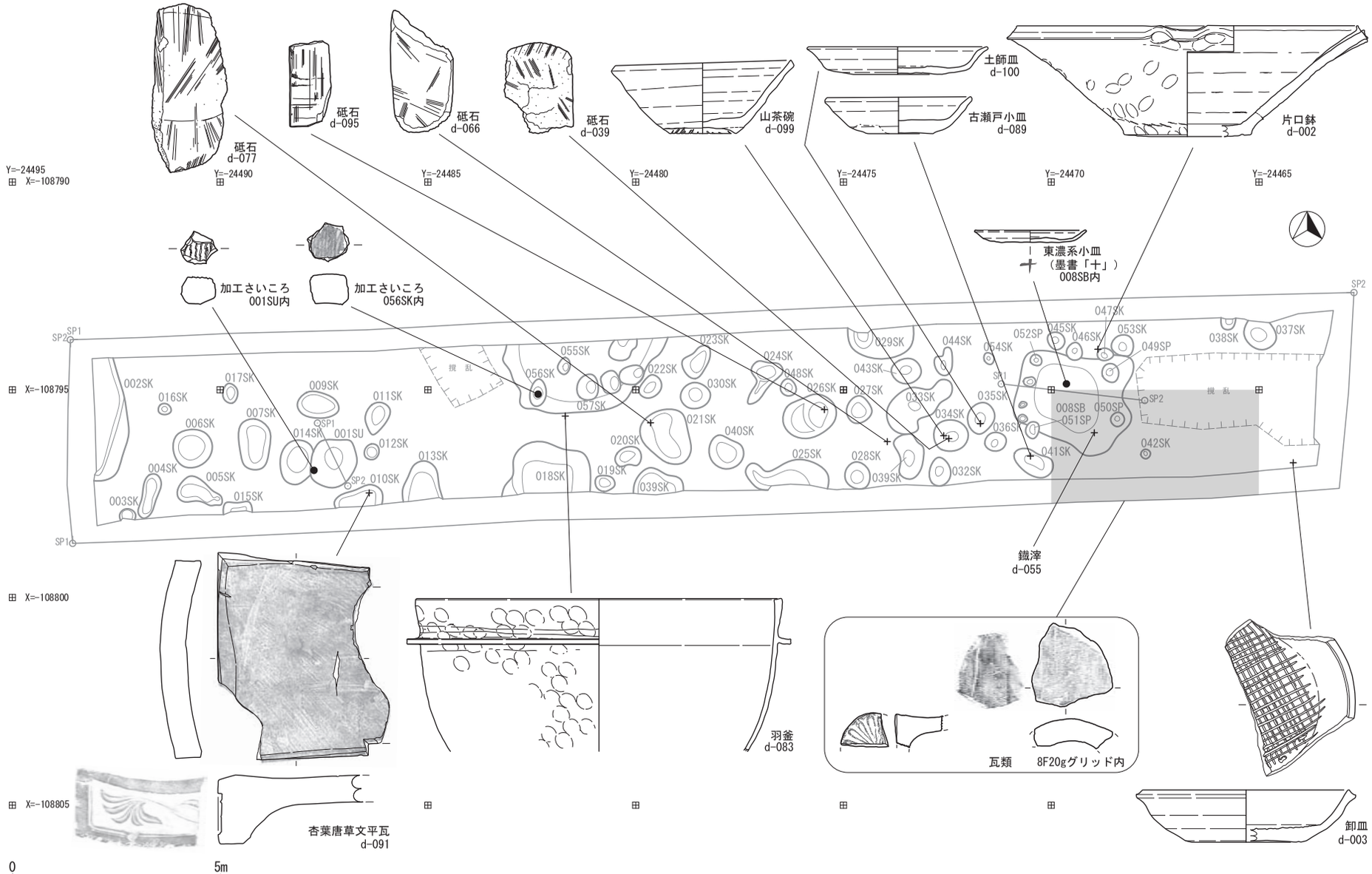
裏面に「十」という墨書のある東濃系小皿片が出土している。このように独特な周辺状況は、この遺構の特殊性を物語っているようでもある。

024SK・057SK 焼土塊の充填された土坑

024SK は 110×46cm 深さ 33cm ほどの不整形な土坑で、内部に大量の焼土塊が充填されていた。(約 3.1kg) また 057SK は 63×50cm 深さ約 30cm の円形土坑で、内部に同様の焼土塊が合計 1.5kg ほど詰め込まれていた。これらの土坑は柱穴とも理解出来るが、同様の遺構は調査区内には他に無く、性格は不明である。

2. 遺物

001SU に集められた器種は山茶碗とかわらけ焼成された小皿である。これらの遺物は d-022 の 1 点を除き、常滑窯 3 ～ 4 型式範疇のものである。d-022 の小皿は底面の広さや体部の立ち上がりを見ると常滑窯 6a 式期と判断されかねない形状ではあるが、胎土や焼成の様子は他の小皿と変わりないことや、重ねられた出土状況から後世の混入の可能性も無いことなどから、偶発的に生み出



※縮尺は、d-002・083・091と瓦約1/6、その他約1/4

第15図　１地点主要遺物分布図

された形状と判断したい。もっとも、これらかわらけ焼成の製品については山茶碗・山皿の工人とは違った、土師器専門の工人が関与していた可能性も無いわけではないが、消費地に於ける出土状況から察知できることには限界がある。

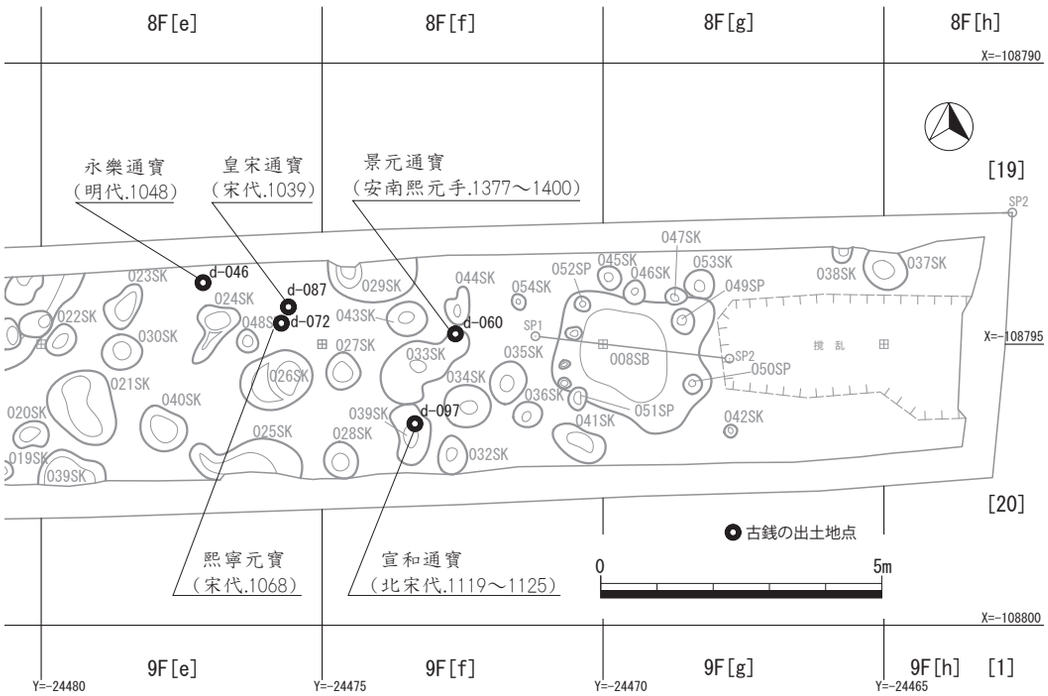
この出土地点から約 3.2km ほど南に、加木屋 1 ～ 3 号窯がある。このうち 3 号窯では土師器皿と壺が焼成されており、注目される。1・2 号窯は山茶碗と山皿を主要に生産していた窯で、いずれの窯も概ね常滑窯 4 型式期に営まれたものと解釈されている。時期的には 001SU 出土遺物とほぼ同時期または直後の窯であり、とりわけ土師器皿に関しては窯で焼かれたものが遠隔地まで流通したとは考え難いこともあり、遺構の存在する大郷集落と加木屋地区における営窯工人との密接な関係を示唆するものかも知れない。なお、この遺構の埋土からは 12 世紀末に加木屋地区で生産された古瓦を原料にした加工さいころが 1 点出土しているが、時期的な齟齬は無い。

この土器集積のすぐ南側から出土した d-091 杏葉唐草文軒平瓦に関しては、従来より断片的な出土が知られているものである。平成 20 年度の調査でも 3 片を発見しているが、いずれも瓦当面のみの断片であった。今回の発見事例は瓦当面約半分を欠くものの、瓦当顎部から平瓦部への接合手法がわかるものである。瓦当面には下外区と脇部分に枠ずれがみられるが、内区の文様にはずれが見られない。平瓦部凹面には布目が残り、尻側の両端に矩形の切り込みが存在する。また差し込み側全体が弧状に丁寧に打ち欠いて加工されいるのが特徴であるが、このままでは軒平瓦としての機能は果たせない。このような加工が当地にもたらされ利用される段階で直ちにおこなわれたのか、それとも後世の再利用時に為されたのかは判断できないが、珍しい使用例であろう。

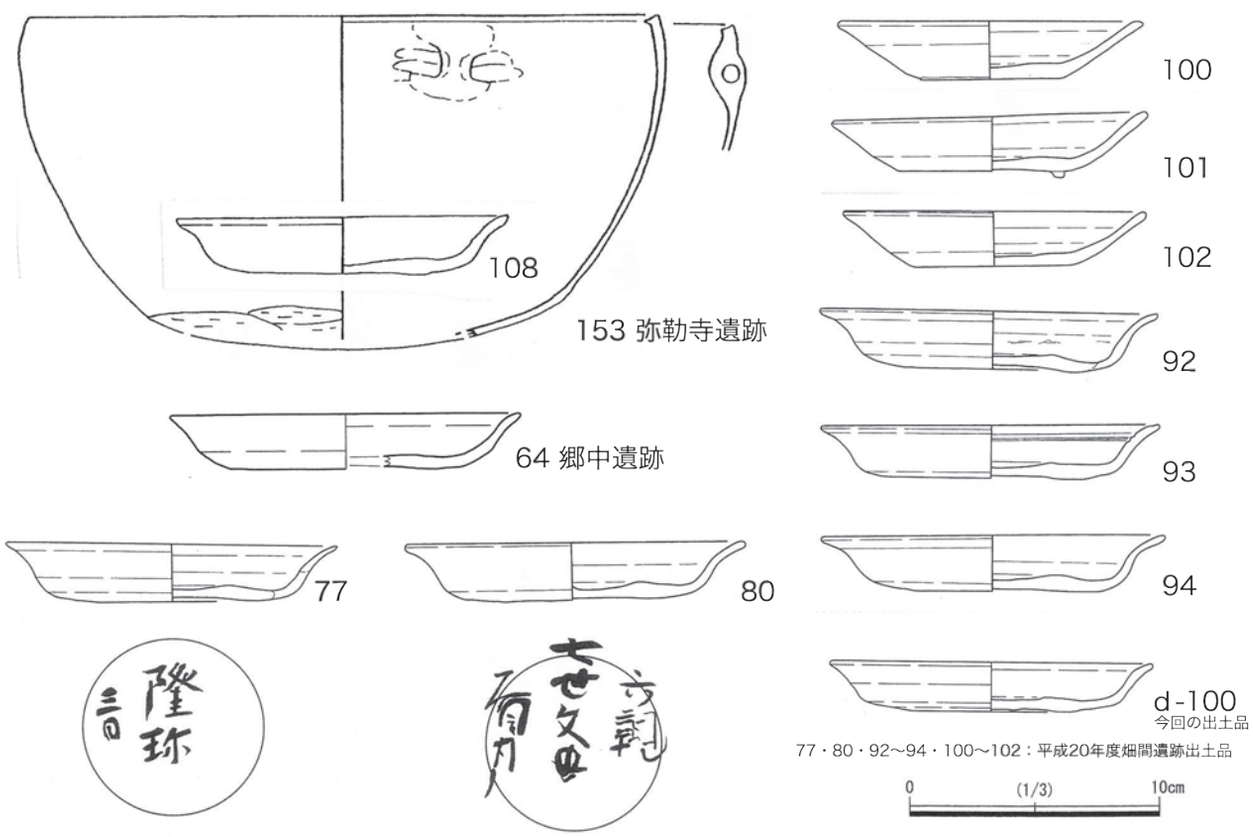
とまれ、この瓦が焼かれたのは加木屋地区の古窯（社山および論田古窯）であることが判明している。なかでも社山古窯は先述した加木屋 1 ～ 3 号窯と 600m ほどの距離に位置し、大田川上流の加木屋の谷とは違う横須賀の谷側に位置しているが、同一郷内ととらえてもよい距離である。なお、この杏葉唐草文軒平瓦をめぐる考察は付載 2 でおこなっているので、参照されたい。

この他の出土遺物としては、陶丸が 15 個発見されている。d-102 例は焼成前に「十」のヘラ記号が刻まれており、008SB で出土した東濃系小皿底面の墨書「十」と呼応するものであろうか。いずれの陶丸も表面が滑らかな状態であり、長年の手擦れによる使用が想像される。この陶丸の分布とほぼ同じ範囲で、5 枚の宋銭がみつかっている。（個々の同定は第 16 図参照）一番新しいものが景元通寶であることから、15 世紀代に使われたものであろう。また、やはりほぼ同じ範囲で砥石 4 個も検出されている。これらの出土状況から、いずれも 008SB 住居址様遺構での活動に伴うものではないかと推測される。

ほぼ同時期での使用が想像されるその他の遺物としては、常滑窯製の片口鉢（d-002）、羽釜（d-083）、瀬戸窯製の卸皿（d-003）、東濃系小皿（008SB 床面出土）、土師皿（d-100）などがある。（第 15 図）うち、土師器皿に関しては、平成 20 年調査時に発見されたまじない遺構（044SU）で、施餓鬼経や僧名（または供養者名）などが墨書された上で数十枚が積み置かれた使用法を報告した。同様の土師皿は遺跡北側の丘陵上に存在した弥勒寺遺跡や、畑間と隣接した郷中遺跡でも発見されている。このうち弥勒寺遺跡例（同図、108、153）は内耳鍋と入れ子になって土坑に埋納されており、これによって 15 世紀末から 16 世紀前半の所産であることが判明したものである。武部真木氏の分類に因れば（武部、2001）轆轤成形 F 類ということになるが、このうち 100 ～ 102 例は体部が直線的に開く F1 類であり、他は体部のナデが強く括れ、口縁部が外反気味の F3 類である。時期



第 16 図　古銭分布図



第 17 図　土師器皿集成図

的な位置付けは清洲城下町遺跡など尾張平野部出土資料の分析から 15 世紀末とされており、東海市例との齟齬は無い。

X=-108790
X=-108795
X=-108800
X=-108805
Y=-24465
Y=-24470
Y=-24475
Y=-24480
Y=-24485
Y=-24490
Y=-24495
8F[h]
8F[g]
8F[f]
8F[e]
8F[d]
8F[c]
8F[b]
9F[h]
9F[g]
9F[f]
9F[e]
9F[d]
9F[c]
9F[b]
[19]
[20]
[1]
焼土塊
加工さいころ
(056SK内)
加工さいころ
(001SU内)
d-050
d-102
d-103
d-004
d-045
d-090
d-082
d-063
d-067
d-096
d-062
d-064
d-071
d-080
d-051
● 陶丸の出土地点
□ 加工さいころ出土地点
※縮尺はd-102約1/2、他1/4
0
5m

第 18 図　陶丸分布図

第３節　１地点のまとめ

１地点で最も注目すべき遺構は、001SU 土器集積であろう。馬頭に山茶碗とかわらけ焼成された山皿を供えて埋納した呪術的な遺構であるが､民俗事例などからその目的は雨乞いと考えられる。一般に雨乞い儀式にみられる要素としては、その地区でいちばん高い山や丘の上で火を焚くことや意図的にさまざまな禁忌を犯すことが多い。

『日本書紀』には「村々の祝部の教えるところのままに、あるいは牛馬を殺して、もろもろの八代の神を祭り、あるいはしきりに市を移し、あるいは河伯に祈る、すでに効くところなし」との記述がある。[註 1)] また『続日本紀』には、雨乞いの際には黒い馬を供え、降り続く雨を止めたいときには白い馬を供えるという記事がある。なぜ馬が用いられたのかという問いに対してはいくつかの説があり、例えば馬は龍の化身とも考えられていたため、水に関わる祈りには水神である龍に対して馬が捧げられたとする説。古くから牛馬は農耕と密接にかかわる畜生で対を為し、乾坤即ち天地の象徴と考えられていたため（乾＝天馬・坤＝土牛)、天に祈りを捧げる場合には天の象徴である馬を用いたとする説などがある。[註 2)]

また東北地方では、死んだ馬の頭蓋骨を晒しておき、旱魃になると滝壷やため池または水源地に浸し降雨を祈る民俗事例も報告されている。本来は水の神が住む清浄な滝壺に、汚穢なる動物の死骸を投じることてによって水の神を怒らせ、雨を降らさせようとするものである。土坑などから牛馬の骨が発見される事例の場合は、大地を牛馬の血で汚し、水神が大雨を降らせてその汚れを洗い流そうとすることを期待するものだと解釈されており、これらは敢えて禁忌を犯す雨乞いの部類である。

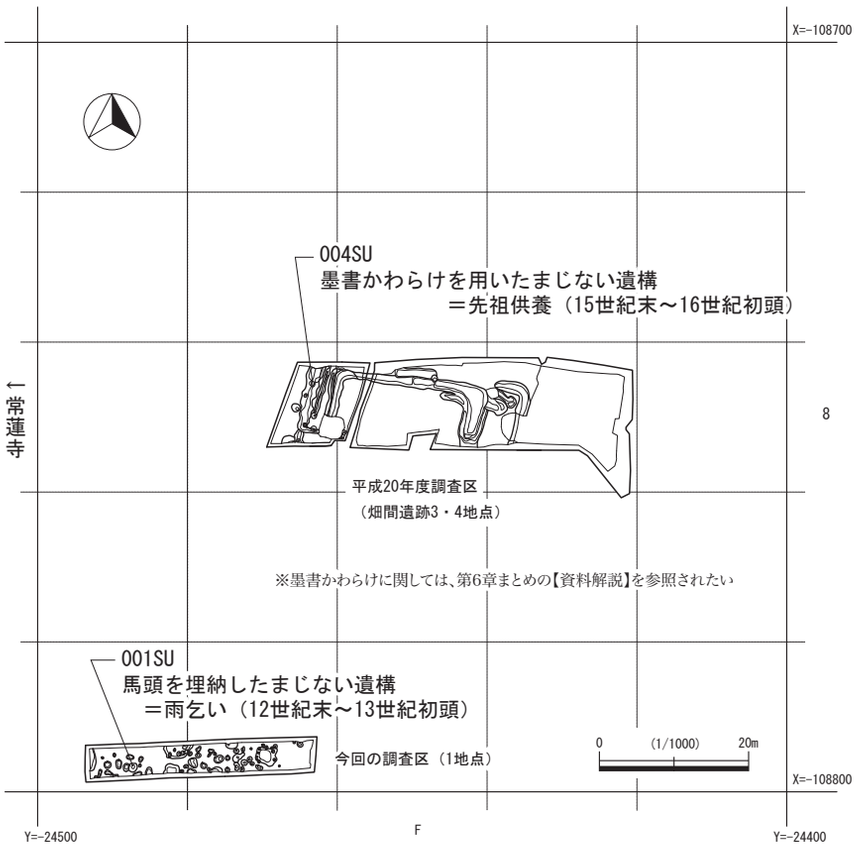
なお、本遺構で山茶碗とかわらけ小皿の二種類が用いられていたことに関しては、そこにどのようなものが盛られていたのかということも含めて明らかではない。更に、遺構の埋土から所謂加工さいころ１点（原料は古瓦）を検出しているが、これが雨乞い儀式に関係したものなのかどうかは判断できなかった。

このように、当地で雨乞いの儀式がおこなわれていたのは 12 世紀末または 13 世紀初頭のことである。このような呪術的な属性に関しては、先述した平成 20 年度の調査における先祖供養のまじない遺構が約 50m の距離で存在し、また両地点のすぐ西側には明応 2(1493) 年創建の常蓮寺が現在に至るまで存在するという状況を考えるならば、集落中央東側のこのあたり一帯が、少なくとも平安時代末期より 15 世紀初頭を経て現在に至るまで、宗教的色彩の強い空間として存在し続けてきたと理解出来よう。

次に 008SB 住居址様遺構に関しては、周辺にさまざまな状況証拠（分布範囲がほぼ重なる陶丸・

註 1)『日本書紀』皇極天皇元年７月戊寅（25 日）条（642)【神仏による祈祷】
群臣相謂之曰。随二村々祝部所教一。或殺二牛馬一祭二諸社神一。或頻移レ市。或祷二河伯一。既無二所効一。
註 2）同時に、牛を大地の象徴とし、これを穀神として崇拝した例も存在し、それが朝廷儀礼にまで取り込まれたのが「土牛の行事」である。『公事根源」には「大寒の日、夜半に陰陽師土牛童子の像を門口に立つ。陽明待賢門は青色の土牛をたつ。美福朱雀門には赤色なり。談天藻璧門は白色なり。安嘉偉鑒（かん）門には黒色なり。郁芳皇嘉殷富達智の四門には、黄色を立つるなり（中略)。四方の門にまた黄色の土牛を立て加ふるは、中央土の色なり。木火金水に土は離れぬことわりあり。慶雲二年天下疫癘盛（さかん）にして、百姓多くうせたりしかば、土牛を造り追儺（ついな）といふ事始りき。異国の書には、農事のために時を示さんとて、土牛を立つる由見えたり。」とある。

砥石・古銭や瀬戸美濃系陶器が集中することなど）が残されているものの、どのようなことがおこなわれていたのかを特定することはできなかった。遺構の規模を考えると実際に住居としての機能は考えられないが、南側に出入り口を持つ簡易な小屋が建てられていたのだろうか。所属は 15 世紀代であると考えられるが、このあたり一帯から出土する陶器類は瀬戸・美濃系のものが多いのが特徴である。何らかの工房址であろうか。



第 19 図　平成 20 年度調査区との位置関係

なお、この遺構範囲から出土した鉄滓 1 点の成分分析をおこなったが、鋼成分はみられず、一般的な鍛治に伴う鉄滓であった。（第 5 章参照）

次に大量の焼土塊が充填された土坑の存在に関しては、やはり平成 20 年度の調査区に於いて同様の焼土塊（やや小ぶりなものが多かった）が平面的に数多く散布する状況を検出したわけだが、厚さが 5cm 以上のものや小舞竹の痕跡を残すものもあることから、土壁立ちの建築物に由来する可能性が高い。平成 20 年度調査区で検出された区画溝の底からは、被熱した建物礎石のぐり石も多く発見されていることなどと併せて考えると、やはりこのあたりに仏堂など土壁を持った建築物が存在していた可能性を指摘しておきたい。

第 4 節　2 地点の概要と遺跡の構造

2 地点は常蓮寺（西山浄土宗）に隣接しており、調査面積は道路予定地範囲の 145㎡である。調査区は南北が 35m で南半は調査直前まで家屋が存在し、その建て替え家屋との関係で幅が 3m ほどしか確保できなかったが、北半は 5m の幅で設定してある。

基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層：表土層。近現代の攪乱と地震による液状化層を含む。攪乱は部分的に地山砂層まで達している。液状化層は近世の井戸を埋め戻した部分を中心にして顕著にみられた。

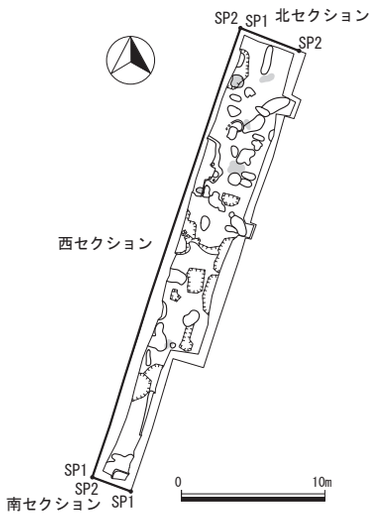
Ⅱ層：中世から近世の遺物包含層。10YR3/4 ～ 3/3 暗褐色砂層を中心に、10YR7/4 にぶい黄橙

色粘土を用いた遺構部分も含む。貝殻を含む部分が多い。

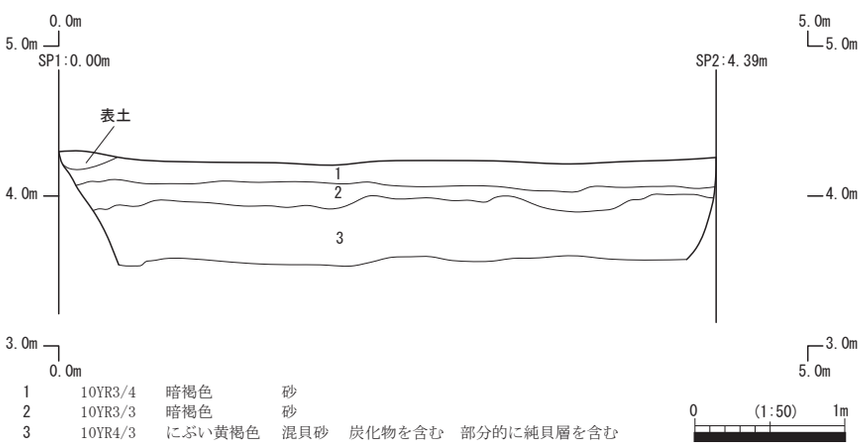
Ⅲ層：弥生時代の遺物包含層。10YR2/3 黒褐色砂、10YR3/3 暗褐色砂など、当地に於ける弥生時代遺構独特の、黒っぽい色調を呈する砂層。安定した層としては存在せず、地山砂層に掘り込まれた遺構埋土としてのみ存在する。

本調査地点の平均標高は 4.3m 前後と、第 1 砂堆の中にあっては高い地区にある。地山レベルは調査区南端で約 3.2m あったが、中央付近で 40 ～ 50cm 高くなり、北半では平均 3.7m を測る。標高の画期は調査区のほぼ中央を西北―東南方向に走っているようではあるが、大半は攪乱と液状化によって明確では無い。

表土掘削の段階から本調査区周辺では貝殻の散布する様子が観察され、混貝砂層として広がりを持つ部分も有った。また、貝層は遺物包含砂層中に単独で存在し、貝殻のみがピットに充填された状況（純貝層）のものもあるが、いずれも近世の所産である。

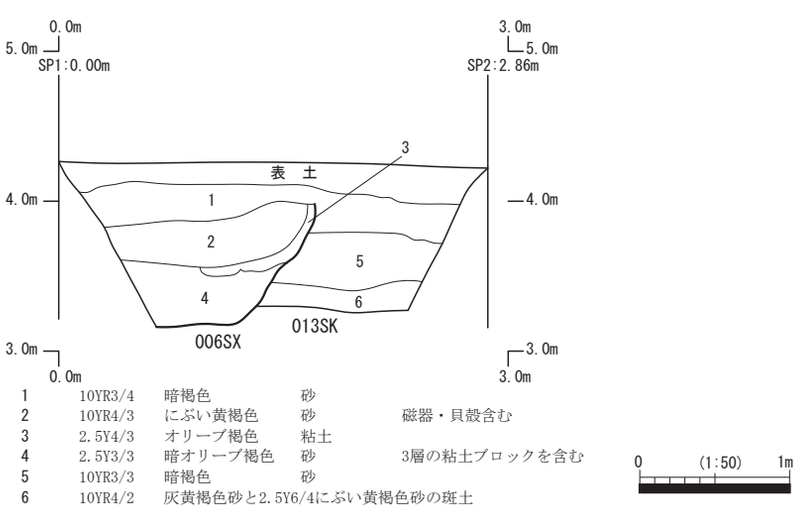


第 20 図　２地点セクション位置図



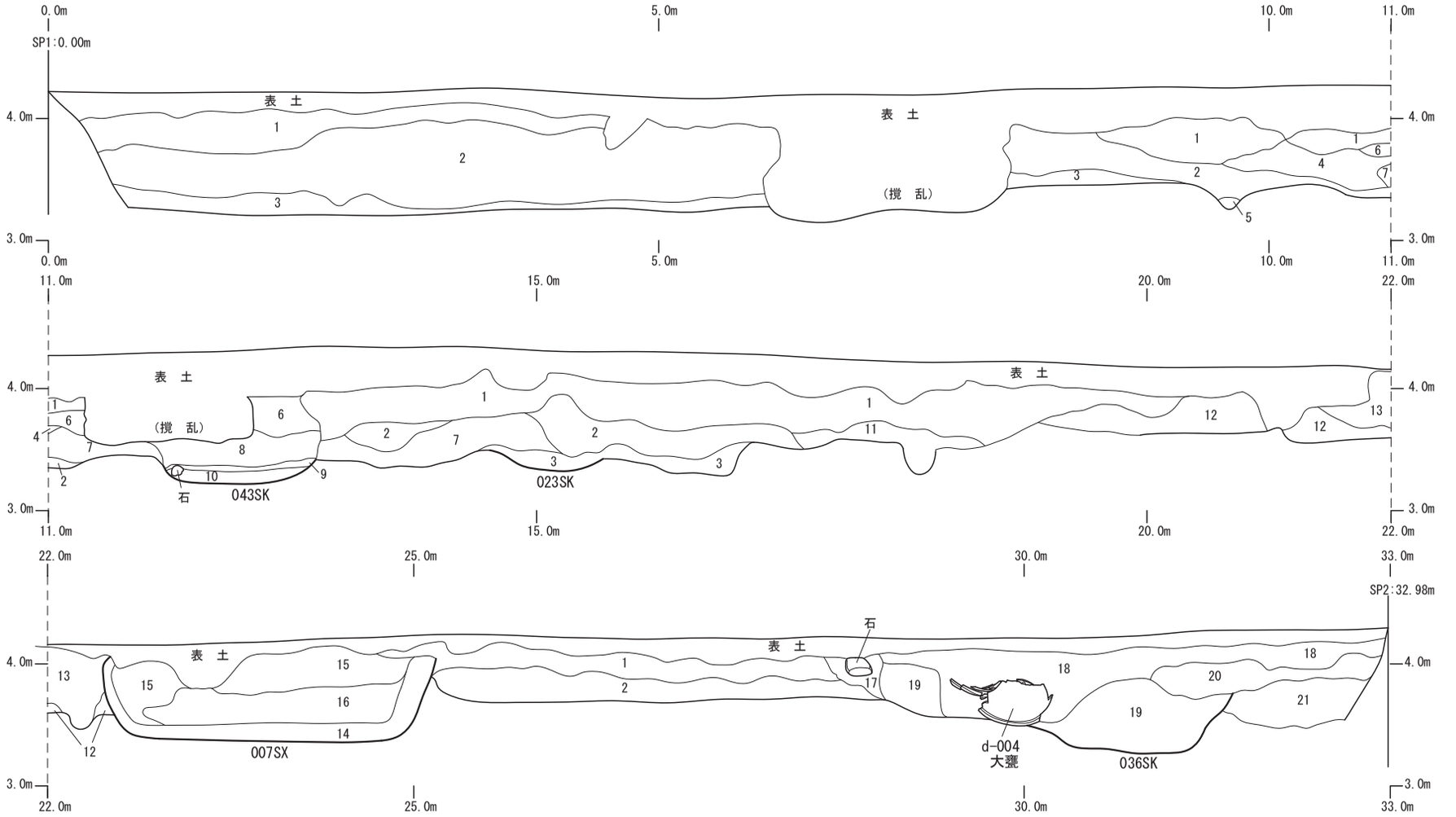
1	10YR3/4	暗褐色	砂
2	10YR3/3	暗褐色	砂
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	混貝砂　炭化物を含む　部分的に純貝層を含む

第 21 図　２地点北セクション図



1	10YR3/4	暗褐色	砂	
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	磁器・貝殻含む
3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土	
4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	3層の粘土ブロックを含む
5	10YR3/3	暗褐色	砂	
6	10YR4/2	灰黄褐色砂と2.5Y6/4にぶい黄褐色砂の斑土		

第 22 図　２地点南セクション図



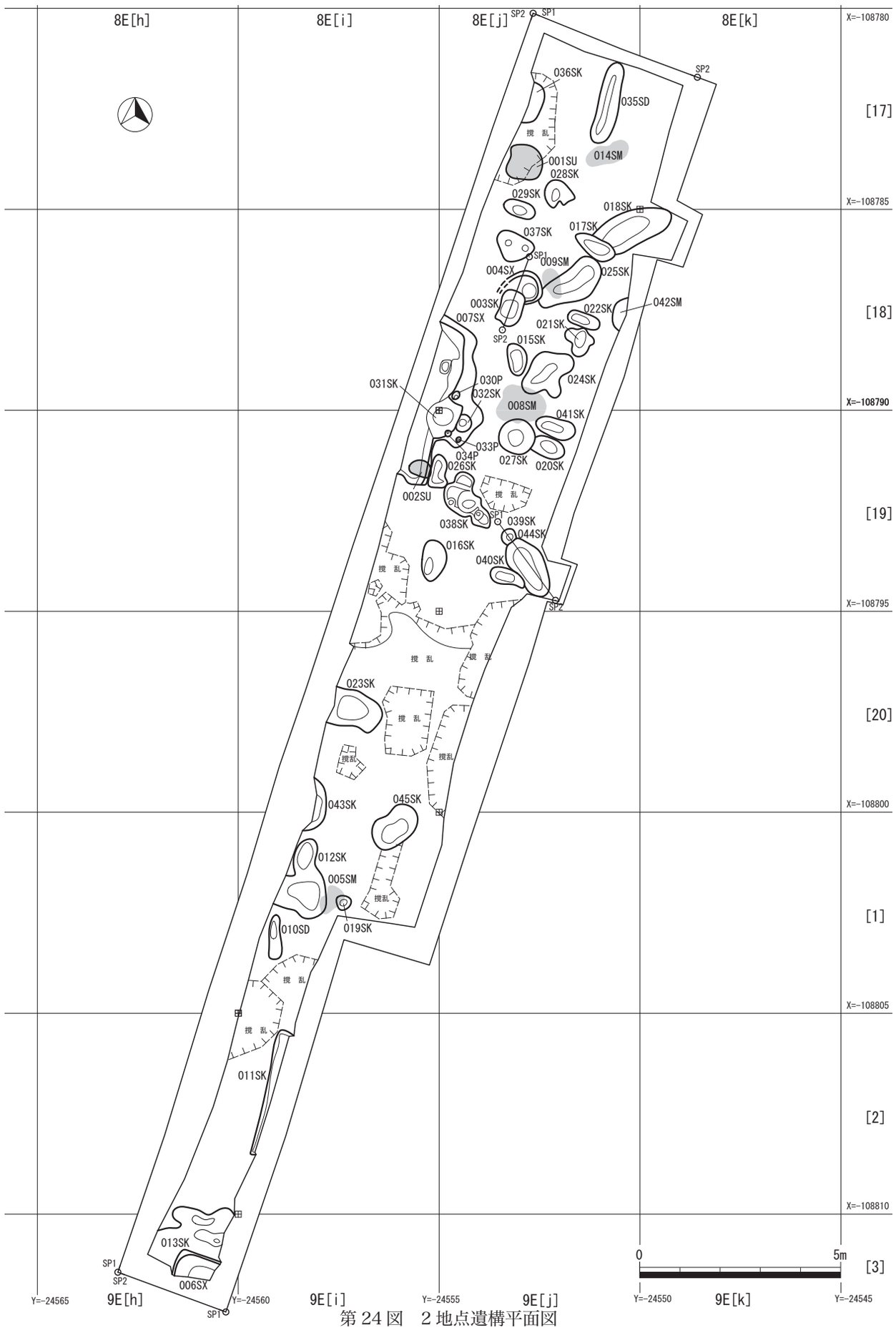
1	10YR3/4	暗褐色	砂	8	10YR3/2	黒褐色	砂	15	7.5YR4/4	褐色	砂
2	10YR3/3	暗褐色	砂	9	10YR4/2	灰黄褐色	砂	16	10YR3/3	暗褐色	砂
3	10YR4/2	灰黄褐色砂と2.5Y6/4にぶい黄色砂の斑土		10	10YR3/4	暗褐色砂と10YR4/3にぶい黄褐色砂の斑土		17	10YR3/3	暗褐色	砂
4	10YR3/4	暗褐色	混貝砂	11	10YR3/3	暗褐色	砂	18	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂
5	10YR3/2	黒褐色	砂	12	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂　貝殻含む	19	10YR4/2	灰黄褐色	砂
6	10YR3/2	黒褐色砂と10YR4/3にぶい黄褐色土の斑土		13	10YR4/3	にぶい黄褐色	混貝土	20	10YR3/3	暗褐色	砂
7	10YR3/4	暗褐色	砂	14	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘土	21	10YR4/3	にぶい黄褐色	混貝砂

0　(1:50)　1m

10YR8/2灰白色粘土ブロックを含む

炭化物を含む　部分的に純貝層を含む

第 23 図　２地点西セクション図



第 24 図　２地点遺構平面図

第５節　遺構と出土遺物

1．遺構

017SK・108SK・025SK 弥生期の土坑群 1（第 25 図、巻頭図版第 8）

いずれも当地区における弥生期独特の暗褐色～黒褐色の埋土を持つ遺構で、方向やその検出状況から一連のものと考えられる。018SK は長径 175cm 以上、幅 50cm 弱の長楕円形土坑で、深さは 40cm 前後。埋土中からは弥生後期初頭の土器 (d-020・027・028 ほか) が出土している。025SK は 178×79cm の長楕円形で、深さは 25cm、やはり埋土より弥生後期のものと思われる壺の破片が出土している。この 2 基の土坑の中心軸はほぼ等しく、E-34°-N である。017SK は 104×47cm 深さ 43cm の長楕円に類するプランを持つ。遺物は検出されていないが、土質や土色の様子から弥生期のものと思われる。018SK 西端と切り合って存在する。これら 3 基の土坑中、特に前二者は規模形状から墓壙である可能性も考えたが、出土する土器に供献的な要素が希薄であることもあり、積極的に肯定出来る状況ではない。今回は土坑墓の可能性を指摘するに留めおきたい。

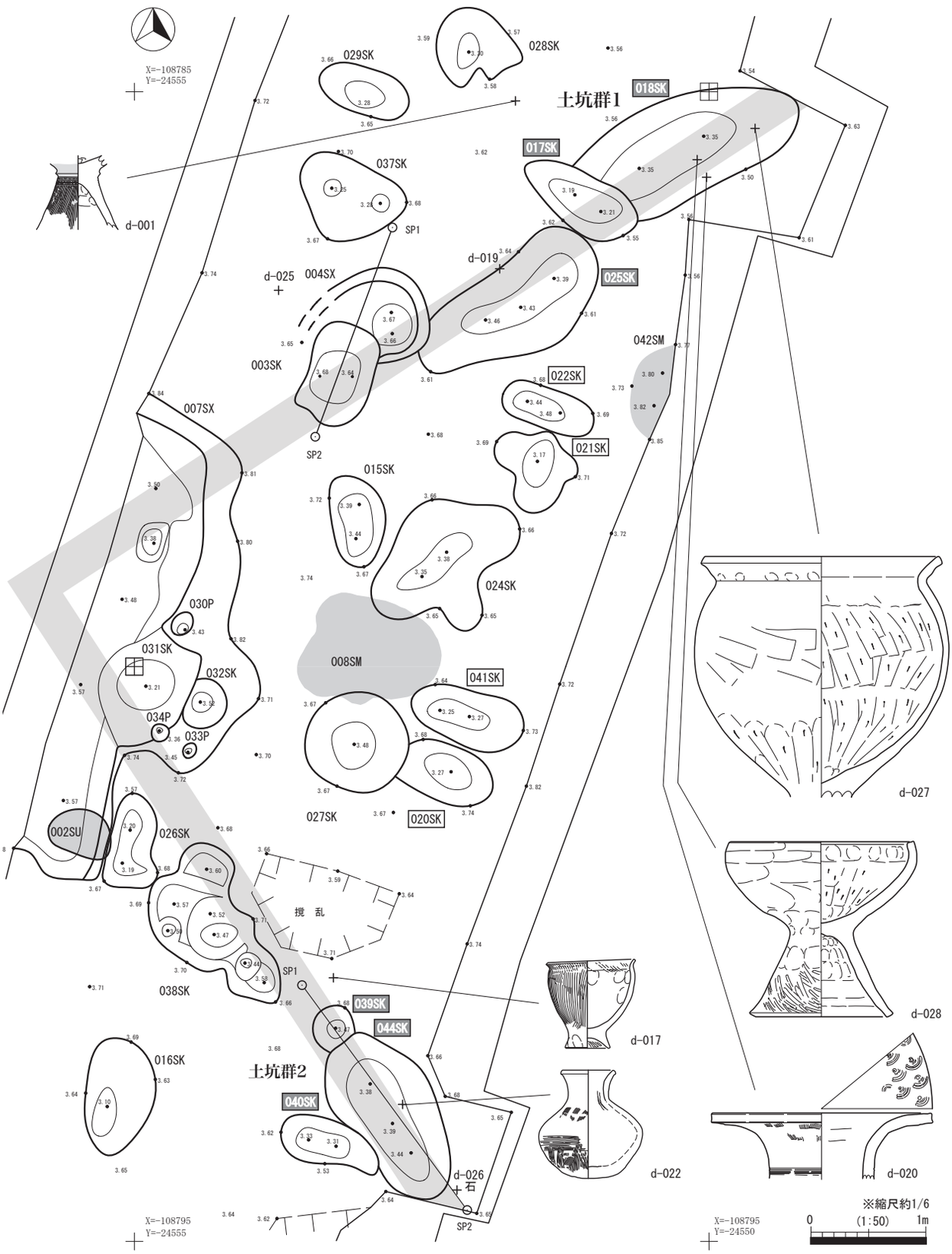
039SK・040SK・044SK 弥生期の土坑群 2（同図）

前群と同質の埋土を持つ土坑で、044SK は墓壙であろう。044SK の規模は 156×83cm 深さ 20cm 前後の長楕円プランを持つ土坑で、中央やや北寄りの部分から小型壺 (d-022) が 1 点出土した。また切り合った 044SK・039SK のすぐ北側からはミニチュア台付甕 (d-017) が出土しており、これらは墓に対して捧げられたものと考えられる。いずれの土器も高蔵式期後半のものと思われる。更に、土坑の南西側からは大きな割られたぐり石 (d-026) が発見された。重さは 10 キロほどもある大きな石であるが、044SK のほぼ中心軸上の地山面から検出されたものである。これが墓壙と関係するものかどうかは不明と言わざるを得ないが、事実として記しておく。中心軸の角度は W-55.5°-N である。039SK はこの 044SK と北西端を切り合う直径 40cm 前後、深さ約 20cm ほどの円形土坑であるが、先後関係が不明瞭であった事などから本来一体の遺構であった可能性も有る。

なお、これらの他にも埋土の状況などから弥生期の遺構である可能性のある土坑が 4 基みられたが（020SK、021SK、022SK、041SK)、いずれも上記土坑群で囲繞された範囲に存在し、それぞれ組を為してほぼ一直線に並ぶ。なかでも 021SK や 020SK、041SK は地山面に 40cm 以上の深さで掘り込まれており、柱穴として機能していた可能性もある。また、プランは 020SK、041SK、022SK の 3 基が同じような長楕円形を呈するのも特徴だが、遺構埋土から弥生土器は検出されていない。

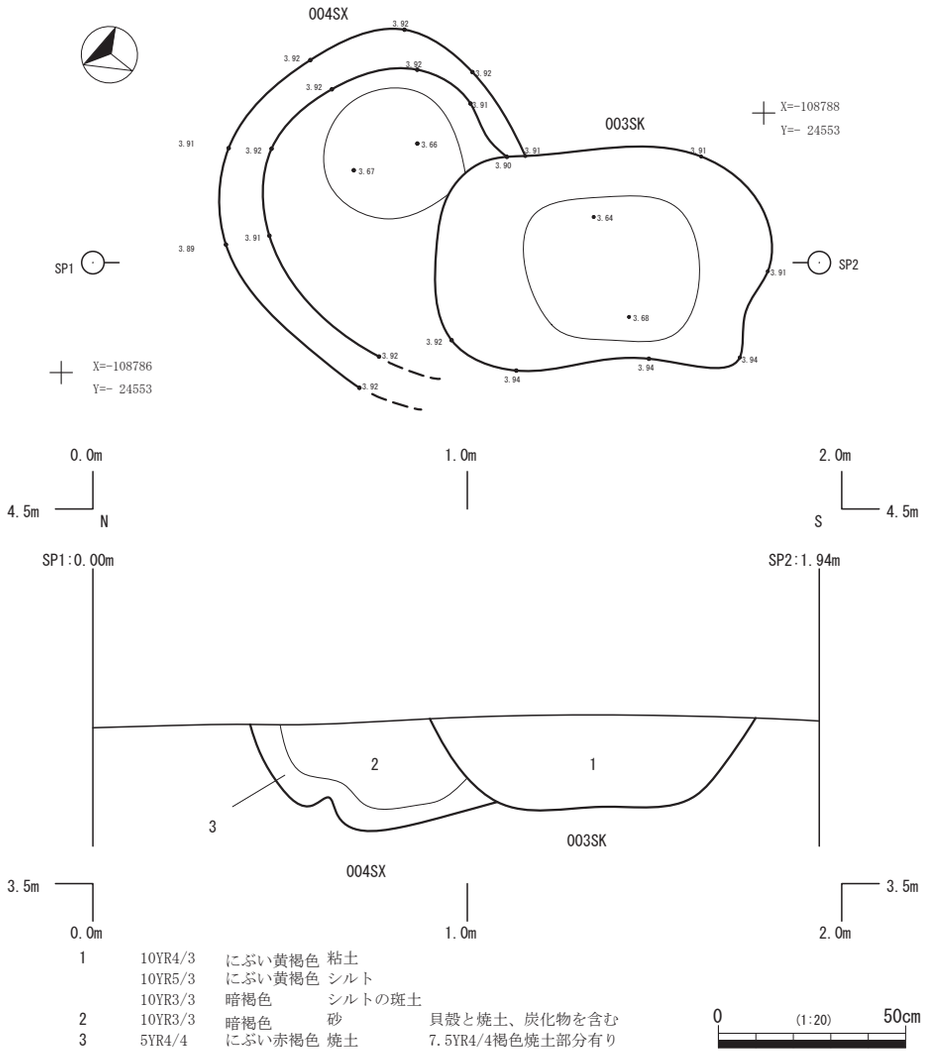
003SK・004SX 土坑と被熱の痕跡を有する遺構の切り合い（第 26 図）

003SK は 88×60cm 深さ 26cm ほどの隅丸方形土坑で、埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土と 10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR2/3 黒褐色土の斑土である。このうち黄褐色粘土は、隣接する 007SX で使われていたものと同質であり、関係が類推される。また、004SX は 003SK と切り合っているが、周囲が被熱した痕跡を残し埋土には炭が多く含まれていたことから、火を焚いた痕跡であると考えられる。西側の被熱範囲は急激に消滅しており、漸移的に地山砂層と一体化してしまっ



第 25 図　弥生期の土坑群

ている。両者ともその性格は不明であるが、ほぼ同時期に掘削されたものであろう。埋土から出土する遺物は近世のものが多い。

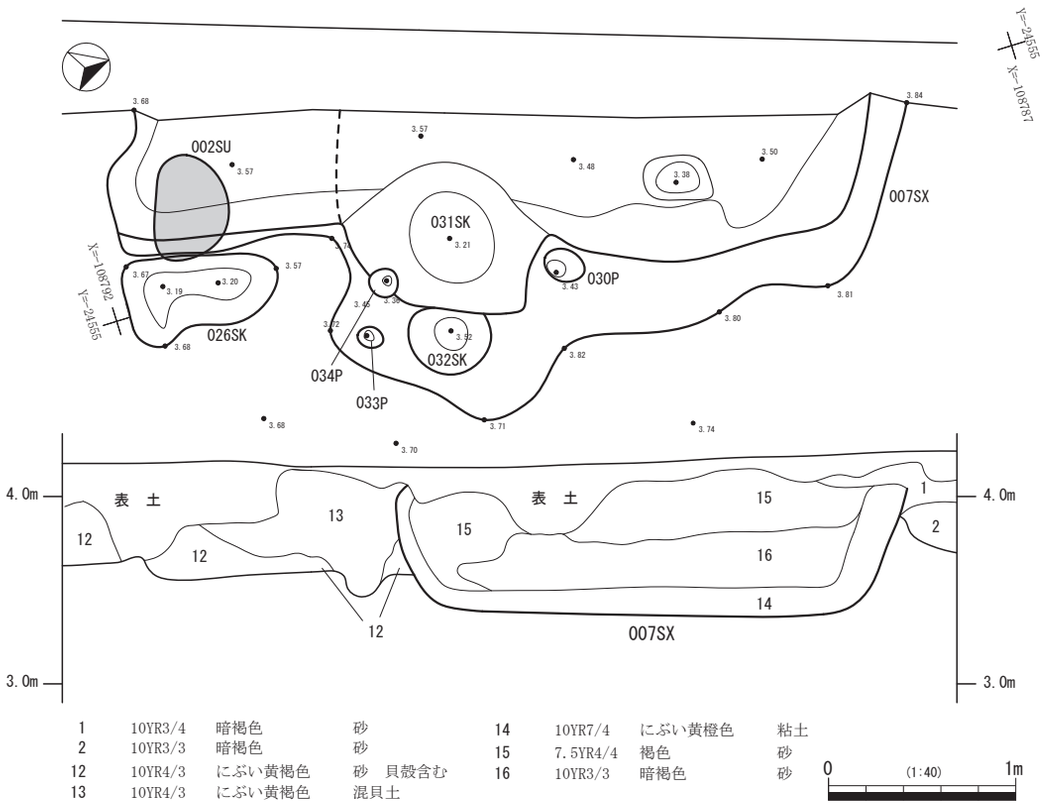


第 26 図　003SK・004SX 遺構の切り合い

007SX と付随する周辺の遺構 = 用途目的不明の遺構 1（第 27 図、図版第 46）

黄褐色粘土を使い浴槽のような構造物を作り、それを中心に三和土状の硬化面や常滑製の大甕を埋め込んだ痕跡（凹み）や柱穴およびピットなどを伴う遺構。030P、031・032SK、033 ～ 034P、026SK、038SK および、先述した 003SK と 004SX も本来一体の施設であった可能性もある。セクション面に現れた粘土槽の幅は 2.7m あり、深さは約 70cm。粘土壁の厚さは 10 ～ 20cm ある。

粘土に混和剤が見られないことから水槽のようなものであるとも考えたが、特に湛水された形跡も無い。またすぐ脇に複数の大甕設置の痕跡と、実際に甕底部の破片も検出しているが、色素や成分の沈着等はみられない。また、粘土槽直近には被熱の痕跡や焼土、炭化物等もみられない。この施設の全体規模は、現代の攪乱によって主に南側が消失していることや、検出されている遺構群の他にどのような遺構を伴っていたかということが不明であり、現状では規模性格共に不明の遺構と言わざるを得ない。年代的には近世の遺構である可能性が高い。

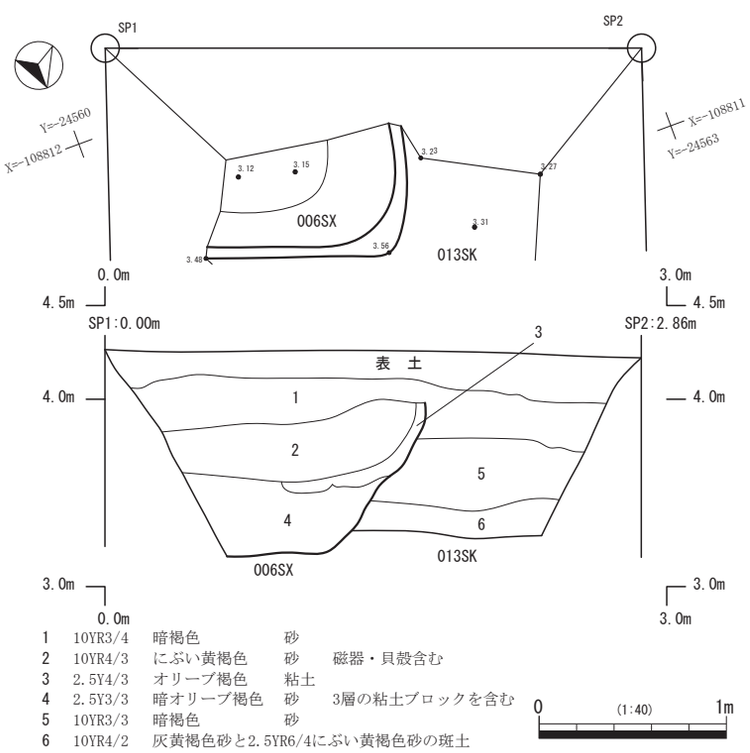


1	10YR3/4	暗褐色	砂	14	10YR7/4	にぶい黄橙色	粘土
2	10YR3/3	暗褐色	砂	15	7.5YR4/4	褐色	砂
12	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂　貝殻含む	16	10YR3/3	暗褐色	砂
13	10YR4/3	にぶい黄褐色	混貝土				

第 27 図　007SX と付随する周辺の遺構

006SX・013SX 用途目的不明の遺構２（第 28 図）

調査区南端で検出したもので、やはり粘土を用い槽状の施設が作られている。粘土を貼る前の堀り方自体は地山砂層にまで達しているが、粘土は底から約 30cm 上がったレベルに使われている。検出できた部分は全体の四分の一以下と思われるが、形状は 007SX 同様、浴槽のような長方形を呈するものだろう。006SX 周辺の地山は浅く堀窪められており、013SX として不整形なプランを検出したが、両者は一体のものであろう。出土する資料は近世のものが多い。

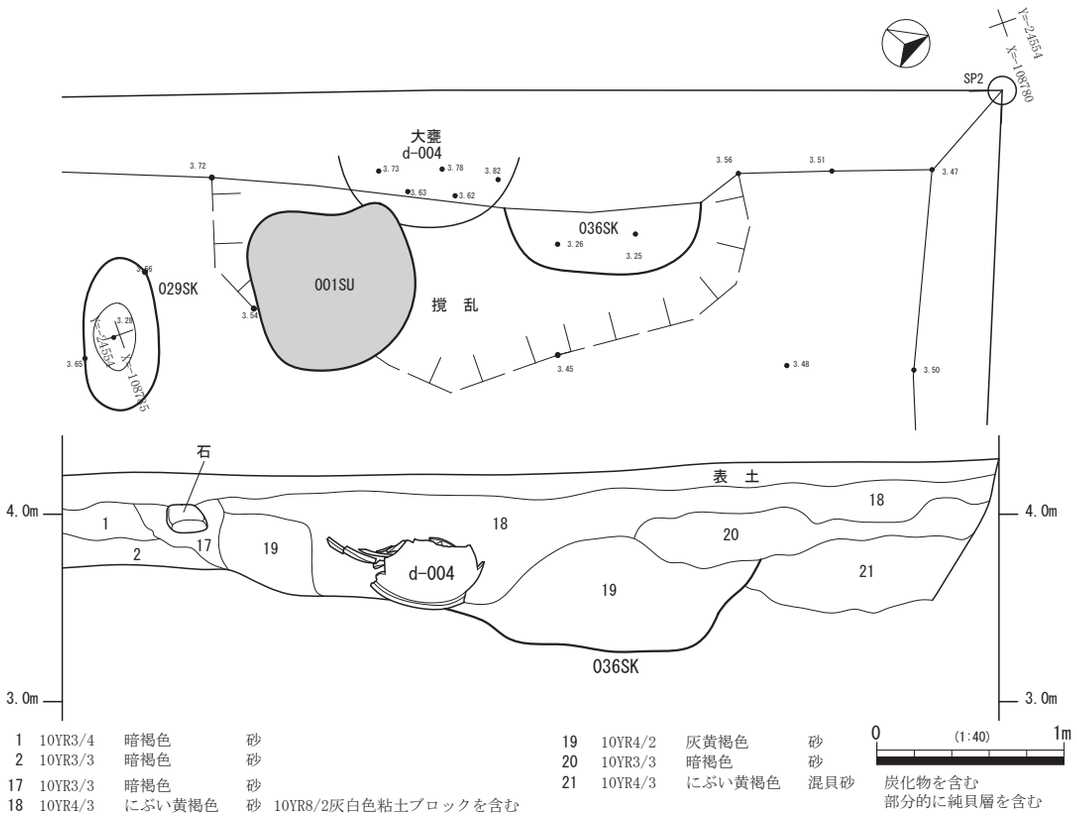


1	10YR3/4	暗褐色	砂	
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	礫器・貝殻含む
3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土	
4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	3層の粘土ブロックを含む
5	10YR3/3	暗褐色	砂	
6	10YR4/2	灰黄褐色砂と2.5YR6/4にぶい黄褐色砂の斑土		

第 28 図　006SX・013SK 用途不明の遺構

036SK 大甕 d-004 を伴う掘り込み（第 29 図）

近世から現代の遺物が混在する掘り込みで、表土直下から掘り込まれている。口縁部を下にして埋設されたような状態で検出された大甕 d-004 は 18 世紀末ころの常滑焼で、現地が常蓮寺庫裡の庭園に隣接する場所であることから、当初は水琴窟または蹲いなどの庭園装置ではないかと考えていた。しかし精査の結果、割れた大甕の内部には現代の瓦礫が放り込まれており、現状は攪乱の一部と見做さざるを得ないが、近世段階で何らかの遺構が存在していたことは確かなようである。



第 29 図　036SK と d-004 大甕を伴う掘り込み

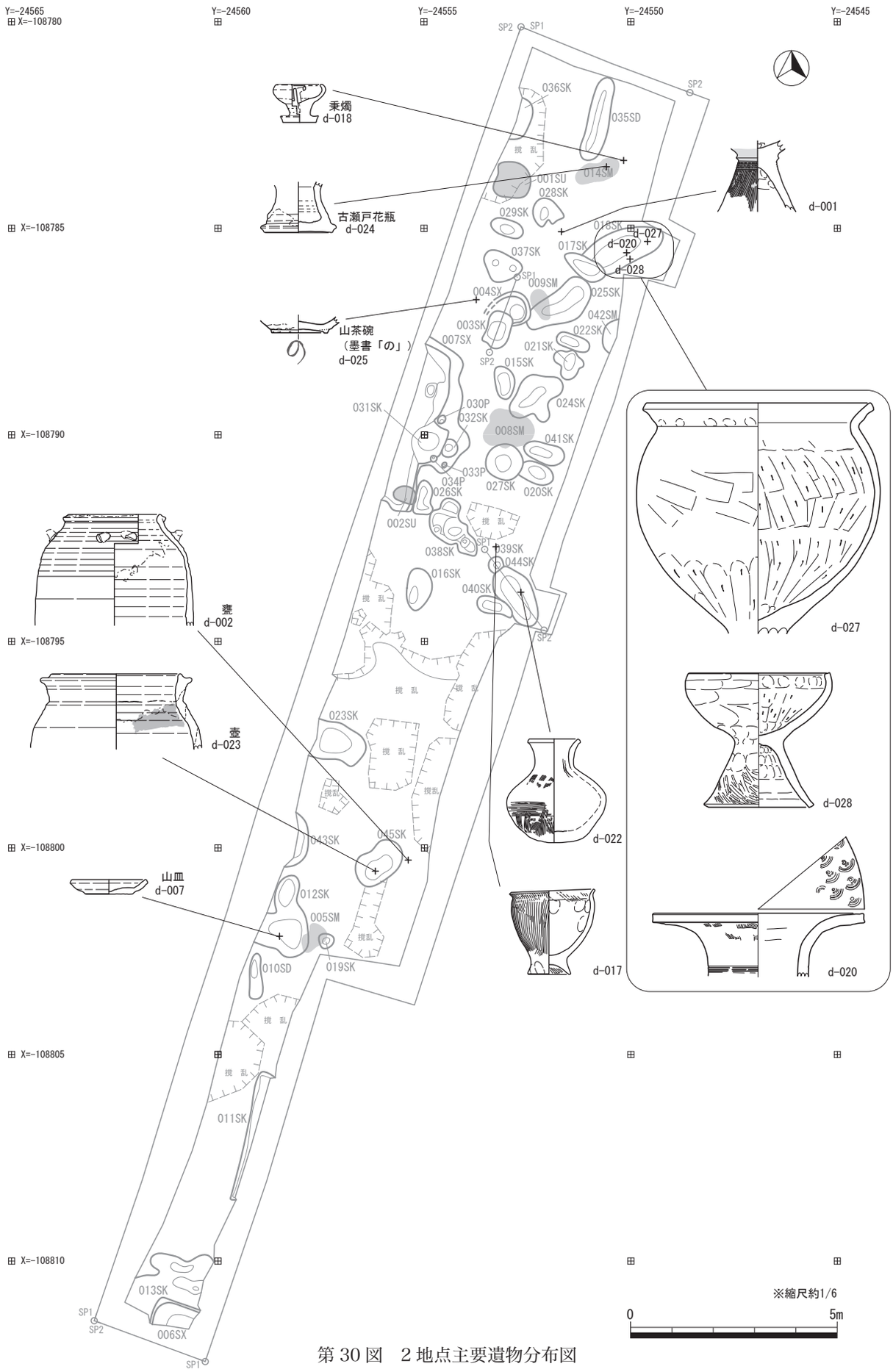
2. 出土遺物

第 1 次整理段階で、2 地点の出土遺物はコンテナ 7 箱分存在したが、その大部分は中世後半から近世の遺物である。うち弥生土器はコンテナ 1 箱にも満たない量であり、器形復元できるものも分布図中に示した 6 個体ほどであった。（第 30 図）

d-001 は弥生時代後期の高杯脚で、赤彩がみられる。地山面から単独に出土しているが、すぐ脇の 018SK からも後期資料が検出されており、関連した遺物であろう。

018SK から検出された資料（d-020 コンパス文を持つ壺口縁、027 台付甕、028 赤彩高坏）に関しては後期でも八王子古宮式段階の資料と理解できよう。

また、土坑群 2 の 044SK 出土の小型壺 d-022 は無文で比較的粗雑な仕上げ。胴部上半の数カ所にハケ目を残し下胴部はヘラナデが見られるが、顕著なヘラ磨きはみられない。器形から見て中期後半のものである可能性が高い。またすぐ脇から出土した d-017 小型台付甕は顕著なハケ目＋ナデがみられることからやはり中期後半のものであろう。



第 30 図　２地点主要遺物分布図

古代の遺物は見当たらなかった。中世の遺物としては、山茶碗の底部外面に「の」字の墨書があるものが単独で出土している。d-025 山茶碗は常滑窯 6a 期のものと思われる。「の」字は流麗な筆跡で、元字である「乃」第２画肩部凹凸の名残りがみられるような形にくずされている。残念ながら意味するところは不明である。d-007 山皿は常滑窯 6a 期のもの。d-024 花瓶は底部のみの出土であるが、底部の糸切り底やたっぷりとかけられ垂れた灰釉の様子などから 15 世紀代の古瀬戸製品と思われる。d-018 秉燭はほぼ完器で、瀬戸・美濃登り窯第３段階の製品で、19 世紀のものであろう。これらの他にも、d-002 甕や d-023 壺など、江戸期の瀬戸・美濃製品が多く出土している。

第６節　２地点のまとめ

今回の調査成果としては、まず弥生期の遺構群の発見が挙げられる。近年の調査で主に隣接する東畑地区における弥生時代の遺跡の消長が明らかになりつつあるが、当地区にも概期の遺構が存在することが判明した。

検出された土坑群は墓壙を中心としたものである可能性が高いが、少なくとも調査区内では周溝墓を思わせるような溝は検出されておらず、単独の土坑墓または土坑墓群として営まれていたものかもしれない。調査区内では地山の標高がいちばん高いエリア、即ち北半部分に弥生期の遺構が集中しており、その中でも墓壙の可能性が高い土坑群 1 と 2 で囲まれた内部に収斂されているようである。この２つの土坑群には時期差があり、2 が中期末、1 が後期初頭のものと推測されるが、それぞれの中心軸方向がちょうど直角に交差する。（第 25 図）このような方向性の転換が即ち何らかの画期と同期したものであるのかどうかは今後の検討課題であるが、ひとつの傾向として留意すべき点である。

当地は古代以降、中世までには確実に大郷集落の中心部に取り込まれたと思われるが、確実に中世に属する遺構は特定できなかった。隣接する常蓮寺の創建された 15 世紀以降には遺物が増加する傾向がみられたが、宗教的な遺物は 1 点の古瀬戸花瓶を除き皆無であり、寺院境内地としての特色を炙り出すことはできなかった。

近世の活動は活発であったようで、調査区の至る所で度重なる地業の痕跡がみられ、大量の貝殻を含む層や、小さな範囲に貝殻が集められたような部分が複数箇所見られた。これらは庶民の生活に伴う廃棄をあらわすものであろう。遺構としては、粘土の槽を伴う 006SX・007SX は共に近世に営まれたものと推測される。ただ残念なことに、このような設備が何を目的に作られたものなのかを明らかにすることはできなかった。

第７節　５地点の概要と遺跡の構造

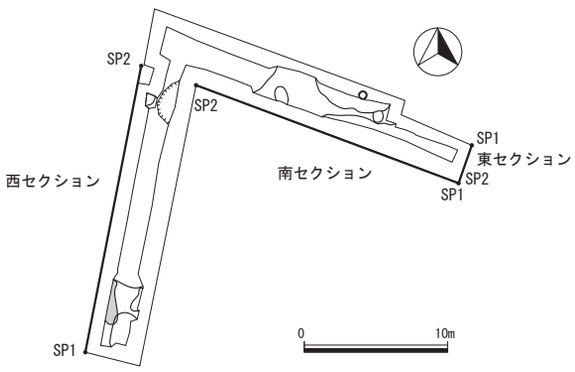
５地点は今回の調査で最初に取りかかった調査区である。第 1 砂堆のほぼ中央に位置し、標高は 4.3m 前後と、砂堆中では高い部分にある。調査区は道路予定地の形状に沿うため、L 字状に設定され、調査面積は 168㎡である。

基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層：表土層。現代の耕作土や盛り土で、一部に攪乱を含む。

Ⅱ層：中世～近世に形成されたと思われるもので、10YR4/4 褐色砂、10YR5/4 にぶい黄褐色砂、貝層を含む。いずれも遺物包含層であることは間違いないが、出土する遺物の量は極めて少ない。

Ⅲ層：地業によってもたらされた粗砂層。層位的にはⅡ層に類するものであろうが、本地点では 002SK 以外に弥生期の遺構はみられないこと、土質に明瞭な相違がみられること、他の層と不整合な在り方をすることなどから、便宜的にⅢ層としておく。



第 31 図　５地点セクション位置図

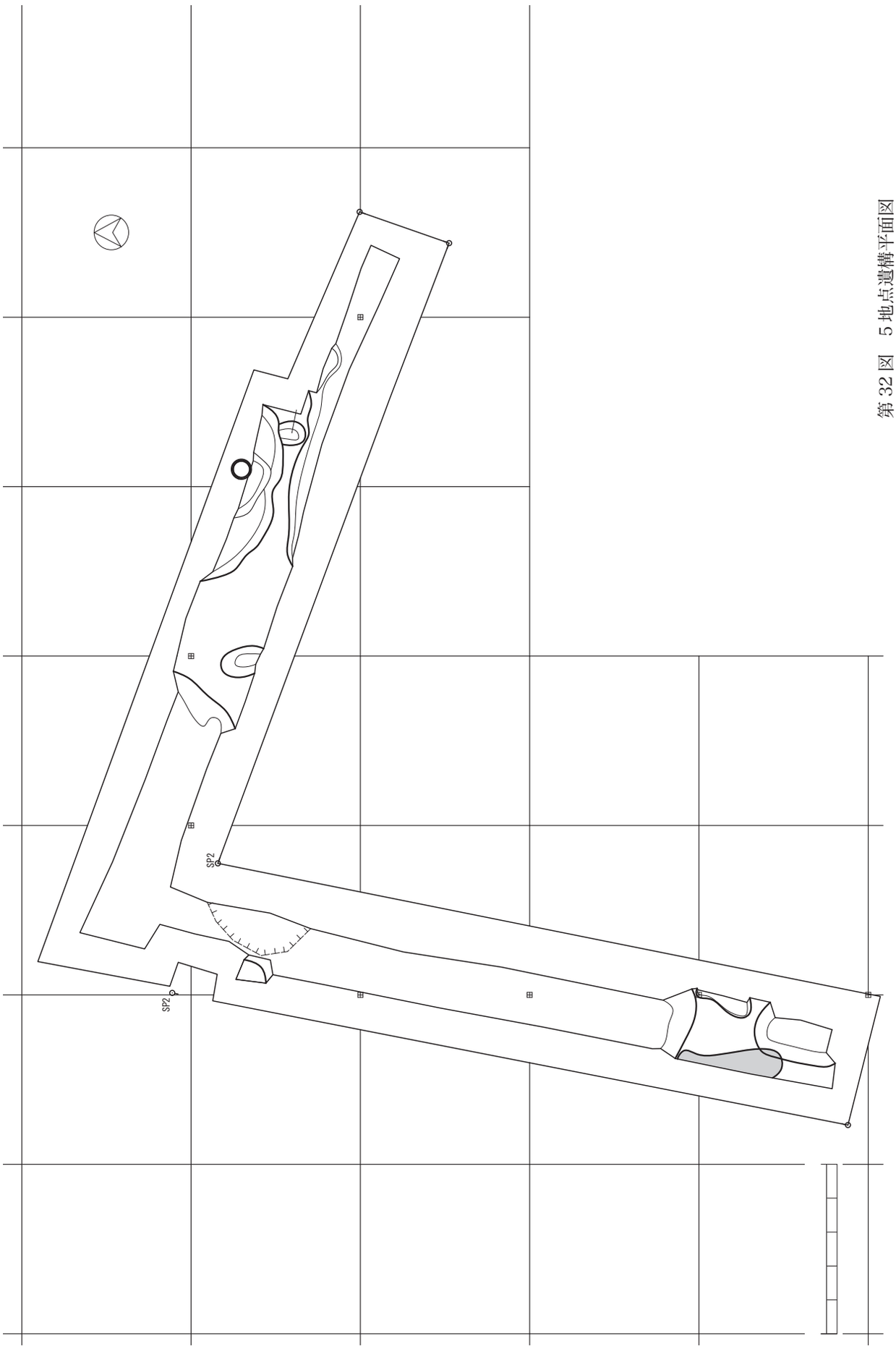
なお、L 字に伸びた調査区について、文中では「南北トレンチ」「東西トレンチ」と呼称する。西セクションは南北トレンチに存在し、南セクションと東セクションは東西トレンチに存在する。

本調査区は畑間遺跡として把握されている範囲のほぼ中央に位置し、標高値も高いことなどから、当初は中世の遺構や遺物がかなり出土するのではないかと予想していた。しかし、表土掘削の時点では散漫に貝殻やごく少量の中世遺物小片が見られるばかりであり、その様相は最後まで変わることがなかった。

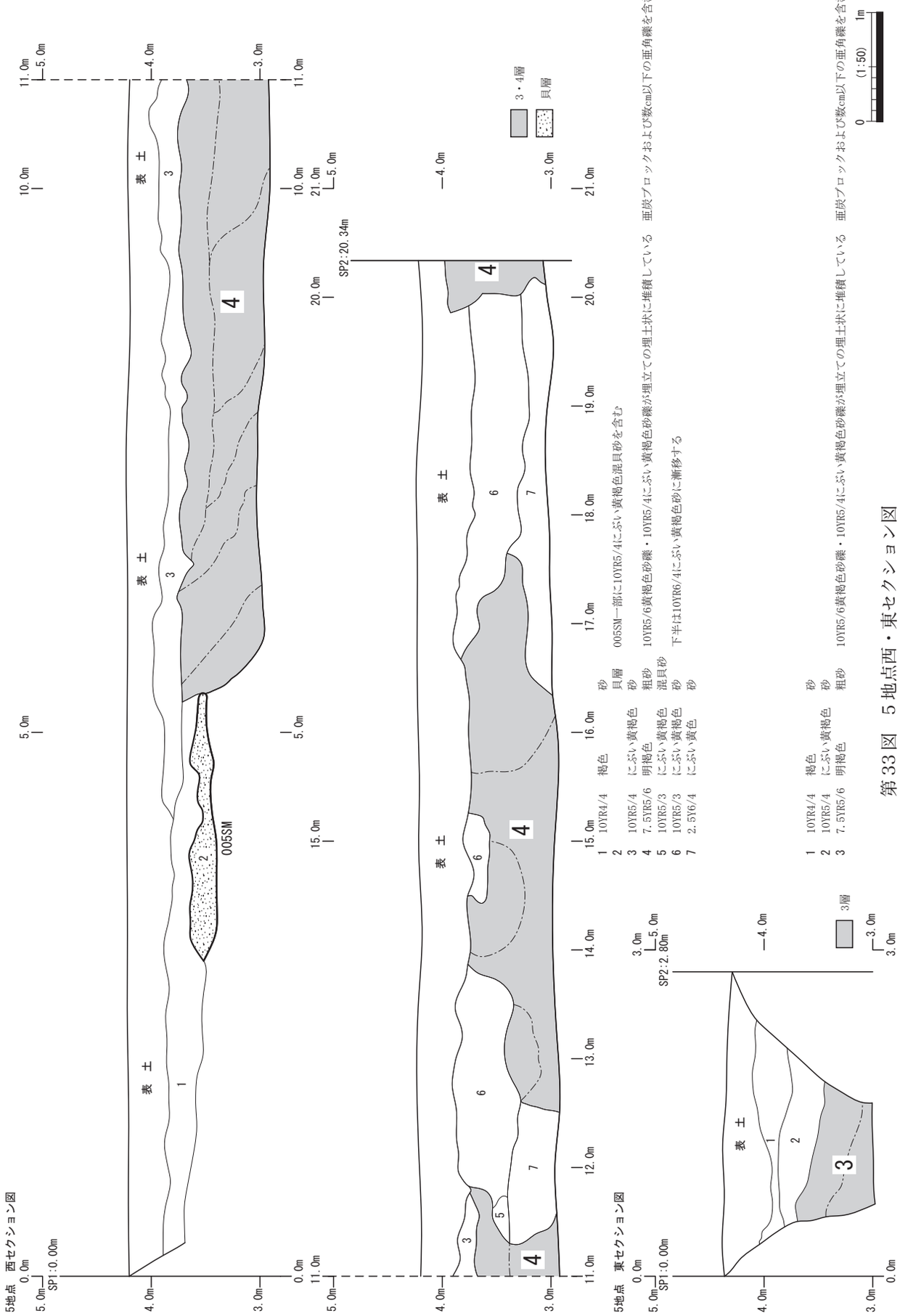
遺構の検出を進めるなかで、小規模な純貝層 005SM を検出したが、貝層には土器などの遺物が見られなかった。調査区南端では早々と地山の検出に至り、その標高は 3.7m を測った。

この地山砂層に接し、砂層とは異質な堆積層を検出した。西セクションにおける４層、東セクションにおける３層、南セクションにおける３層および５層がそれに相当する。全体的には 7.5YR5/6 明褐色粗砂層であるが、10YR5/6 黄褐色砂礫・10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫が埋め立て時の単位の痕跡を保って堆積しており、大小亜炭ブロックを散漫に、数センチ以下の亜角礫を多く含むものである。検出当初は地山砂層との接し方が、恰も遺構の埋土の如き様相を呈していたことから、そのプラン確定を目的として掘削を進めていったのだが、かなり広範囲に広がる様相が窺えた。セクション図で明らかなように、地山砂層とはかなり急角度で接しており、例えば西セクションの場合、４層は湧水によりその正確な下限レベルは未調査であるが、60cm 以上の段差で急激に落ち込む様子が看取される。セクション後半では５～７層との不整合がみられるが、成因は不明である。

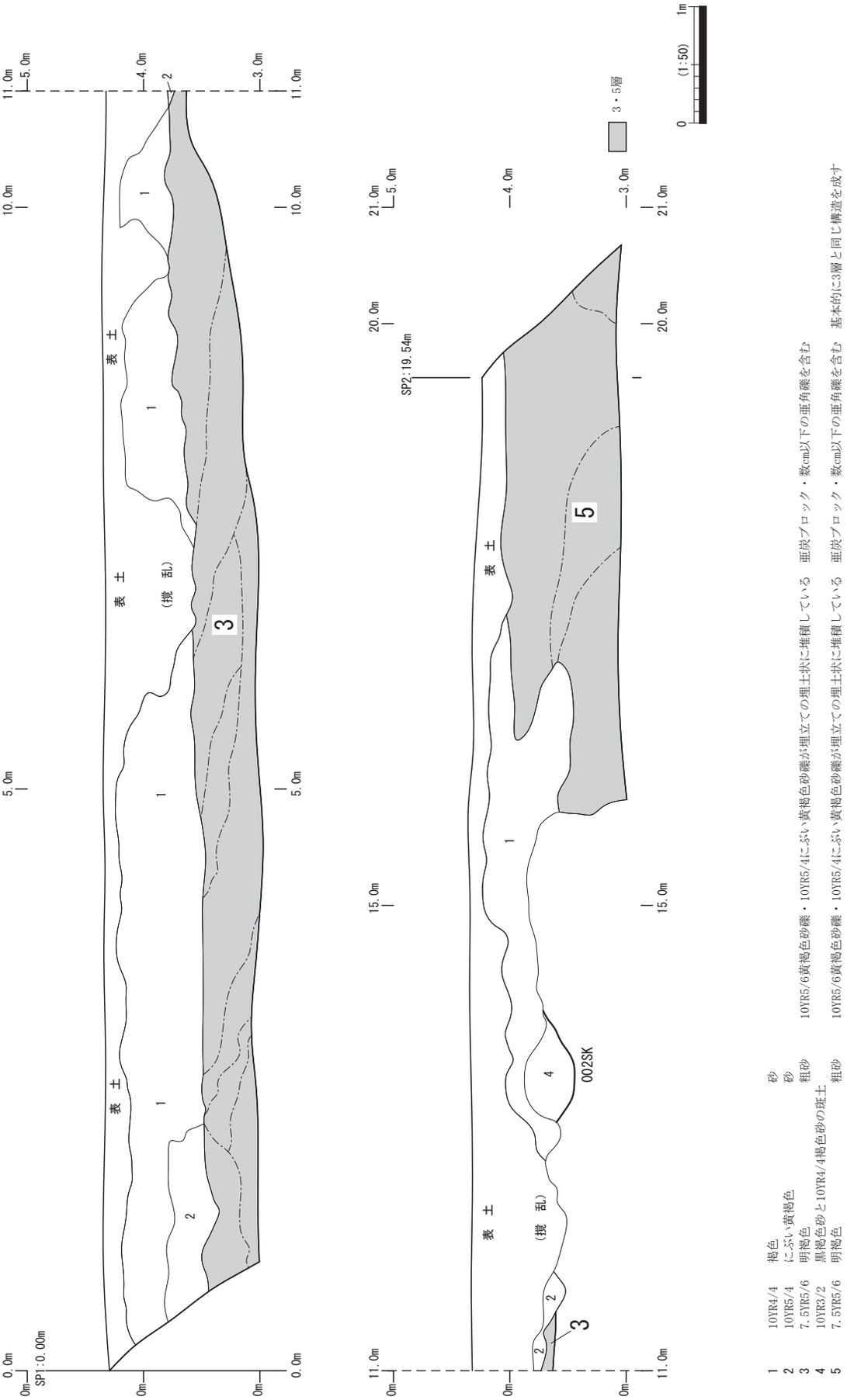
この堆積層にはごく少量であるが山茶碗の破片などの考古学的遺物も含まれており、また周囲の丘陵地に見られるような亜炭のブロックを含む点などから類推して、地業などの土木工事の痕跡ではないかとも考えている。事実４層断面の詳細な観察の結果、恰も窪地に手前から順に土砂を埋積していったかの如く、斜めに単位が連続する部分もあった。同様の様相は南セクションでも観察され、こちらは東端から緩やかに上昇する地山を覆い隠すように堆積しており（3 層）、地山の標高が 3m から 3.6m に到達した部分で消滅し、弥生の遺構を夾み地山レベルが 3.8m に達した部分で急激に落ち込み、新たな大きな単位の埋土として出現している（5 層）。南セクション西端部では表土直下にこの埋積層が存在する状況であり、この様相からもかなり新しい時代の層であるとも考えられる。



第 32 図　5 地点遺構平面図



第33図　５地点西・東セクション図



第 34 図　5 地点南セクション図

第８節　遺構と出土遺物

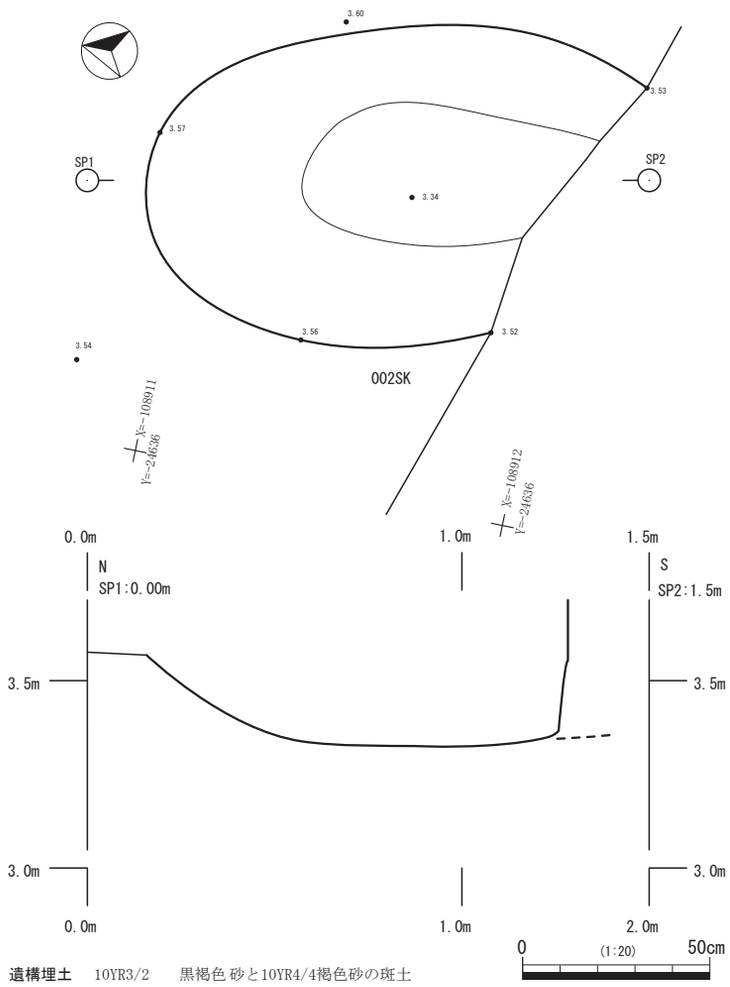
1．遺構

005SM 貝層

南北トレンチ南端で検出された貝層で、検出部分は 2×0.7m ほどあり、更に西側に広がっている。シオフキを主体とする貝層で、続きハマグリを含むが、巻貝は含まれていない。破砕されておらず、廃棄により形成されたものであろう。遺物が含まれていないので時期特定は出来ないが、中世後半以降のものである可能性が高い。

002SK 弥生期の土坑（第 35 図）

東西トレンチのほぼ中央、地山レベルがいちばん高くなったあたりで検出された土坑で、当地における弥生期独特の土色 10YR3/2 黒褐色砂が充填されている。検出範囲の大きさは 109×90cm 深さ 23cm の楕円形プランを呈する。



第 35 図　002SK 土坑

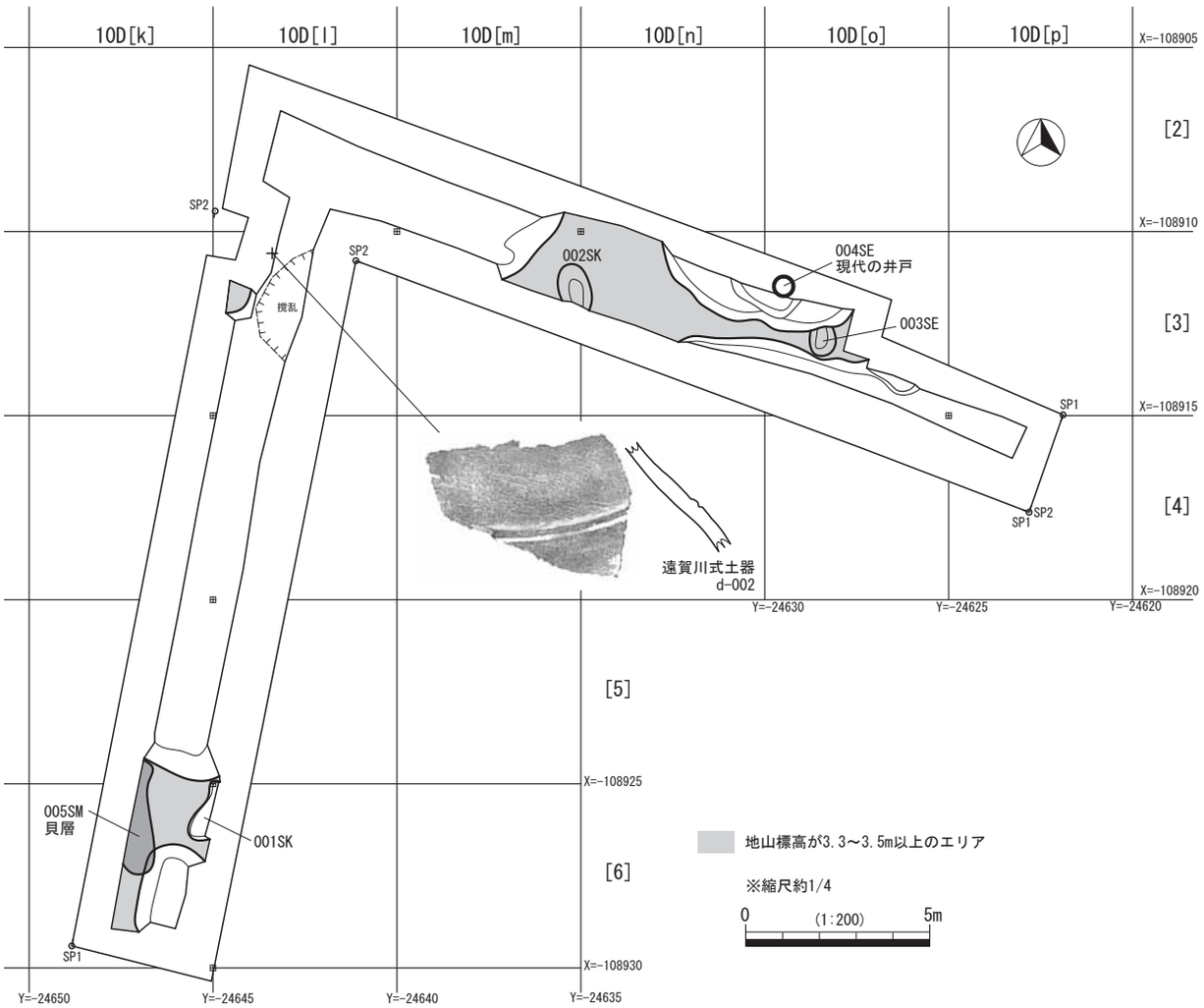
2．遺物

出土遺物は極めて少なく、図示できるようなものもほとんど無い。

小さな破片ではあるが、土師器皿 d-001（図無し）は轆轤引きで、1 地点で検出された d-100 例と同様のものである。弥生土器と思われる土器片も数片みつかっているが、d-002 は弥生時代前期の遠賀川式土器で、壺の一部である。（第 36 図、図版第 48）削り出し凸帯が 1 条巡ることから、壺の肩部分と思われる。

第９節　５地点のまとめ

遺跡の構造でも触れたように、本地点の調査でその存在が明らかになった特異な堆積層に関しては、集落の消長も含めたより巨視的な観点から検討していく必要が有る。砂堆上に家屋が密集する集落の基礎部分に、このような土砂が何のために持ち込まれたのであろうか。使われていた土砂は夾雑物の様子などから、遺跡周囲の丘陵地からもたらされたものと考えられる。過去の周辺の調査



第 36 図　5 地点主要遺物・標高分布図

（本調査区より南側）でもこのような堆積層が発見されているが、この堆積層の広がりの東端を確認したのみで、全体を把握するには至っていない。

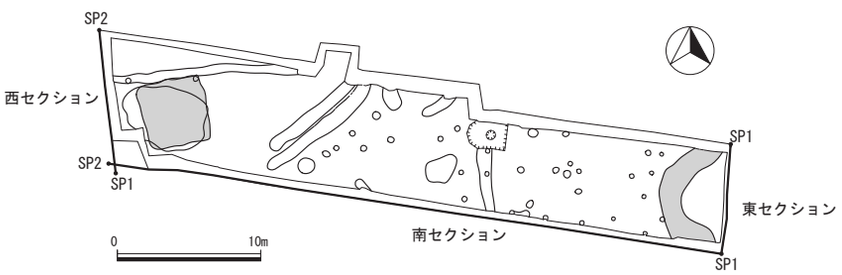
出土遺物に関しては土器片が数十片であり、その大半が中世以降のものであった。うち、2 点の弥生土器に関しては、遠賀川式土器の破片が含まれており、注目される。過去の調査でも畑間地内からしばしば遠賀川式土器が発見されており、この第 1 砂堆が知多半島西海岸における橋頭堡の一つであったことを物語っている。

遺構に関しては特に注目すべきものは無いが、地山標高の高い部分（標高 3.5m 以上）に弥生時代の土坑が単独で存在したことは、隣接する東畑地区を中心に展開していたと考えられる弥生時代集落の北限を考える上でも重要な発見と言えよう。

第３章　東畑遺跡（４地点）の調査

第１節　調査の概要と遺跡の構造

東畑遺跡（４地点）は第１砂堆南端近くに位置し、現標高４～4.5m 前後である。大田川旧河道の低地に面し、観福寺を擁する木田の丘陵地と対峙する。



第 37 図　４地点セクション位置図

今回の調査予定面積は道路敷き部分を中心に 350㎡であったが、西端に耕作地が存在し、調整の結果最終的には遺構確認のための部分的な拡張区も含め 369㎡となった。基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土層。現在の耕作土や攪乱を含む。

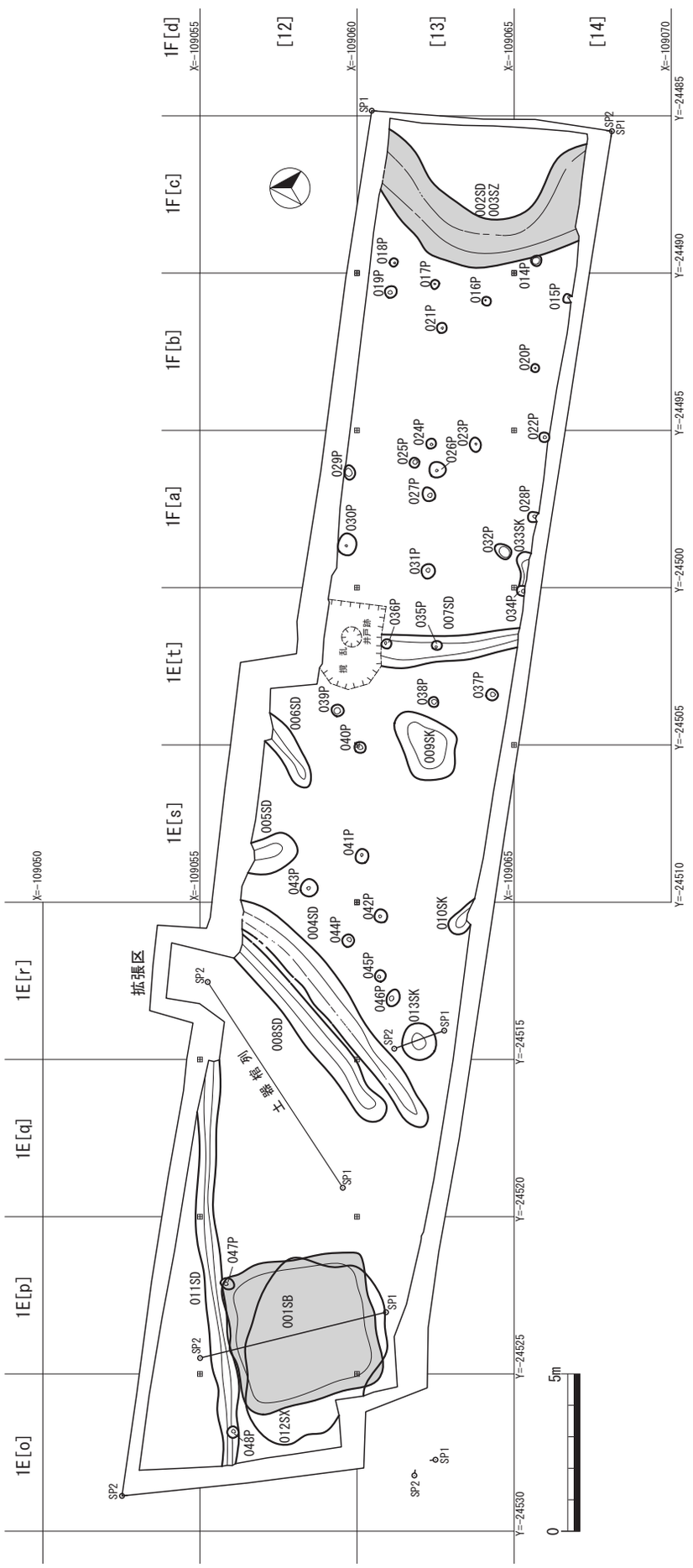
Ⅱ層：中世～近世の遺物包含層。7.5YR3/3 暗褐色砂層。主に中近世の遺物を含む。調査区東半では中世前半の茶碗類を中心にした遺物が多く検出され、同時に土錘も多く出土した。

Ⅲ層：弥生時代の遺物包含層。7.5YR3/4 暗褐色粗砂層、7.5YR2/2 黒褐色粗砂など。方形周溝墓 003SZ の周溝 002SD の埋土や、一部に 010SK など古代の土坑埋土も含む。

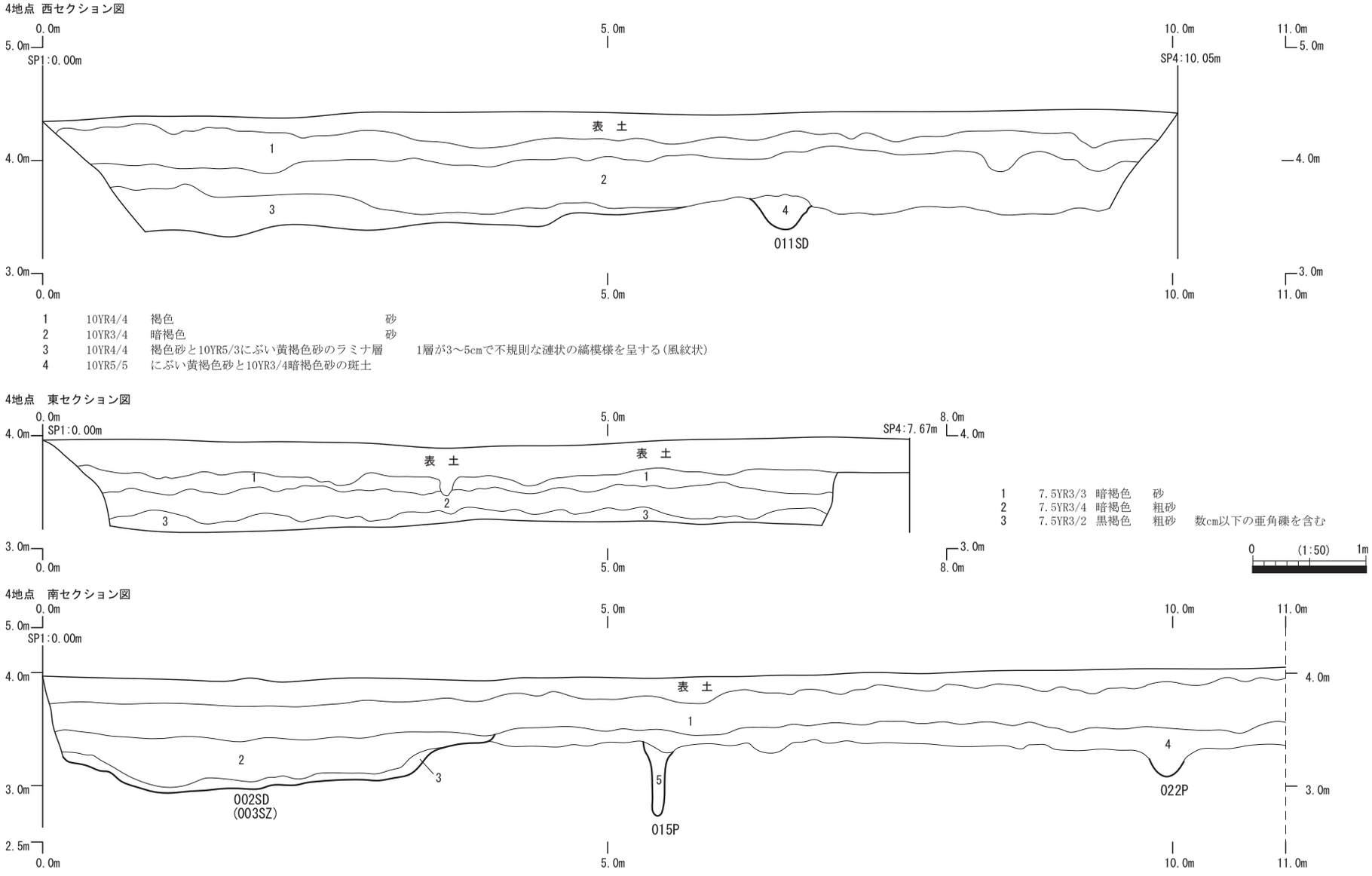
Ⅳ層：不規則な縞文様を呈する砂層。調査区西半から西端にかけて顕著に確認された層で、液状化による連続した皿状構造が重層する様子がみられる。愛知県埋蔵文化財センター鬼頭剛氏のご教示によれば、水分の過飽和状態、即ち地層全体が水没（沈水）状態であって、そこに巨大な地震などで震動が加わることによって発現する構造であるとのこと。今回のセクション面での観察では、標高 3.5m を上限として以下の層にこの構造がみられることから、少なくとも標高 4m 前後まで砂堆が沈水していた状況を想定しなければならない。現在までの伊勢湾周辺の先史地理学的見地では、縄文海進最盛期の海水準がほぼこの数値に相当するが、遺跡の存在する砂堆そのものの形成が海退に伴うものであるという点や、皿状構造の砂層中に弥生時代中期の遺物が半ば埋没するような状態で検出されることなどから、沈水時期に関しては再考を要する。

今回の調査区は、平成 18 年度調査区に連続し、周辺には平成 20・21 年度の調査区が存在する。このあたり一帯は八劔社跡地であり、現在では大田里組・市場組山車蔵脇に「元八劔社御神殿跡地」の石碑が残るのみである。記録によれば明治 42 年に「信徒少なく維持困難」との理由で取り壊され、大宮神社に合祀されている。直接神社に関係した遺構や遺物は検出されていないが、平成 20 年度の調査では加木屋地区の古窯で焼かれたと推定される平安末期の軒丸瓦が、平成 21 年度の調査では灰釉陶器の浄瓶、須恵質の瓦塔片などが出土しており、神社と共に神宮寺など仏教関連の施設が存在していた可能性が高い。

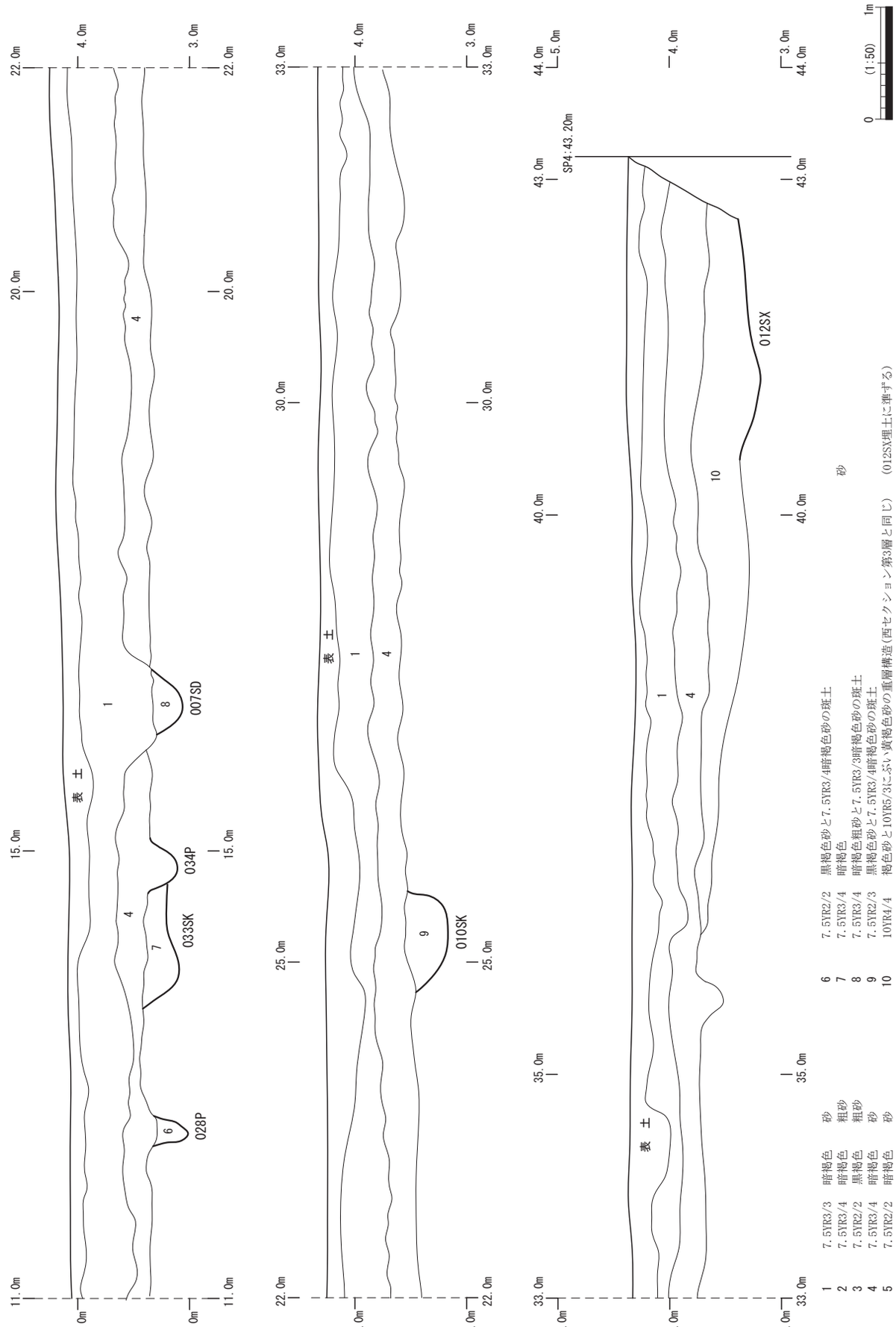
また、東畑遺跡からは弥生時代から古代にかけての遺物・遺構が豊富に発見されている。



第３８図　４地点遺構平面図



第 39 図　４地点西・東・南セクション図



第 40 図　４地点南セクション図

弥生時代としては、方形周溝墓や土器棺墓、住居址にともなう様々な遺物が出土しているが、なかでも今回の調査で発見された土器棺列は他に類例のないものであり、注目される。住居址や方形周溝墓ともに、時期的には中期から後期にかけてのものが殆どであり、東畑地区内での居住域および墓域の消長が大まかに把握されつつある。

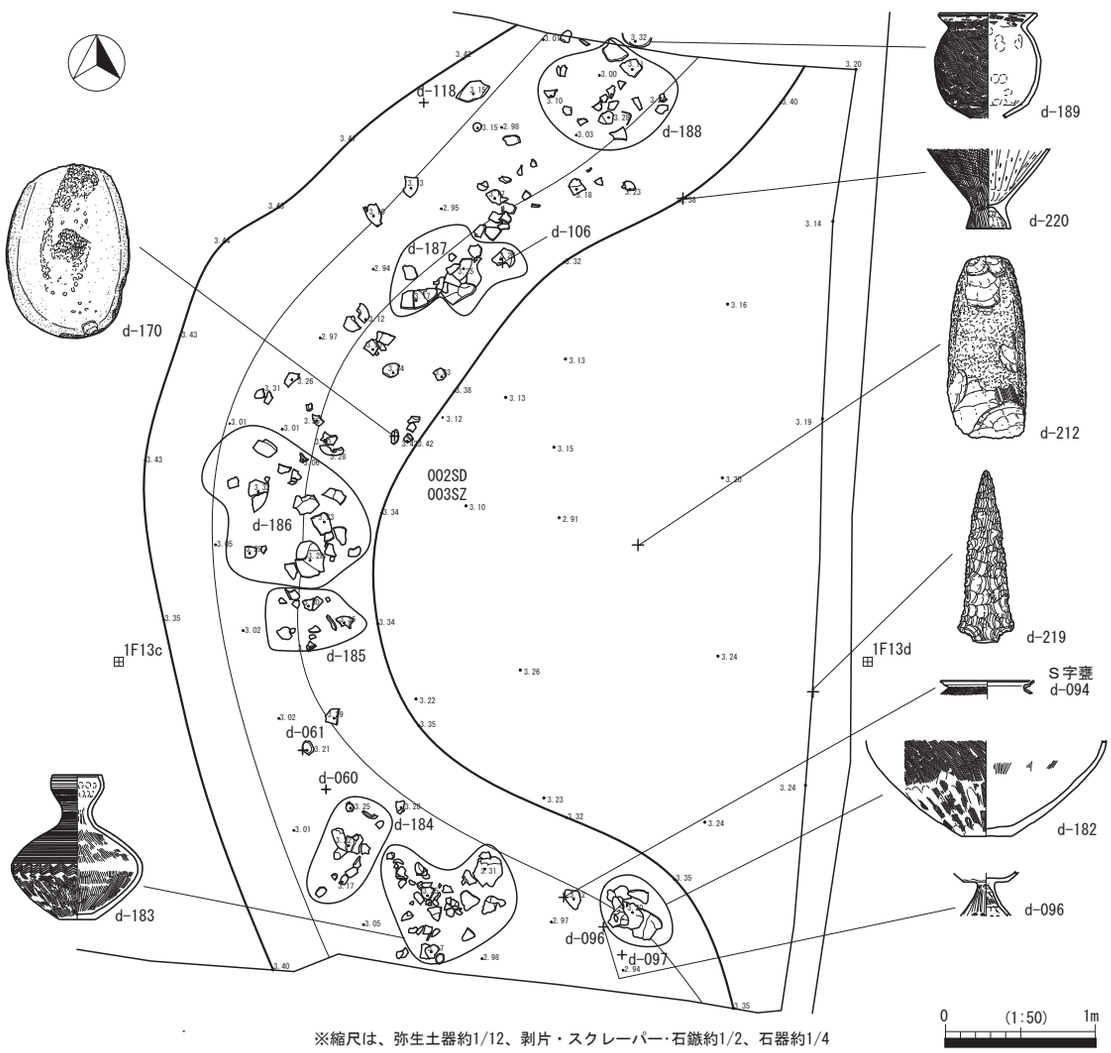
続く廻間・松河戸期に属する遺物・遺構も多く、概期の集落が存在していた可能性が高い。

これらの弥生時代から古代の遺物に混ざり、主に地山直上の遺物包含層から縄文土器が出土している。今回の調査区からはわずかに４片ほどの発見であったが、平成 21 年度の調査では 200 片以上の縄文土器が発掘されている。その大半は縄文晩期前半の従来本刈谷式土器と呼ばれていたものとそれに続く型式のものであるが、今回分類作業をおこない、主なものは本報告書の付載として掲載している。

第２節　主な遺構と出土遺物

１．遺構

003SZ 方形周溝墓（第 41 図）



※縮尺は、弥生土器約1/12、剥片・スクレーパー・石鏃約1/2、石器約1/4

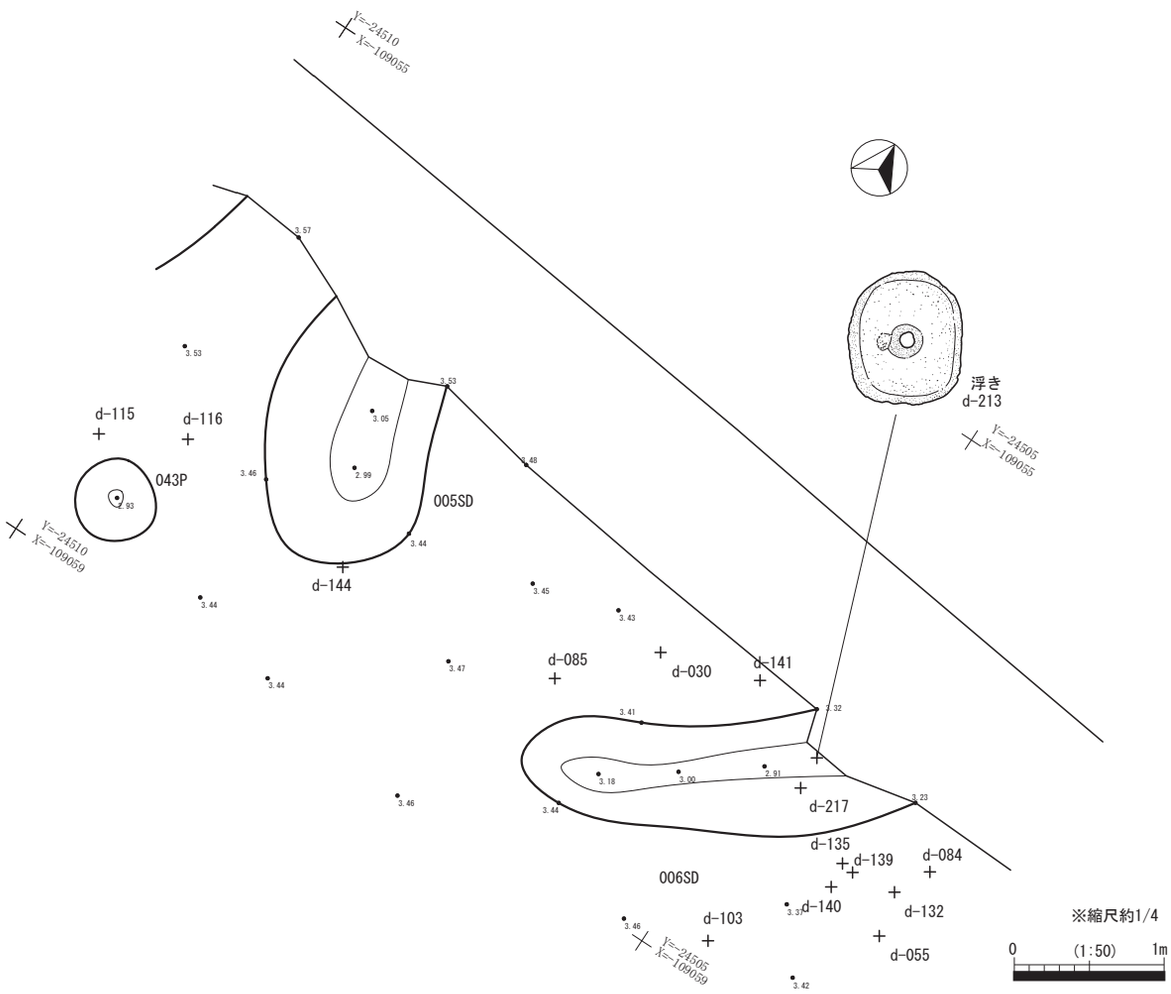
第 41 図　003SZ 方形周溝墓

調査区東端で検出されたもので、周溝 002SD を伴う。推定されるプランは 1 辺が 8m 前後の墳丘で、陸橋部が南側の溝中央部付近に設置されたタイプである。その場合主軸の方向はほぼ NE-SW になる。周溝の幅は 1.2 ～ 1.8m で、深さは中央部で約 50cm である。

周溝 002SD 埋土からは大量の弥生土器が発見されている。細片が多く器形復元できるものは少ないが、細頸壷 (d-183) や台付甕 (d-220) の存在から高蔵式 2 期に属する資料と考えられる。墳丘部の盛り土はほとんど削平されているが、地山直上に僅かに残った遺物包含層からは特徴的な石器が検出されている。d-212 は磨製石斧と d-219 有茎石鏃である。

005SD・006SD 方形周溝墓？（第 42 図）

いずれも細長い土坑であるとも考えられるが、隅に陸橋部を配した方形周溝墓の可能性を指摘しておきたい。005SD は幅約 1m で深さ 45cm ほど。006SD は幅約 80cm で深さは 40cm を測る。両者の主軸は直交というにはやや難があるがほぼ同規模であり、埋土もほぼ同質であった。006SD からは軽石製の浮き (d-213) が出土している。類推される規模は 1 辺 5m 以下である。

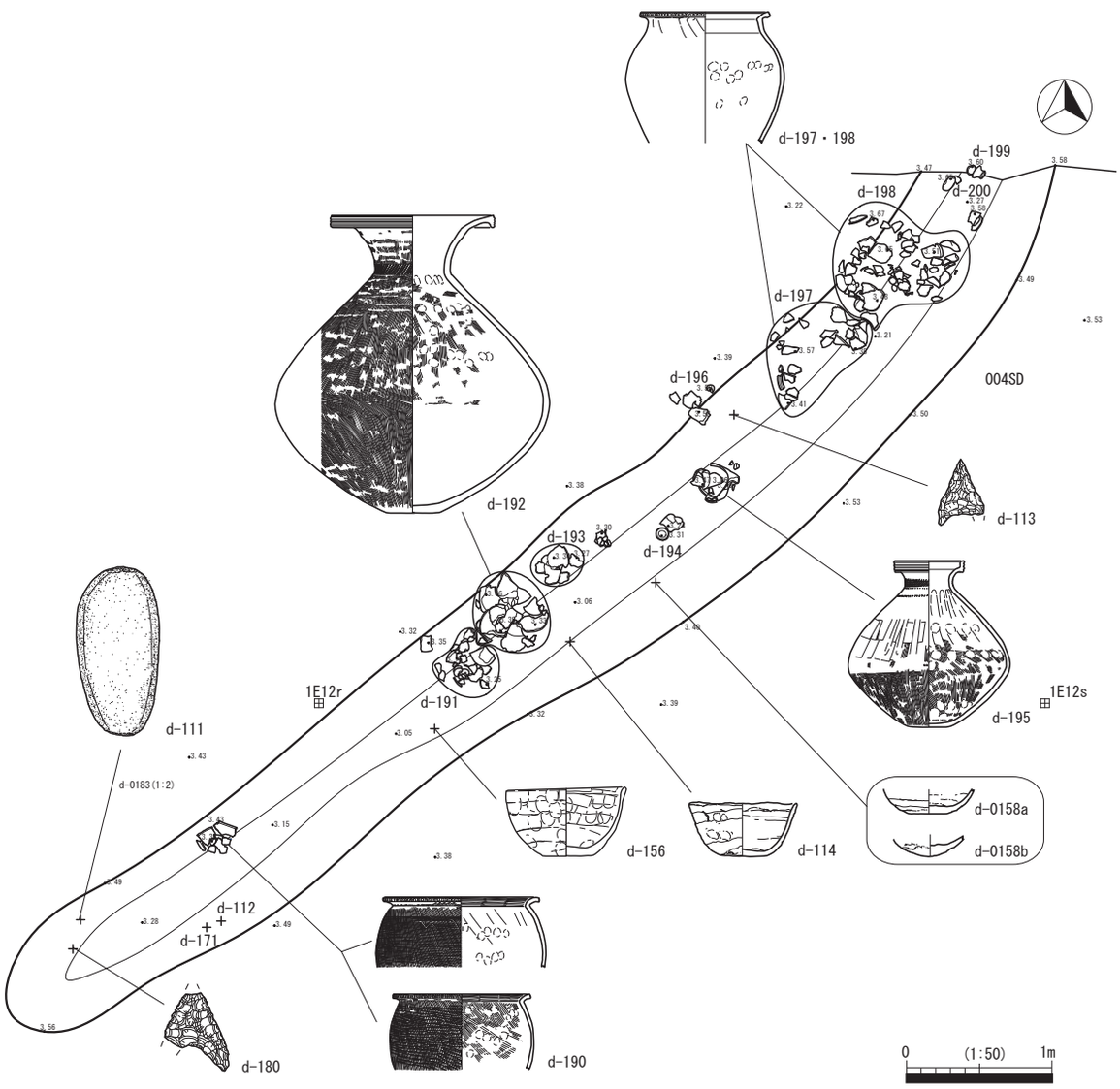


第 42 図　005SD・006SD 方形周溝墓？

004SD 溝（第 43 図、図版第 47）

検出部分はほぼ直線を為す溝である。E-39°-N 北端近くでやや北に向かって湾曲する傾向がみられることから、未検出部分で北または北西方向に曲がる可能性もある。検出部分の全長は約 9m。幅は 0.8 ～ 1.2m で深さは 40cm 前後である。溝の埋土からは大量の土器が検出されている。大形破片も多く見られ、器形復元された器種をみると、大小の壺や甕の他に、碗に近い形状をした特殊な丸小鉢も複数個含まれている (d-158a・b、114、156)。これらは器表に粘土紐の輪積み痕を意図的に残して仕上げられた極めて特殊な土器で、他に類例を見ない。内面は丁寧なヘラ磨きが施されており、二次的な被熱の痕跡は無い。出土地点に注目すると、大形壺 d-192 を中心に南東側にほぼ等間隔で配置されていたようである。004SD からは石鏃 (d-113、180) や敲石 (d-111) も発見されている。高蔵期の所産と考えられる。

土器の出土状況より、004SD は墓に伴う溝である可能性が高いが、周溝墓の溝にしては長さと幅が不釣り合いである。土器の出土状況を詳細に観察すると、多くが溝の中心軸より西北側に寄った感じで出土していることがわかる。出土遺物中、検出された溝範囲に限れば大形壺 d-192 は中



※縮尺は、弥生土器約1/12、丸小鉢約1/8、剥片・スクレーパー・石鏃約1/2、石器約1/4

第 43 図　004SD 溝

心的存在のようである。丸小鉢もこの大形壺南東側に意図的に配置されたようにも見られ、後述する土器棺列の配置と密接に関連するようである。更に、並行してほぼ同規模の溝 008SD が存在するが、こちらには殆ど遺物がみられなかった。両者の底部レベルには 10 ～ 20㎝の段差があり、008SD が上段に位置する。004SD・008SD ともに規模や方向に共通性がみられるが、これらはいずれも土器棺列に伴い一体となった遺構と解釈すべきであろう。

なお、004SD に接し、東南側に 4 つのピット (043P ～ 046P) が検出されているが、こちらも不規則な間隔ながらもほぼ同方向に並ぶことから、柵列など 004SD の付随施設であった可能性もある。

土器棺列 (d-027・002・d-022・035 および d-026)（第 44 図、巻頭図版第 2・4）

既に表土掘削の時点で検出されていた土器棺 d-002 周辺の精査に伴い検出された土器棺列で、最終的には 4 基が一直線に並ぶ状況が判明した。

大きく見ると 2 基が組を為し配置されているようであり、西組（d-027･d-002）の間隔が 1.6m、東組（d-035・d-022）の間隔が 1.1m で、西組 d-002 と東組 d-022 は 3m 離れている。

A、B2 組 4 基の土器棺はいずれも壺形土器で、頸部以上を意図的に欠いたものである。d-022 は壺の約半身を、d-035 は胴部下半が用いられているが、別固体である。

なかでもいちばんよく原形を留めていた d-002 の精査で判明したことは、土器全体が土坑に埋設されたわけではなく、浅く堀りくぼめ下胴部を埋設固定した上で土を盛り上げた可能性が高いことである。このような埋設方法は破砕の著しい d-027 や、下胴部のみを身として使った d-035 の場合にも共通しており、4 基に共通したものであると考えられる。いずれの土器も際立った特徴はみられないが、d-027 には半截竹管状の工具で絵画風の意匠が描かれている。いずれの土器も高蔵期に属するものであろう。なお、d-002 土器棺内部からはチャート製の敲石 1 点が発見されたが、土器棺への埋葬に伴う副葬品と理解すべきであろう。また、土器棺内に充填されていた土壌分析の結果、プラントオパールが検出された。（第 5 章参照）　遺跡周辺には大田川の旧河道と渡内川などの合流点付近にかなり広大な後背湿地が存在していたことを考えると、中期頃には当地で稲作が行われていた証拠であるとも考えられるが、土器棺が土圧で押し潰され開口状態にあった時に、上層の中世層が空隙に流入した可能性もあり、断言はできない。

d-026 土器集積はこれら 4 基の土器棺の延長線上に位置し、d-027 とは 2.5m の距離を置く。土器棺列検出以前に土器の取り上げがおこなわれてしまったため現場では気付かず、測量図面の検討中に中心軸を共有する可能性が判明したため、土器の出土範囲を同一図面に組み込んでみた。こちらは少なくとも 3 個体ほどの土器集積であったが、いずれも甕であり、高蔵期のものである。これら複数の甕が土器棺列に対する供献的意味合いで埋設されたものがどうかは判断できないが、方向軸という意思を共有していた可能性を指摘しておきたい。

また、先述した 004SD・008SD との関係については、土器棺列と方向を同じくすることや、土器棺 d-027 とほぼ同じ範囲に収束していることから、一体の遺構と捉えるべきであろう。更には、004SD から検出された大形壺 d-192 と土器棺列両端の土器が直角三角形の位置関係を呈することや、特殊な丸小鉢の配置など、さまざまな意図が隠されているようである。（第 51 図）

折込 A3

折込 A3

第 44 図　４地点土器棺列

001SB 住居址（第 46 図、巻頭図版第 3）

1 辺 4m ほどの隅丸方形プランを呈する竪穴住居址である。N-14°-W

床面の標高は 3.5m で、20cm 前後の掘り込みが残存していた。内部は 7.5YR3/1 黒褐色の砂で充填されていたが、床面の断ち割りをおこなったところ、下層にも貝層を伴う掘り込みが存在することがわかった。平面プランは確定できなかったが、ほぼ水平を保つ部分もあることから、001SB の堀り方である可能性もある。更に、この下部遺構は北側に幅 60cm 深さ 30cm ほどの溝 011SD と一体となって掘り込まれているようでもあり、001SB の北辺と溝のプランがほぼ重なっている。柱穴などは検出できなかった。

貝層は非常に小規模なものであったが、貝殻はほとんど破砕されておらず、ハマグリとマガキを主体とし、オキシジミなどを含んでいた。

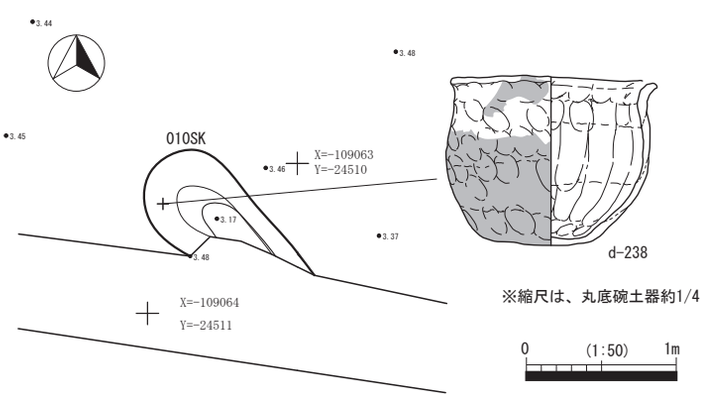
床面および埋土からは大量の土器や石器が検出されている。甕が多く床面に伏せて置かれたままの状況で出土したものもある。(d-206、207)　石器類は 2 点の管玉のほか、石鏃や剥片、スクレーパー、敲石、軽石製浮きなど多様な器種が出土したが、石包丁や石皿などは発見できなかった。なお、4 地点全体の出土石器は、分布図（第 49 図）を参照されたい。

住居址の時期は、高蔵期前半と推定されるが、出土土器の一部や周辺に貝田町期の遺物もみられることから、最初の掘削はその時期におこなわれた可能性もある。住居廃絶後の窪地には大量の土器片が廃棄されたようであり、その出土量はコンテナ 3 箱にも及ぶ。

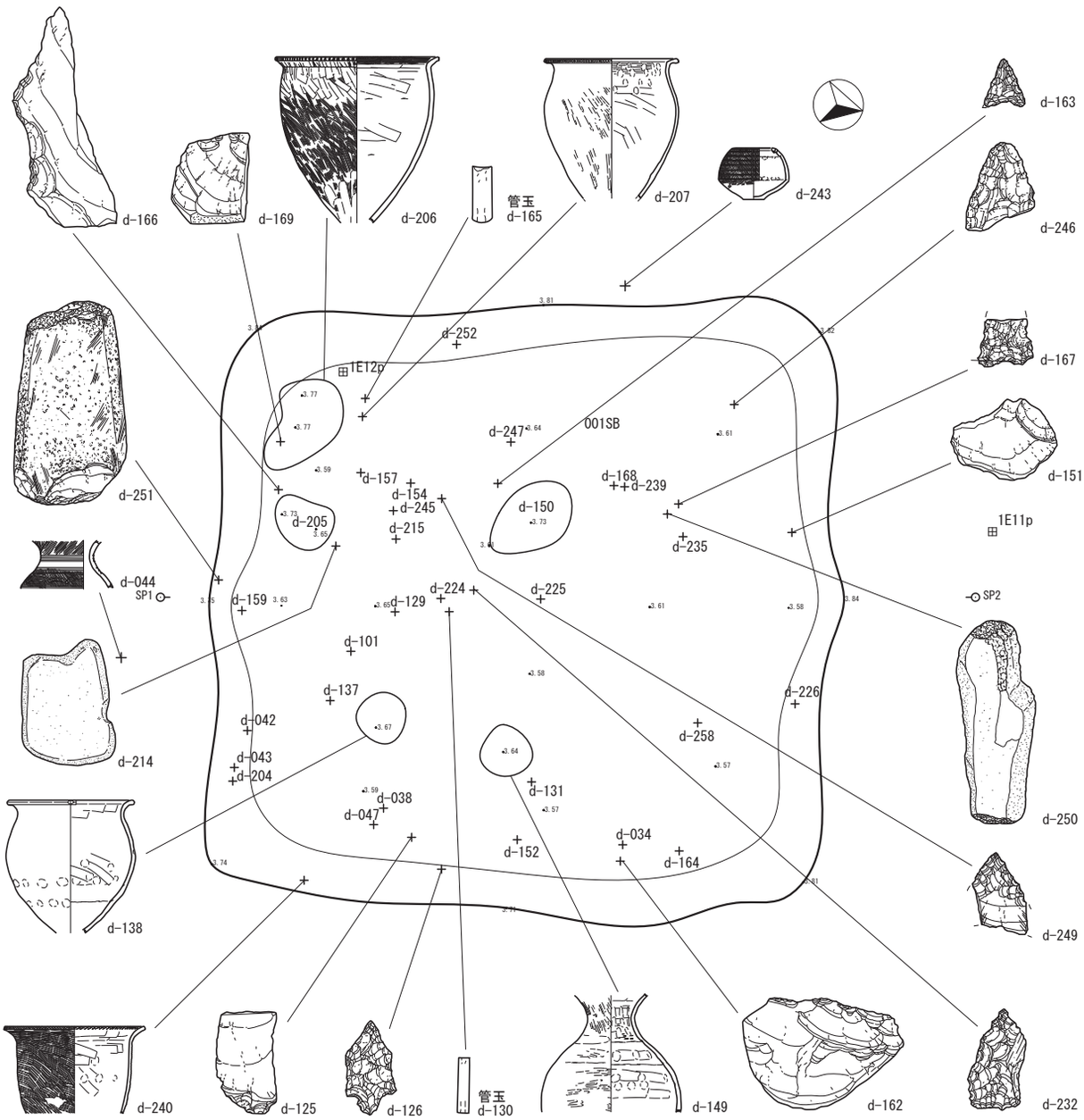
012SX は 001SB 住居址の下部に存在した性格不明の掘り込みである。先に考察した住居址そのものの堀り方とは別のもので、不整形で中央が凹む擂り鉢状に検出された。これが人工的な掘削の痕跡であるのか、自然現象で生じた窪地なのかは判断できなかった。この 012SX 全体は、基本層序の項でⅣ層（不規則な縞文様を呈する砂層）中に形成されており、かなり大量の弥生土器片を包含していた。住居址床面から検出された土器との時期差はほとんど認められなかったが、仮に大規模地震による液状化がその成因にかかわっているとすると、地震の発生も弥生時代に限定されることになるが、地質学的な成因はこの砂層全体の沈水状況を前提とするものであるので、検討を要する課題として把握しておきたい。

010SK 土坑（第 45 図）

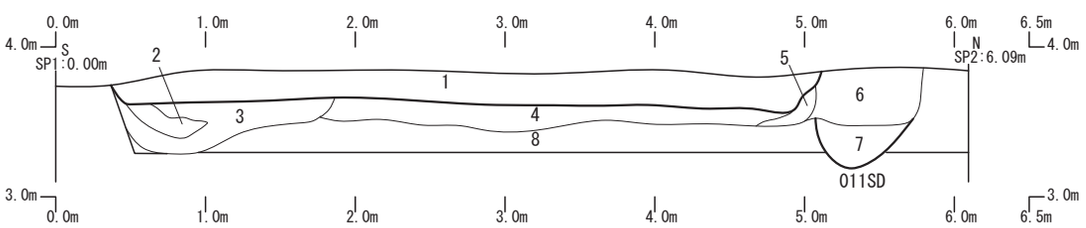
検出部分は幅 60cm 深さ 25cm ほどで、中から小形の甕形土器 d-238（完形品）が出土している。指痕が多く残りいびつで手捻りの雰囲気を醸し出した土器で、外面には煤の付着が認められる。単独出土のため時期の特定が難しいが、市内の大木之本遺跡でも同様の土器が出土していることから、8 世紀代のものである可能性が高い。



第 45 図　010SK 土坑



※縮尺は、弥生土器約1/12、剥片・スクレーパー・石鏃約1/2、石器約1/4、管玉1/1



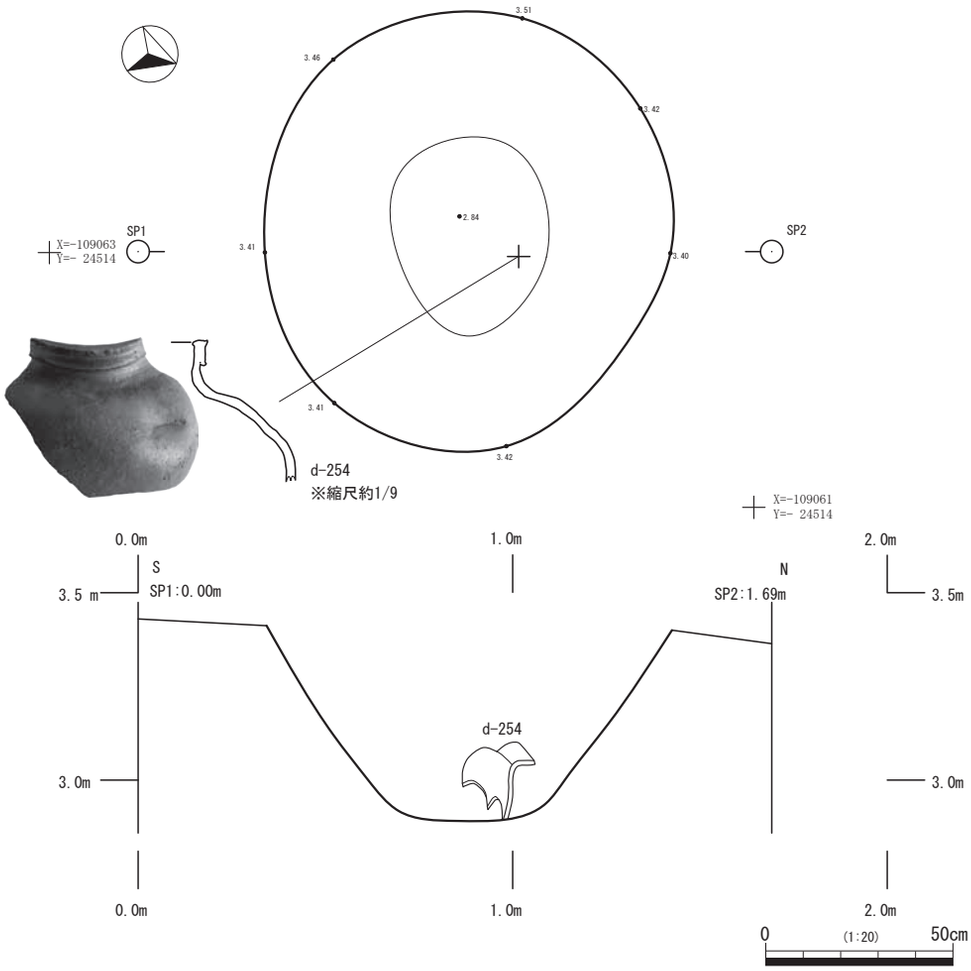
1	7.5YR3/1	黒褐色	砂
2	混土貝層		貝は破砕されず
3	10YR3/2	黒褐色	砂
4	10YR3/3	暗褐色	砂
5	2.5Y6/4	にぶい黄色	粗砂
6	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂
7	10YR3/4	暗褐色	砂
8	10YR4/4 10YR5/3	褐色砂と	

0　(1:50)　1m

第 46 図　001SB 住居址

013SK 土坑（第 47 図）

直径 1.1m ほどの円形の土坑で、擂り鉢状の断面形状を呈する。深さは約 60cm で底部に大きく歪んだ常滑焼の甕の破片 d-254 が 1 点発見されている。土坑の性格は不明であるが、甕の形状が常滑窯 12 型式段階であることから、16 世紀の所産であろう。



第 47 図　013SK 土坑

2. 出土遺物（第 48 図ほか）

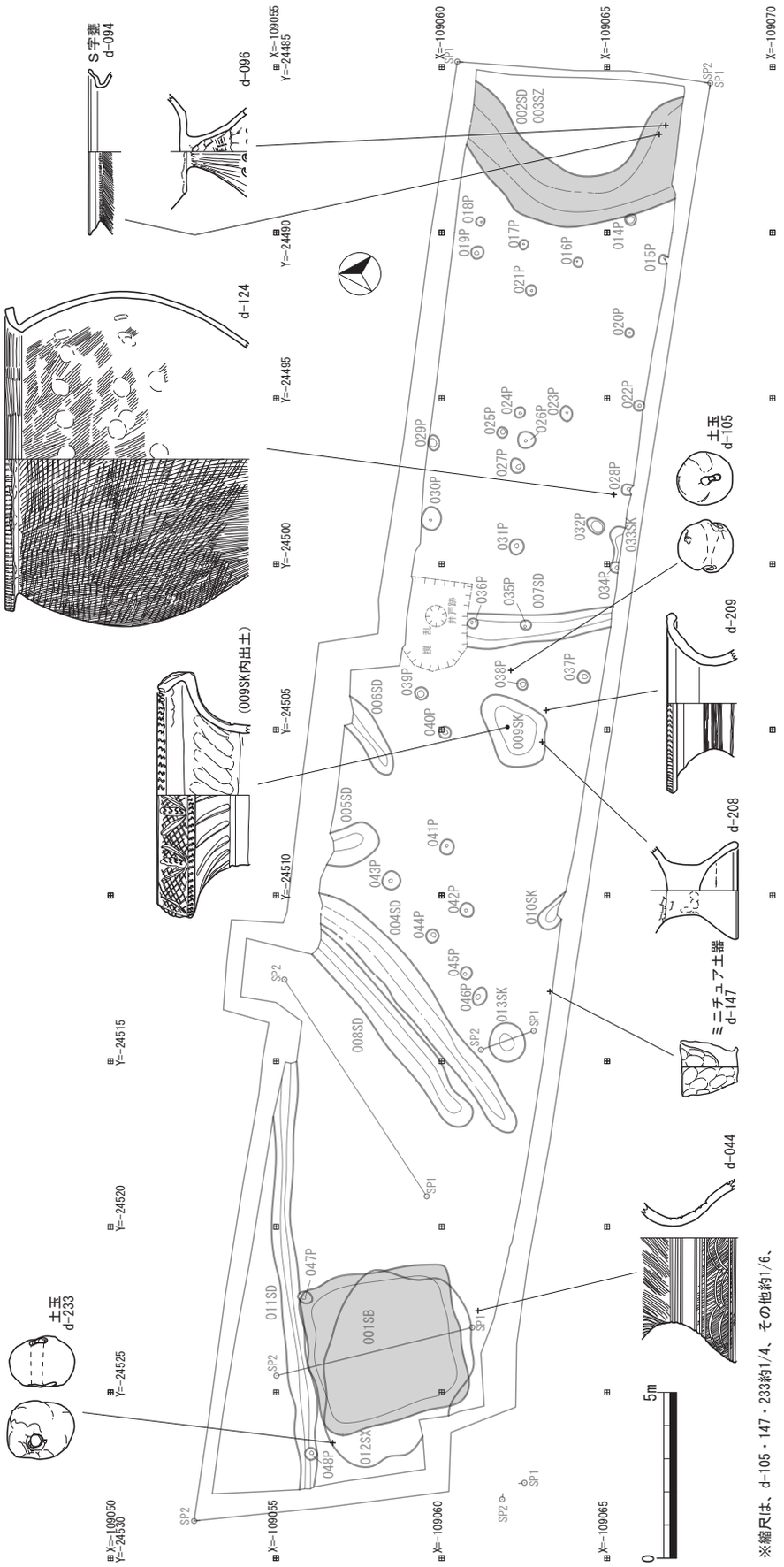
4 地点の出土遺物には、縄文土器 3 片を最古に、大量の弥生土器、ごく少量の須恵器・土師器、中世陶器、土玉や土錘などの土製品、各種石器類があり、コンテナ数は 32 箱に及ぶ。

縄文土器は後期末の凹線文系のものと、晩期前葉の雷Ⅱ式のものがある。いずれも地山面からの出土で、拓影図とともに付載にて取り扱う。

弥生土器は調査区のほぼ全面で検出しているが、方形周溝墓の溝や住居址からの出土が大半である。その出土状況は各遺構の平面図中に組み込んであるので、そちらを参照されたい。

時期的には中期のものが大半であり、岩滑式段階の受け口状口縁大形壺や、貝田町式前半および瓜郷式、貝田町後半および古井式期のものが少量と、高蔵式期のものが大量に加え、後期と思われるものごく少量に続き、廻間式期のものも S 字甕を含めて数点発見されている。

古代の時期は極めて希薄で、須恵器や土師器を合わせても十数点がみられるだけである。完形で

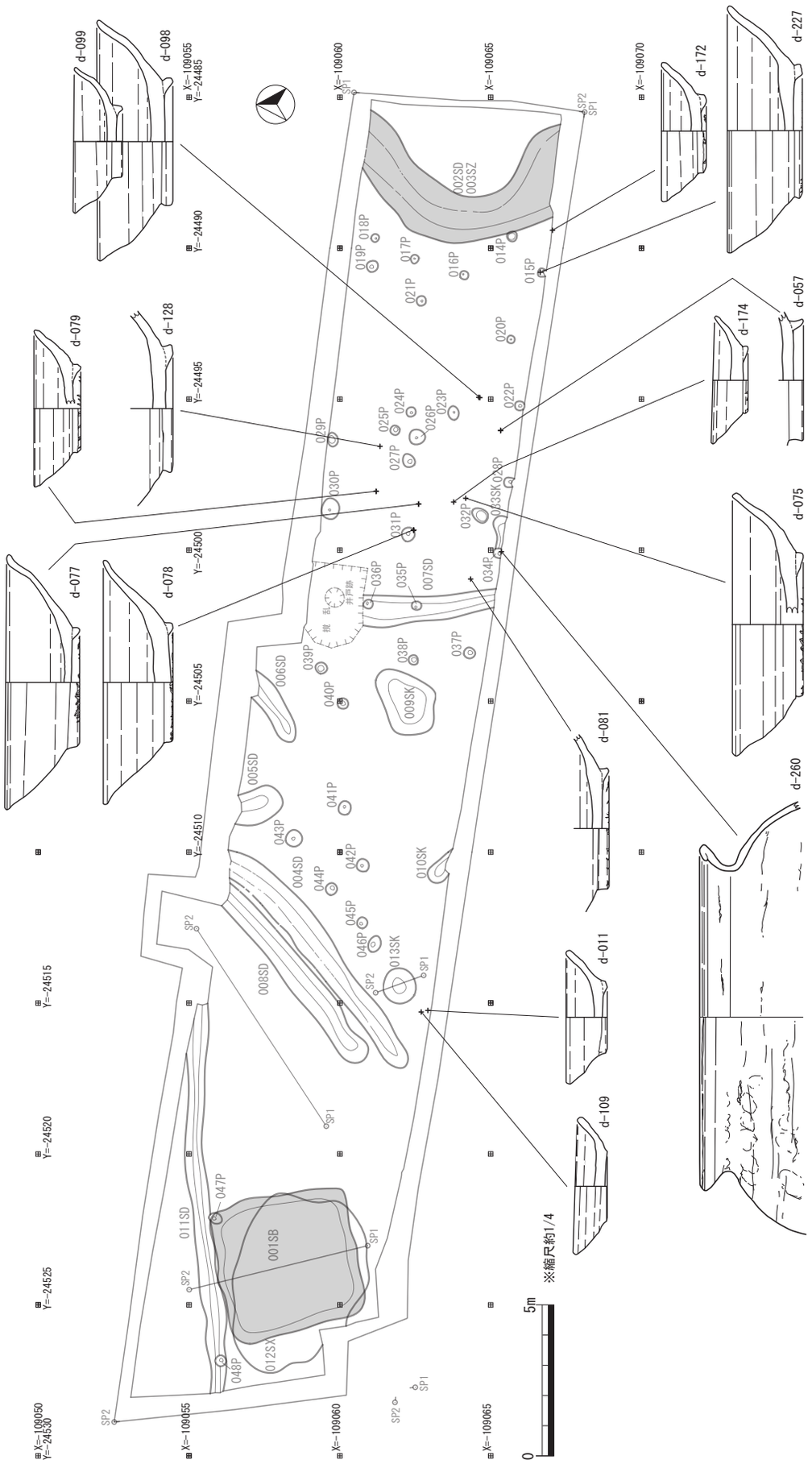


第48図　４地点主要土器出土分布図

折込 A3

折込 A3

第 49 図　4 地点石器出土分布図



第 50 図　４地点中世陶器類出土分布図

出土した小形の甕形土器 d-238 を除けばいずれも破片で、器形を復元できる資料は無い。

中世陶器は古段階（常滑窯１～２型式）の茶碗類が調査区東半のほぼ地山面レベルで多く発見されている。（第 50 図）。なかでも d-098・099 は小皿と碗が入れ子になって出土しているが、概期の遺構として確定できるものはなかった。

石器類は調査区のほぼ全面から検出されているが、大半は弥生期のものである。とりわけ 001SB を中心とした調査区西半に濃厚に分布するが（第 49 図、巻頭図版第 4)、器種としては石鏃（有茎･凹基)、磨製石斧、打製尖頭器、磨石、石錘、石皿、敲石、石核、砥石、浮き（軽石製)、剥片、UF=Used Flake、RF=Retouched Flake などがある。極めて豊富な器種内容であるが、稲の収穫具である石包丁はみつかっていない。なお、石鏃の一部は縄文晩期のものが含まれている可能性もある。

第３節　４地点のまとめ

４地点で最も注目すべき発見は、土器棺列であろう。方形周溝墓などの墳丘墓に、主体部とは別に土器棺墓が設置される事例は朝日遺跡などでみられるが、４基もの土器棺が一直線に並ぶ事例は極めて珍しい。直線の向かう方向には特に天文学的意味合い（二至二分の日の出や日没など）や景観上の意味（特徴的な山頂や目視可能な巨石など）を見出すことはできなかったが、例えば祖先の墓を指向していたり、場合によっては銅鐸の埋納地を指し示すものであるのかもしれない。とまれ本例の発見は、未知の構造（物理的且つ精神的）を持った墓制が存在する可能性を示している。

『愛知県史資料編２　考古２　弥生』によれば、土器棺墓の発見された県内の遺跡は 50 カ所ということである。尾張地域５例に対し、三河地域 45 例と分布域に際立った偏りがみられるが、恐らく縄文晩期以来の伝統的風習が影響しているのだろう。時期的には前期から後期までみられるが、三河内陸部では前期のものが、西三河沿岸部では中期のものが多い傾向にある。朝日遺跡例は方形周溝墓の墳丘上に主体部とは別に複数の土器棺墓が営まれたもので、この場合は追葬的な意味合いや家族単位による祭祀を考慮する必要がある。

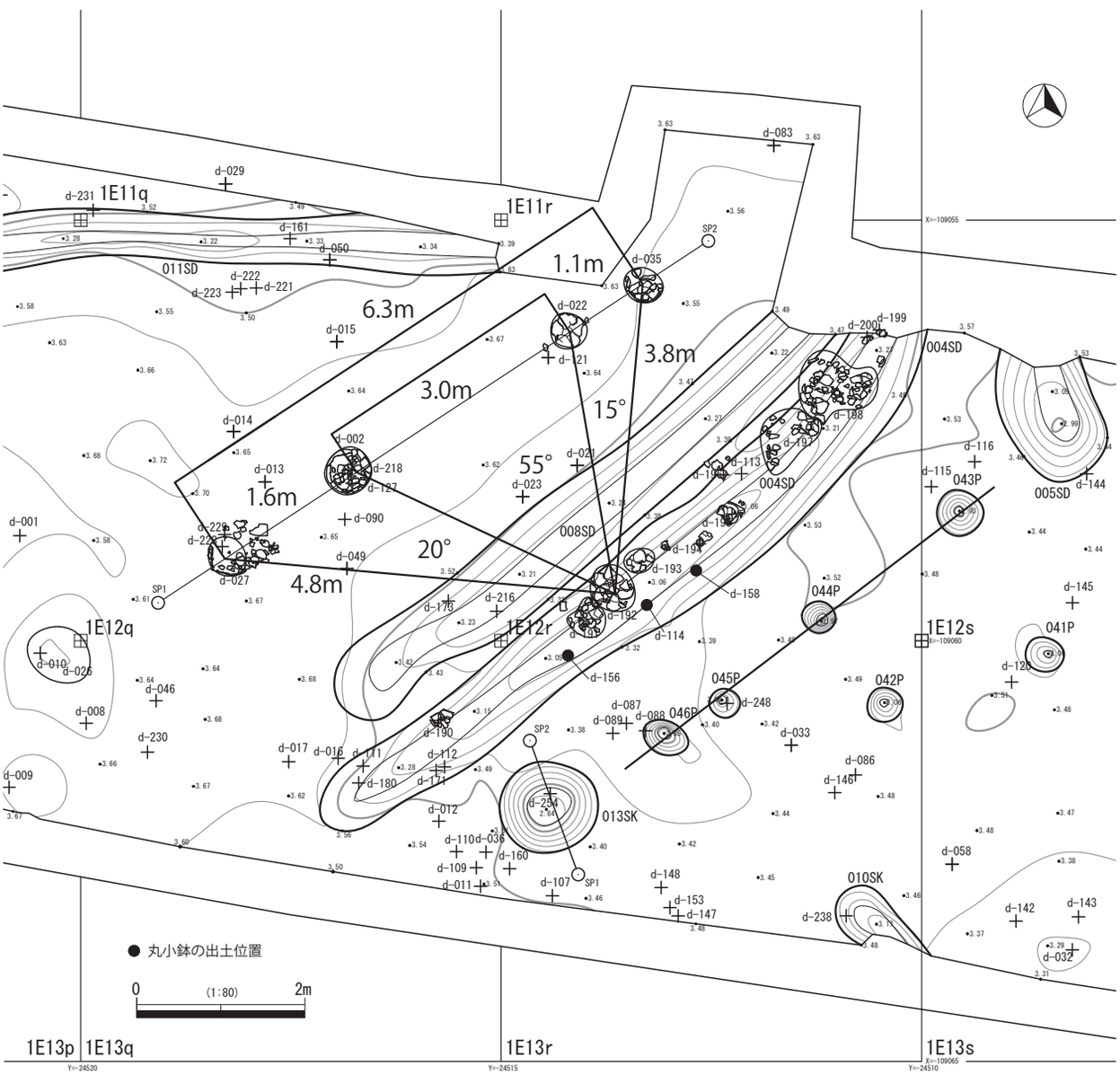
東畑遺跡に於ける４基の土器棺の直線的配列（延長線上に存在する甕の集積も含む）は、それに並行して同一方向を指向する二重の溝や、そこに置かれた供献土器とともに理解されなければならない。即ち、象徴的な供献大形壺と両端の土器棺が作り出す直角三角形の意味や、大形壺付近を中心に配置されていた特殊な丸小鉢の存在、更にはやはり同方向に並ぶ外側の杭列などとともに総合的に考えるべきであろう。ここには溝を境界として明らかに墓の内と外という概念が具体化され、更には墓前祭祀の痕跡が集約されているようである。仮に個々の土器棺が小規模な盛り土を為していたとするなら、より遠近法的な視点と視線が容易に創出されたことだろう。

興味深いのは土器棺列の延長線上で検出された d-026 甕の集積の存在である。004SD 内に累々とみられる供献土器群は、埋葬された主体部としての土器棺列に対する所謂境界外側からの祭祀に伴ってもたらされたものである。これに対し d-026 は、主体部の造り出した遠近感や方向即ち意思を既に共有していた者によって供献されたものである可能性が高いことを指摘しておく。

このような構造を持った墓は他に類例が無く、ほぼ同時期に調査区東端で検出されたような一般的な方形周溝墓が存在することを考えると、極めて特殊な例であると言わざるを得ない。その特殊

性はこの土器棺列への供献のためだけに作製されたと思われる丸小鉢の存在からも裏付けられよう。粘土紐の輪の輪積み痕をそのまま残して造形された丸小鉢は、いずれも掌にちょうど収まる大きさである。器表面は粘土紐の接合部を敢えて消さず､内面のみに磨きをかけて仕上げられている。資料を実見していただいた石黒立人氏の表現を借りればこの資料は「意図的に個性が隠蔽された」ものであり、それは使用者のアイデンティティーの隠匿をも意味するものであろう。

このような小形土器を作製する場合、器表の仕上げと整形は一体となって進行するのが普通であり、寧ろ器表面に一切の加工と仕上げを施さずに内面のみを調整することの方が難しい。また器形そのものも、碗とも鉢とも形容し難い実に曖昧な形状をしており、ただ液体を満たすという用途を果たすために磨かれた内面と違い、粘土紐の境界線が見えたままの外見は異様な存在感を放っている。所謂当時使用されていた土器型式や様式の範疇を意図的に離れ、この墓の祭祀にのみ有効な言わば刹那的な個性を演出することによって祭祀（供献）行為そのものがより純化されていったのだろう。この丸小鉢は、その出土レベルや出土状況などから、004SD の土器群が半ば埋もれた段階



第 51 図　土器棺位置関係図

で供献された可能性が高い。恐らく土器棺列に対する墓前祭祀が一定期間続けられていたことを物語るものであろう。

このような特殊な土器を使うこと自体、他に類例の無い土器棺列という葬送形態と相俟って、墓本体と実に効果的に呼応しているようにも見受けられる。

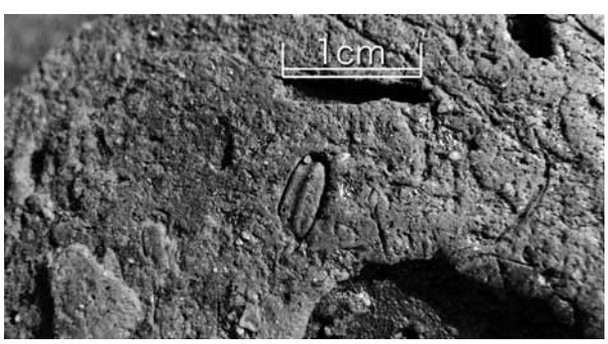
なお、d-002 土器棺内部の砂から検出されたプラントオパールの意義については、分析者の指摘するごとく、土器棺が埋設されていた上下層の土壌分析も含めた検討が必要であろう。(第５章参照)

稲作の可能性については、今回の調査で籾殻または米粒の圧痕ではないかと思われる土器底部も２点出土しており（下の写真)、自然科学的な分析と共に、これらの資料も詳細に分析されるべきであろう。大田～横須賀の谷周辺には、大田川の旧河道周辺や、第 1 砂堆東側の湿地帯周辺など、稲作に好条件の地理的環境も揃っており、水田跡の発見が待たれるところである。

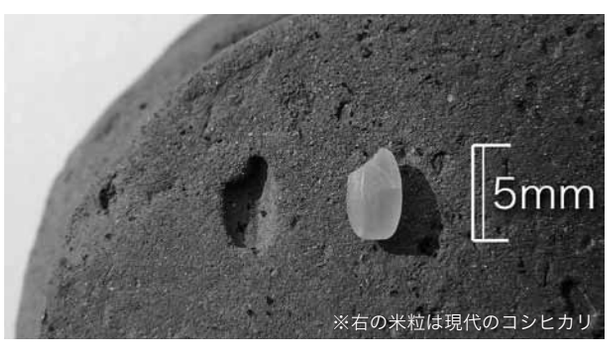
住居址に関しては、土器棺列と主軸を異にすることや、一段階古い型式の土器を含むことから、単独で存在したものであろう。砂堆上でのプラン検出は難を極めたが、最終的には床面の検出に成功し、管玉などの貴重な遺物も発見することが出来た。また、住居址範囲のみならず、豊富な石器類を検出しその分布状況を把握できたことは大きな収穫であった。

この東畑地区では、断片的ながら調査の積み重ねによって弥生時代の遺跡の動態が明らかにされつつあり、とりわけ弥生時代中期から後期にかけての時期には知多半島北部における中心的な集落の一つであったことが判明しつつある。

なお、基本層序の項で言及した「液状化による連続した皿状構造が重層する様子」を呈する砂層についても、データの蓄積と成因となった地震の時期や規模の特定など、地質学や先史地理学分野との学際的な研究が必要であろう。



籾殻圧痕？（1E13s グリッド出土壺底部）

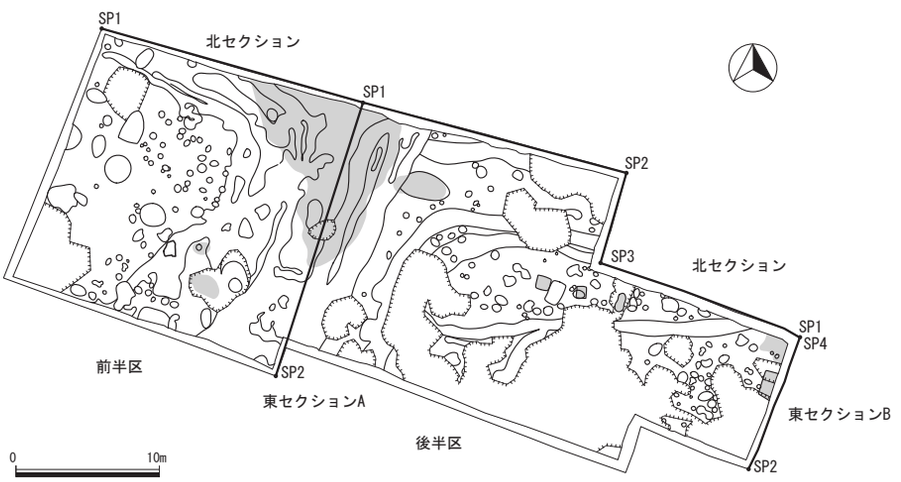


米粒圧痕？
（遺物番号 4-5：1E13c グリッド出土小型鉢底部）

第４章　龍雲院遺跡（３地点）の調査

第１節　調査の概要と遺跡の構造

龍雲院遺跡（３地点）は第１砂堆北西端近くに位置し、名鉄太田川駅に近く、曹洞宗龍雲院隣接地にある。現標高は 2.6m 前後と、第１砂堆のなかでもいちばん低い地域である。



第 52 図　３地点セクション位置図

当遺跡に於ける調査予定面積は 1,200㎡であったが、残土処理を場内でおこなう必要があったため３回に分けて調査の予定であった。しかし、最初に予定していた龍雲院に接した部分約 300㎡の表土掘削の結果、そのほぼ全面が現代の攪乱であり、昭和時代を通じて小さな沼地状態でゴミ捨て場と化していたことが判明したため、現状を撮影し直ちに埋め戻した。残る面積約 900㎡を前半区・後半区の２分割し、排土を遣り繰りして調査をおこなった。

基本層序は以下のとおりである。

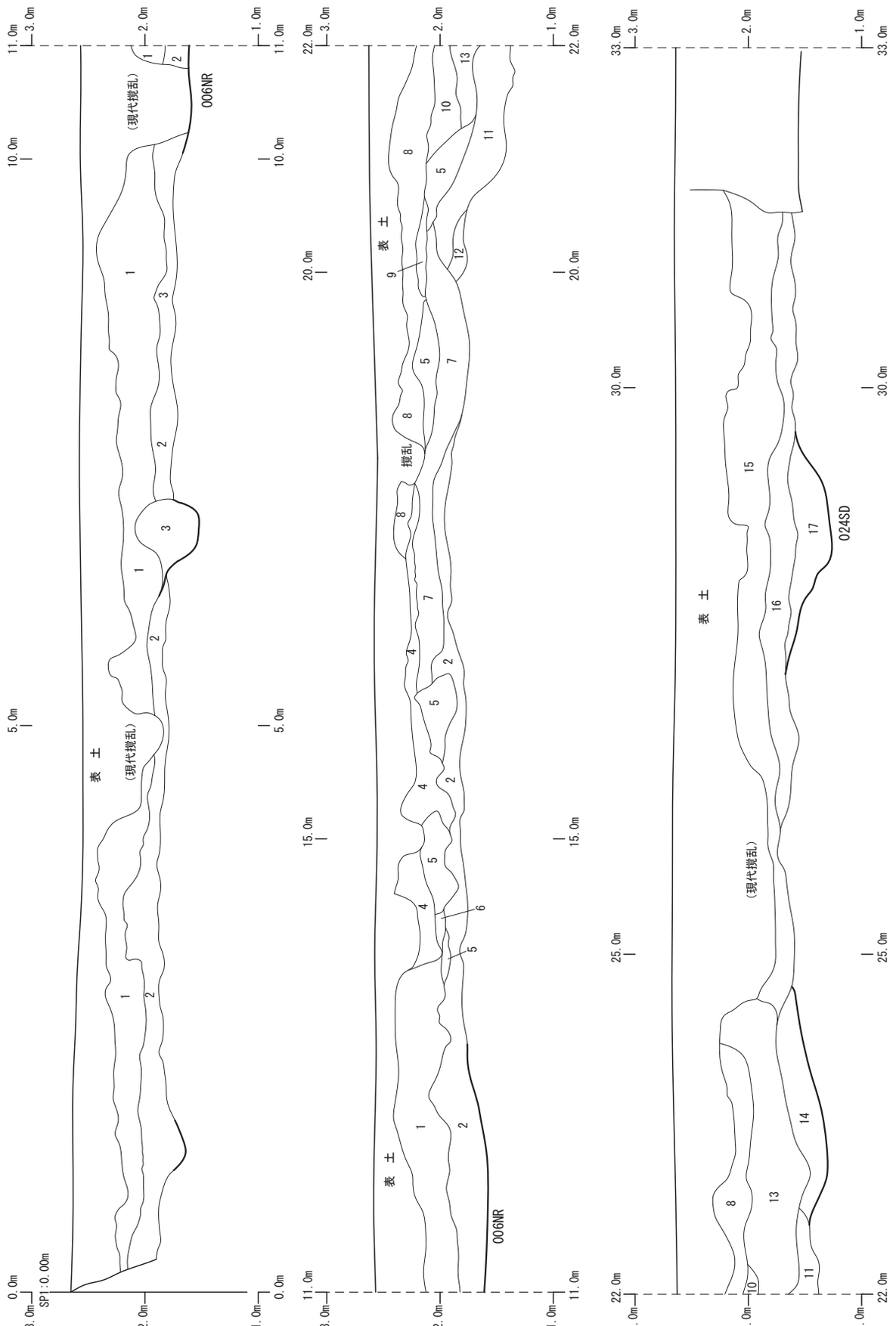
Ⅰ層：表土層。近現代の撹乱層で、地山層にまで達する攪乱も多い。攪乱は全区でみられた。

Ⅱ層：中世後半～近世の遺物包含層。本遺跡には弥生時代の遺物包含層が存在しないため、ほとんどの層がここに含まれる。10YR4/3 にぶい黄褐色土や 10YR3/4 暗褐色土、7.5YR3/2 黒褐色土や同色の砂層など、さまざまな層がみられる。貝層が多いのも特徴で、純貝層や混貝土層のほか、極端に破砕圧縮された５～ 10cm ほどの貝層が厚さ 40cm 以上、溝に沿って堤防のように幅狭く積み重ねられた部分もあった。（東セクション A 第２層）　貝層の多くは中世末から近世の所産である。また、北セクション中央部を中心に、地震による液状化の痕跡がみられた。

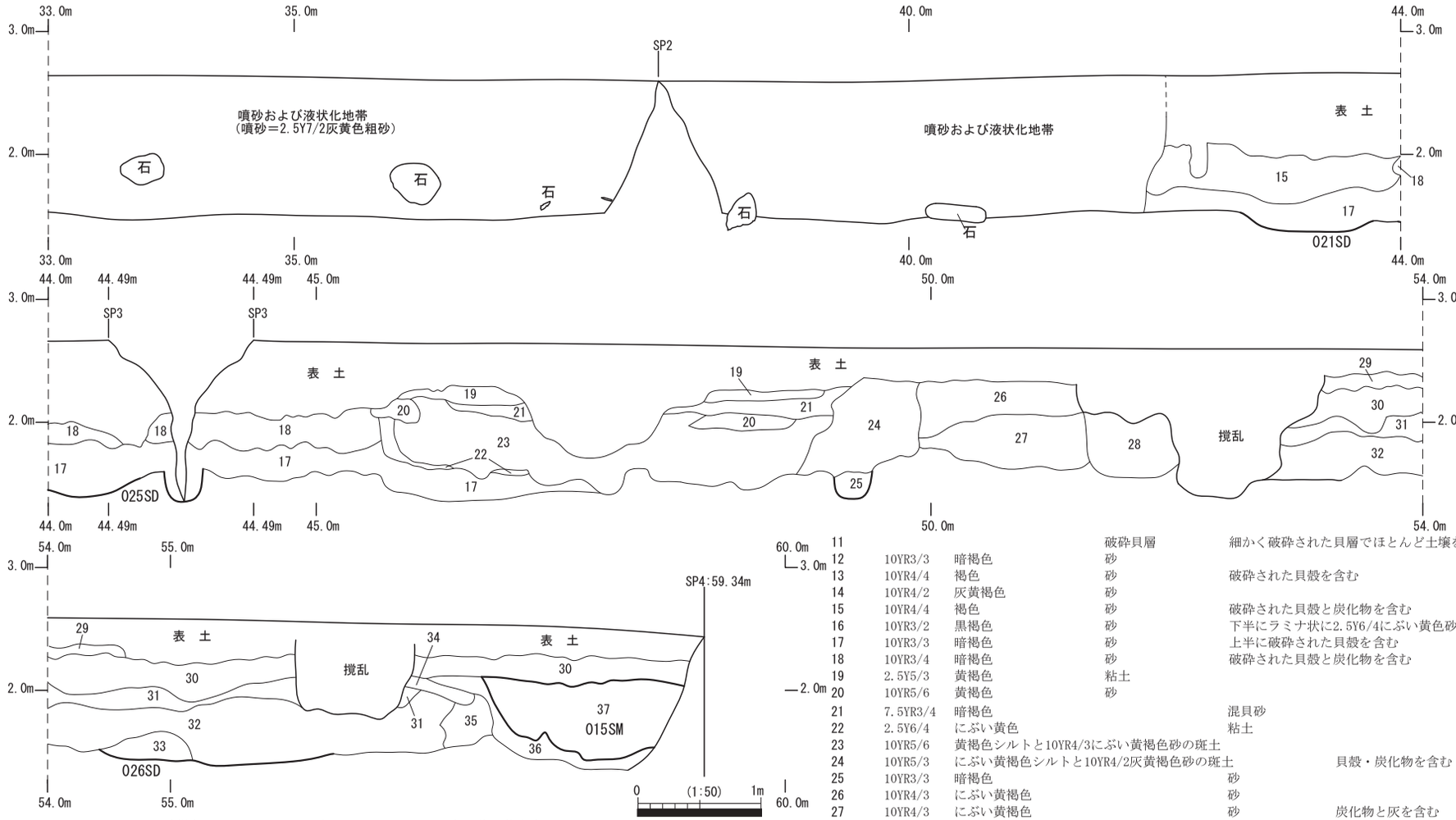
Ⅲ層：中世前半の遺物包含層。中世後半の遺物包含層掘削が終了したレベルで、それ以前には存在の気配すら無かった複数の溝や土坑が出現した。検出面の標高は 1.5m ほどで、遺構掘削と同時に湧水する状況であった。調査区のほぼ全面に広がる溝などの下層遺構が、その気配も感じさせないような状況で埋もれていた理由を説明せねばならないが、いくつかの可能性の中には、津波による一時的な埋没も考慮する必要があろう。

龍雲院遺跡はこれまで未調査の遺跡で、中心街開発に先立つ試掘調査によって中世の遺物が発見されたことを契機に遺跡登録されたものである。

佐渡島のような形状をした第１砂堆の北西端に遺跡は位置するが、地表面は第２砂堆の延長上

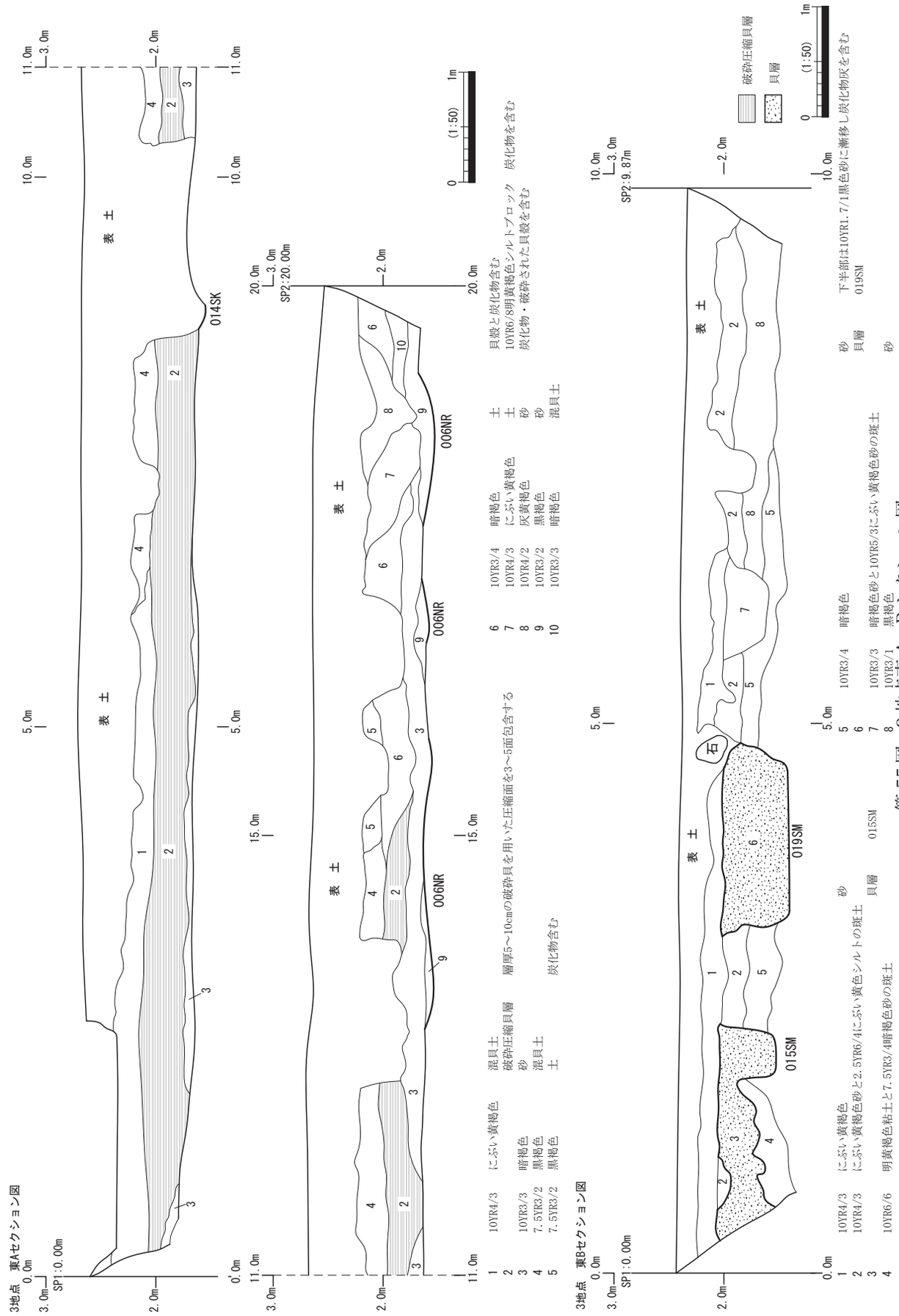


第53図　３地点北セクション図１



1	10YR3/4	暗褐色	砂	貝殻・炭化物を含む
2	7.5YR3/3	暗褐色	砂	下半部は10YR3/2黒褐色砂に漸移する
3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	貝殻・炭化物を含む
4	7.5YR3/2	黒褐色	混貝土	粉砕された貝殻と炭化物を多く含む
5			貝層	001SMの末端部　ほとんど破砕されていない
6	7.5YR3/2	黒褐色	混貝土	炭化物を多く含む
7			破砕圧縮貝層	層厚5～10cmの破砕貝を用いた圧縮面を3～5面包含する
8	10YR4/3	にぶい黄褐色	混貝土	貝殻・炭化物を含む
9	5Y6/2	灰オリーブ色	破砕圧縮貝層	超硬化面　極めて硬く締まる
10			混土貝層	001SMの末端部　破砕されていない貝を多く含む
11			破砕貝層	細かく破砕された貝層でほとんど土壌を含まない
12	10YR3/3	暗褐色	砂	
13	10YR4/4	褐色	砂	破砕された貝殻を含む
14	10YR4/2	灰黄褐色	砂	
15	10YR4/4	褐色	砂	破砕された貝殻と炭化物を含む
16	10YR3/2	黒褐色	砂	下半にラミナ状に2.5Y6/4にぶい黄色砂を含む
17	10YR3/3	暗褐色	砂	上半に破砕された貝殻を含む
18	10YR3/4	暗褐色	砂	破砕された貝殻と炭化物を含む
19	2.5Y5/3	黄褐色	粘土	
20	10YR5/6	黄褐色	砂	
21	7.5YR3/4	暗褐色	混貝砂	
22	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土	
23	10YR5/6	黄褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂の斑土		
24	10YR5/3	にぶい黄褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂の斑土		貝殻・炭化物を含む
25	10YR3/3	暗褐色	砂	
26	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	
27	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	炭化物と灰を含む
28	10YR4/2	灰黄褐色	砂	
29	10YR4/4	褐色粗	粗砂	
30	10YR3/4	暗褐色	砂	炭化物や破砕された貝殻を含む
31	10YR3/4	暗褐色	砂	破砕された貝殻を含む
32	10YR2/3	黒褐色	砂	貝殻と灰を含む
33	10YR3/4	暗褐色	砂	貝殻と焦土ブロックを含む
34	10YR4/4	褐色シルトと10YR7/2にぶい黄橙粘土の斑土		
35	10YR4/3	にぶい黄褐色砂と10YR3/2黒褐色砂の斑土		
36	10YR6/6	明黄褐色粘土と7.5YR3/4暗褐色砂の斑土		
37			貝層	015SM

第54図　３地点北セクション図２



第 55 図　３地点東Ａ・Ｂセクション図

A3

A3

第 56 図　3 地点遺構平面図

に位置する名鉄太田川駅に向かって緩やかに傾斜している。駅の標高が 1.5m であり、龍雲院遺跡は 2.6m 前後であるが、第 1 砂堆中央部は 4.5m を測る。ちょうどこの龍雲院遺跡西端が、近世以降の大田の集落の西端とほぼ一致し、近隣住民の証言によれば、遺跡西辺あたりから西は一段低くなって長らく水田地帯であったという。地形的には砂堆と砂堆の間の低地即ち後背湿地ということになる。

調査範囲全面にわたって調査直前まで家屋が密集していた関係もあり、攪乱も多かった。それら家屋の中には、江戸時代から続く旧家も含まれており、旧土蔵の土台に使われていた巨大なぐり石（直径 50 ～ 80cm）が噴砂に混ざるような状態で無数に出土した。これら攪乱部分の分布状況は表土掘削の時点でおおむね把握することが可能であった。

また、表土掘削の時点で既に貝層が露出した部分が有り、前半区の調査ではその広がりを確認することができた。

第 2 節　遺構と出土遺物

1．遺構

001SM 貝層の広がり（第 57 図）

表土掘削と共に出現した貝層で、その面積は 60㎡にも及ぶ。平均的な厚さは 30cm 前後であったが、末端は混貝土層や破砕貝層を為す部分もあった。含まれている遺物や堆積状況から、中世末～近世以降のものであると考えられる。貝層は更に調査区北側にも広がりをみせており、貝の総量がかなりあることから、集落共同の廃棄場所または、何らかの生産に関係した廃棄によるものであろう。主な貝種はハマグリ・シオフキ・アサリであり、小巻貝（ウミニナやヘナタリ）ばかりがまとめて廃棄された部分も有った。

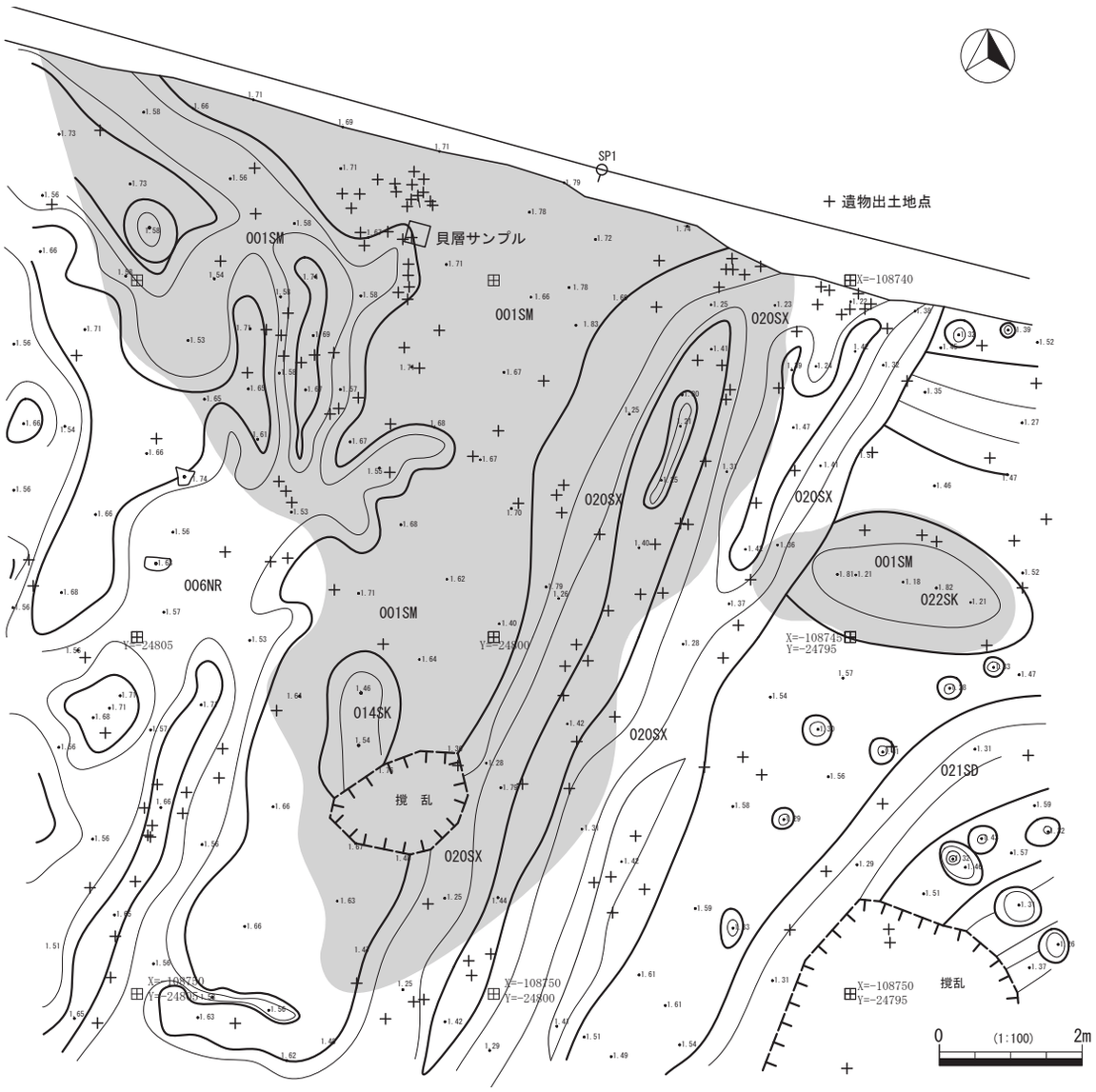
また、前半区と後半区の境界あたりでは、この貝層に続き、破砕圧縮され層状に堆積した部分が細長く存在した。最終的には 020SX としてプランを把握した区画溝の西側の土手を為すように人為的に作られた圧縮層である可能性が高いが、その目的は不明である。西側、即ち海側からの高潮を防ぐための防潮堤として作られたものであろうか。

015SM 貝層の広がりと 019SM 土坑に充填された貝層（第 58 図）

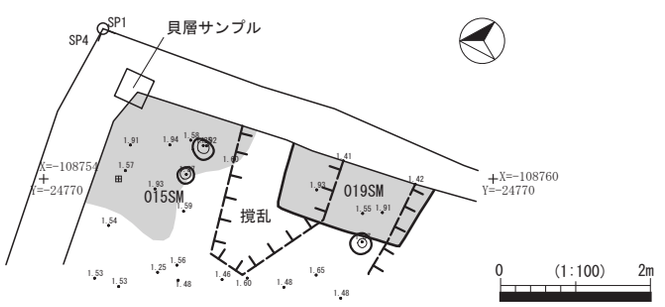
後半区東端で検出された貝層で、主に近世の土器片を含む。1.5m×2m 厚さ 10 ～ 30cm ほどの規模で､大半は調査区外に広がっていると思われる。先述した 001SM 貝層にはあまりみられなかったマガキを主体とする貝層であり、少量のハマグリとシオフキを含む。近接する 019SM とほぼ同質のものであった。019SM は 2m×1m 深さ 1m 強の土坑にぎっしり充填された貝層であり、下半に中世末～近世の遺物を多く含んでいた。東側は調査区外に広がっており、正確な規模やなどは不明である。

016SX・017SX 石組遺構（第 59 図）

性格不明の石組み。016SX は 5 つの石が組み合わされたもので、比較的細長いものを放射状に四方に向け、その上の中心に残りの一つが配置されていた。この石組み自体、70×80cm 深さ

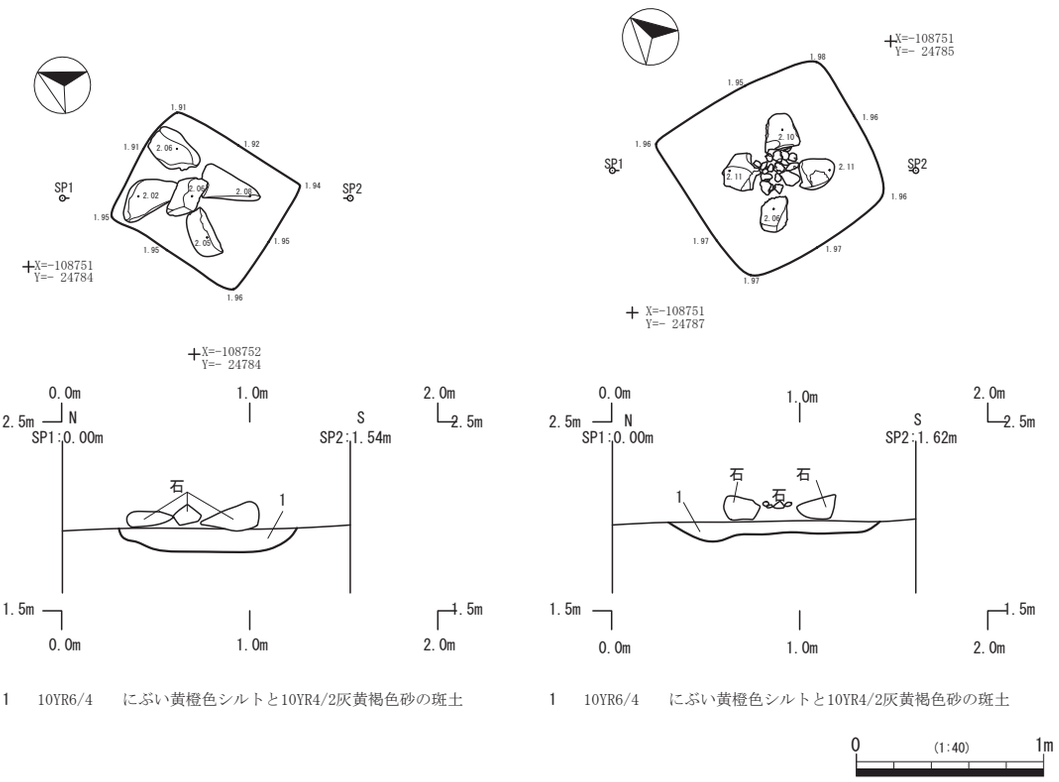


第 57 図　001SM 貝層



第 58 図　015SM・019SM 貝層

10cm ほどの長方形に浅く掘られた土坑の上に乗っており、何らかの埋設物が存在することを予想して掘削を進めたが、何も無かった。016SX から 2.5m 西側で別の石組み 017SX が検出されたが、こちらは大きめの石 4 個をやはり放射状に配置した中に、20 個ほどの亜角礫（チャートが中心）が配置されていた。こちらも 90×80cm 深さ 10cm 前後の方形の土坑を伴っていたが、遺物などはみつかっていない。両者とも、放射状に配置された石は概ね東北・南東・西南・北西方向を示す



第 59 図　016・017SX 石組遺構

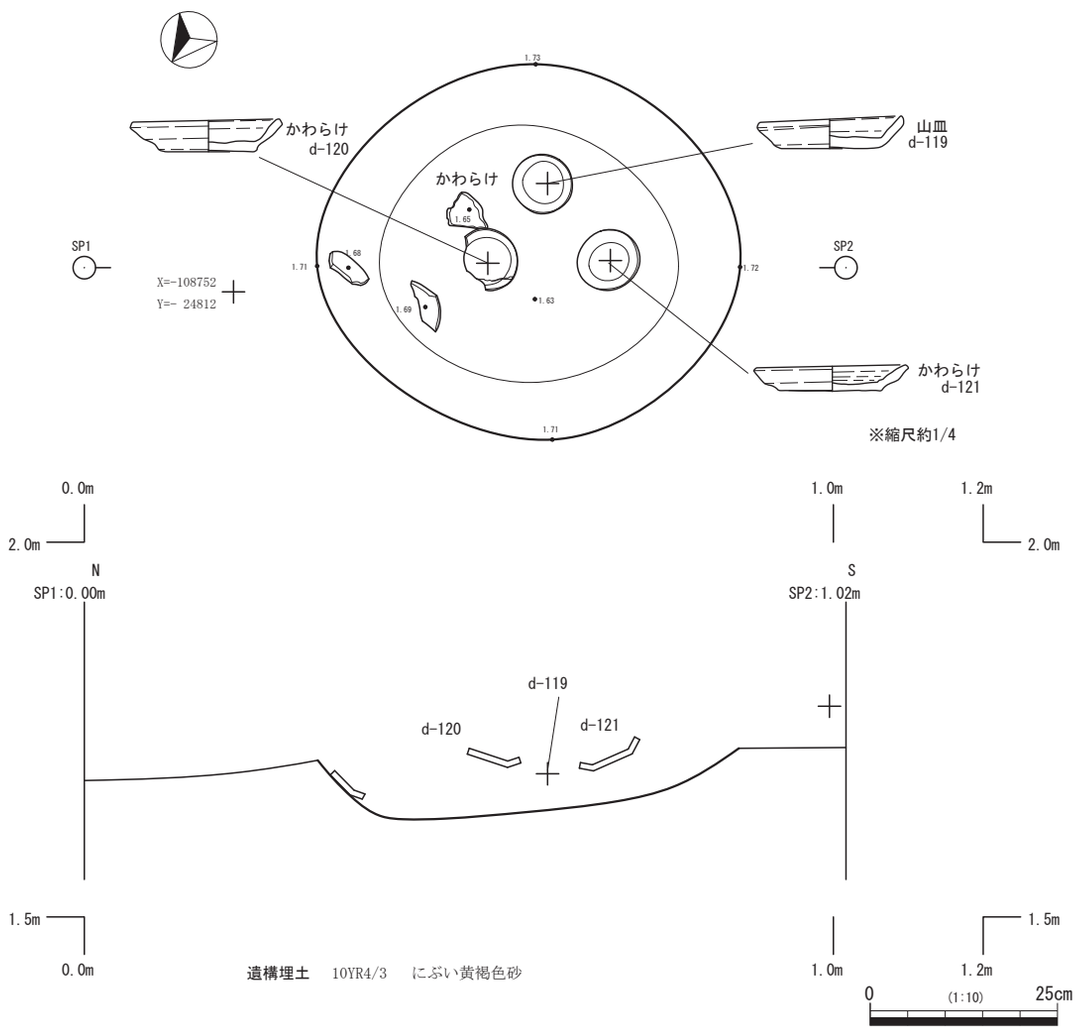
ように置かれていたが、土坑の形状は同期していない。中央に置かれた石が大きめのもの一つのものと、亜角礫多数のものが恰も対を為すようにも思われる。層位の状況や周辺の出土遺物の様子などから、恐らく江戸時代後期を遡ること無い時期に設置されたものと思われるが、茶室や土蔵に取り囲まれた屋敷の中庭の一装置として考えるべきであろうか。

003SK 土坑（第 60 図、巻頭図版第 6）

55×50cm 深さ 10cm ほどの浅く小さな土坑の中に、3 枚の小皿と茶碗の破片が埋納されていた。d-119 は瀬戸窯 7 型式の製品、d-120、121 の 2 点は多少作りが違うが、ロクロナデ・回転糸切りという製法は山皿と同じで、焼成がかわらけ焼き仕上げのものである。d-120 は口縁部の半分ほどが意図的に欠損されているが、土坑の中からその破片はみつかっていない。大きめの破片は 3 片あるが d-120 脇のものが別個体のかわらけ焼きで、残りの 2 片はそれぞれ別個体の茶碗のものである。出土状況からこれらの小皿は意図的に配置され埋納されたものと思われるが、その目的は不明である。山皿とかわらけ焼きの違いは一見して紅白の色彩的な対象を為すことにも、目的の謎を解く鍵が隠されているのかもしれない。

002SZ 土坑墓（第 61 図、同上）

190×110cm 深さ 20cm 弱の長楕円形プランを呈する土坑墓である。湧水があり半ば水に浸されたような状況で検出され、人骨の残存状況も悪い。仰臥屈葬と推定される土葬墓である。幸い顎骨と何本かの歯牙が検出された。頭部は北北東を向く。死亡年齢は 30 歳以上で、性別は不明である。（詳細は第 5 章参照）副葬品として、被葬者の胸あたりから常滑窯 6a 型式の山皿 d-110 が 1 点発見さ

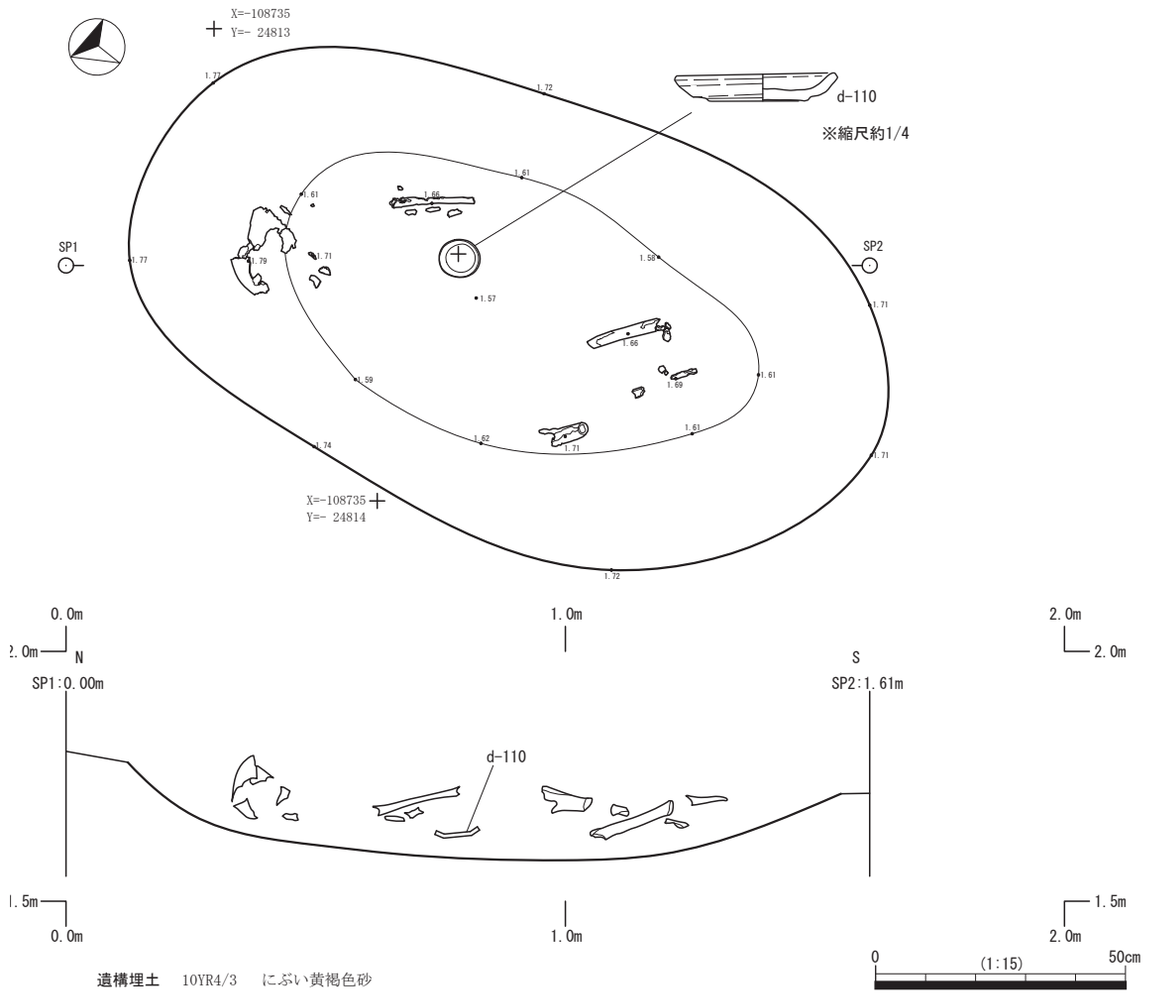


第 60 図　003SK 土坑

れている。このように山皿を副葬する中世人骨は、知多市の細見遺跡でも発見されている。細見例は口縁部を欠く常滑窯 5 型式相当の山皿が、頭部の脇に添えられていた。

023SZ 土坑墓（第 62 図、巻頭図版第 6、図版第 50）

60×100cm 深さ 15cm 前後の方形土坑に、屈葬された人骨が 1 体埋葬されていた。仰臥姿勢のものが土圧で右側に倒れたようにも見えるが、副葬品の短刀 d-407 が両手で握られるように埋葬されていたことを考えると、当初より右腋を下にして埋葬されていた可能性もある。頭部は北北東を向いている。全身骨がほぼ検出されているなか、上下の顎骨部分のみが欠損していた。死亡推定年齢は 40 歳前後から 60 歳代までの熟年男性である。短刀の全長は約 32cm ある一寸刀で、X 線撮影の結果茎（なかご）部分に目釘穴が 1 カ所検出されたが、銘などの彫刻は存在しないようであった。長方形の墓壙形状と短刀という立派な副葬品を持つことなどから木棺の存在を想定して検出を進めたが、木質や釘などは発見できなかった。人骨に関しては保存状態が比較的良好であったため、年代測定と炭素・窒素安定同位体分析および、副葬品の短刀に付着していた木質の樹種同定をおこなった。その結果人骨の年代は 11 世紀中頃～ 13 世紀前半であり、鞘と考えられる付着木質はヒノキ科であることが判明した。いずれも詳細は第 5 章を参照されたい。



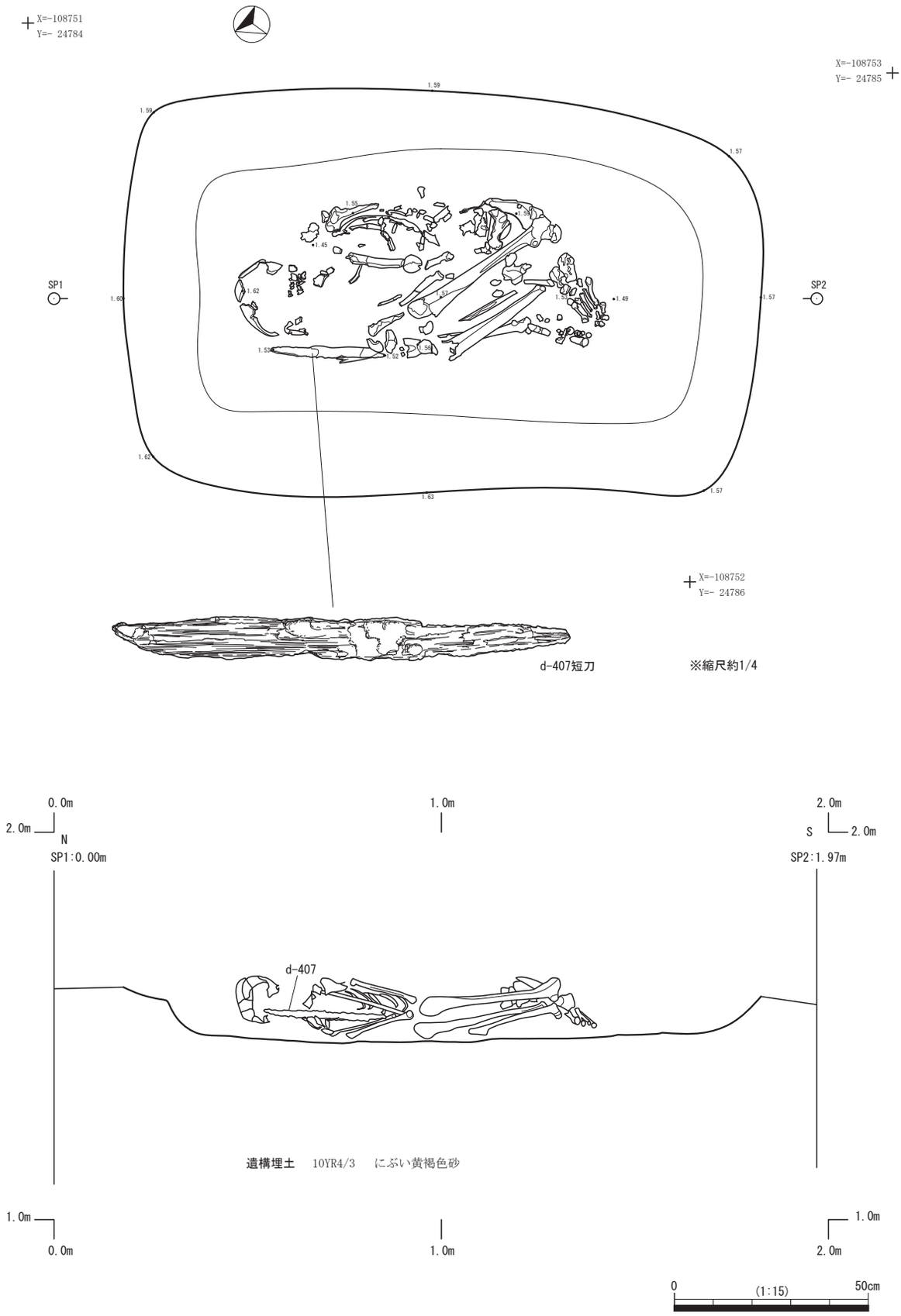
第 61 図　002SZ 土坑墓

これら 2 基の土坑墓の他、2 体の胎児骨が発見されている。d-026 と d-085 がそれであるが、いずれも埋葬土坑は検出されず、地山の砂層に埋もれるように発見された。出土の標高はいずれも 1.7m 前後で、先述した 002SZ の副葬品山皿は 1.6m、023SZ の副葬品短刀は 1.5m と、いずれも地山砂層レベルとよく対応してほぼ同じ数値を示している。

これらの埋葬人骨のうち、二重の区画溝で囲まれた内部に構築された 023SZ は、所謂居館における屋敷墓という性格のものであろう。一般に副葬品としては短刀と同時に中国青磁や陶器類を埋葬する例も多いが、本例は短刀のみであった。（調査区内からは中国青磁は 2 片発見されている。）一方 002SZ は調査区のほぼ中央を南北に走る大区画溝より西側にあり、副葬品も粗末な小皿 1 枚と対照的である。庶民の墓であろうか。また、近くに胎児墓も存在する状況から、集落西縁のより海岸に近い部分には集落の共同墓地が広がっていた可能性もある。

006NR 自然流路（第 63 図、巻頭図版第 1）

前半区の調査で、遺物包含層下半～地山レベルに眠っていた流路である。第 1 節でも述べたように、遺物包含層上半の掘削時にはその存在や気配すら感じられなかったもので、掘削があるレベルに達し急に出現した印象がある。かなりの湧水を伴い、不規則な形状であったために前半区の調査時には自然流路として取り扱っていたが、後に後半区で同様に出現した溝の在り方などと総合的



第 62 図　023SZ 土坑墓

に検討すると、複数の溝が並行する区画溝の一種ではないかとも考えられる。事実流路で囲まれた内側（この場合西側）でとりわけ小さなピットが集中する部分が存在したが、プランは確定できなかったが何らかの小規模な建物があった可能性が高く、006NR はその建物を取り囲んでいた区画溝の残欠である可能性が高い。

020SX 流路または溝群（第 63 図）

前半区と後半区の境界にあり、南部は前述の 006NR とプランが一体化してしまっている。もともと２本の並行する溝であったようで、中央部に細長く中州が残っていた。調査区内では主要な部分が N-22°-E の方向で直進するが、北端で東側に湾曲する傾向が見られることから、後述する 021SD の更に外側を取り囲むプランに展開する可能性が高い。溝の中からは東濃系第 10 ～ 11 型式の山茶碗も発見されているが、常滑窯２～３型式の山茶碗も多くみられることから、溝の掘削は 12 世紀末までに開始され、かなり長期に亘り区画として機能していたようである。事実当地にあった江戸時代後半から続いていた旧家の敷地境が見事にこの溝と重なっており、溝そのものは近世までに埋積されてしまっていたにもかかわらず、近年に至るまで隣家との境界はこの位置に存在し続けていた。また、溝の西岸は地山そのものに高まりがみられ、南側に突き出した細長い岬のような形状を覆い堤防を為すように圧縮破砕貝層が存在した。この圧縮層の形成は層中に赤物の手捻り土管が垂直に埋め込まれていたことなどから、近世を通じて行われていたものらしい。ただし、堤防状の圧縮貝層が形成されその上を覆うように 001SM 貝層が形成される以前に、すでに 020SX 溝は貝殻で埋積されてしまっており、水流は無かったと思われる。ちなみに溝底の標高は 1.2m 前後であり、発掘調査中は常時湧水し水流が生じていた。なお、020SX 北端で切り合う 024SD だが、湾曲する方向が同一のため、020SX と一体のものとして理解してもよいかもしれない。

021SD 区画溝（第 63 図）

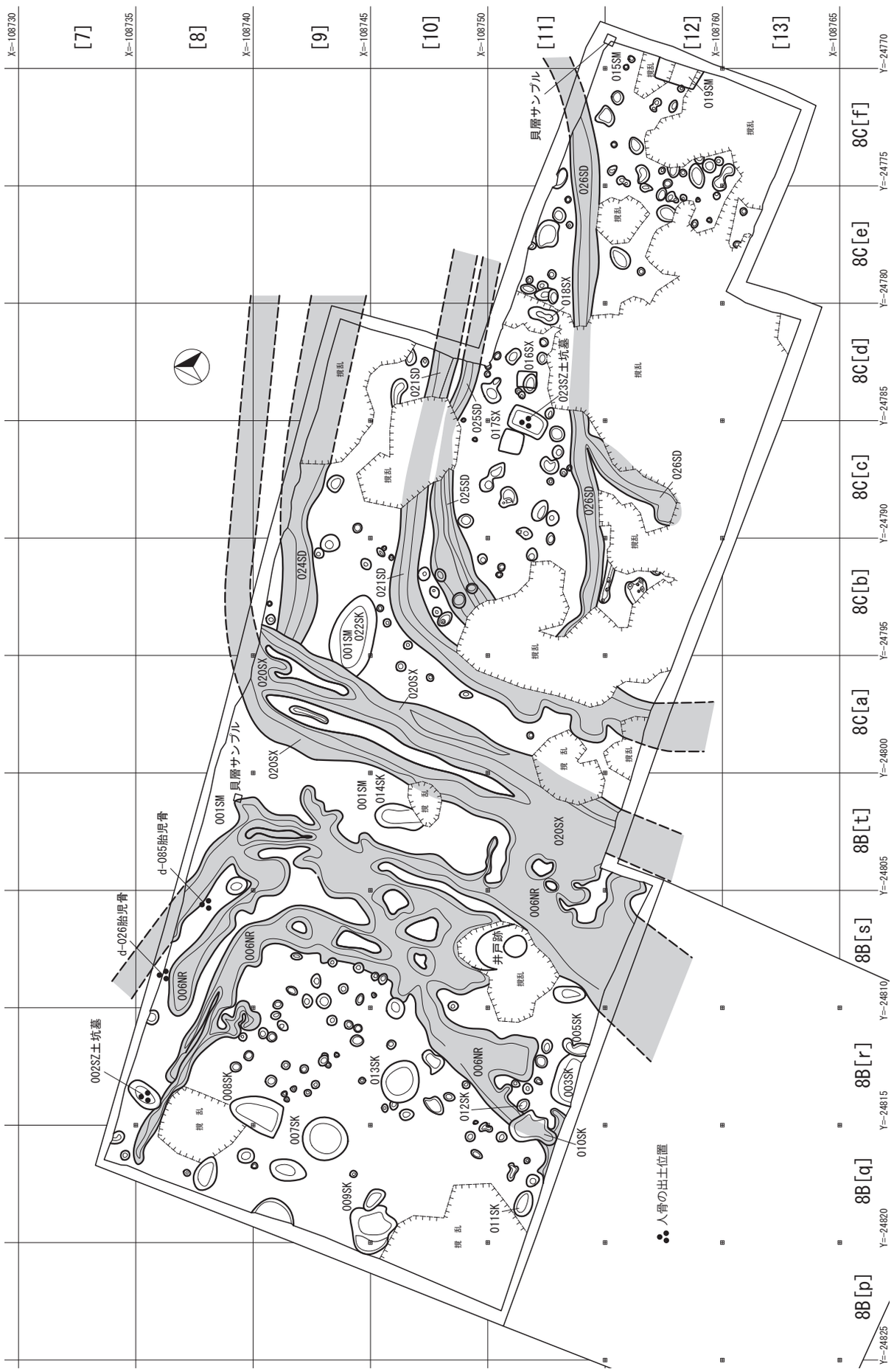
後半区内で検出された並行する二重の溝で、途中攪乱によって喪失されているが、さまざまな状況から居館の区画溝と考えられる。北辺は W-10°-N 方向に走り、西辺は北辺に対して 104° の鈍角で隅丸に湾曲しているが、南端は攪乱部分と重なり二重のプランは検出されていない。この区画溝内側には先述した 023SZ 土坑墓が存在するが、大半が攪乱で湧水も著しく、残念ながら建築物の遺構は検出されていない。

026SD 溝（第 63 図）

021SD で区画された内側をほぼ東西に貫通する溝である。幅は約 1m で深さは 20 ～ 30cm、西半で南西側に分岐するが、行き先は攪乱によって不明である。居館の敷地内に位置するものだが、二重の区画溝とは方向を異にするため、性格は不明である。もし敷地内の建物が東西南北に即して建てられていたとすれば、それら建物に伴う排水溝として区画溝に繋がるように掘削されたものなのかもしれない。地山に掘り込まれた様相から 021SD との時期差は認められなかった。

２出土遺物

３地点からの出土遺物としては、弥生土器と思われるものが数片と製塩土器脚部数点、須恵器片



第 63 図　006NR・020SX・021SD・026SD 流路・溝群

5 点以外は大半が中世から近世の遺物であった。出土遺物はコンテナ約 30 箱に及ぶ。

今回は主要な遺物を器種別または種類別に、詳細な出土分布図を作成したのでそれらを中心に紹介していきたい。

先ず多く出土した山皿についてであるが（第 64 図）、かわらけ焼き仕上げの小皿も含めて、完形品に近いものだけでも 100 点近くが出土した。H-72 段階の灰釉皿が 1 点 (d-307)、猿投窯製品と思われるもの 1 点（d-138）、常滑窯 2 型式のもの 1 点（d-345）、同 3 型式のもの 6 点のほか、大半は 6a 型式のものである。また瀬戸窯のものや東濃系のものも各数点みられた。

かわらけ類はかわらけ焼成の小皿の他、非轆轤製法の手捏ねのものが 3 点みられた。分布にはかなり偏りがみられ、前半区の南辺と北辺中央付近に集中がみられる。前者には先述した 003SK のような埋納遺構も含まれているが、後者はおおむね貝層の広がりに同期したものである。かわらけは山皿に混ざるように散漫に出土している。前半区においては、006NR 流路で囲まれたピット群周辺には山皿類が見られず、むしろ意図的なものを感じる。

次に茶碗類の出土状況だが（第 65 図）、常滑窯 2 ～ 3 型式のものが 020SX 流路北端で集中的に発見されている。破棄されたものか意図的に集積したものかは不明だが、壁面にはまだ多くの茶碗が見えており、調査区外に広がっているようである。これら古手の茶碗類は、主として流路や溝の底か遺物包含層下層の地山直上で発見されることが多い。また東濃系の山茶碗（11 型式）や瀬戸の小皿・石皿も発見されたが、いずれも溝や流路の埋積後の包含層からの出土である。更には中国青磁も数片出土している。所謂龍泉窯系の蓮弁文茶碗の底部（d-299）や、内面に片切彫りで優雅な花文様が描かれた破片（d-329）がある。いずれも 13 世紀範疇であろう。

同図にはその他の土製品も組み込んでおいた。紡錘車 (d-151) は時期不明のもの。土管 (d-192) は手捻り赤物で明治期のものと思われる。小形の花瓶（d-019）は 13 世紀古瀬戸のもの。祖母懐銘陶片（d-298）は所謂祖母懐壺底部に刻まれた「祖母懐」銘部分であり、文字は釘彫りされている。脇に年号が刻まれていた可能性もあるが、周囲が丁寧にハツられているので、暫く懐に入れて持ち歩かれていたのであろう。原資料は 16 世紀前半のものである可能性が高い。

土製品のたぐいとしては、陶器片を加工した加工円盤と呼ばれるものが多く出土した。（第 66 図、巻頭図版第 7）大別すると、陶器類の破片を円形に加工したものと、碗類の底部を調整して丸く仕上げたものがある。（稀に瓦が使われる）使用目的は不明だが、材料として前者の場合自然釉のかかった大甕の破片から素焼き赤物の陶器片まで、後者は「碗底丸」とも呼ばれ山茶碗から天目茶碗までさまざまなものが用いられている。また、更に小形の加工品も存在する。現場ではその形状や雰囲気から「加工さいころ」と呼んでいたが、主に山茶碗の高台部分の含まれた破片を使い、周囲を細かく打ち欠いて小石程度の大きさに調整したものがそれである。使用される原料は山茶碗が殆どで、その他には少量だがなぜか布目瓦が用いられている。

同様の「加工さいころ」が大量に出土した下津北山遺跡（稲沢市）の報告書では（愛知県埋蔵文化財センター　2000）これら加工品を総称して加工円盤と呼んで詳細な分析が為されている。その 540 点余りの分析結果によると、数量的には A 類の灰釉系陶器椀皿を使用したものが 63% と大半で、次に B 類の椀皿を除いた灰釉系陶器類（甕・壺など）が 22% を占めていた。同遺跡では、方形区画溝や廃棄土坑からの出土が多いが出土状況や分布に特異な様相は看取されないものの、膨大な出土量が遺跡の特殊性を何らか反映させている可能性が高く、宗教に関連した遺物ではないか

と推測している。3 地点では、加工円盤 65 点と加工さいころ 7 点を検出した。その出土分布図を見る限りでは、加工円盤は調査区中央を縦断する区画溝に沿った出土と、溝から東側の出土が多く、加工さいころは区画溝から西側に多く分布する様子が看取できる。ここには何らかの「内と外」または「境界」という概念が反映されているようにも見受けられるが、現状ではその使用目的は不明と言わざるを得ない。

次に陶丸の分布状況を見てみよう。（第 67 図）13 点の出土が見られたが、加工円盤が多く見られた中央の区画溝周辺ではほとんど出土せず、調査区東半の二重の区画溝で囲まれた内部に比較的集中し、調査区西半には散漫に分布している。

その他の遺物としては、砥石が 17 個出土している。主なものは出土分布図（第 68 図）を参照されたい。いずれも小形のものであり、あらゆる面が徹底的に使用されている。石材は緑色凝灰岩のものが多く、稀に片麻岩や砂岩のものもあるが、それらは荒研ぎ用だろう。時期は特定し得ないが、出土状況から中世から近世の所産である可能性が高い。主に農具や調理具の研磨に用いたものだろう。

また、鉄滓と鞴の羽口など、鍛治と関連した遺物も出土した。（第 69 図）これらは比較的狭い範囲から集中的に出土がみられたため、当初は鍛治工房や製鉄炉なども検出されるのではないかと期待していたが、遺構はみられなかった。鉄滓の中には稠密なものもみられたため、その成分分析もおこなったが、鋼成分は検出されなかった。詳細は第 5 章を参照されたい。鞴の羽口はいずれも破片であったが 4 個体を検出した。末端に鉄滓が付着したものもある。これら鉄滓等の検出状況から、001SM 貝層末端部や貝層中から発見されるものも多く、貝類の加工に際しても火を使うことの共通性があることなどから、何らかの関連が予想される。なお鉄滓の総量は約 2.5kg 以上であり、中世末から近世の所産である可能性が高い。

これらの他に、江戸時代に入って床状に粘土を貼ったり赤物の甕を伏せて竈状に用いた遺構も認められたが、大半は攪乱によって破壊されており、規模や性格を把握することはできなかった。稀に寛永通宝（新寛永）を出土することから、江戸時代中期以降の所産と考えられる。

なお、調査区内では埋め戻された井戸の痕跡を 2 カ所で検出したが、周囲に噴砂を伴う西側のものは江戸時代以後の、内部に漆喰やコンクリート塊の詰め込まれた東側のものは明治以後のものであった。

折込 A3

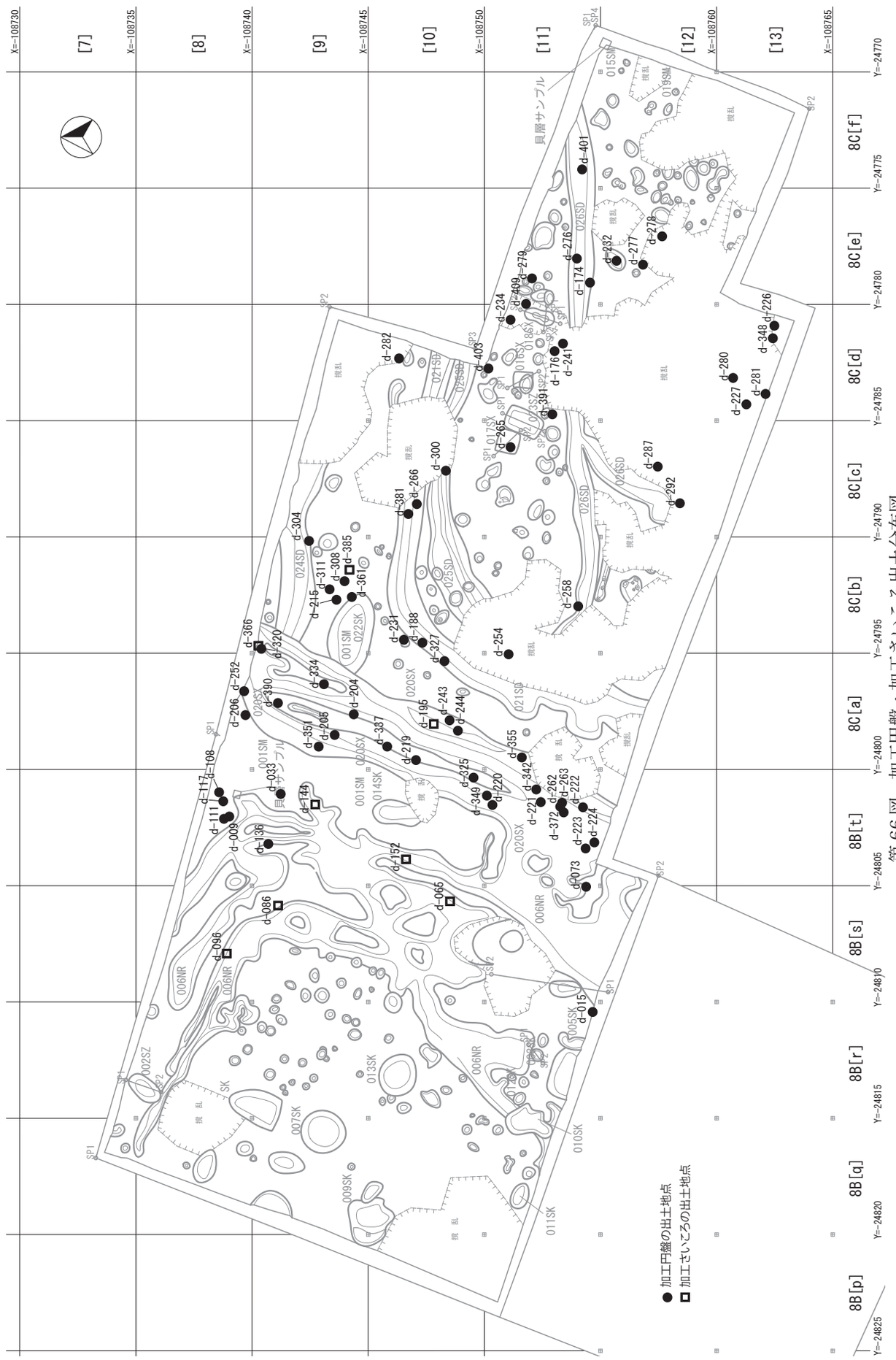
折込 A3

第 64 図　山田出土分布図

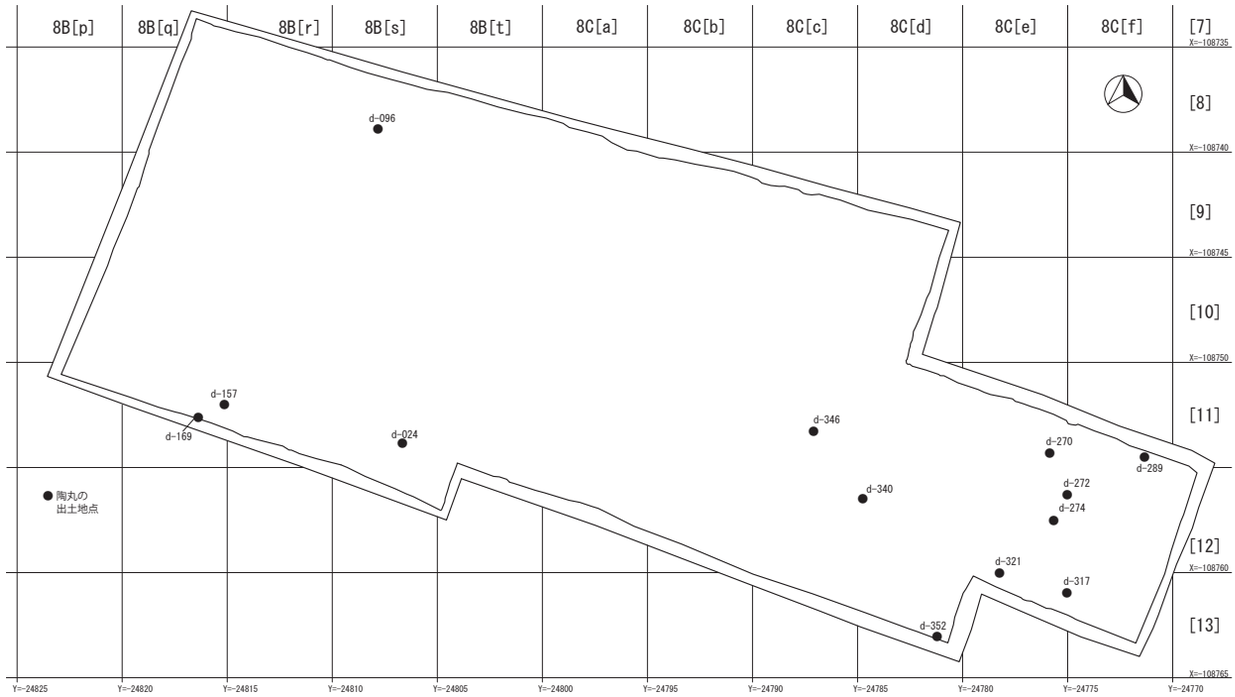
折込 A3

折込 A3

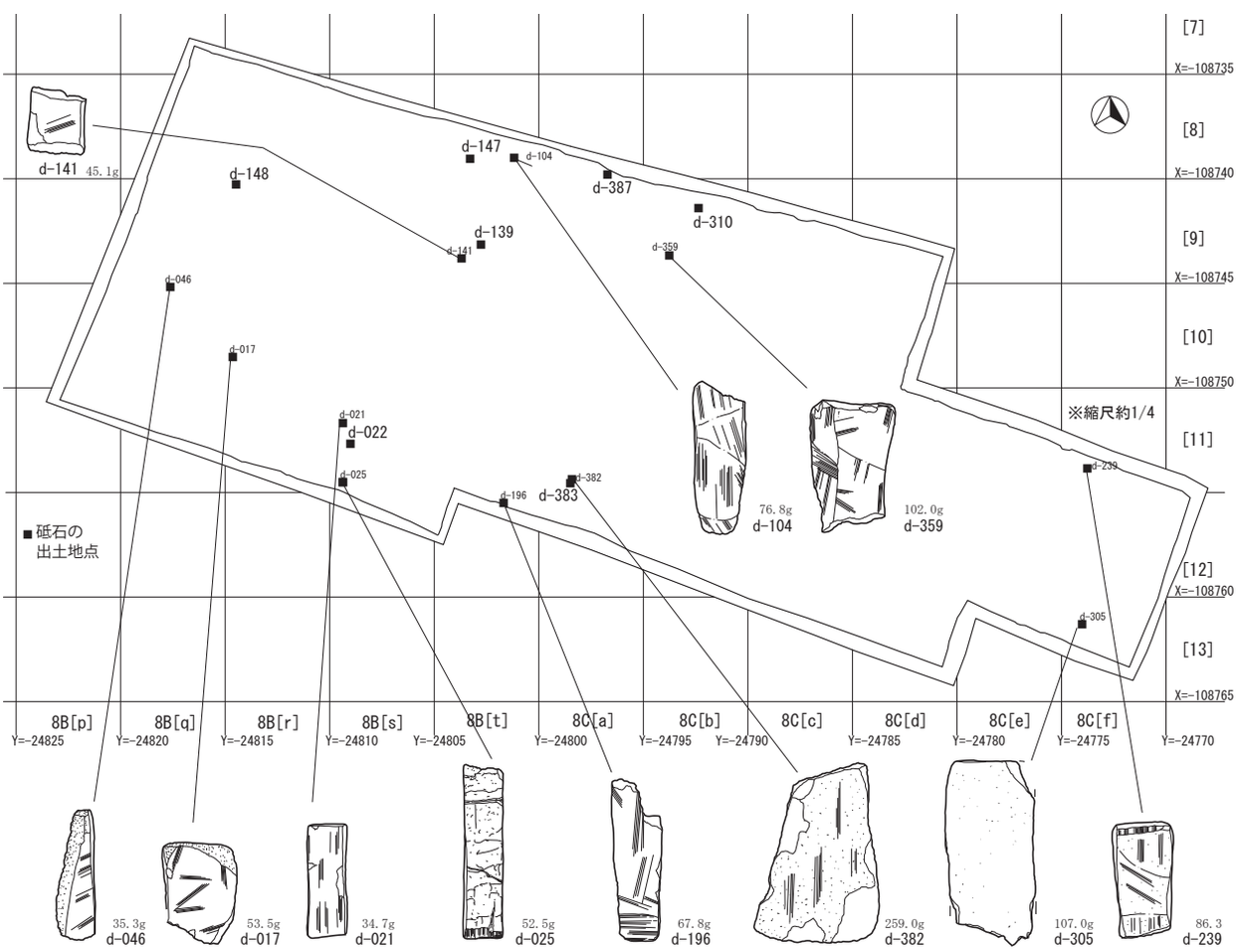
第 65 図　茶碗類及びその他の製品出土分布図



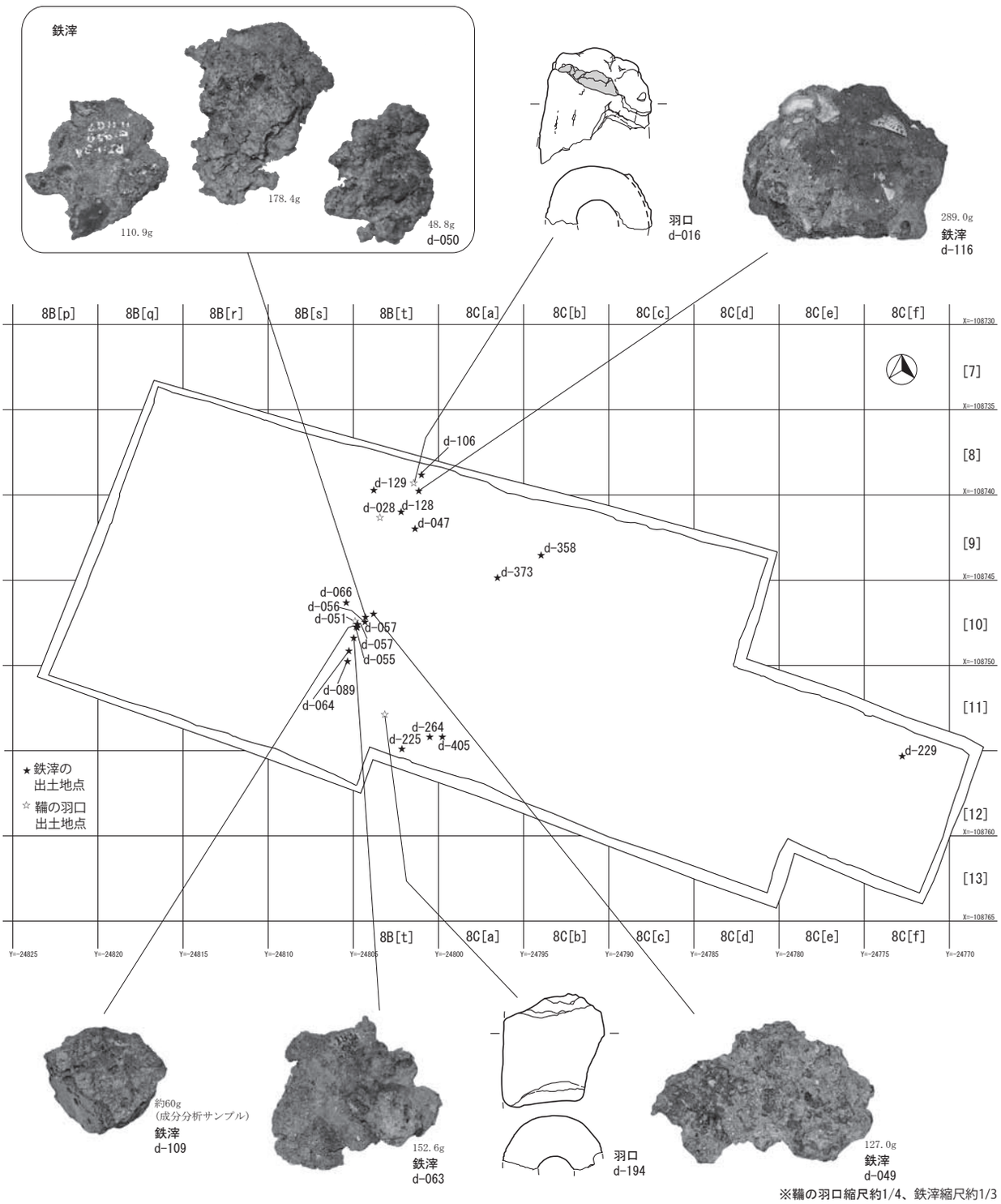
第 66 図　加工円盤・加工さいころ出土分布図



第 67 図　陶丸出土分布図



第 68 図　砥石出土分布図



第 69 図　鍛冶関連遺物出土分布図

第 3 節　龍雲院遺跡（3 地点）のまとめ

3 地点の調査で最も注目すべき発見は区画溝群であろう。遺跡の構造でも述べたように、現地は大里郷即ち大田の集落が乗る第 1 砂堆の西縁に相当し、標高 2m 前後の低い地域である。砂質土壌に於ける区画溝の掘削は極めて容易ではあるが、湧水を伴うことや固結度が低いことから、長期間に亘る形状の保持が難しい。

今回検出された溝にはそれぞれ特徴があり、021SD は 2 本が並行して湾曲する状況や、その内側に屋敷墓と思われる土坑墓が存在する様子から、居館の区画溝と理解すべきであろう。020SX（024SD を含む）は二重または部分的には三重になり、021SD 同様に湾曲するプランが確認されたが、こちらはその西側に堤防状の高まりが見られることなどから、集落内部を区画する溝と理解すべきかも知れない。もっともこの両者が並行して展開する様相もみられることから、前者を内堀、後者を外堀的な施設という解釈もできよう。その場合には相応の規模を持った居館または寺院に類するような施設の存在を前提とせねばならず、現状ではあくまでも想像の域を出ない仮説である。

このような区画溝に関連した遺構としては、平成 20 年度調査の畑間遺跡 3・4 地点において、地山砂層と直下のシルト層まで掘り抜いた複数条の溝が検出されている。犬走りを伴い幅 2m 前後、深さ 80cm という断面構造に対して 1 辺 20m 弱という小規模な区画プランを呈することから、居館ではなく仏堂などに伴う区画溝である可能性が高いが、北辺が E-10°-S という角度は今回 3 地点で検出された区画溝群とほぼ整合する。畑間遺跡例は 12 世紀後半の開削が報告されているが、3 地点例も屋敷墓に埋葬された人骨の年代や溝から出土する遺物の様相などから、12 世紀末～ 13 世紀初頭に掘削された可能性が高い。現在大田の集落に見られる東西の路地は約 30° の角度を呈するものが殆どである。しかし一部には約 10° の角度を持つ路地もあることから、それらは近世以前の地割りを踏襲している可能性もある。

このように、居館に伴う区画溝は集落全体の地割りとも密接に関連することから、巨視的な検討が必要とされる。前項でも触れたように、今回の調査範囲と少なくとも近世の集落西縁はほぼ重なるのだが、それでは前半区で検出された半ば自然流路化した溝（006NR と 020SX の一部を含む）についてはどのように解釈すべきであろう。020SX が西側に堤防状の高まりを伴い近世に至るまで地境としての役割が踏襲されてきたことは明らかで、そのことは隣接して別の区画が存在することを意味しているのではないだろうか。検討の結果、006NR もピット群を取り囲むように掘削された複数条の区画溝の残欠である可能性が高く、内側に何らかの構造物が存在していたと解釈すべきであろう。

また、これら溝群全体が一気に埋没したように遺物包含層下層に眠っていた理由は、変化の緩慢な海進海退現象では説明できず、少なくとも標高 4.5m ほどの砂堆縁辺を覆う規模の津波によって埋没した可能性を指摘しておきたい。

所謂東海地震と呼ばれる海溝型の大規模地震は、ほとんどの場合津波を伴っていたと考えられるので、記録に残る例をいくつか見ていきたい。古代以降で当地方と関係のある地震としては 684 年の白鳳地震（東海・東南海・南海連動か）、887 年の仁和地震（東海・東南海・南海連動か）、1096 年の永長地震（東海・東南海連動）、1200 年前後の数十年間（南海・東海連動か）、1293 年と 1331 年の元弘地震（駿河湾震源）、1360 ～ 61 年の正平（康安）地震（東南海・南海・東海連

動か）などが知られている。

このうち 1096 年（嘉保 3 年）の永長地震では大極殿に被害があり、東大寺の巨鐘が落下、近江瀬田橋の落下や駿河で民家社寺 400 余りが流失、琵琶湖や揖斐川付近では強震動などという記録がある。西暦 1200 年前後の地震の詳細は不明だが、静岡市の遺跡でその痕跡が発見されているという。3 地点で見られた溝群の埋積は 13 世紀初頭の可能性が高く、今後は堆積物の詳細な分析や地質学的視点を加味することによって、時期や規模の特定がなされていくものと思われる。

なお、北セクション中央付近に集中してみられた激しい液状化の痕跡や噴砂については、当地に江戸時代から続く旧家の土蔵やその他の建物が存在していたことを考慮すれば、1854 年の安政東海地震（東海・東南海連動型）または 1944 年の昭和東南海地震の痕跡と解釈できるのかもしれない。

次に言及すべきは 023SZ 土坑墓であろう。埋葬人骨の年代測定によって 12 世紀後半から 13 世紀初頭の人骨という結果が得られたが、短刀を副葬した検出例は知多半島地域でも初の発見である。副葬品として短刀と同時に陶器類が見られないことは寧ろ不自然さを感じるが、年代測定で得られた数値は、所謂区画溝埋積以前の遺物と考えられる常滑窯 2 ～ 3 型式の山茶碗の年代とよく付合するものであり、区画溝を伴った居館は 12 世紀末に存在したのであろう。

一方大区画より西側で発見された 002SZ 土坑墓および d-026・085 胎児骨に関しては、周囲の溝が埋積された後に埋葬されたものと考えられる。集落西縁が水田ばかりではなく、その一部に集落の共同墓地が営まれていたことを示す例として理解すべきであろう。

とまれ、何らかの原因によって地山面における溝群が埋積されて以後、13 世紀中葉以降にも当地での居住は続けられていた。時期を特定することは出来なかったが、鉄滓や鞴の羽口の存在から、この地区に鍛治場が設けられていたことは確かである。また、中世末に開始されたと思われる貝塚の形成は、この辺りが貝殻等の廃棄場所としても使われていたことを示すものである。やはり集落縁辺にふさわしい風景が展開していたのであろう。

江戸時代のさまざまな痕跡は大半が攪乱されており、個々のプランを把握することが出来ず、どのような性格のものであったかよくわからない。粘土を用いた小さな施設がいくつか連なっていたようでもあり、何らかの工房が展開していた可能性が高い。

遺物に関しては、山皿類の出土がかなり目立ったが、中にはまじないを思わせる埋納遺構も発見されており、同時にかわらけ焼きの小皿も使われていたことも注目される。

第５章　自然科学分析

第１節　貝層分析の結果

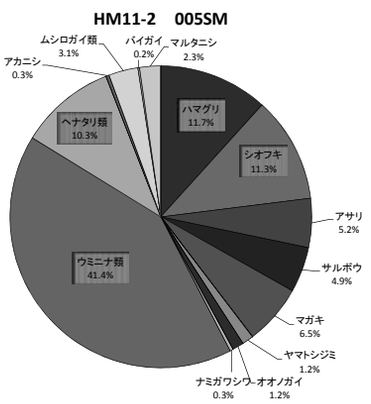
西野　順二（国際文化財株式会社）

平成 23 年度に調査された畑間・東畑・龍雲院遺跡において、小規模な地点貝塚を検出した。それらの貝塚から一部を採集し、貝類の分類を行った。しかし、分析に使用したサンプルは、任意に採集されたものであり、全量分析・定量分析ではないことをお断りしておきたい。

畑間遺跡２地点（HM11-2）

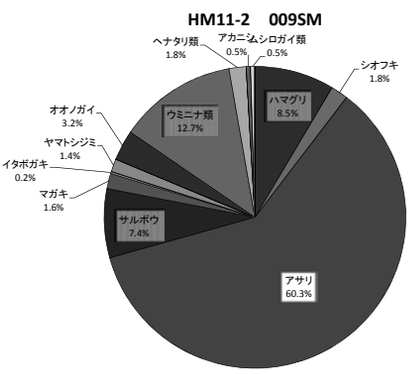
005SM（中世～近世の貝層）

ウミニナ類が最も多く含まれている。二枚貝ではハマグリとシオフキが同程度含まれている。ウミニナ等の小巻貝は、貝層の中で纏まっていることが多く、本地点でも、ウミニナ類が集中するブロックがあったと考えられる。ハマグリとシオフキが同程度出土している点を特筆しておく。



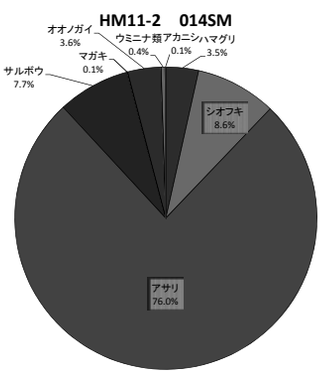
009SM（中世～近世の貝層）

アサリを主体とした貝塚である。他の貝層より比較的形の整ったオオノガイが 14 個体含まれていた。オオノガイに関しては、比較的大きな貝種であるため、サンプルの容積に対する占める割合が高くなる。そのため少数であっても形の残った個体が多く含まれておれば、その重要度も高くなる。



014SM（中世～近世の貝層）

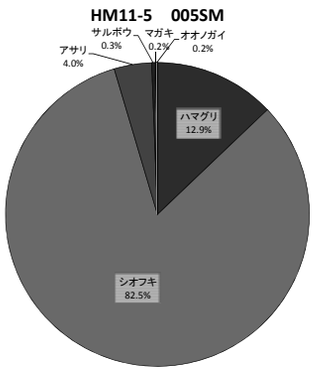
アサリを主体とした貝塚である。009SM と同様にオオノガイの残存状態は良好で、43 個体含まれていた。009SM とはシオフキが多く含まれている点とウミニナ類があまり含まれていない点で異なる。



畑間遺跡５地点（HM11-5）

005SM

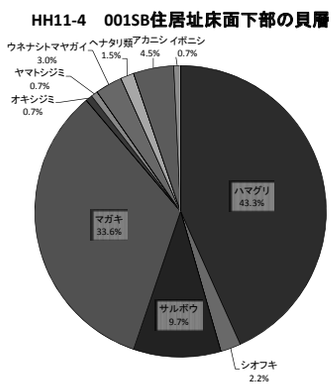
シオフキを主体とする貝塚である。続いてハマグリが多く含まれている。巻貝は含まれていなかった。比較的形の良好な個体が多い。



東畑遺跡４地点（HH11-4）

001SB 住居址床面下部の貝層（弥生期）

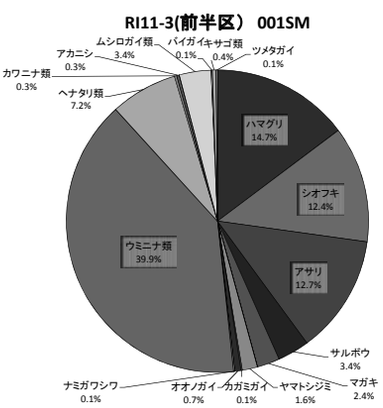
ハマグリが最も多いが、他の貝塚と比べてマガキの含有率が高く、アサリが含まれていない。他の貝塚と異なりオキシジミやウネナシトマヤガイなどの貝種が見られるのも特徴である。

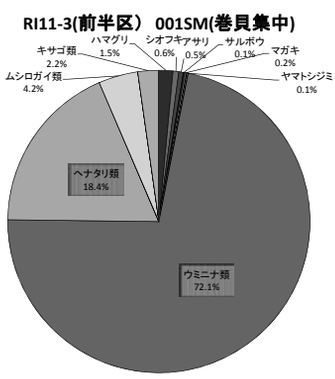


龍雲院遺跡３地点（RI11-3）（前半区）

001SM（中世～近世の貝層）

畑間遺跡２地点の 005SM と同様にウミニナ類が多く、二枚貝ではハマグリ、シオフキ、アサリが同程度含まれている。小型の巻貝が集中するところがあり、主にウミニナ類とヘナタリ類が含まれていた。

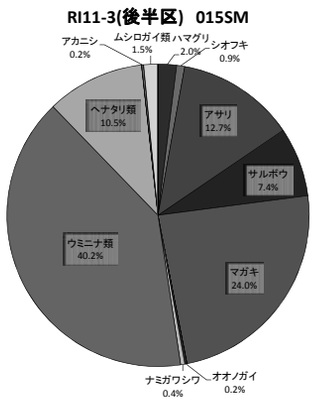




龍雲院遺跡３地点（RI11-3）（後半区）

015SM（中世～近世の貝層）

001SM と同様にウミニナ類が多いが、二枚貝ではマガキが主体を占めており、ハマグリ及びシオフキは少ない。



これらの貝塚の貝類の出土傾向をみると、それぞれの遺跡によって特徴が異なることが分かる。

畑間遺跡では、ハマグリ及びシオフキが多く出土する貝塚と、アサリを主体とする貝塚の２つが存在する。前者は、平成 20 年度に調査した貝塚の様相と酷似している。後者では、オオノガイの保存状態が良く残っているものを比較的多く含まれているため、アサリとの関係性が興味深い。また、シオフキとアサリは同じ環境に生息することが多く、よく同時に採取されるが、この二つの間に出土傾向が異なるということは、それぞれ選択的に採取されたか、利用されていた可能性がある。今日でもアサリはよく採られるが、シオフキはあまり好まれないという傾向がある。

東畑遺跡では、弥生時代の貝塚であり、他の地点から出土する貝類の種類の傾向性が異なっている。それは、弥生時代から中世以降に至る過程で、周辺環境に変化があり貝類の生息域が変化したか、人の嗜好が変化したのかもしれない。

龍雲院遺跡では、基本的に畑間遺跡と似た出土傾向を示すが、特にウミニナ類といった小巻貝が多量に含まれている。そして、他の地点と比べて貝種が多いのも特徴である。

	ハマグリ	シオフキ	アサリ	サルボウ	マガキ	イタボガキ	オキシジミ	ヤマトシジミ	カガミガイ	オオノガイ	ウネナシトマヤガイ	ナミガワシワ	ウミニナ類	ヘナタリ類	カワニナ類	アカニシ	イボニシ	ムシロガイ類	バイガイ	マルタニシ	キサゴ類	ツメタガイ
HM11-2 005SM	67	65	30	28	37			7		7		2	237	59		2		18	1	13		
HM11-2 009SM	37	8	261	32	7	1		6		14			55	8		2		2				
HM11-2 014SM	42	104	914	93	1					43			5			1						
HM11-5 005SM	84	537	26	2	1					1												
HH11-4 001SB住居址床面下部の貝層	58	3	0	13	45		1	1			4			2		6	1					15
RI11-3(前半区） 001SM	109	92	94	25	18			12	1	5		1	295	53	2	2		25	1		3	1
RI11-3(前半区） 001SM(巻貝集中)	12	5	4	1	2			1					581	148				34			18	
RI11-3(後半区） 015SM	9	4	58	34	110					1		2	184	48		1		7				

第３表　貝類個数表

（注）貝類のカウントに関して、二枚貝については左右全て数え、最も多く存在していた方を最小個体数としている。

第２節　東海市龍雲院遺跡から出土した人骨

長岡朋人・清家大樹・平田和明
聖マリアンナ医科大学解剖学講座

1．はじめに

東海市教育委員会による発掘調査により、東海市龍雲院遺跡から平安〜鎌倉期に属する人骨が４体出土した。中世人骨が関東地方以外から出土する事例はきわめてめずらしく、以下に人類学的な鑑定結果を報告する。

2．観察方法

性別判定・死亡年齢推定

性別判定はBruzek(2002)とWalker(2008)の方法に従った。寛骨では、耳状面前溝、大坐骨切痕、大坐骨切痕弧、寛骨下端、坐骨恥骨示数の５つの特徴を用いることで高精度の性別判定ができる(Bruzek、2002)。また、頭蓋では、項稜、眉上隆起、眼窩上縁、乳様突起、オトガイ隆起の発達程度により性別判定が可能である（Walker、2008)。

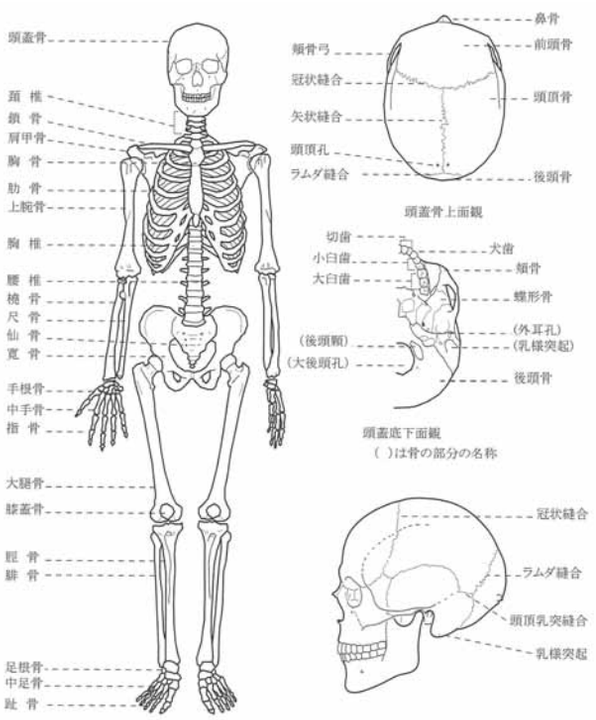
人骨の死亡年齢の推定は、未成年人骨では側頭骨錐体と後頭骨底の計測値の回帰式（Nagaokaetal.、2012）に基づいた。一方、成人では腸骨耳状面(Lovejoyetal.、1985;BuckberryandChamberlain、2002)、寛骨臼（Calce、2012)、歯の咬耗（Lovejoy、1985）の観察により推定を行った。

頭蓋・四肢骨計測

未成年人骨の計測方法はFazekasandKósa(1978)に従ったが、側頭骨錐体部の計測方法はNagaokaetal.(2012)に従った。一方、成人骨の頭蓋・四肢骨の計測は、MartinandKnussmann(1988)に従った。ただし、乳様突起の計測はNagaokaetal.(2008)の方法に従った。計測値は第４表に載せた。

歯の咬耗度

永久歯の歯冠の咬耗度はMolnar(1971)に従って観察した。



第70図　人体骨格各部名称

3．観察結果

3-1．遺構番号002SZ

人骨出土部位

保存状態は不良である。頭蓋、右上腕骨、左右大腿骨、遊離歯２個が残っていた。

歯牙残存部位

歯は遊離歯が２個残存していた。左上顎第２

小臼歯と左下顎犬歯である。

最小個体数

いずれの骨も重複する部位がないため最小個体数は 1 体であった。

性別

寛骨や頭蓋から性別判定はできなかった。性別は不明である。

死亡年齢

左上顎第 2 小臼歯と左下顎犬歯の咬耗は象牙質が点状に露出しており、Molnar の 4 ～ 5 度であった。歯の咬耗に基づく死亡年齢推定を行ったところ、Lovejoy の F ～ G 段階であったため、死亡年齢は 30 歳以上と推定できた。

古病理学的所見

左上顎第 2 小臼歯の近心隣接面には象牙質に至る齲触を認めた。

特殊所見

左右の大腿骨の骨体表面にはネズミによる噛み傷を認めた。傷の色調は白っぽいため最近のものである。

3-2. 遺構番号 023SZ

人骨は体の左側を上にし、屈曲位で解剖学位置を保って埋葬されていたため、軟組織が付着した状態で埋葬され、埋葬後の撹乱はなかったと推定される。

人骨出土部位

全身の骨が残り、保存状態はやや良好である。頭蓋（写真 1）、左右鎖骨、左肩甲骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、手根骨、手指骨、肋骨、頚椎、胸椎、腰椎、仙骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、足根骨、足指骨が残っていた。頭蓋は前頭骨、右側頭骨、左右頭頂骨、後頭骨、左頬骨が残っていたが、上下顎骨や歯は欠損していた。また、左右寛骨は恥骨が破損していた。

最小個体数

いずれの骨も重複する部位がないため最小個体数は 1 体であった。

性別

大坐骨切痕は狭く、大坐骨切痕後弧は耳状面前縁と重なるため、男性と判定できた。頭蓋を見ると、乳様突起はやや大きく、項稜も明瞭で、眼窩上縁が丸みを帯びており、男性という判定で矛盾はない。

死亡年齢

腸骨耳状面には横線構造が見られ、表面のテクスチャーは粗く、耳状面表面には大小の孔が認められた。Lovejoyetal. の 4 度、BuckberryandChamberlain の 4 度であった。Lovejoyetal. の基準によると 30 歳台後半、BuckberryandChamberlain によると 51.4±14.5 歳と推定された。一方、寛骨臼では月状面後尖にリッピング、寛骨臼縁に孔を伴う変形を認めた。Calce の基準では 39-64 歳と推定できた。総合すると、40 歳前後から 60 歳代までの熟年段階の人骨と考えられた。

形態的所見

冠状縫合では、内板がほぼ完全に癒合していたが、外板の癒合は半分以下であった。矢状縫合とラムダ縫合では、内板・外板ともに癒合は縫合全体の半分に達しなかった。乳様突起は中程度の発達であった。前頭結節は未発達、側頭線は不明瞭であった。

古病理学的所見

第 11、12 胸椎は椎体の左側に過剰な骨形成が認められ癒合していた（写真 2)。関節突起には大きな変形は認められず、椎間円板の間隙は狭まっていなかった。変形性脊椎関節症、もしくは強直性脊椎関節症と考えられたが、隣接する椎骨が破損していたため判断はできなかった。

また、第 1 〜 5 腰椎の関節突起や椎体にはリッピングが発達し、変形性脊椎関節症である。その程度は関節突起や椎体の輪郭を崩すほどであった（写真 3)。

次に、左大腿骨の遠位骨体には炎症を伴う著しい骨増殖を認めた。右大腿骨と比較すると著しく肥厚し、骨体の前面には漏孔を認めた（写真 4)。骨髄炎と考えられた。一方、右大腿骨には炎症を認めなかった。

3-3. 遺物番号 d-026

人骨出土部位

全身の骨が残り、保存状態は良好である。頭蓋、下顎骨、左右鎖骨、左肩甲骨、左右上腕骨、左右橈骨、右尺骨、肋骨、椎骨、左右腸骨、左大腿骨、手足不明の指骨、遊離歯 8 個が残っていた。頭蓋は前頭骨、左右側頭骨、後頭骨、蝶形骨、左右頬骨が残っていた。

歯牙残存部位

歯は遊離歯が 8 個残存していた。右上顎乳中切歯、右上顎乳側切歯、右上顎乳犬歯、左上顎乳中切歯、左上顎乳側切歯、左上顎乳犬歯、右下顎乳側切歯、左右不明の下顎乳犬歯であった。いずれも歯冠の約半分ほど形成していた。

最小個体数

いずれの骨も重複する部位がないため最小個体数は 1 体である。

性別

未成年人骨であるため性別判定はできなかった。

死亡年齢

側頭骨錐体長は右が 39.3mm であり、Nagaokaetal.(2012) の回帰式から算出された推定年齢は胎齢 10 ヶ月であった。また、後頭骨底長が 12.0mm、後頭骨底幅が 15.9mm であり、Nagaokaetal.(2012) の回帰式から算出された年齢は胎齢 10 ヶ月であった。出生前後に死亡した個体と考えられた。

3-4. 遺物番号 d-085

人骨出土部位

全身の骨が残り、保存状態は良好である。頭蓋、下顎骨、左右鎖骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、左右橈骨、右尺骨、肋骨、椎骨、左右腸骨、右坐骨、左右大腿骨、左右不明の腓骨 2 個、手足不明の指骨、遊離歯 11 個が残っていた。頭蓋は前頭骨、左右側頭骨、後頭骨、蝶形骨、左右頬骨が残っ

ていた。

歯牙残存部位

歯は遊離歯が 11 個残存していた。右上顎乳中切歯、右上顎乳側切歯、右上顎乳犬歯、左上顎乳中切歯、左上顎乳犬歯、右下顎乳中切歯、右下顎乳側切歯、右下顎乳犬歯、右下顎第 1 乳臼歯、左下顎乳中切歯、左下顎第 1 乳臼歯であった。いずれも歯冠の約半分～全体が形成していた。

最小個体数

いずれの骨も重複する部位がないため最小個体数は 1 体である。

性別

未成年人骨であるため性別判定はできなかった。

死亡年齢

側頭骨錐体長は右が 37.7mm であり、Nagaokaetal.(2012) の回帰式から算出された推定年齢は胎齢 10 ヶ月であった。出生前後に死亡した個体と考えられた。

4. まとめ

今回龍雲院遺跡から出土した人骨の個体数は 4 体であった。出生前後が 2 体（d-026、d-085)、30 歳以上が 1 体（土坑墓 002SZ)、40 ～ 60 歳台が 1 体（土坑墓 023SZ）であった。そのうち 40 ～ 60 歳台の 1 体（土坑墓 023SZ）が男性と推定された。また、特記事項として、023SZ 人骨の椎骨に変形性脊椎関節症、左大腿骨に骨髄炎を認めた。

計測項目		左右	023SZ
頭蓋			
27	正中矢状頭頂弧長		133.0
30	正中矢状頭頂弦長		118.7
	乳様突起高 1	右	21.6
	乳様突起高 3	右	24.2
	乳様突起長 1	右	31.4
	乳様突起幅	右	14.8
上腕骨			
7	骨体最小周	右	66.0
7	骨体最小周	左	66.0
橈骨			
3	骨体最小周	右	47.0
3	骨体最小周	左	47.0
4	骨体横径	右	18.9
4	骨体横径	左	18.9
5	骨体矢状径	右	13.0
5	骨体矢状径	左	13.2
尺骨			
3	骨体最小周	右	40.0
3	骨体最小周	左	39.0
11	骨体矢状径	右	14.1
11	骨体矢状径	左	14.9
12	骨体横径	右	17.4
12	骨体横径	左	16.7
11/12	骨体横断示数	右	81.2
11/12	骨体横断示数	左	89.3
13	骨体上横径	右	22.6
13	骨体上横径	左	22.2
14	骨体上矢状径	右	26.4
14	骨体上矢状径	左	26.7
13/14	尺骨扁平示数	右	85.6
13/14	尺骨扁平示数	左	83.2
大腿骨			
6	骨体中央矢状径	右	31.0
6	骨体中央矢状径	左	30.9

計測項目		左右	023SZ
大腿骨			
7	骨体中央横径	右	27.1
7	骨体中央横径	左	27.7
6/7	骨体中央断面示数	右	114.4
6/7	骨体中央断面示数	左	111.6
8	骨体中央周	右	93.0
8	骨体中央周	左	91.0
9	骨体上横径	右	29.6
9	骨体上横径	左	30.4
10	骨体上矢状径	右	26.2
10	骨体上矢状径	左	29.9
10/9	骨体上断面示数	右	88.5
10/9	骨体上断面示数	左	98.4
15	頚垂直径	右	28.9
15	頚垂直径	左	30.0
16	頚矢状径	右	26.1
16	頚矢状径	左	27.3
16/15	頚断面示数	右	90.3
16/15	頚断面示数	左	91.0
17	頭周	右	92.0
17	頭周	左	92.0
18	頭垂直径	右	45.9
19	頭横径	右	45.7
19/18	頭断面示数	右	99.6
20	頭周	右	45.0
脛骨			
8a	栄養孔位最大径	右	35.4
8a	栄養孔位最大径	左	36.3
9a	栄養孔位横径	右	27.4
9a	栄養孔位横径	左	25.6
9a/8a	栄養孔位断面示数	右	77.4
9a/8a	栄養孔位断面示数	左	70.5
10a	栄養孔位周	右	98.0
10a	栄養孔位周	左	99.0
10b	骨体最小周	右	83.0
10b	骨体最小周	左	83.0

計測項目		左右	d-026	d-085
頭蓋				
9a	側頭骨錐体長	右	39.3	37.7
9a	側頭骨錐体長	左	40.5	37.9
9b	側頭骨錐体幅	右	14.2	13.8
9b	側頭骨錐体幅	左	14.3	14.0
10a	後頭骨底長		12.0	
10a	後頭骨底幅		15.9	
11a	後頭骨外側長	右	27.4	24.8
11a	後頭骨外側長	左	27.3	
11b	後頭骨外側幅	右	14.4	
11b	後頭骨外側幅	左		
16a	頬骨長	右		20.4
16a	頬骨長	左	24.5	
16b	頬骨幅	右	20.4	18.8
16b	頬骨幅	左	20.4	
上肢帯				
20a	鎖骨長	左	42.4	
21b	肩甲骨幅	右		28.4
21b	肩甲骨幅	左	29.4	
21c	肩甲棘長	右		30.7
上肢				
25a	上腕骨骨体長	右	62.7	62.9
25b	上腕骨体遠位幅	右	16.7	16.4
26a	尺骨骨体長	右	56.3	61.0
27a	橈骨骨体長	右		52.6
27a	橈骨骨体長	左	48.9	52.3
下肢帯				
22a	腸骨長	左		34.6
22b	腸骨幅	左	31.1	31.3
下肢				
28a	大腿骨骨体長	右		72.8
28b	大腿骨体遠位幅	右		19.0
28b	大腿骨体遠位幅	左		19.3
29a	脛骨骨体長	左		64.2

第 4 表　023SZ・d-026・d-085 出土人骨の計測値（mm）と示数

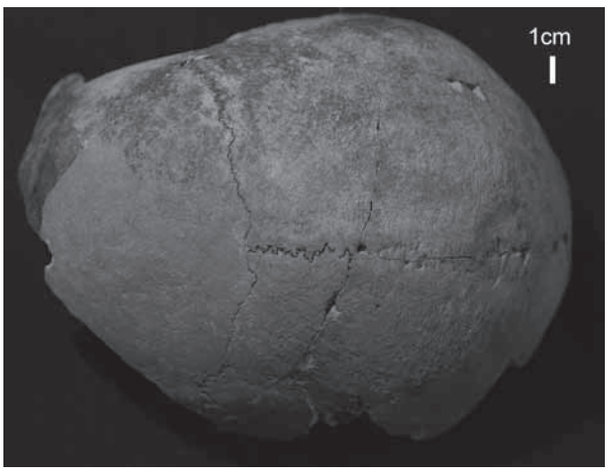


写真１　頭蓋の上面観
（遺構番号 023SZ）

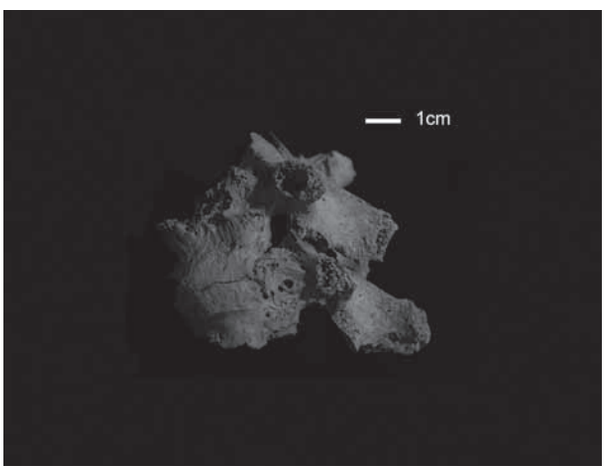


写真２　第 11 ～ 12 胸椎の左側面観
（遺構番号 023SZ）

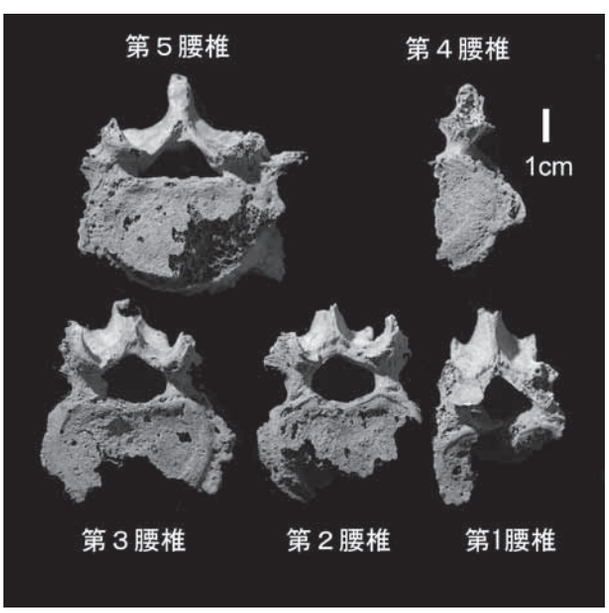


写真３　第１～５腰椎の上面観
（遺構番号 023SZ）

左大腿骨の遠位骨体には炎症を伴う著しい骨増殖があった。
骨体の肥厚と漏孔（矢印）を認めた

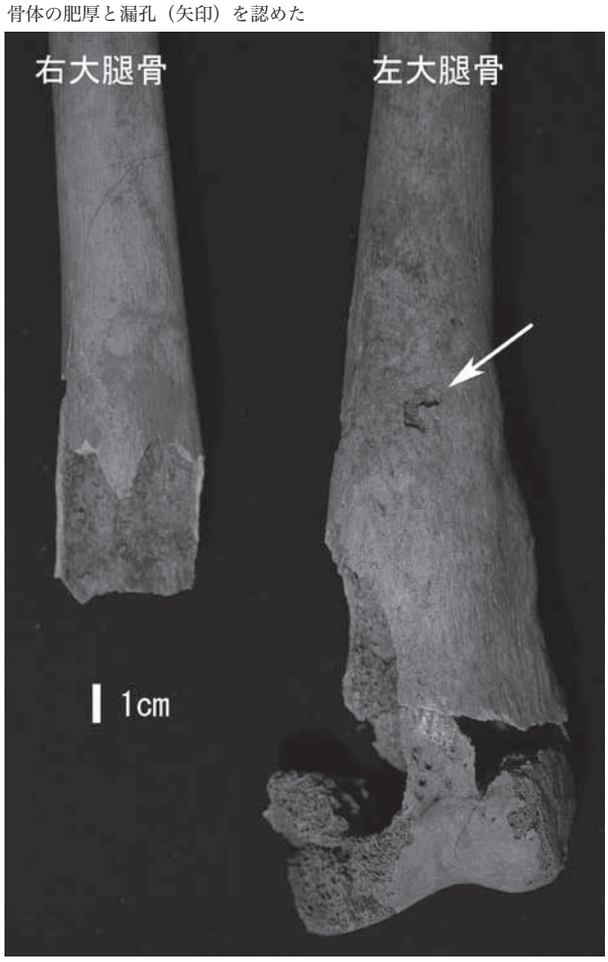


写真４　左右大腿骨
（遺構番号 023SZ）

《参考文献》

BruzekJ.(2002)Amethodforvisualdeterminationofsexusingthehumanhipbone.AmericanJournalofPhysicalAnthropology,117:157-168.
BuckberryJ.L.andChamberlainA.T.(2002)Ageestimationfromtheauricularsurfaceoftheilium:Arevisedmethod.AmericanJournalofPhysicalAnthropology,119:231-239.
CalceS.E.(2012)Anewmethodtoestimateadultage-at-deathusingtheacetabulum.AmericanJournalofPhysicalAnthropology,148:11-23.
FazekasI.G.andKósaF.(1978)Forensicfetalosteology.AcademicPress,Budapest.
LovejoyCO.(1985)DentalwearintheLibbenpopulation:itsfunctionalpatternandroleinthedeterminationofadultskeletalageatdeath.AmericanJournalofPhysicalAnthropology,68:47-56.
LovejoyC.O.,MeindlR.S.,PryzbeckT.R.,andMensforthR.P.(1985)Chronologicalmetamorphosisoftheauricularsurfaceoftheillium:Anewmethodofdeterminingadultageatdeath.AmericanJournalofPhysicalAnthropology,68:15-28.
MartinR.andKnussmannR.(1988)Anthropologie.Band Ⅰ.GustavFischerVerlag,Stuttgart.
MolnarS.(1971)Humantoothwear,toothfunction,andculturalvariability.AmericanJournalofPhysicalAnthropology,34:175-189.
NagaokaT.,AbeM.,andShimataniK.(2012)Estimationofmortalityprofilesfromnon-adulthumanskeletonsinEdo-periodJapan.AnthropologicalScience,120:115-128
WalkerP.L.(2008)SexingSkullsUsingDiscriminantFunctionAnalysisofVisuallyAssessedTraits.AmericanJournalofPhysicalAnthropology,136:39–50.

第３節　龍雲院遺跡における人骨の年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
ZaurLomtatidze・InezaJorjoliani・中村賢太郎

1．はじめに

愛知県東海市に位置する龍雲院遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調製データは第５表のとおりである。

龍雲院遺跡（RI11）では、土坑墓（023SZ）が検出された。墓内からは短刀など副葬品を伴う人骨が出土した。墓の年代を明らかにするために、人骨から抽出したコラーゲンの年代測定を行った。人骨の部位は肋骨である（PLD-21086）。なお、同じ肋骨から抽出したコラーゲンについて、コラーゲンの保存状態の評価用に炭素窒素比（C/N）を、海産物摂取による海洋リザーバー効果の影響を評価するために炭素安定同位体比（$\delta^{13}C$）と窒素安定同位体比（$\delta^{15}N$）を測定した（詳細は別項参照）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-21086	遺跡：龍雲院遺跡（RI11）3 地点 遺構：023SZ その他：墓内	種類：骨（ヒト、肋骨） 状態：dry	超音波煮沸洗浄 コラーゲン抽出

第５表　測定試料および処理

3．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第６表に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

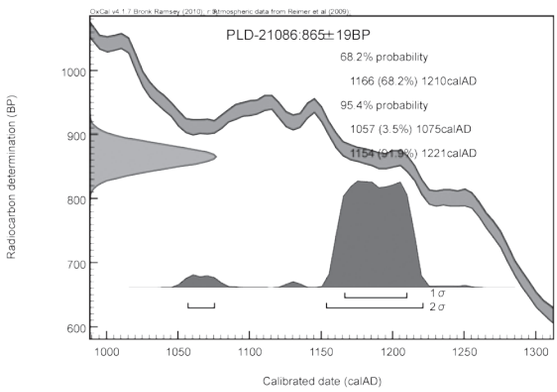
^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の

半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ :IntCal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-21086	-20.56 ± 0.27	865 ± 19	865 ± 20	1166AD(68.2%)1210AD	1057AD(3.5%)1075AD 1154AD(91.9%)1221AD

第６表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

5. 考察

龍雲院遺跡（RI11）の墓（023SZ）から出土した人骨（PLD-21086）は、２σ暦年代範囲が 1057-1075calAD(3.5%) および 1154-1221calAD(91.9%) であった。人骨からのコラーゲン収率は 1.8%、抽出されたコラーゲンの C/N 比は 3.29（別項参照）、同じくコラーゲンからの炭素収率は 38.6% で、コラーゲンの保存状態に問題は無いと評価できる。また、δ ^{13}C とδ ^{15}N から主に陸産物からなる食生活を送っていたと推定され（別項参照）、人骨の年代への海洋リザーバー効果の影響は小さいと判断できる。したがって、023SZ のヒトは、11 世紀中頃～13 世紀前半、つまり平安～鎌倉時代に死亡し、埋葬されたと考えられる。

写真５　年代測定試料

《参考文献》

BronkRamsey,C.(2009)BayesianAnalysisofRadiocarbondates.Radiocarbon,51(1),337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」:3-20, 日本第四紀学会 .

Reimer,P.J.,Baillie,M.G.L.,Bard,E.,Bayliss,A.,Beck,J.W.,Blackwell,P.G.,BronkRamsey,C.,Buck,C.E.,Burr,G.S.,Edwards,R.L.,Friedrich,M.,Grootes,P.M.,Guilderson,T.P.,Hajdas,I.,Heaton,T.J.,Hogg,A.G.,Hughen,K.A.,Kaiser,K.F.,Kromer,B.,McCormac,F.G.,Manning,S.W.,Reimer,R.W.,Richards,D.A.,Southon,J.R.,Talamo,S.,Turney,C.S.M.,vanderPlicht,J.andWeyhenmeyerC.E.(2009)IntCal09andMarine09RadiocarbonAgeCalibrationCurves,0–50,000YearscalBP.Radiocarbon,51,1111-1150.

第４節　炭素・窒素安定同位体分析

山形秀樹・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1．はじめに

龍雲院遺跡より検出された人骨を対象として、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料の C/N 比を求めた。なお、放射性炭素年代測定を行っている（放射性炭素年代測定参照）。

2．試料および方法

測定を実施するにあたり、人骨試料は、超音波洗浄を施して表面に付着した汚れを除去した後、試料からコラーゲンを抽出し、それを用いて測定を行った。

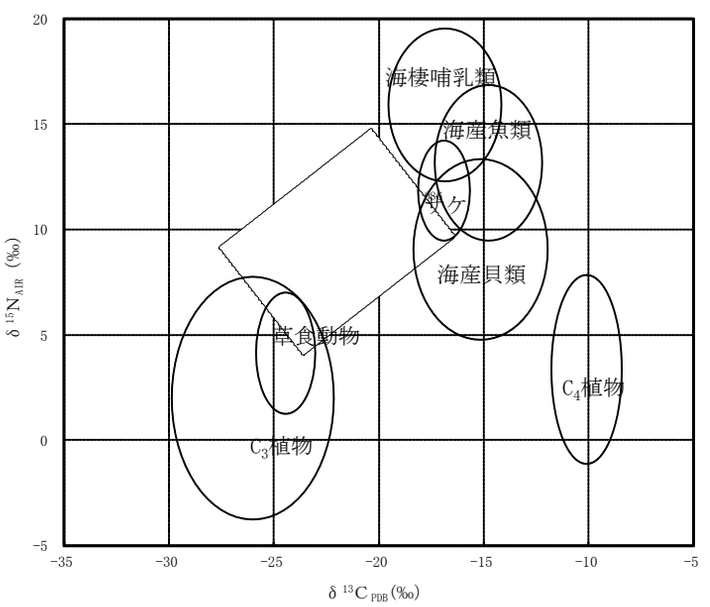
炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）である FlashEA1112（ThermoFisherScientific 社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ科学製）を使用した。

炭素安定同位体比（$\delta\ ^{13}C_{PDB}$）および窒素安定同位体比（$\delta\ ^{15}N_{Air}$）の測定には、MASS（質量分析計）である DELTAV（ThermoFisherScientific 社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比が IAEASucrose（ANU）、窒素安定同位体比が IAEAN1 を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA 内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させた。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで CO_2 と N_2 を分離し、TCD でそれぞれ検出・定量を行った。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいて C/N 比を算出した。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度 1000℃、還元炉温度 680℃、分離カラム温度 45℃であった。分離した CO_2 および N_2 はそのまま He キャリアガスと共にインターフェースを通して MASS に導入し、安定同位体比を測定した。

試料番号	試料名	遺構	$\delta\ ^{13}C_{PDB}$ (‰)	$\delta\ ^{15}N_{Air}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N 比
PLD-21086	人骨（肋骨）	023SZ	−19.2	10.7	41.8	14.8	3.29

第７表　測定結果



第 71 図　炭素・窒素安定同位体比
（吉田・西田（2009）に基づいて作成）

3．結果

第７表に、試料名と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、

窒素含有量、C/N 比を示す。第 71 図は炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係を示したものである。

4. 考察

一般的に骨のコラーゲンの C/N 比は 2.9 ～ 3.6 の間に収まる (DeNiro1985)。PLD-21086 の C/N 比は 3.29 であり、この範囲に収まる値を示した。このことから、埋没中に骨の外部から大きな汚染はなかったと考えられる。

人の成長に必要な生体組織を構成する際、食物に含まれているタンパク質が利用される。このとき、食物の分子組成は変化するが、同位体組成はほとんど変えることなく体組織の一部に残存する。このため、人の体組織の同位体組成から、主に消費した食物の情報を推定することが可能となる。

人が食物中のタンパク質を利用して体組織を構成する際に同位体分別が起きる。人骨中のコラーゲンについては、分析値に $\delta^{13}C$ で 4.5‰、$\delta^{15}N$ で 3.5‰差し引くことにより体内での同位体分別効果を補正することができる (Ambrose、1993)。体内での同位体分別効果を補正した結果を図 1 に示した。補正後の値は、C_3 植物や草食動物付近の結果を示したことから、主に食していたのは C_3 植物、草食動物など陸産物であると推定される。

《参考文献》

DeNiroMJ.（1985）Postmortempreservationandalterationofinvivobonecollagenisotoperatiosinrelationtopalaeodietaryreconstruction.Nature317:806-9.

赤澤威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元 . 田中琢・佐原眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」:132-143, クバプロ .

AmbroseSH.(1993)Isotopicanalysisofpaleodiet:methodologicalandinterpretiveconciderations.In:SandfordMK,editor.Investigationsofancienthumantissue:chemicalanalysisinanthropology.Langhorne:GordonandBreach.59-130.

南川雅男（2001）炭素・窒素同位体分析により復元した先史日本人の食生活 . 国立歴史民俗博物館研究報告 ,86,333-357.

Yoneda,M.,M.Hirota,M.Uchida,A.Tanaka,Y.Shibata,M.Morita,andT.Akazawa(2002)RadiocarbonandstableisotopeanalysesontheEarliestJomonskeletonsfromtheTochibararockshelter,Nagano,Japan.Radiocarbon44(2),549-557.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究 . 平成 16-18 年度科学研究補助金基礎研究 B（課題番号 16300290）研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」,85-95.

吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器 . 新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」:87-99, 新潟日報事業社 .

第５節　龍雲院遺跡出土短刀のＸ線透過撮影および付着木質の樹種同定

竹原弘展・黒沼保子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

龍雲院遺跡は、東海市大田町に所在し、砂堆上に立地する。龍雲院遺跡より出土した短刀について、Ｘ線透過撮影および樹種同定を行い、形態、材質を調査した。

2．試料と方法

分析対象は、墓 023SZ の墓内より出土した短刀１点である。墓の年代として、人骨の放射性炭素年代測定により、２σ暦年代範囲（確率 95.4%）で 1057-1075calAD(3.5%) および 1154-1221calAD(91.9%) との結果を得ている（詳細は別項参照）。

Ｘ線透過撮影は、発生装置には工業用ポータブルＸ線装置である（株）リガク製ラジオフレックス 100GS、感光材料には富士フイルム製工業用X-レイフィルム IX80 を使用し、鉛増感紙 0.03mm を併用した。撮影条件は、90kV、5mA、距離 1m、照射時間１分である。現像は手処理で行い、現像液に富士フイルム製ハイレンドール I、停止液に 3% 酢酸溶液、定着液に同ハイレンフィックス I を使用し、水洗、乾燥には富士 QW、富士ドライウェルを併用した。

樹種同定は、短刀に付着していた鞘と思われる木片について行った。木質が鉄に置換しており剃刀の刃が入らなかったため、同定用試料として 5mm 角程度を採取し、走査型電子顕微鏡を用いて同定を行った。カッターナイフを用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、同定用の試料を作製した。これを直径 1cm の真鍮製試料台に両面テ - プで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3．結果

Ｘ線透過撮影により得られた現像フィルムを、通常のスキャナで簡易的に取り込んだ画像を第 72 図に示す。

樹種同定の結果は、針葉樹のヒノキ科であった。以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を写真６に示す。

（1）ヒノキ科　Cupressaceae（写真６）

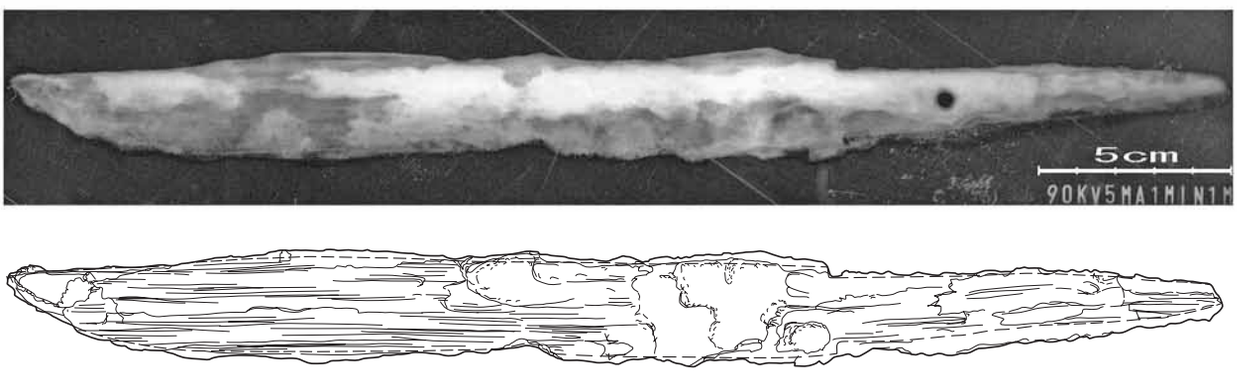
仮道管、放射組織からなる針葉樹である。分野壁孔はやや小型のヒノキ型と思われるが、状態が悪く不明瞭である。また、１分野内の分野壁孔の数が確認できなかったため、ヒノキ科までの同定とした。

4．考察

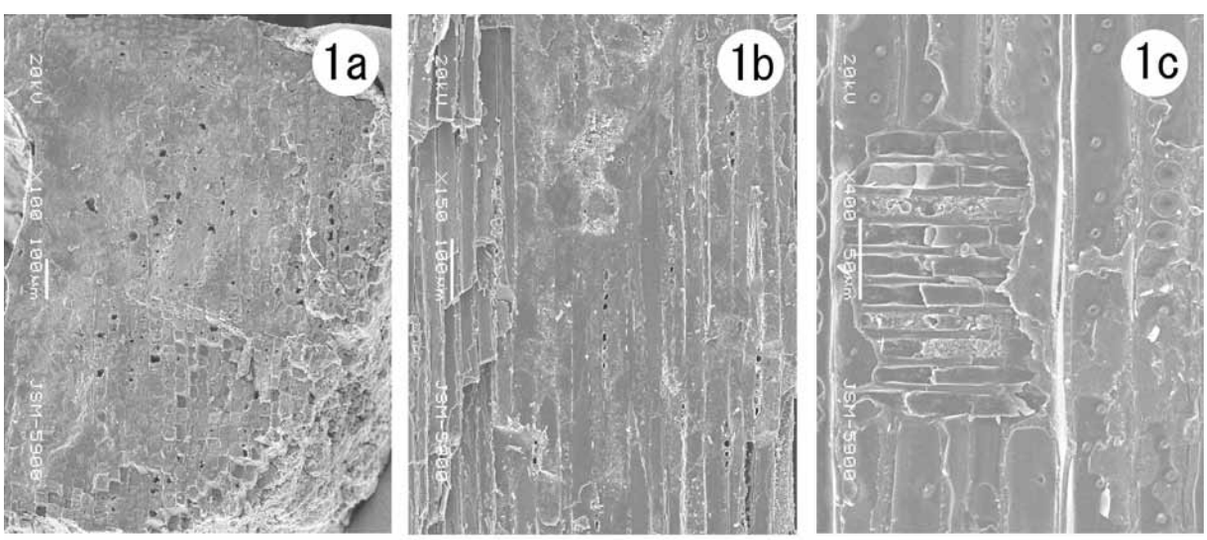
Ｘ線透過撮影と遺物との比較検討の結果、一部刃の欠損があるものの、茎から切先までほぼ完形で残存していることが確認された。全長 31.3cm、うち茎が 10.2cm で、刀身に反りはほとんど認められない。棟区、刃区、直径 4mm の目釘穴が確認された。短刀はほぼ完形ではあったが、茎の一部など、Ｘ線がよく透過している箇所がみられ、腐食はそれなりに進行しているものと考えられ

る。

鞘と思われる木質はヒノキ科であった。ヒノキ科では、一般的にヒノキ属のヒノキとサワラ、アスナロ属のアスナロがよく利用される。遺跡から出土した刀剣の鞘には、ヒノキを含むヒノキ科やスギ、モミ属が用いられている（島地・伊東、1988）。針葉樹は全般的に木理直通で狂いが少なく、軽軟で加工容易であるため、刀の鞘として適材であったと推測される。



第 72 図　短刀の X 線透過写真・実測図



1a: 横断面　　1b: 接線断面　　1c: 放射断面

写真６　短刀付着木片（ヒノキ科）の走査型電子顕微鏡写真

《参考文献》

島地謙、伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧 .259p, 雄山閣出版 .

第６節　東畑遺跡・龍雲院遺跡出土鉄滓の自然科学分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1．はじめに

東畑遺跡および龍雲院遺跡は東海市大田町に隣接して所在し、ともに砂堆上に立地する。両遺跡より出土した鉄滓について、走査型電子顕微鏡および付属するエネルギー分散型Ｘ線分析装置による観察と分析を行った。

2．試料と方法

分析対象は、鉄滓２点で、時期はいずれも鎌倉～室町時代と考えられている。第８表に一覧を示す。

分析№	遺跡	地点	ドット	時期
1	東畑	1	d-055	鎌倉～室町
2	龍雲院	3（前半区）	d-109	鎌倉～室町

第８表　分析対象一覧

各試料の断面プレパラートを作製し、観察、分析を行った。プレパラートの作製には、包埋樹脂に注型用高透明エポキシ樹脂を使用し、試料の一部を岩石カッターで切り取った後包埋した。包埋試料は、ディスコプランで研磨した後、コランダムの #3000、ダイヤモンド粒子の１μｍの順で研磨し、観察、分析面とした。採取した断面の位置を図版１の写真中に白線で示す。試料は、カーボン蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV、以後 SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型Ｘ線分析装置（同 JED-2200、以後 EDS）による鉱物組織の定性分析を行った。

3．分析結果および考察

SEM 反射電子像を写真７に、SEM 反射電子像（×200）に記された各ポイントの EDS による検出元素を第９表に示す。

［分析№１（写真 7-1 ～ 3）］

磁着はほとんど無い。SEM 反射電子像では、写真 7-2、3 のような結晶組織が観察された。金属鉄は確認されなかった。EDS 分析結果と併せると、明色の樹枝状ないし粒状組織（写真 7-3 の a）では鉄 (Fe) と酸素 (O) のみが検出されウスタイト (FeO) とみられる。中間色木ずれ状組織（同写真 b）では鉄とケイ素 (Si) と酸素が検出されファイヤライト ($2FeO \cdot SiO_2$) とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同写真 c）上に晶出している。

［分析№２（写真 7-4 ～ 6）］

磁着はほとんど無い。SEM 反射電子像では、写真 7-5・6 のような結晶組織が観察された。金属鉄は確認されなかった。EDS 分析結果と併せると、明色の樹枝状ないし粒状組織（写真 7-6 の a）では鉄と酸素のみが検出されウスタイトとみられる。中間色木ずれ状組織（同写真 b）では鉄とケイ素と酸素が検出されファイヤライトとみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同写真 c）上に晶出している。

分析№	ポイント	検出元素	所見	
1	a	O, Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	
	c	O, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	
2	a	O, Fe	ウスタイト	鍛冶滓
	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	
	c	O, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	

第９表　EDS 分析結果

一般に砂鉄製錬の場合、原料中にチタンが多く含まれており、さらにその製錬滓にはチタンが濃縮され、チタンを含む結晶鉱物が晶出する。今回の鉄滓の定性分析結果では、いずれの試料からもチタンは検出されず、ウスタイトが検出された。したがって、これら２点の鉄滓はいずれも製錬に伴う製錬滓ではなく、精錬鍛冶や鍛錬鍛冶に伴う鍛冶滓である可能性が高いと考えられる。

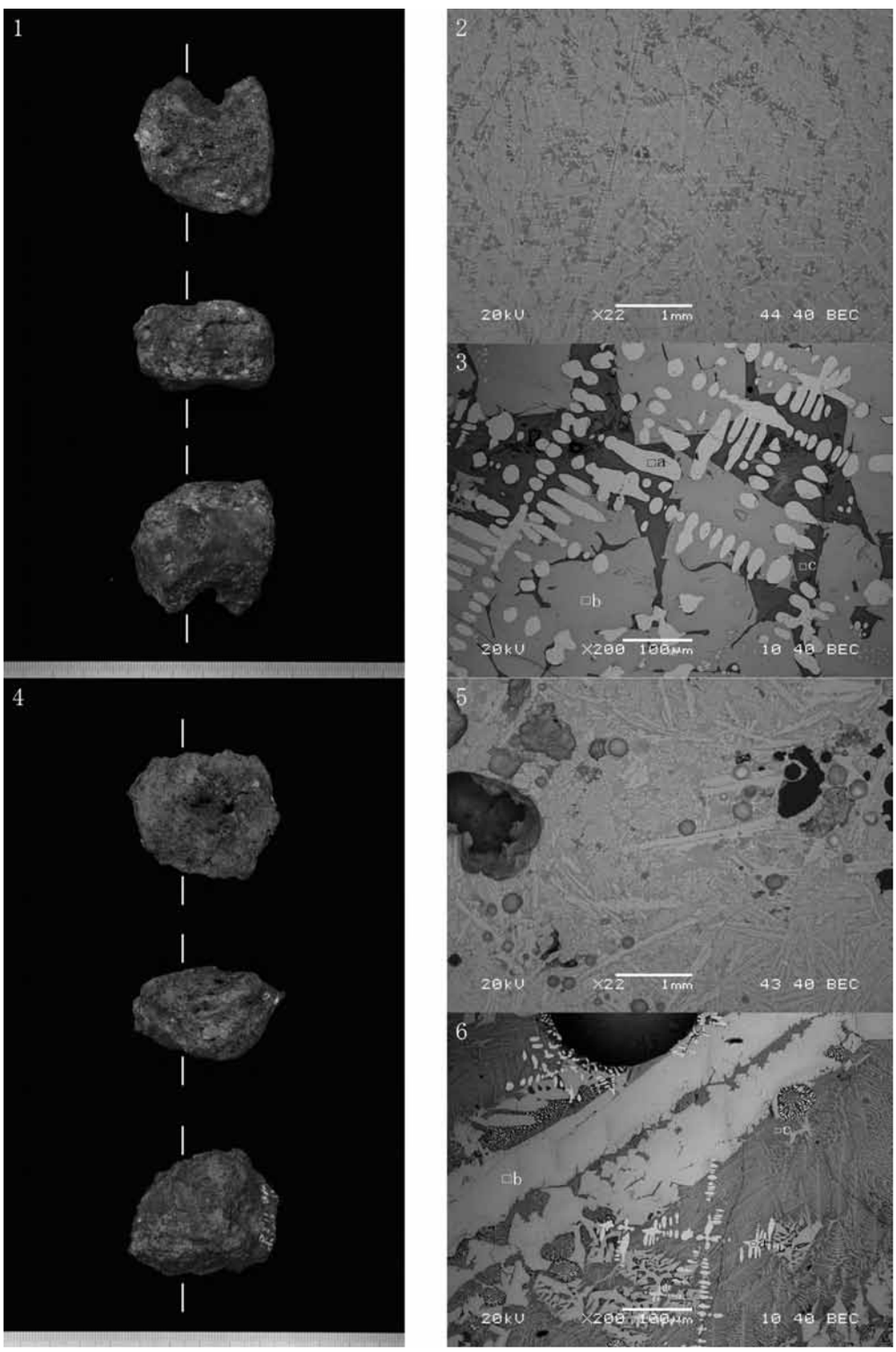


写真７　鉄滓の分析画像

1: 分析№１、２・3: 分析№１SEM 反射電子像（2:×22、3:×200）、4: 分析№２、５・6: 分析№２SEM 反射電子像（5:×22、6:×200）

第７節　東畑遺跡で発見された管玉の蛍光Ｘ線分析

愛知県埋蔵文化財センター　堀木真美子

1．試料および分析方法

今回分析を行った試料は、東畑遺跡（4 地点）の住居址 001SB 床面から出土した d-130 および d-165 の管玉である。d-130 は径 1mm、長さ 8mm、管状の石器である。組織は無斑晶で濃緑色の滑らかな質感を呈する。長軸方向に対し斜めの方向に、若干の色の違いによる縞模様が確認できる。d-165 は径 4mm、長さ 8mm の管状の石器であり、組織は無斑晶で濃緑色の滑らかな質感を呈する。長軸方向にほぼ平行に、緑色の濃淡による縞模様が認められる。

これら２点の石器の石材については、斑晶が認められず滑らかな質感を持つ岩石であるため、チャートであるか溶結凝灰岩であるのか、肉眼観察では判断できなかった。チャートと溶結凝灰岩では、堆積岩と火成岩であり、生成過程も科学組成も大きく異なる。また産地を考慮する場合に重要な判断基準となる。

そこで今回はの分析では、これらの石器の科学組成を蛍光Ｘ線分析により明らかにし、石材の推定を行った。チャートは、犬山市木曽川河畔で採取した赤色のものである。溶結凝灰岩は鳳来町川売で採取した赤灰色のものである。

測定方法は、直接試料にＸ線を照射する方法で行った。測定機器は（株）堀場製作所製 XGT-5000、Ｘ線管電圧 30kV、測定時間 500 秒、照射径 100 μ m、雰囲気は大気。測定箇所は、試料の異なる３つのカ所を測定点とした。また定量分析は、ファンダメンタルパラメータ法によって行った。

2．測定結果

測定結果を第 10 表に示す。今回の試料の他に、チャートと溶結凝灰岩を同分析方法で測定を行った。

その結果、遺跡出土試料の d-130 では Al（アルミニウム）、Si(ケイ素）、S（硫黄）、K(カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Cr（クロム）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Cu（銅）を確認した。d-165 では Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe が確認された。チャートでは、Si、S、K、Ca、Fe が確認され、溶結凝灰岩では Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe が確認された。

科学組成値をみると、d-130、d-165 の２試料では Ti と Fe に若干の違いがある。その他の成分には大きな違いは認められない。またチャートや溶結凝灰岩の組成値についても、それぞれの試料内では Al 以外の元素では、その組成値に大きな差は見られない。

3．考察

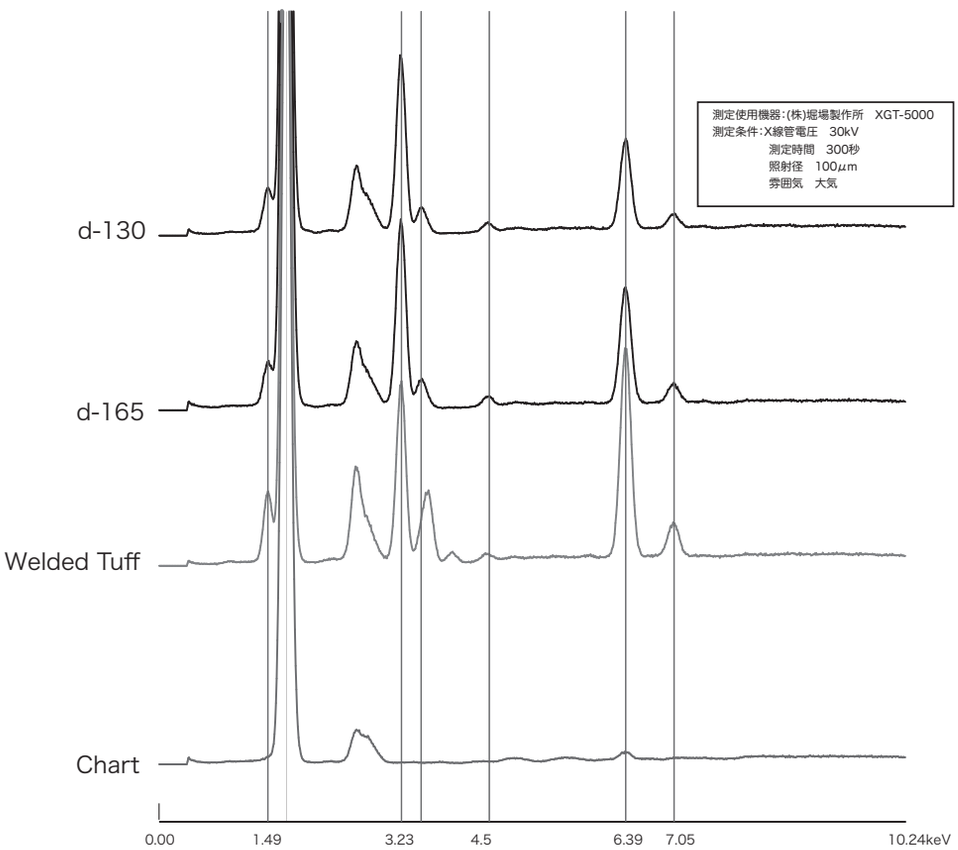
チャートと溶結凝灰岩では、岩石の生成過程が異なるために、科学組成が大きく異なっている。チャートは海中で生物遺骸が堆積した岩石であり、ケイ素が多く含まれる。溶結凝灰岩は、火山活動にもとなって噴出した火山灰が、堆積し溶融してできた岩石であり、マグマの組成を反映した組成を示している。このことは溶結凝灰岩には、Al や K、Ca が多く含まれている理由である。

今回分析を行った d-130、d-165 は、チャートの試料よりは SiO2 が少なく、Al2O3、K2O、

TiO、Fe2O3 が多い。また溶結凝灰岩に比べると Al2O3、CaO、Fe2O3 がやや少ない。このことから、今回の試料については、2 点ともチャートではなく、溶結凝灰岩であると判断できる。ただし、今回の比較試料と同一の岩体であるか否かの判断は出来ない。

※約 2 倍

d-165　　d-130



第 10 表　管玉・熔結凝灰岩・チャートの蛍光 X 線分析結果

	Al2O3	SiO2	SO3	K2O	CaO	TiO	Cr2O3	MnO	Fe2O3	CuO	total
d-165-1	6.00	87.46	0.03	5.23	0.15	0.23	0.01	0.01	0.89	0.00	100.01
d-165-2	4.72	88.60	0.02	5.51	0.10	0.17	0.01	0.01	0.86	0.01	100.01
d-165-3	4.83	88.70	0.02	5.71	0.12	0.26	0.01	0.00	0.97	0.00	100.62
d-130-1	3.18	90.69	−	5.04	0.17	0.18	−	0.00	0.64	−	99.90
d-130-2	6.34	87.89	−	4.85	0.10	0.13	−	0.01	0.62	−	99.94
d-130-3	3.23	89.62	−	5.93	0.13	0.21	−	0.00	0.79	−	99.91

	Al2O3	SiO2	SO3	K2O	CaO	TiO	Cr2O3	MnO	Fe2O3	CuO	total
Chaert-A	−	99.90	0.04	0.00	0.00	0.00	−	−	0.05	−	100.00
Chaert-B	−	99.94	0.02	0.00	0.00	0.00	−	−	0.02	−	99.99
Chaert-C	−	99.89	0.02	0.00	0.01	0.00	−	−	0.07	−	100.00
WeldedTuff-A	11.75	80.34	−	5.22	1.05	0.09	−	0.01	1.50	−	99.96
WeldedTuff-B	9.55	81.64	−	5.77	1.17	0.09	−	0.01	1.72	−	99.95
WeldedTuff-C	9.70	82.39	−	4.92	1.36	0.07	−	0.01	1.47	−	99.92

第 11 表　管玉・チャート・熔結凝灰岩の科学組成

第８節　東畑遺跡のプラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

1．はじめに

愛知県東海市に所在する東畑遺跡の発掘調査において、遺跡周辺における稲作の有無を検討する目的でプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析結果を示し、遺跡周辺における稲作の有無について検討した。

2．試料と方法

分析試料は、土器棺と方形周溝墓の周溝 002SD から採取された２試料である（第 12 表）。これらの試料から、次の手順でプラント・オパールを抽出した。

試料 No.	地点	遺構名	遺構種別	層位	時期	土質
1	4	d-002	土器棺	土器棺内部の砂	弥生中期	にぶい黄褐色（10YR5/3）中粒砂
2		002SD	方形周溝墓周溝	周溝埋土		黒褐色（10YR2/2）粘土混じり砂礫

第 12 表　分析資料一覧表

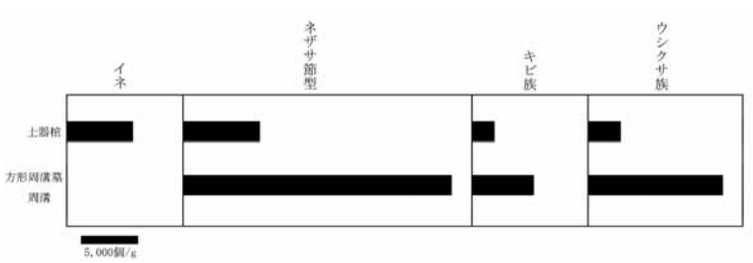
秤量した試料を、乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

3．結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（第 13 表）、それらの分布を第 14 表に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

試料 No.	遺構	イネ（個 /g）	ネザサ節型（個 /g）	キビ族（個 /g）	ウシクサ族（個 /g）	不明（個 /g）
1	土器棺	5,700	6,600	1,900	2,800	2,800
2	方形周溝墓周溝	0	23,200	5,300	11,600	1,100

第 13 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数



第 14 表　東畑遺跡における植物珪酸体分布

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が確認できた。イネ機動細胞珪酸体は、土器棺で 5,700 個産出しているが、方形周溝墓の周溝 002SD では産出していない。ネザサ節型機動細胞珪酸体は、土器棺で 6,600 個、周溝 002SD で 23,200 個の産出が見られる。キビ族機動細胞珪酸体は、土器棺で 1,900 個、周溝 002SD で 5,300 個産出している。ウシクサ族機動細胞珪酸体は、土器棺で 2,800 個、周溝 002SD で 11,600 個産出している。

4. 考察

今回の分析目的は、遺跡周辺における稲作の有無の確認であるため、試料から産出したイネ機動細胞珪酸体に注目する。イネ機動細胞珪酸体については、試料 1g 当り 5,000 個以上検出された地点から推定される水田址の分布範囲と、実際の発掘調査で確認された水田址の範囲とがよく対応する結果が得られており（藤原、1984）、1g 当り 5,000 個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。今回の試料を検鏡した結果、土器棺内の砂から試料 1g 当り 5,700 個のイネ機動細胞珪酸体が確認できた。この結果は、水田土壌の目安とされる量を超えている。イネ機動細胞珪酸体が土器棺内に存在する理由としては、遺跡周辺で稲作が行われており、そこから水田土壌などイネ機動細胞珪酸体が多く含まれる土壌が何らかの要因で土器棺内にもたらされた可能性や、藁などが土器棺内に敷かれた可能性などが考えられよう。藁を敷いたと考えられる場合、藁は遺跡周辺で栽培された稲由来ではなく、別の場所から運ばれた稲由来である可能性も否定できない。あるいは、もし土器棺の蓋が開いていた状態で長年放置されていれば、後世のイネ機動細胞珪酸体が本試料中に入り込んできた可能性も考えられる。この可能性については､本試料を挟む上下層のプラント･オパール分析を行い、各層準のイネ機動細胞珪酸体の量を把握することで、検証できるであろう。

このように、イネ機動細胞珪酸体は周溝 002SD からは産出せず、土器棺からのみ産出したが、イネ機動細胞珪酸体が土器棺内に存在する背景としてはいくつかの可能性が考えられ、遺跡周辺の稲作による稲かどうかの判断は難しい。よって、ここでは土器棺内からイネ機動細胞珪酸体が産出したと指摘するにとどめておく。

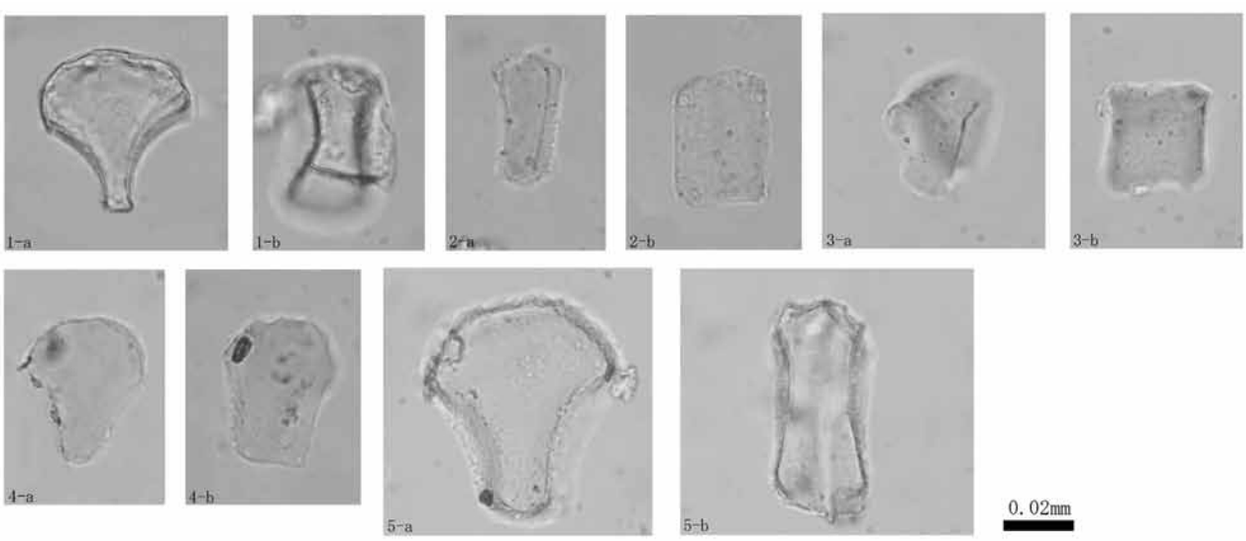


写真８　東畑遺跡から産出した植物珪酸体

1. イネ機動細胞珪酸体（土器棺）、2. ウシクサ族機動細胞珪酸体（土器棺）、3. キビ族機動細胞珪酸体（土器棺）、
4. ネザサ節型機動細胞珪酸体（土器棺）、5. ネザサ節型機動細胞珪酸体（方形周溝墓）　a: 断面、b: 側面

《参考文献》

藤原宏志（1984）プラント・オパ - ル分析法とその応用 - 先史時代の水田址探査 -. 考古学ジャ - ナル ,227,2-7.

第６章　まとめ

－大田地区における遺跡の消長について－

大田地区の中心街整備事業に伴い、平成 11 年度からこれまでに、約２万㎡にも及ぶ面積が発掘調査されてきた。その殆どが、道路予定地範囲であるために大半の調査区は幅狭で細長く、遺構の面的な把握が難しい地点が多かったとはいえ、長く集落の地下に埋もれていた過去の歴史を探るという意味に於いては、十分な情報を得ることができた。

江戸時代に開削された現在の大田川によってその北部が分断されてしまっているが、大田の集落は大規模な砂堆上に集約されている。沖積地における微地形の分析などから、大田～横須賀の谷には形成順に第１から第３までの、およそ３列の砂堆が存在することが明らかになった。広大な谷のいちばん奥に存在するのが第１砂堆であり、形状は中央が斜めに括れた佐渡島のようである。第１砂堆の北端は弥勒寺のある丘陵に達しているが、南端は大田川旧河道に沿って小規模な段丘地形を形成している。この第１砂堆中央の括れ部に関しては、第１砂堆が形成されていく過程に於いて砂堆を周回するように流れていた旧河道が一時的に流路を変え、この部分を貫通した痕跡であると考えられる。事実平成 20 年度の畑間遺跡の調査では、標高 3m 以下の地山直上を東から西に向かって流れた自然流路の存在を確認しており、正確な時期は特定し得ないが砂堆中央部を乗り越えていくような洪水が過去に何度もあったことを想像させるものである。

改修前の大田川は、加木屋谷から来る本流と荒尾・渡内方面から来る支流（渡内川）に、富木島方面からの短い流れが合流し、第１砂堆東側で大きな湿地帯を形成していた。下流域は第１砂堆南端を大きく迂回し、横須賀（馬走瀬）集落の乗る砂堆の北端を河口として伊勢湾に注いでいた。大田地区の遺跡を語るには、このような旧地形を把握しておかなければならない。

第２砂堆は未発達なもので、大宮神社から太田川駅にかけて細長く伸びている。第３砂堆は江戸時代の海岸線で、北端は丘陵に接し、北から松崎・上浜田・下浜田遺跡が存在し、大田川旧河口を夾んで南には知多市にかけて、烏帽子・荒古・細見遺跡などが存在する。

それぞれの砂堆の間は後背湿地や標高 2m にも満たない低地が広がり、現代に及ぶまで長く水田や畑地として利用されていた。また、その一部は潟湖を形成していたことも類推し得る。

これらの砂堆列は、海退期に形成されたものである。即ち、今から約 6000 年前をピークとした海水準の変動は縄文海進と呼ばれ、先史地理学や古環境学などと考古学の学際的研究に伴い、各地方での海面変動の様子が明らかになりつつある。

伊勢湾周辺に於ける海進最盛期の海水準は３～ 4m とされており（第 15 表参照）、知多半島沿岸各地にみられる砂堆の標高とよく付合する。大田の谷の場合、いちばん大きな第１砂堆の最高値は 4.5m であり、大宮神社の存在する第２砂堆は 2.5 ～ 3m 以下、第３砂堆は 3m 前後で、江戸時代までの海岸線であった第３砂堆を除く第１・第２砂堆は、海退現象の揺籃によって徐々に形成されたものであることが推察できる。各砂堆間の低地は後背湿地または小規模な潟湖をなしていた可能性が高く、川舟での往来も想定できる。旧大田川の河口は湊としての機能も果たしていた。なお、現在の大田川の場合、汽水域は河口から 2.5km 遡った砂間橋あたりにまで達する。

大田の谷で一番古い遺跡は、縄文前期の土器を出土した高ノ御前遺跡である。[註 1)] 立地環境は丘陵上から丘陵先端部で、大田川旧河道左岸にあるが、出土遺物は各々少量ながらも縄文前期中葉から前期末、中期中葉・後葉、後期前葉、晩期にかけての土器が出土している。

また、高ノ御前遺跡では混土貝層が検出されているが、残念ながら時期は特定されていない。ハイガイ・ハマグリ・アサリなどという構成種からみて、晩期以前の貝層である可能性も高く、此の地では相当古い時代から海産物の利用が続いてきたことが窺われる。

縄文期の資料に関しては、先年の調査で注目すべき発見があった。平成 21 年度の東畑地区の調査で、晩期土器が多く発見されたのである。中心となる資料は晩期前葉のかつて本刈谷式土器と呼ばれていたもので、現在は学史を尊重する立場から雷式の名称で分析が為されている。[註 2)] 破片数は口縁部資料だけでも 100 点以上あり、文様や器形のバリエーションからその組成も窺い知ることのできる貴重な資料である。（主な出土資料は付載 1 を参照されたい）

このように縄文期の資料は第 1 砂堆南端とその周辺にのみ偏在することから、縄文海進最盛期以後、入江を為していた大田の谷の埋積が進み、現在の第 1 砂堆全域が居住に叶う安定的な環境となったのは縄文晩期中葉頃と推定される。

弥生時代前期になると砂堆の方々で動きがみられ、断片的に遠賀川式土器を出土する地点がある一方、烏帽子遺跡の調査で明らかにされたように、所謂居住域と墓域を区別するような集落規模の遺跡が展開しはじめる。同遺跡で発見された長楕円形の舟形土坑からは、下呂石の原石が詰められた水神平期の壺が発見されている。弥生時代の墓制としては他に土器棺墓や方形周溝墓があるが、大田の谷周辺では弥生時代を通じてこれら複数の墓制が併存し続けたようである。（第 73 図）

なかでも土器棺墓に関しては第 3 章（4 地点・東畑遺跡）で報告したように、一直線上に並ぶ特異な様相が看取でき、供献された丸小鉢の存在などとともに、尾張平野部とも西三河部とも違った独自の風習が醸成されていたことを推測させる。

弥生時代を通じた遺跡の様相としては、第 1 砂堆上では遺構を伴わず散漫に分布する前期資料の分布状況から、居住の中心は寧ろ横須賀から知多市八幡にかけての第 3 砂堆上であった可能性が高い。中期に至り第 1 砂堆方面に本格的な進出が始まり、砂堆南部の東畑地区を中心に後期から古墳時代に至るまで墓域を伴う集落が展開していく様子を窺い知ることが出来る。

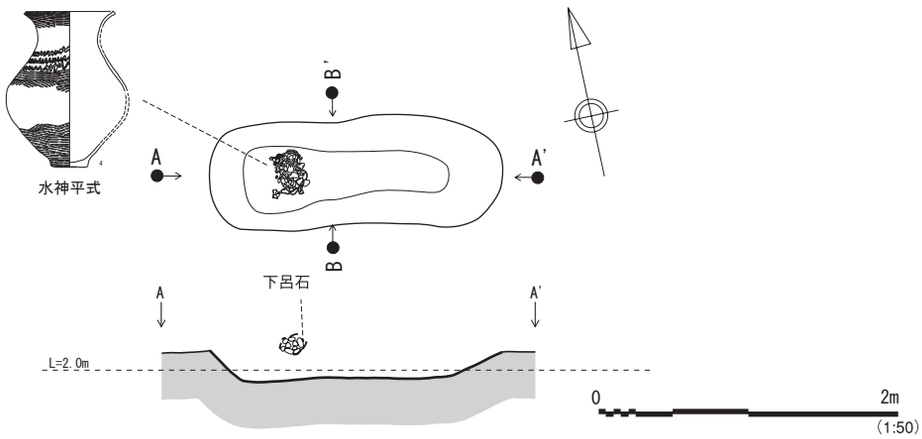
烏帽子遺跡からは古墳時代前期の可能性が高い土坑墓（木棺墓の可能性も残されている）も発見されており、墓壙内からはベンガラと硝子製勾玉・小玉、管玉が出土している。知多半島地域では名和町の兜山古墳以外に前期古墳は知られておらず、後期に入りようやく大田～横須賀の谷周辺にも複数の古墳が出現する。[註 3)]

古墳時代の集落としては、製塩を生業の中心に置く松崎遺跡が海浜集落として中心的な存在であったことが推測できる。当時の海岸線である第 3 砂堆とその背後の丘陵裾部一帯に広がりを見せる遺跡であるが、此の時期はいちばん海側の第 3 砂堆一帯と、第 1 砂堆東畑地区に集落の中心

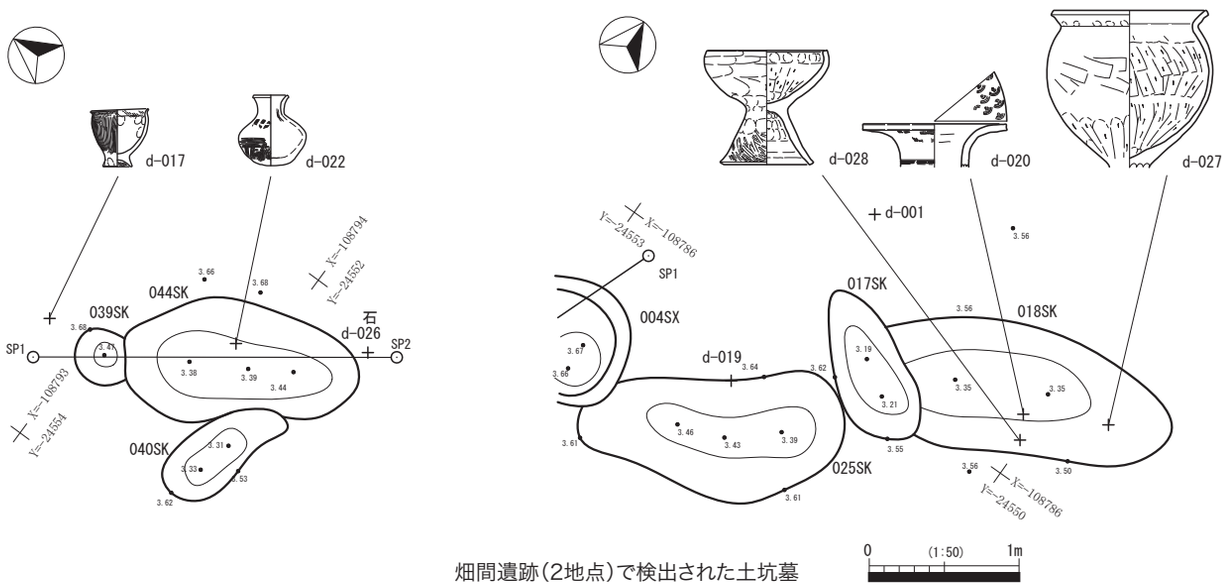
註 1）縄文時代の資料に関しては、最も海岸寄りの第 3 砂堆にある烏帽子遺跡と、横須賀の谷のいちばん奥寄りの砂堆上に位置する野崎遺跡より、縄文時代早期末の粕畑式土器片がそれぞれ 1 片ずつ発見されている。これらは弥生時代の遺跡であり、縄文早期の安定した遺物包含層が検出されているわけではない。その時期の中心的な遺跡は楠廻間貝塚である。

註 2）平成 21 年度調査、東畑遺跡 1 地点および 2 地点東側から集中的に出土した。

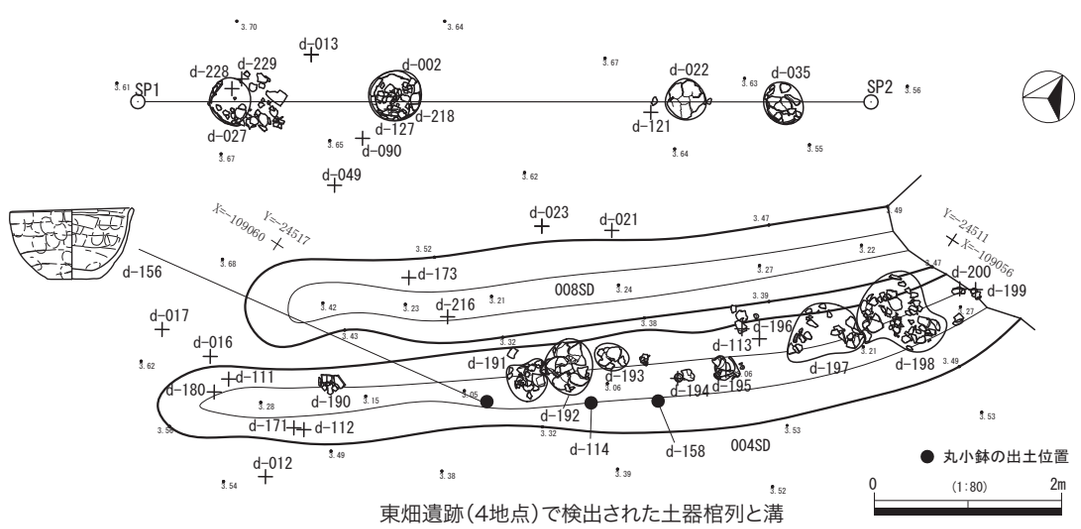
註 3）王塚古墳、丸根古墳、岩屋口古墳、釈迦御堂古墳などであるが、群集する様子は見られない。



烏帽子遺跡の土坑墓(『烏帽子遺跡Ⅱ』より)



畑間遺跡(2地点)で検出された土坑墓



東畑遺跡(4地点)で検出された土器棺列と溝

第 73 図　弥生期の多様な墓制

があったようだ。この松崎遺跡を中心にした古代の復元に関しては、早野浩二氏による優れた論攷があるので、そちらを参照されたい。

次に鳥羽離宮などに瓦を供給していた加木屋地区の古窯址群については、考古学的見地や荘園制研究分野など、多方面からの研究が為されている。柴垣勇夫氏によれば、地方産瓦が平安京に運ばれた背景には、荘園からの貢納とするよりも国司の成功（じょうごう）による瓦の供給があったとし、受領国司層の動きと関連したものと理解すべきと述べている。

また、鳥羽東殿では猿投窯東山地区の瓦陶兼業窯からの瓦も供給されていることも、より広域に支配権限を行使しうる国司の関与を裏付けるものであると指摘している。国司の命令は郡衙を経て在地領主、領民や工人集団などに伝えられていくのであろうが、未だ所在不明の旧智多郡衙についてはさまざまな状況証拠からこの大田～横須賀の谷に存在していた可能性も考えていかねばならない。

第１砂堆の方々で散漫に出土する加木屋谷由来の古瓦に関しては、例えば知多郡衙を当地に想定した場合、製品の取り纏めや船積みによる運送の拠点として第１砂堆一帯が機能していた痕跡であると解釈することもできる。[註)] また、あゆち潟周辺に存在したであろう愛知郡衙や領地関係にあった熱田神宮方面には、陸路よりもはるかに便利な海路が利用されていたことを考慮すれば、砂堆列に伴う潟湖または伊勢湾に砂州を伴い開口していた旧大田川河口周辺は、絶好の寄港地であったはずである。

中世になると第１砂堆の北半とやや空間を置いて八劔社を擁していた南部、そして第３砂堆の南側ほぼ全面に集落が展開していく。３地点の調査で明らかになったように、中世までには集落内に大小の区画溝を伴った居館が存在していたようである。複数条の溝を周囲に備えた居館は、区画内に屋敷墓を持つことや、その副葬品として短刀が埋葬されていたことや中国青磁の破片が検出されていることを考えると、一般庶民のものではない。

武豊町ウスガイト遺跡ではほぼ同時期の集落が発見され、溝で区画された屋敷地が検出されている。その規模は東西約 34m 南北 32m ほどで、面積は 1088㎡（約 330 坪）あり、区画内からは複数の土坑墓（190×40cm と 130×80cm）も発見されている。ウスガイト遺跡の場合は副葬品として金属製品は検出されていないが、陶器と土師器が供えられていたようである。

知多半島に於ける中世集落は現在の集落と重複して存在するものが多いことから、長くその実態がよくわかっていなかった。近年ようやく、大規模な開発や圃場整備などに伴い、ウスガイト遺跡のように現在の集落に隣接した農地の地下にも、中世の集落が眠っていることが判明してきたのである。大田地区の場合は、臨海沖積地範疇という地形的な制約もあり現在の集落とほぼ重複しているようだが、その原形は中世の荘園期にまで遡ることが可能である。

戦国時代になると、大田地区周辺のほとんど全ての寺院が「信長の兵火によって焼かれた」という伝承を史実として今に伝えているが、何らかの歴史的事実を背景に持つものであろう。弥勒寺遺跡の調査では実際に 16 世紀頃に火災で消失した建物の痕跡が検出されており、土壁に由来する焼土塊が平成 20 年度調査に続き今回も畑間遺跡１地点で数多く発見されている。

此の時期までには荘園公領制もすっかり形骸化し、知多半島にもさまざまな勢力が進出してきた。織田信秀亡き後、信長が跡を継いでからは文字通り群雄割拠の様相を呈し、知多半島北部には荒尾

註）烏帽子遺跡から大木之本遺跡周辺は、出土遺物からみて郡衙の有力な候補地になると思う。

氏、花井氏、水野氏、佐治氏らが、南部には三河国渥美の田原城主戸田氏が領地を拡大していた。このような混乱状態がいちおうの収束を見たのは、桶狭間の合戦（永禄３年 =1560 年）を経て永禄５年に信長と松平元康（家康）が和睦を結んで以後のことであるという。本能寺の変以後は知多を含む尾張が織田信雄の領地となり、その後秀吉→羽柴秀次の領するところとなるのだが、関ヶ原の合戦に先立ち志摩国鳥羽城主九鬼義隆が知多半島を攻略し、この弥勒寺周辺も戦火に遭ったとされる。

『横須賀町誌』によれば、

観福寺：同寺の旧記によると古寺領百五十貫（一に十五町ともいふ）あったけれども、織田信長の時之を没収せられ豊臣秀吉に至って又朱印を賜ったが、慶長中九鬼氏の暴火に焼亡し後絶へたという。

龍雲院：天文年中火災に罹って全部烏有に帰し云々

安楽寺・玉泉院・妙乗院：元亀天正の頃織田信長の兵火に罹り塔堂伽藍悉く烏有に帰し云々

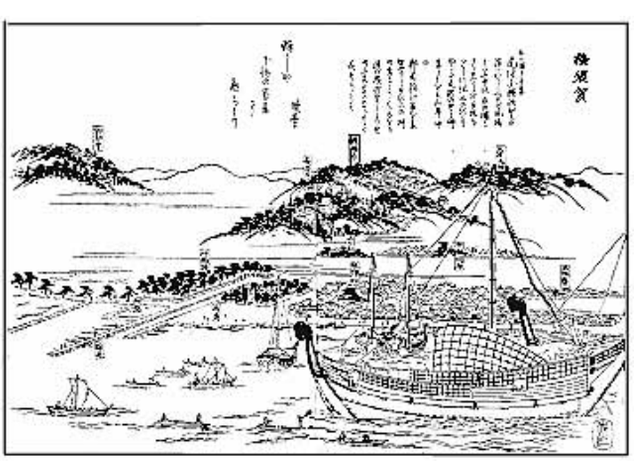
とある。このような興亡をを繰り返しながらも、大田の集落は廃絶することなく現在に至るまで居住が続けられていた。その理由としては、第一に集落周辺に半島部でも有数の広大な沖積地、即ち生産地を擁していたこと。船での往来が容易であったこと。同時に、時代を通じて何らかの政治的な拠点が置かれていたことなどを挙げることが出来る。

尾張藩の統治する時代になると、寛文 6(1666) 年には第二代藩主徳川光友が横須賀御殿を築いた。その位置は烏帽子遺跡に隣接する横須賀町の旧海岸部であり（第３砂堆）、現在の勤労センター・市民体育館辺りである。御殿用地は船の出入りしていた大田川の河口部であり、河川の氾濫などによる影響を避けるため、光友は横須賀御殿の築造と同時に現在の流路に付け替えたのである。

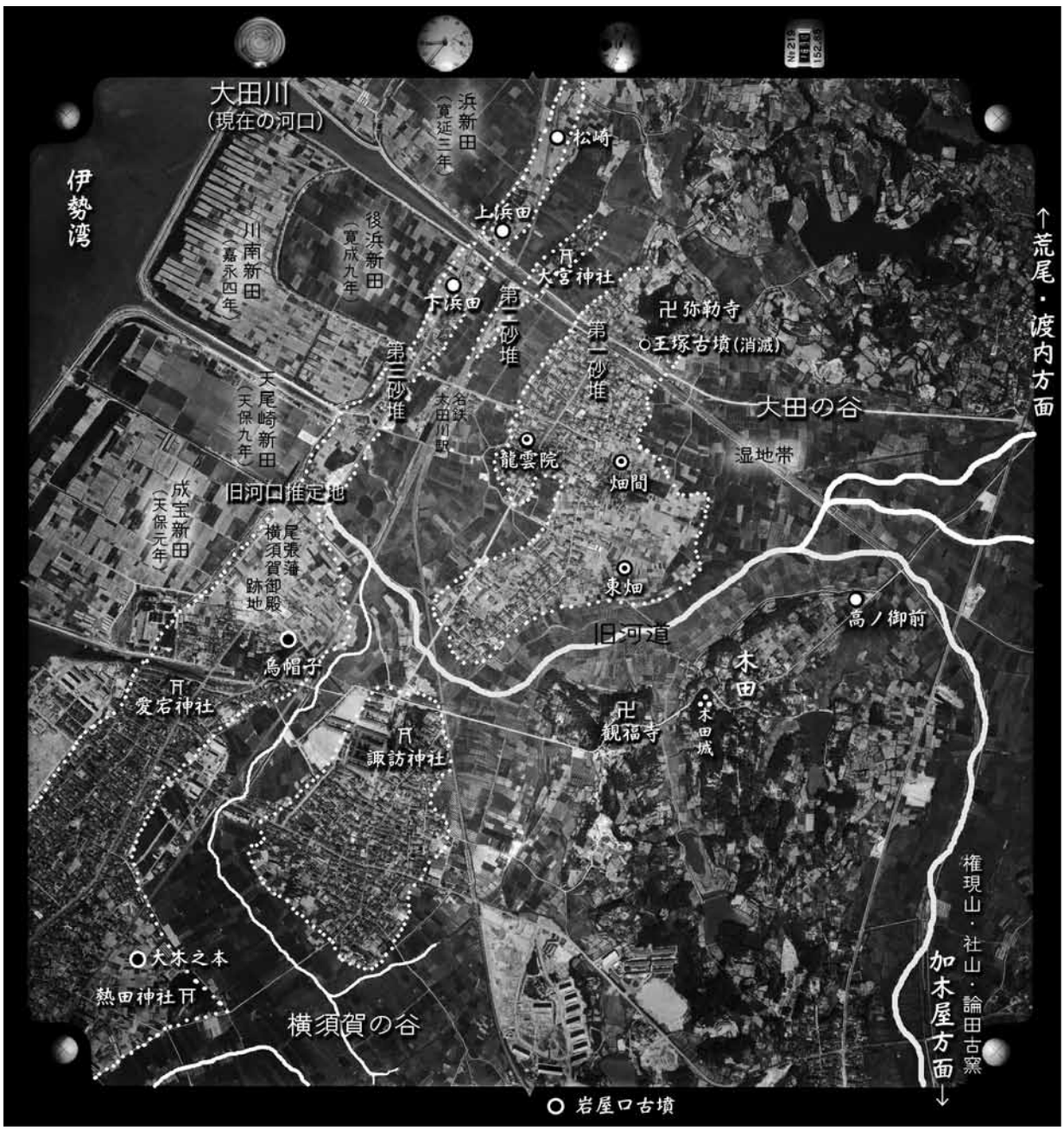
光友の没後に御殿そのものは取り壊されてしまったようだが、天明 3(1783) 年にはその跡地に代官所が置かれ、知多半島北部の行政的拠点として整備が進んでいく。また、17 世紀後半になるといち早く名和の海岸での新田開発が開始され[註)]、次第に海岸線を南下し、大田～横須賀の海岸部では寛延 3(1750) 年の浜新田（地積 139.6 反）を筆頭に、明治に至るまで開発は続けられていく。

新田開発時代の海岸線は後にコンクリート堤防として護岸されていったが、現在でも産業道路沿いに擁壁として再利用されている堤防を見ることが出来る。その海岸線は近代に至り更に海側に後退し、現在見るような巨大な工場地帯に変貌していったのである。

註）名和前新田：元禄 8(1695) 年築造、地積 333 反

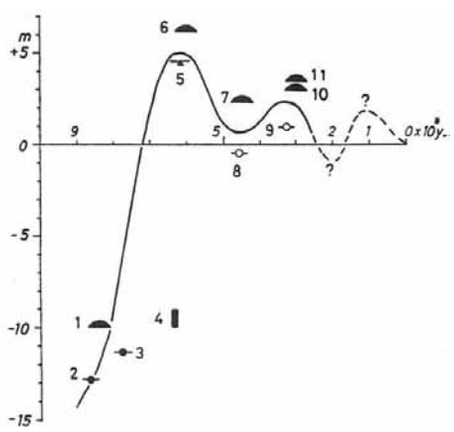


『尾張名所圖會』より横須賀



第 74 図　東海市大田地区遺跡分布図

撮影年月日 :1961 年 5 月 1 日　国土地理院　撮影高度 2000m　※旧地形と遺跡・寺院等の分布を加筆



1. 先苅貝塚（ca.-9.5 ～ -10m、8330±260y、B.P.）
2.-12.85 ～ -13.00m（8590±230y、B.P.）
3.-11.50 ～ -11.60m（7710±280y、B.P.）
4. アカホヤ火山灰（-9.0 ～ -10.0m、ca.6300y、B.P.）
5. 海成層の上限（4.3 ～ 4.5m、山下氏の計測）
6. 清水ノ上貝塚（ca.6m）　7. 乙福谷遺跡（ca.2.2m）
8.-0.5 ～ 0.70m（4560±170y、B.P.）
9.0.70 ～ 1.00m（3220±140y、B.P.）
10. 林ノ峰貝塚（ca.2.8m）　11. 下別所遺跡（ca.3.3m）

第 15 表　内海谷における相対的海面変化曲線

【資料解説】

平成 20 年度の畑間遺跡における発掘調査では、墨書された土師器皿（かわらけ）を集積したまじない遺構が発見された。(044SU= 次頁模式図参照)

墨書された文字は大まかに解読出来、「隆珎」という人名の他、経文の一部が書かれていたことが判明した。

資料 No.80 では、土師器皿の底面に三行に亘り「六親　七世父母　□□□」と書かれていた。このうち前二行が盂蘭盆経からの引用と思われるが、曹洞宗の回向偈にも冒頭に同様の言葉が唱えられる。即ち「六親眷属、七世の父母、有縁無縁三界の萬霊、法界の含識に回向す」がそれであり、前二句は対になって使われることが多いようだ。

「六親」とは父母兄弟妻子のことであり、「眷属」とは自分を取り巻く家族のことである。「七世の父母」とは実際に七世代ということではなく、それほどまで遡った先祖たちのことを指す。

No.80 の場合三行目筆跡が明瞭でなく判読できていないのだが、「二閏月」とも読める。人名のようには見えないので、供養の行われた日付が書かれていたのかもしれない。

肝心の「隆珎」に関しては、当地に所縁のある仏教関係者なのか、それとも先祖供養のまじないと思われるこの儀式の主催者（供養者）なのか判然としない。

検出された土師器皿は全部で 21 枚あったが、破片やその出土状況からうち 8 枚に墨書がみられた。土師器皿の出土状況を見ると、数枚から 5 枚ほどを 6 前後の山に分けて配置し、各山のいちばん上の皿は底を上にして蓋のように置かれていたようである。皿には何か盛られていたのであろう。周辺に火を焚いたような痕跡は見られなかったが、墨書された経文から、先祖供養のまじないであったことが推測できる。

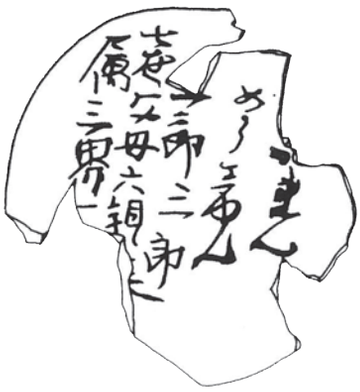
土師器皿の時期については、尾張平野部での編年研究が進んでいることや、畑間遺跡至近の弥勒寺遺跡で内耳鍋と伴出した例などから、15 世紀末から 16 世紀初頭のものであることが判明している。

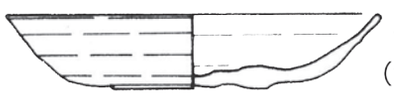
同様の例を調べていたところ、清洲城下町遺跡で出土していたことを知った。平成 5 年の調査で出土した SD01-7 がそれである。こちらは畑間遺跡例と違い、土師器皿の内面に墨書されている。文字内容はほとんど解明されているが、数人の人物名の後に「七世父母六親眷　属三界萬霊」と書かれてある。この場合、経文の前に書かれた人物名は所謂「眷属」即ち供養者一族または家族の名前であろう。

このように、戦国時代の当地方では、墨書した土師器皿を用いた先祖供養のまじないが行われていたことが明らかになった。これらはいずれも家族単位の小規模な供養であろう。

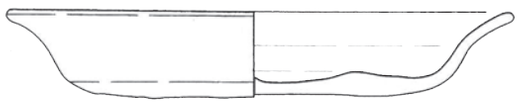
この他にも死者や先祖に対する追善供養の方法としては、柿経（こけらきょう）を製作することがある。薄く剥いだ細長い木の板に経文などを書写したもので、数十枚を束ね、更に数十束を一巻として束ねる場合も多い。当然多人数での書写が必要となるので、集落単位または寺院単位での製作が想定される。

柿経最古の例は京都鳥羽離宮で出土した 12 世紀代後半のもので、その後全国各地で 18 世紀まで製作されていたことが解明されている。当地方では清洲城下町遺跡の他、五条川を遡った岩倉市大山寺町小森でも出土しており、戦国時代には尾張平野一帯でも柿経供養の風習が広まっていたことがわかる。





SD01-7
（清洲城下町遺跡出土資料）

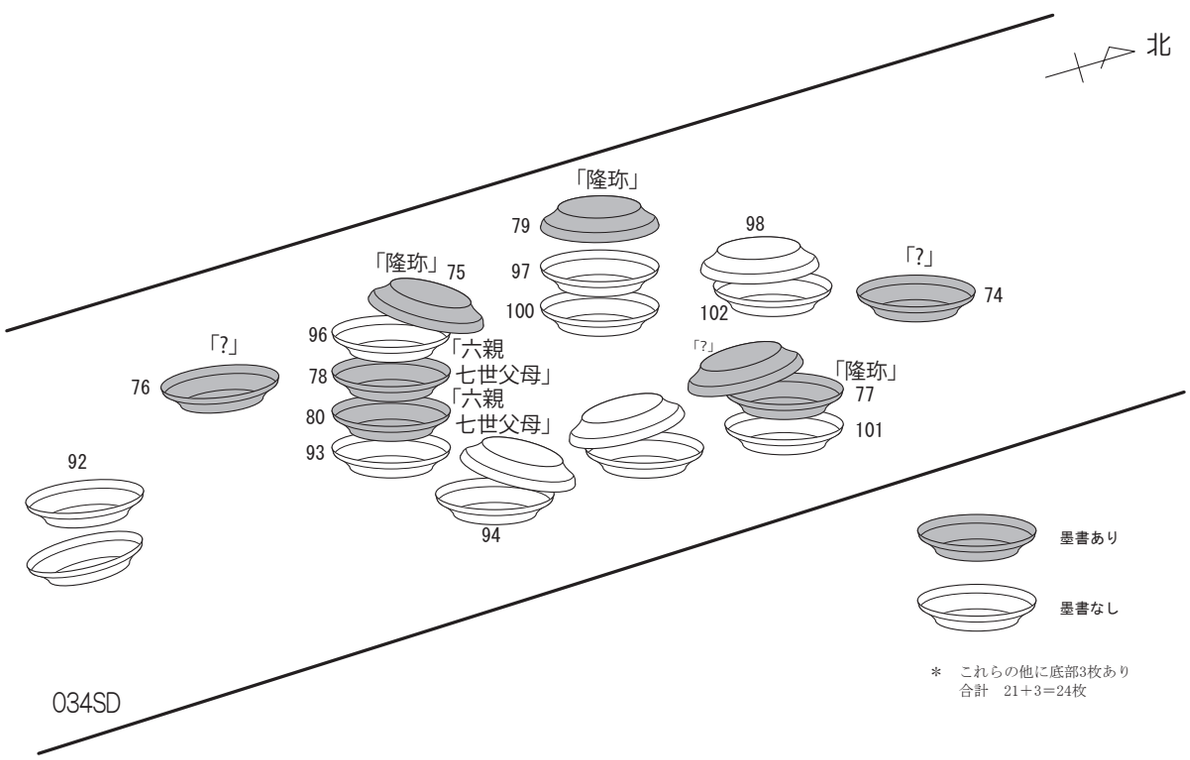


No.80
（畑間遺跡出土資料）

0　(1/2)　5cm

□里ん
めう萬ん
□一郎三郎
七世父母六親眷
属三界萬靈カ

六親
七世父母
二閨月カ



畑間遺跡 044SU 土師器皿集積遺構の構造（模式図）

《参考文献》

『上野町史』1949　上野町
『八幡のむらのおいたち』八幡町史資料第２集 1956　八幡町史編纂会編
『権現山古窯址』白菊古文科学報第２集　1965　白菊古文化研究会
『横須賀町誌』1928　愛知県史蹟編纂会・知多郡横須賀町役場発行
『横須賀町史』1967　横須賀町役場
「高ノ御前遺跡第３地点試掘調査報告」『中ノ池遺跡群発掘調査報告書』付載１　1982　東海市教育委員会
『トゝメキ遺跡』1988　東海市教育委員会
『東海市史　通史編』1990　東海市史編さん委員会
『浅山新田堤防発掘調査報告』1996　東海市教育委員会
『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報』1997　東海市教育委員会
『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』1998　東海市教育委員会
『大木之本遺跡第Ⅱ地点発掘調査報告』1998　東海市教育委員会
『上浜田遺跡発掘調査報告』1999　東海市教育委員会
『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』2009　東海市教育委員会
『平成 22 年度　畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』2012　東海市教育委員会
『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』2012　東海市教育委員会
永井伸明・宮澤浩司「伊勢湾を望む海辺の遺跡 - 東畑遺跡等発掘調査概報 -」『研究報告とうかい』創刊号　2007　東海市教育委員会
『細見遺跡（第三次発掘調査)』1986　知多市教育委員会
『楠廻間貝塚』2005　知多市教育委員会
『南知多町の考古資料』『南知多町誌　資料編 6』抜刷 1997　知多古文化研究会編
『清洲城下町遺跡Ⅵ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 65 集　1996　愛知県埋蔵文化財センター
『下津北山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 88 集　2000　愛知県埋蔵文化財センター
*『烏帽子遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 117 集　2003　愛知県埋蔵文化財センター
『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告』1999　愛知県教育委員会
『愛知県史資料編１　考古１　旧石器・縄文』2002　愛知県史編さん委員会
『愛知県史資料編２　考古２　弥生』2003　愛知県史編さん委員会
『愛知県史別編　中世・近世　瀬戸系』2007　愛知県史編さん委員会
『愛知県史別編　中世・近世　常滑系』2012　愛知県史編さん委員会
『知多の古瓦』1993　半田市立博物館
『日本の地質　中部地方 2』1988　共立出版株式会社
藤本元啓『中世熱田社の構造と展開』2003　続群書類従完成会
小林達雄編『総覧　縄文土器』2008
松島義章「小規模なおぼれ谷に残されていた縄文海進の記録」『海洋科学　完新世海面変動』1983　海洋出版
杉崎章「知多半島における古代漁村集落の土器」『古代学研究』第 15・16 号　1956　古代学研究会
杉崎章「東海地方の古代海浜集落」『知多古文化研究２　磯部幸男先生退官記念論文集』1986　知多古文化研究会
柴垣勇夫「十二世紀の常滑窯の瓦生産窯」永原慶二編『常滑焼と中世社会』1995　小学館
中野晴久「常滑窯の研究　～近世赤物について～」『知多古文化研究 10　杉崎章先生追悼論文集』1996 知多古文化研究会
奥川弘成「知多半島の集落の動向」『東海の中世集落を考える　―考古学から中世のムラをどう読み解くか―』2002　第９回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
武部真木「尾張低地部の中世集落」同上
増子康眞「愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推移」『古代人 63』2003　名古屋考古学会
飴谷　一「東海のイメージ no,4　加工円盤について」『考古学フォーラム 9』1998　考古学フォーラム編集部
武部真木「中世土師器皿の様相　―12 ～ 16 世紀の尾張平野―」『考古学フォーラム 13』2001　考古学フォーラム編集部
* 早野浩二「臨海の古墳時代集落　―松崎遺跡の歴史的素描―」『研究紀要第６号』2005　(財) 愛知県埋蔵文化財センター
松浦五輪美・原田憲二郎「柿経の考察―分類と編年について―」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1992　奈良市教育委員会
野口泰子「加工円盤－出土状況－」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要第５号』2003　名古屋市見晴台考古資料館
伊藤正人「縄文時代の名古屋－地形変遷と遺跡立地－」同上

* 印は愛知県埋蔵文化財センター website からダウンロード可能のものです　url=http://www.maibun.com/top/

付載 1　東畑遺跡出土の縄文土器（図版第 48・49）

平成 21 年度の東畑遺跡の発掘調査では、2 地点の東寄り部分と 1 地点において、縄文晩期土器が多く出土している。現地は第 1 砂堆南端であり、大田川の旧河道に面している。平成 23 年度調査では、東畑遺跡 4 地点がこれらの調査区から北に 50m ほどしか離れていないにもかかわらず、検出された縄文土器は僅か 4 片の出土であった。

今回縁あって報告させていただく土器の大半は縄文晩期の雷Ⅱ式以後の資料であったが、ごく少量の中期～後期資料も含まれていた。

大田の谷周辺の縄文遺跡としては高ノ御前遺跡が知られるのみであったが、丘陵地周辺のみならず、縄文海進最頂期以後いちはやく陸化した第 1 砂堆上にも縄文晩期人の活動が及んでいたことを表すものとして、今回の発見は極めて重要である。

資料の大半は従来当地方では本刈谷式と呼ばれてきたもので、近年増子康眞氏によって学史的な見地から再検討が為され、雷式として再編されたものが中心である。今回の分類も増子氏のものに従った。

なお今回は有文土器の口縁部資料を中心に約 100 点の紹介に留めたが、出土資料の中には晩期後半のものと考えられる条痕文のみの土器や無文土器も破片数にして更に 100 点以上が出土しており、それらは機会を改めて紹介することとしたい。

また、既に刊行された報告書で明らかなように、これらの縄文土器の出土状況は弥生期から古墳時代前期にかけて同所に営まれた集落の遺物包含層からの出土であり、残念ながら縄文期の遺構は確認されていない。よって個々の土器片の出土地点に意味を探るより、本稿では限られた調査区内や地域（小字単位）のなかでの濃淡に注目して記述を進めることとする。

1 は縄文中期前葉の北裏ＣⅠ式土器の口縁部で、現在砂堆上で確認される資料としては最古の資

料と言うことになる。粗い縄文が外反する口縁部周辺に付けられ、頸部を半截竹管による沈線で区切っている。

2 ～ 5 は後期の堀之内Ⅱ式から東海地方西部の天子神社様式期に属するもの。2･3 は同一個体で、力強い列点や沈線で口辺部を飾り、胴部には細かな縄文を用いている。縄文以下は浅めの沈線がみられることから､磨消縄文で文様を構成する可能性が高い。器面にタール状の物質が付着している。4･5 は浅い沈線で文様を描き磨消縄文を用いられている。従来天子神社様式と呼ばれていたもので、球形の器形を持つ注口土器である可能性もある。6 は幅 6mm の半截竹管状工具で 2 本一組の細い平行線を用い、波状部を中心に口縁部に文様を展開していくもので、後の凹線文土器の文様に繋がる要素から、ここに置いた。

7 は波状口縁の頂部を中心に顔状に配置した 3 点の刺突文と両脇に沈線文を展開させるもので、後期の元住吉山式に属する資料である。8 は平口縁だが深い沈線区画を対向させる文様構成でのものであまり類例を知らないが、凹線文期のものであろう。9 はキャリパー状に内湾した波状口縁器形の土器で、口縁に平行して 3 本の沈線がみられる。口端の一条は棒状器具で、下二条は巻貝による施文である。10 は 3 本の並行沈線のみの資料で、やはり巻貝による施文と思われる。これらはいずれも後期の凹線文土器に分類される。11 は器面が黒色研磨された精製土器で、口辺には列点を巡らせ、その下に間隔を置いて沈線を巡らせている。

12 以下は雷Ⅱ式土器である。肥厚させた口縁部に主に小巻貝による沈線や連続刺突文、押し引き文を施す。文様の構成要素などをもとに細分をおこない、12 ～ 32 までを雷Ⅱａ式とした。12 は先端を割った小巻貝による沈線を口縁部文様帯に 4 段施すもので、器形は拓影図の左端が僅かに上がる波状口縁である。波頂部直下には刺突文を縦位に施し、沈線は意図的に小刻み且つ不規則に震えるように引かれている。器面全体の地文は巻貝によるもので、主体を為す。13 はほとんど肥厚しない文様帯に 2 ～ 3 条の巻貝沈線が引かれている。胴部の地文は撫で消されているようにも見える。14 は白い胎土の土器で、僅かに肥厚させた口縁部に 2 条の震え沈線を施す。15 は口縁部の肥厚部分に深く突き刺すように、巻貝による 2 条の震え沈線が引かれている。16 は巻貝条痕を地文とし、口縁部に深く二条の巻貝沈線が巡らされている。17 は顕著な震え沈線が 3 条みられるもの。18 は肥厚させた口縁部に押し引きとも形容しうる巻貝沈線を 3 条施したもので、胎土中に 1 ミリ前後の粗砂を多く含む。19 は肥厚部直下に粘土紐の繋ぎ目を残すもので、緩やかな波状口縁器形を呈する可能性もある。20 は密な連続刺突が 2 条みられ、地文は巻貝条痕である。21 は 3 段の押し引き沈線が施されている。22 は 3 条の細かな押し引き沈線とも表現できるが、結果的に震え沈線状に仕上げられた印象もある。23 は白い胎土の土器で、密な連続刺突がみられる。24 と 25 は同一個体で、浅い貝殻による沈線が施されたもの。地文は貝殻条痕である。26 は波状口縁の頂部に押圧を、文様帯の下端に先端を割った巻貝による刺突文を持ち、左右に弧状に並行沈線を展開させるもの。施文具は半截竹管である可能性も有る。27 は貝殻条痕を地文にし、巻貝による数センチ単位の短い沈線を 3 段巡らせるもので、やや内傾する器形が特徴である。28 はやはり断続的に巻貝沈線を施すもので、器表面にタール状の物質がところどころみられる。29 は波状部で、口縁頂点には刺突文がある。巻貝条痕が全面に見られるが、同一の施文具で波頂部の左肩から右に向かって弧状の文様が描かれているようにも見れる。30 は貝殻条痕であるが、地文と一体化した条痕の区切り目が文様帯を意識しているようである。31 は内外の器面が条痕調整されている

が、文様帯は無文である。32 は地文として全面に巻貝条痕が見られるが、時折ストロークの長い沈線状に巡らされた部分が有り、文様帯を意識したものであるのかもしれない。33 ～ 37 は他地域からの搬入土器である。33 は壺型の器形を呈するもので、ヘラによる鋭い沈線や三角形の抉り込み、刻目を施した隆帯などの特徴から橿原式土器である。当地域では既に下別所式段階での共伴が知られているが、本遺跡では便宜上Ⅱ a 式範疇に入れた。34 ～ 37 は貼付隆帯や刻目を施した隆帯が特徴的な土器で、34 は後期上ノ段式の可能性も有る。35 はやや粗雑な貼付隆帯を組み合わせて波状部を作り出しており、清水天王山式系の可能性がある。36 は緩い壺器形で頸部に刻目隆帯を 1 条巡らせている。37 は薄手の波状口縁器形で、波頂部と頸部に巡る貼付隆帯に刻目を施す。これらは晩期上ノ段式に類するものであろう。

38 以下は雷Ⅱ b 式に分類できるものである。基本的には沈線と刺突文または刺突列の併用が主体となるが、小巻貝による擬縄文を併用したものや顕著な波状沈線を施したものも含めた。38 は波頂部から左右に弧状の沈線を展開し、その上下に連続刺突を施すもの。地文は貝殻条痕である。39・40 は同一個体で、貝殻条痕を地文とする波状口縁深鉢で、やはり波頂部から左右に展開する弧状沈線と連続刺突文の併用が特徴である。本例の場合沈線原体は頂部の割れた小巻貝であり、結果として並行沈線になっている。41 は胎土に粗砂粒子を多く含み、刺突列の間に 2 条の巻貝沈線が引かれている。文様帯はほとんど肥厚されていない。42 は棒状具による深い沈線の上下に刺突列を施すもの。43 は浅い 2 条の沈線の上下に刺突列を施す。口縁部は緩やかな波状になる可能性がある。44 は先端を折った巻貝による沈線と鋭い刺突を併用する。45 は口縁部文様帯に巻貝沈線を弧状に展開させ、周辺を刺突文で飾るもの。46 とは別個体だが、共に胎土に粗砂粒子を多く含み、地文は巻貝条痕である。47 は幅の狭い文様帯に約 1cm 単位の半截竹管による押し引きを 2 段施すもの。48 は巻貝沈線の上下に刺突文列がみられる。49 ～ 53 は口縁部文様帯の地文として擬縄文が使われているもので、前段階の寺津式からの流れを重視する場合はⅡ a 式に含めるべきかもしれない。54 は波状口縁の深鉢で、2 列の刺突文列がみられるが、波頭部周辺に限っては顕著な巻貝条痕を胴部にまで施しており、興味深い施文方法である。54 は幅の狭い文様帯に鋭い刺突文列が 2 条施されているが、地文として擬縄文がみられる。器表には煮沸使用の痕跡であろうか、吹きこぼれのような跡がみられる。56 ～ 59 は文様帯に短線列を施すもので、56 は巻貝による 3 段の短線列が、57 は長さ 3cm ほどの太い巻貝沈線が 2 段みられる。58 は弱々しい巻貝沈線が 2 段みられる。59 は貝殻条痕が地文で、巻貝による短い沈線が 2 段巡る。

60 ～ 69 は口縁部文様帯に先端を割った巻貝による波状沈線を施す一群である。60 は巻貝条痕を地文とする。61 は胎土に粗砂粒子を多く含み、穏やかに上下する波状沈線が 3 段施されている。62 は白い胎土で同期した波状沈線が 2 段みられる。63 は粗砂粒子を多く含む胎土で、文様帯を僅かに肥厚させ、対向する波状沈線になっている。64・65 は同一個体で、殆ど同期した 2 条の巻貝沈線を巡らせてある。平口縁であるが 64 の拓影図で明らかなように、文様帯を縦に区切る部分がみられる。66 は緩めの波状沈線が 2 条。67 は白い胎土の土器で地文は貝殻条痕である。68・69 は同一個体で、激しく乱れた波状沈線が 2 条施されている。波状口縁になる可能性が高い。

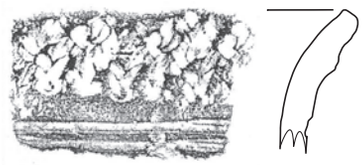
70 ～ 94 は雷Ⅱ c 式に分類した。増子氏によると、半截竹管沈線 + 刺突列という文様の併用例がほぼ消失し、押引文が増加する。口縁部文様帯の肥厚部分が縮約され狭くなり、施文部分が内側に傾斜する。サルボウ・ハイガイなどの縁端を使い刺突する半月状の刺突列が指標となるというこ

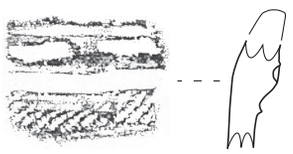
とである。70 は口縁部文様帯の上下端に巻貝による刺突文列を巡らせる土器で、地文は巻貝条痕を撫で消すように仕上げられている。緩やかな波状口縁は双頭の波頭で、貝による押圧が施されている。71 は撫で消された貝殻条痕を地文とし、刺突文列が 3 段施されている。72 は胎土に粗砂粒子を多く含み、刺突文列を 2 列施す。73 は貝殻条痕を地文とし、不規則で浅い刺突文列を 2 条巡らせている。74 は巻貝条痕を地文とし、巻貝による刺突文を施したもので、波状口縁を為す。75 は貝殻条痕地文で刺突文列を 2 段施すもの。76 は巻貝条痕地文で 3 段の細かな刺突文列を施すもの。77 は貝殻条痕地文にやや不規則で細かな刺突文列を 3 段施すもの。78 は口縁部の狭い範囲に 2 段の刺突文列を施すもの。79 は巻貝条痕地文で、極めて幅の狭い文様帯に 2 段の刺突文列が施されたもの。80 は貝殻条痕地文で肥厚の見られない口縁部にやや密に 2 段の刺突文列を施すもの。81 は粗砂粒子を多く含む胎土で、幅の狭い文様帯に弱々しい刺突文が施されている。82 は貝殻条痕が撫で消されたような器面に細かな押引文を 2 条施すもの。83 は殆ど肥厚されない口縁部に緻密な連続刺突を 2 段施してある。84 は口縁がやや内傾する器形で幅狭い肥厚部に鋭い刺突列を 2 段施してある。85・86 は貝殻条痕を地文とし、半截竹管による連続刺突は 2 段施すもの。87 は大きく開く器形で幅狭い肥厚部に浅い刺突をやや密に施してある。88 は貝殻条痕地文で、幅狭い肥厚部に緻密な押し引きが 2 段みられる。89 は直径約 26cm ほどの深鉢で、幅狭い肥厚部に貝殻原体による刺突を 2 段、密に巡らせている。90 は巻貝条痕地文で、狭い文様帯に細かな貝殻刺突を 2 段巡らせてある。91 はやはり幅狭い肥厚部に並行沈線と刺突文を併用するもの。92 は長さ 2cm 弱の短線列を 3 段施すが、3 段目は肥厚部の下端に置かれている。93 は摩耗によりよくわからないが、貝殻条痕地文のようである。もはや肥厚部に顕著な施文は見られない。94 は巻貝条痕地文の浅鉢で、文様帯を意識した 1 条の巻貝沈線が巡らされている。

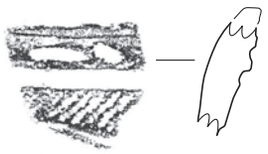
95 以下は雷Ⅱ式に続く型式のもので、桜井式、稲荷山式などに分類される資料である。95 は四角く肥厚させた口縁部に半截竹管状器具で鋭い刺突を施してある。96 はやや内傾した器形で、口縁部を肥厚させるために粘土紐を貼り付けた時の指撫で痕をそのまま残している。刺突の原体は半截竹管であろう。97 は粗雑に肥厚させた口縁部には巻貝条痕を、胴部には貝殻条痕が地文として用いられている。粗砂粒子を含む胎土で、口縁部には巻貝先端による刺突を斜めに巡らせてある。98 は粗製土器で指撫でによる器面調整が為されている。口縁部から胴部にかけて弧状に展開する調整痕は、恐らく何らかの文様を意識したものであろう。99 は直径約 24cm の粗製深鉢で、指撫でや篦による調整痕が顕著である。拓影図右側に見られるように、巻貝条痕を間隔を置いて複数条垂下させる部分も有り、これもまた何らかの文様意識の片鱗である可能性もある。

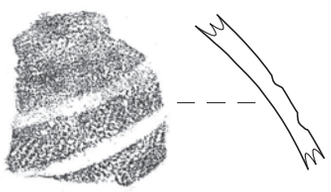
今回報告する資料は以上であるが、冒頭にも記したように、これら有文土器の他にも無文土器が 100 片以上検出されており、それらは雷Ⅱ式に続く桜井式以後急増する粗製土器に相当する可能性も高い。少なくとも東畑遺跡における縄文期は晩期前半の雷Ⅱ式から桜井・稲荷山式段階までが含まれたものであるという可能性を念頭に置く必要が有る。

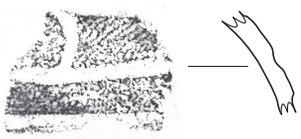
なお、参考資料として名和町塚森遺跡出土の縄文土器拓影図と、高ノ御前遺跡第 3 地点出土の土器拓影図を再編して掲載した。高ノ御前遺跡に関しては第 1 章の歴史的背景でも言及した如く、さまざまな意味で予兆的な遺跡である。これら晩期資料の他にも、断片的ながら縄文前期・中期・後期資料も出土しており、大田～横須賀の谷周辺に概期の未知の遺跡が眠っている可能性を示唆し

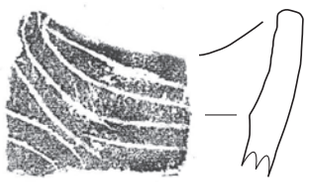

1 (d-1419)

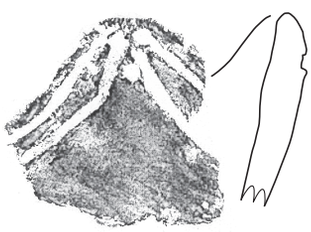

2 (d-1878-2)

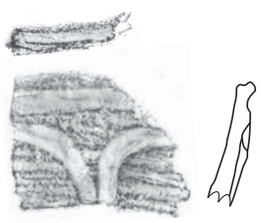

3 (d-1879-5)


4 (d-2016-1)

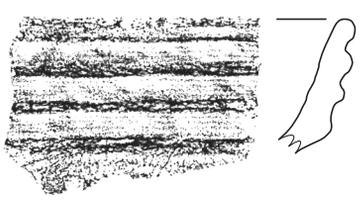

5 (d-1790-13)

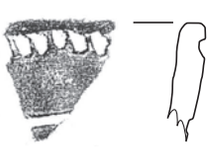

6 (d-1742-1)

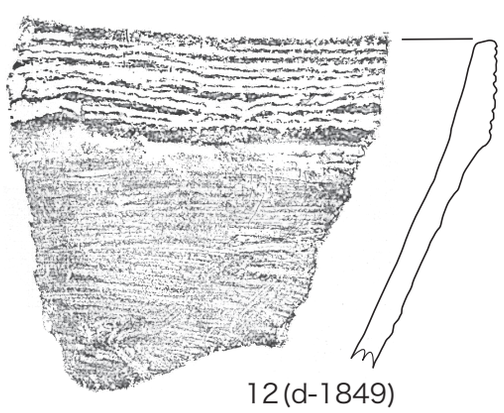

7 (d-2314)

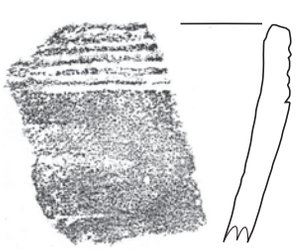

8 (d-135)

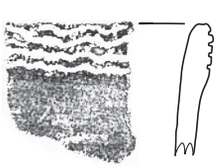
9 (d-1348-1)

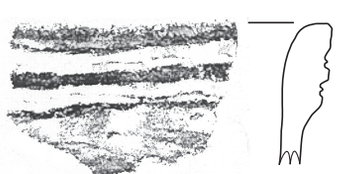

10 (d-121)

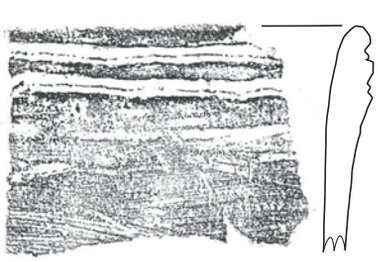

11 (d-1965-7)

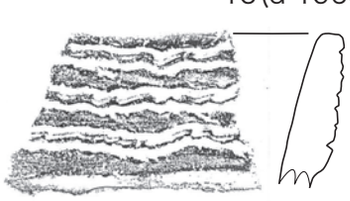

12 (d-1849)

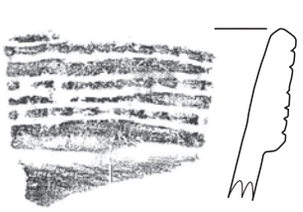

13 (d-1962-2)


14(d-1504-1)


15 (d-1966)

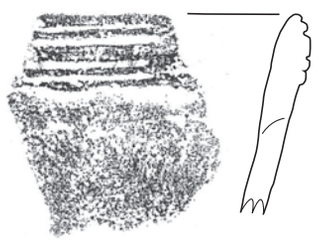

16 (d-2224-1)

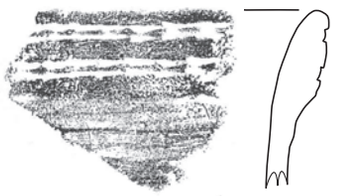

17(d-1848-3)


18 (d-1880)

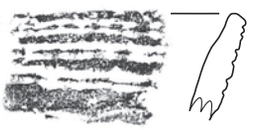
0 (1/2) 5cm

縄文土器拓影図 1

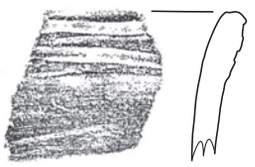

19(d-1925-2)

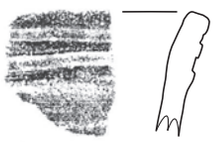

20(d-1743-1)

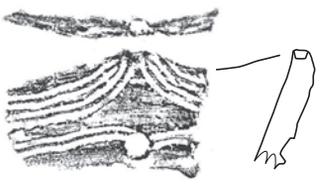
21(d-1872)

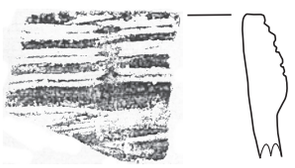

22 (d-1461-1)

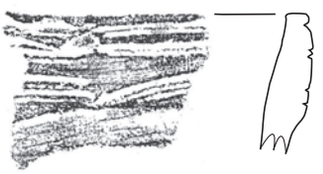
23(d-1506-4)

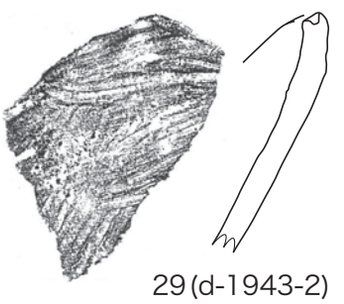

24 (d-1888-4)


25 (d-1930-1)

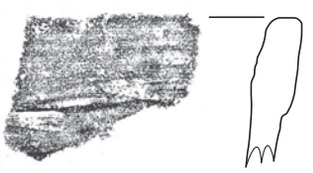

26 (d-2021-1)


27(d-1772-4)

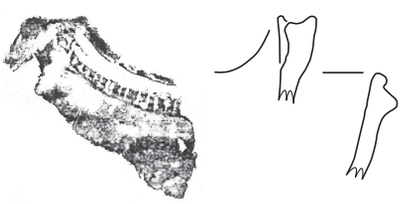

28 (d-1844-2)

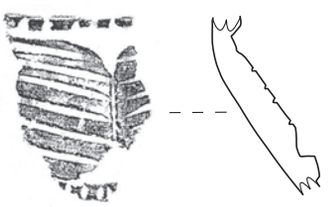

29 (d-1943-2)

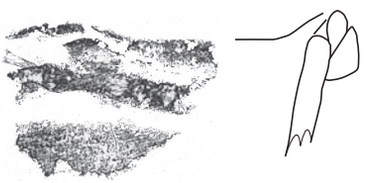
30(d-1876)

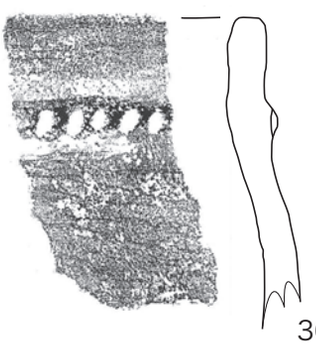

31 (d-1879-2)

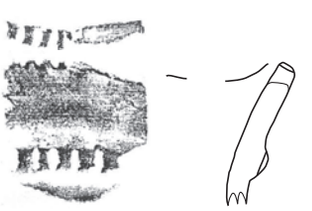
32 (d-1769)


34(d-1878-1)


33 (d-2038-1)

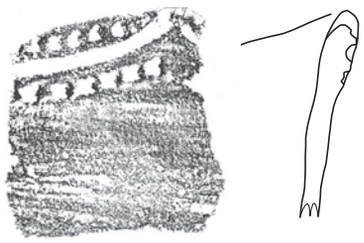

35(d-1928-1)


36 (d-1652)

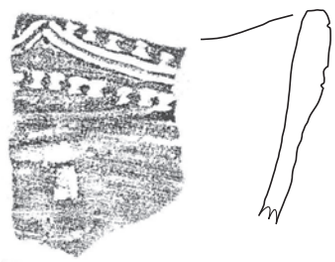

37(d-1474-4)

0 (1/2) 5cm

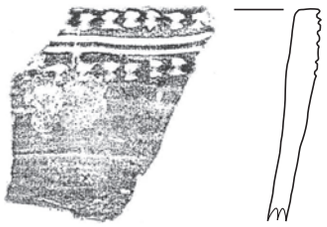
縄文土器拓影図 2



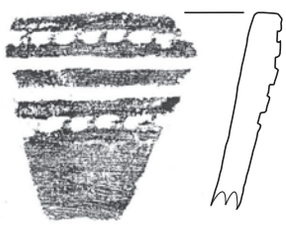
38 (d-1879-3)



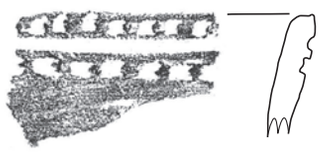
39 (d-1474-5)



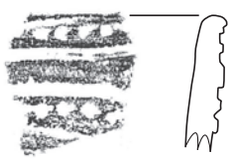
40 (d-1965-4)



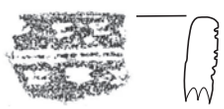
41 (d-1506-1)



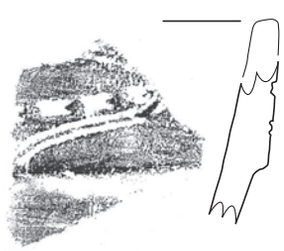
42 (d-1653)



43 (d-1965-6)

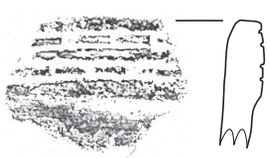


44 (d-1789-4)

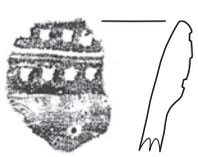


45 (d-1887-1)

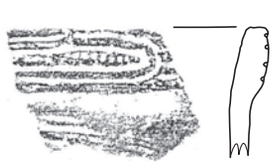
46 (d-1789-3)



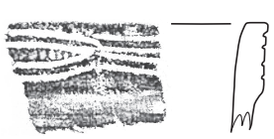
47 (d-1878-3)



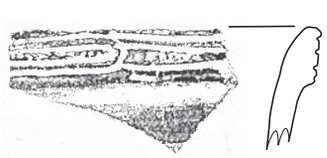
48 (d-2008)



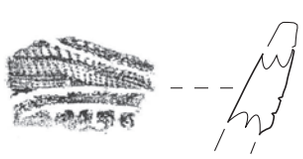
49 (d-1623-2)



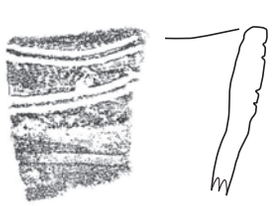
50 (d-1790-1)



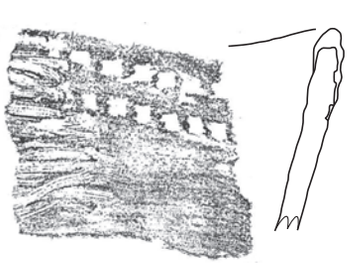
51 (d-1793-4)



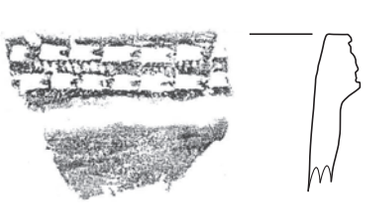
52 (d-1933-4)



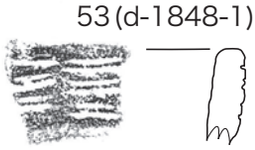
53 (d-1848-1)



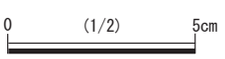
54 (d-1478-2)

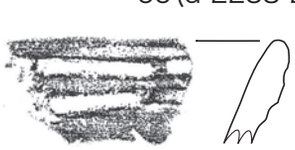


55 (d-2238-2)

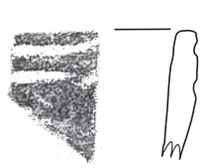


56 (d-1404-3)





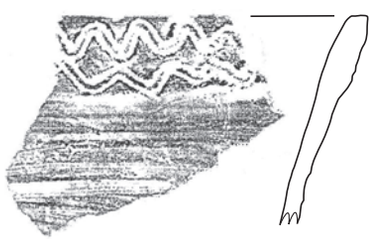
57 (d-2194-1)

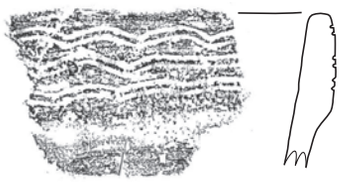


58 (d-1877)

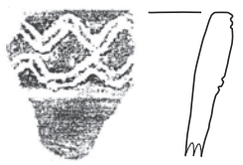
59 (d-1928-5)

縄文土器拓影図 3

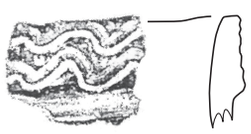

60 (d-2053)

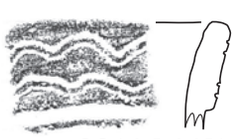

61 (d-1399)

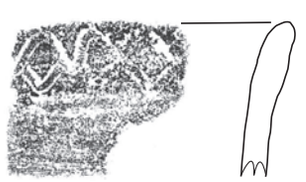
62 (d-2008-1)

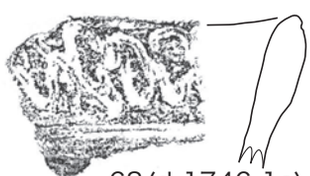

63 (d-2007-3)

64 (d-1790-7)

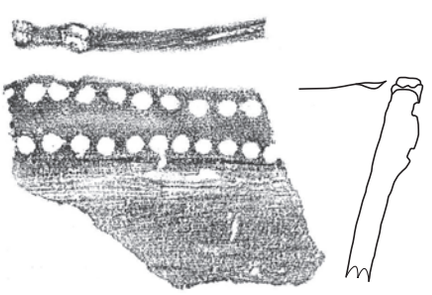

65 (d-1772-5)

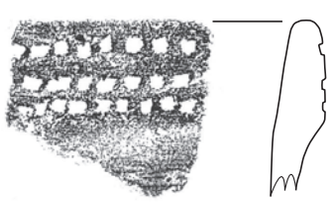

66 (d-1441)

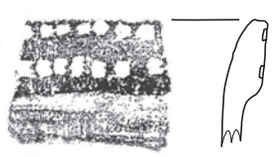

67 (d-1873-1)


68 (d-1746-1a)

69 (d-1746-1b)

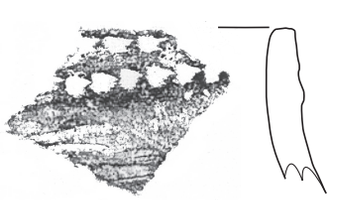

70 (d-1933-1)

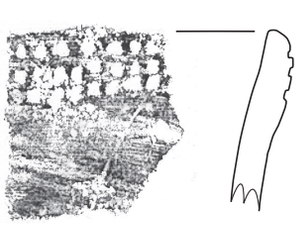

71 (d-2192)

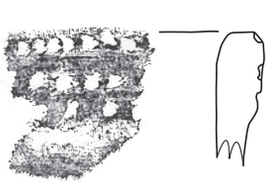

72 (d-1931)

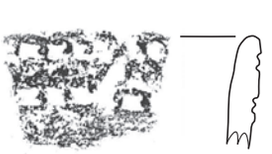
73 (d-1506-3)

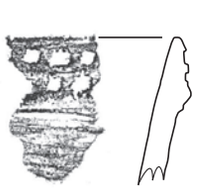
74 (d-139)

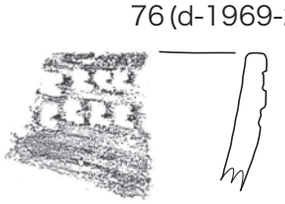

75 (d-1772-3)

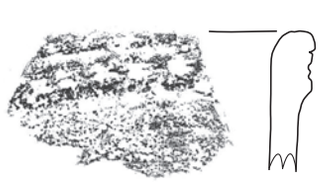

76 (d-1969-2)

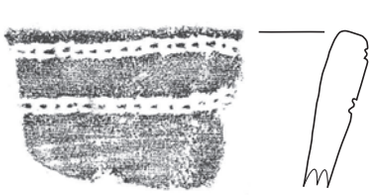

77 (d-2294)

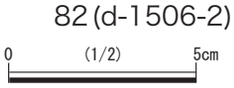

78 (d-1791-9)


79 (d-1879-6)

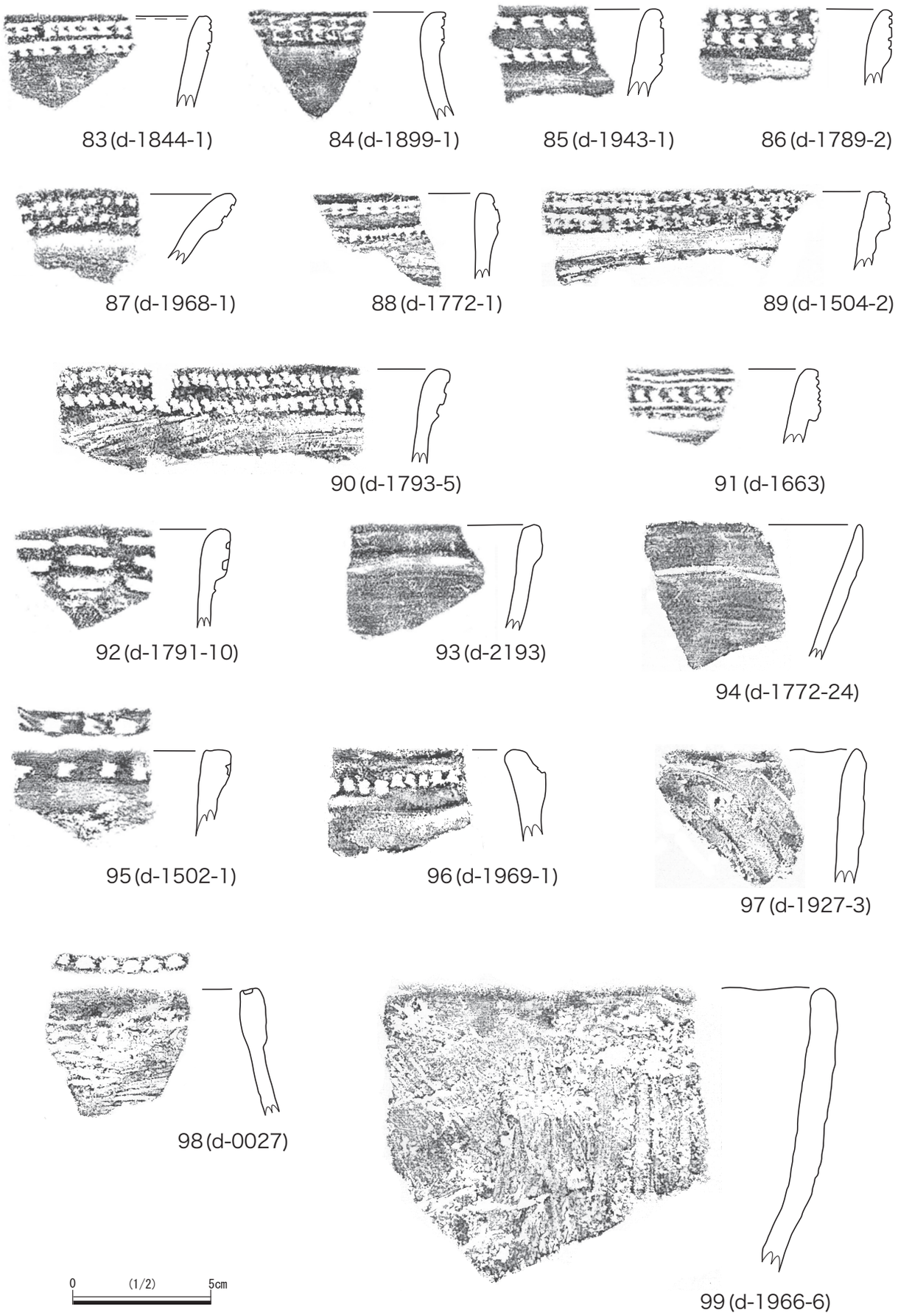

80 (d-1423)


81 (d-1459)


82 (d-1506-2)



縄文土器拓影図 4

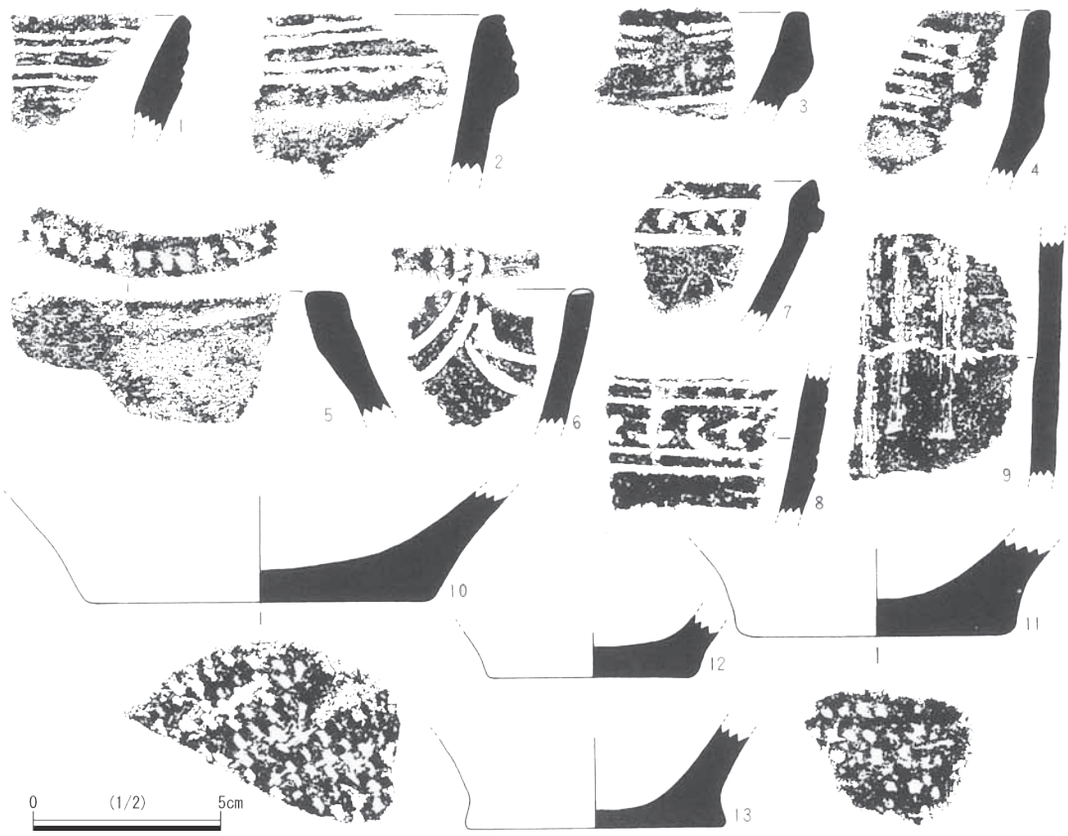

83 (d-1844-1)
84 (d-1899-1)
85 (d-1943-1)
86 (d-1789-2)
87 (d-1968-1)
88 (d-1772-1)
89 (d-1504-2)
90 (d-1793-5)
91 (d-1663)
92 (d-1791-10)
93 (d-2193)
94 (d-1772-24)
95 (d-1502-1)
96 (d-1969-1)
97 (d-1927-3)
98 (d-0027)
99 (d-1966-6)
0 (1/2) 5cm

縄文土器拓影図 5

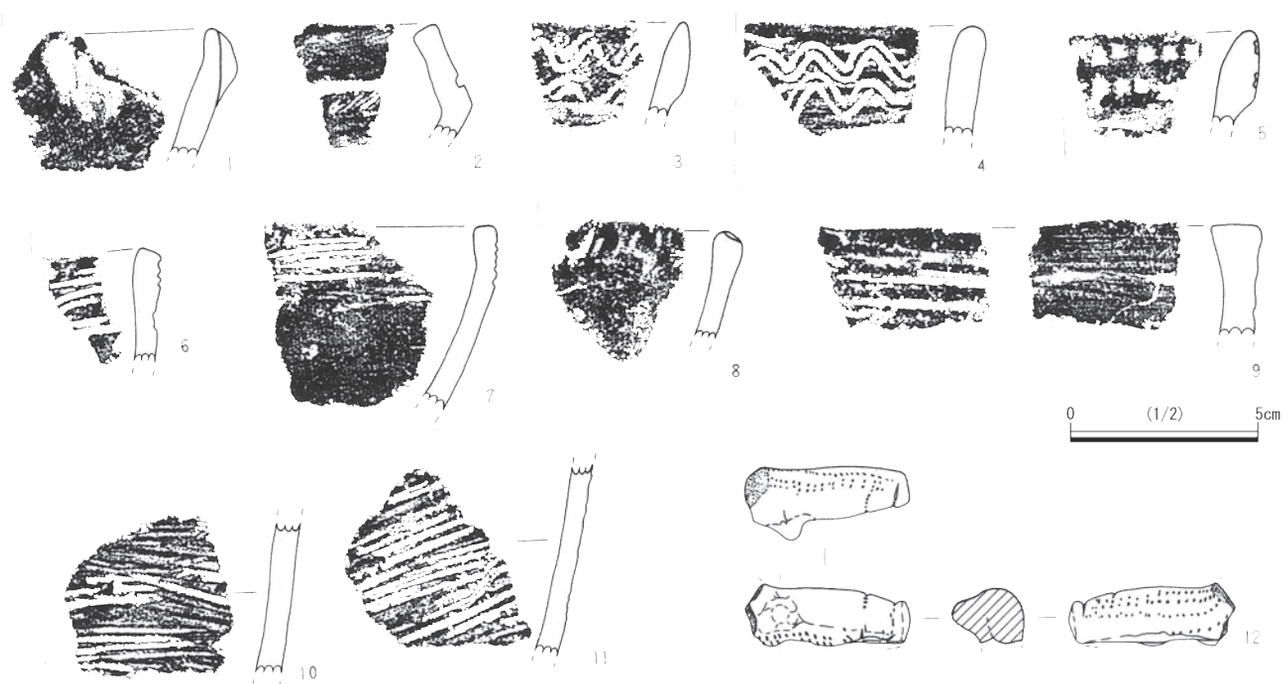
ているのかもしれない。

※なお本稿を掲載するにあたって、東海市教育委員会の様々な便宜を得た。とりわけ平洲記念館・郷土資料館館長である立松　彰氏には採拓と実測を、また資料の分類に関しては、増子康眞氏と山下勝年氏のご教示を得ることができた。ここに改めて記して御礼申し上げる次第である。

参考資料 1-1　高ノ前遺跡第 3 地点出土資料（部分）（報告書図版を再編）



参考資料 1-2　高ノ前遺跡第 3 地点出土資料（部分）（報告書図版を再編）



参考資料 2　塚森遺跡出土の縄文土器と土偶

付載２　杏葉唐草文軒平瓦小考

大田地区中心街開発にともなう近年の調査で、平安時代末期に東海市加木屋地区の古窯で焼かれた瓦が、砂堆上の各調査区から発見されている。

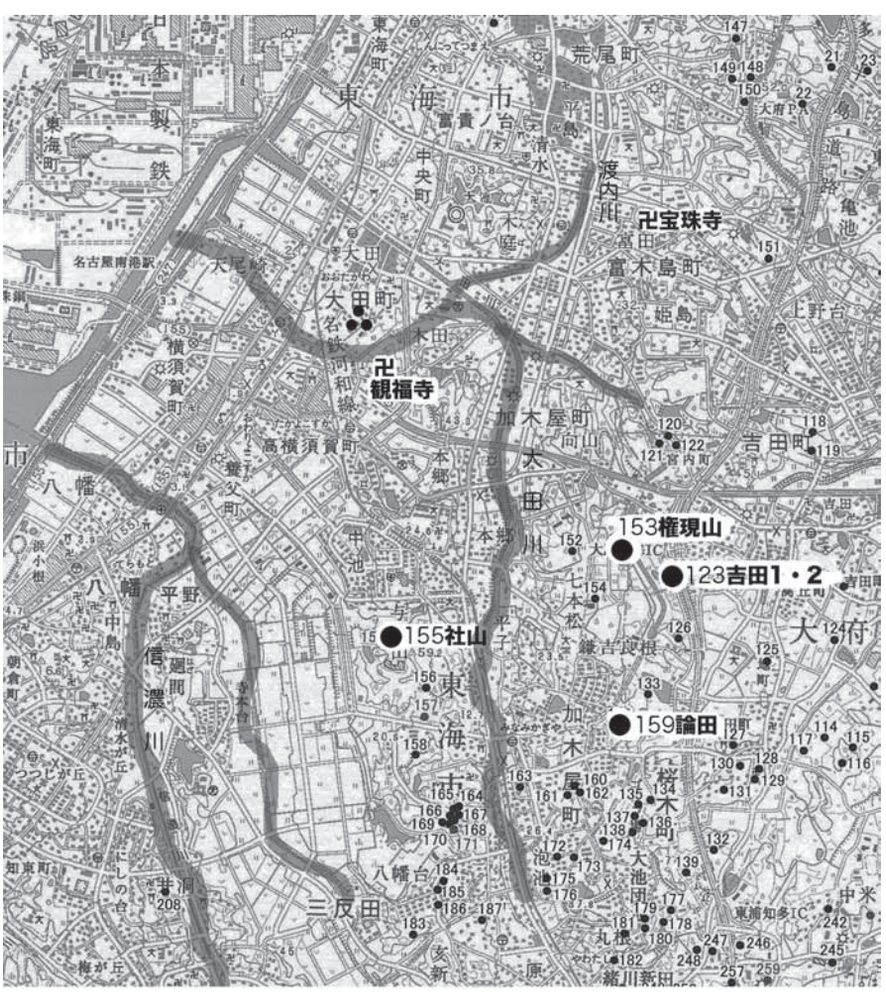
所謂寺院跡のように、大規模な瓦溜まりや堂宇の存在を直接裏付ける遺構が検出されているわけではなく、資料も破片が大半であるが、荘園の特産物として京都を中心に供給されていたものであり、その生産地での動向を探る上で貴重な発見である。

古窯で焼かれていた多様な瓦のなかでも、杏葉唐草文軒平瓦は最も特異な存在である。一般に平瓦瓦当の意匠のなかで唐草文は線対称に展開するものが大半であるが、この杏葉唐草文は左右に上下が対向する点対称配置である。考古学の呼称では「杏葉」と形容してはいるが、５裂した花弁のような意匠が特徴的で、その優美な文様はアールヌーヴォー期の植物文様を連想させる。

この瓦は古くから観福寺での採集（詳細や現在の所蔵は不明）と熱田神宮寺での出土が知られており、社山古窯と論田古窯で焼成されたことが判明している。

論田古窯は加木屋地区に存在し、権現山古窯や大府市の吉田１・２号窯などとともに大田川水系に属する。一方社山古窯と加木屋１～３号窯は丘陵を隔てた横須賀の谷の信濃川水系に属する。この両水系は下流で中心集落を擁する砂堆を共有するため、基本的には同一地区の古窯址群として捉えてよいだろう。

この分布図で明らかなように、社山・権現山・吉



加木屋地区の古窯分布図

田･論田の各古窯の分布は直径２キロ範囲に収まり、日常の往来には何ら不便無い距離関係にある。また観福寺や今回の調査地点を含む大田の集落までの距離は３キロ前後であり、地理的にも河川水系を共有する同一地域範疇と理解して差し支え無い。

これら加木屋地区の古窯址群で焼かれた瓦の多くは、京都の鳥羽離宮にもたらされていたようだが、先述した杏葉唐草文軒平瓦だけは遠隔地からの発見が無い。

観福寺の創建は大宝 2(702) 年に行基菩薩によると伝えられているが、縁起の真偽はともかく、秘仏本尊の十一面観世音菩薩立像（県指定文化財）が 10 世紀末から 11 世紀初め頃の製作と考えられることや、本堂内宮殿（国指定重要文化財）[註 1)] の建築年代は建物の背面の墨書に宝治 2(1248) 年とあり、少なくとも平安時代後期には本尊を祀る堂宇が営まれていたことは確実のようである。

熱田神宮寺は木津山神宮寺大薬師とも称し、創建年代は不明であるが、太政官符尾張国司の項目中に「応置、神宮寺別当・御船宿禰木津山を補任、経論一万五千九百巻の写経、仏菩薩四天王像 1028 体の造立、神体５躯造立及び神宮寺一区造建、如法院一処、塔３基、別院３処の造建を命ず。承和 14(847) 年」とあり、以上を含む、昌泰 3(900) 年の太政官符までの６通の公文書がある。また、「延喜式」巻３に金剛般若経転読「本朝文粋」寛弘元 (1004) 年大般若経供養の記事があることなどから、平安時代には確実に存在していたことがわかる。

文永 7(1270) 年の「熱田神宮踏歌祭頌文」などには、神宮寺薬師堂薬師如来は多くの参詣客を集め大いに繁栄したことが記されている。

一般に神宮寺は所属する神社が主体的に運営することが多いため、仏教の宗派を特定できないものも多い。熱田神宮寺の場合も本尊として薬師如来が祀られていたが、元禄時代の堂宇修理記録では「本尊薬師如来の坐像。・・・此堂もと八剣宮の境内にあり・・・八剣宮の本地仏と称せし云々」とも伝えられている。また、宝暦 12(1762) 年の『張州雑志』には「如法院は蓬莱山と号し、熱田神宮寺座主、初め天台宗輪王寺に属するも、近世には野田密蔵院に属すると云う。権座主に円定坊･宝蔵坊・地福院があったが、今ニ院廃すと云う。」とあり、わずかに天台宗との繋がりを伺い知ることが出来る。

観福寺の存在する木田の地は『吾妻鏡』などの史料により 12 世紀末以前からの熱田社領であることが判明しているが、出土した杏葉唐草文軒平瓦の存在は、両地が熱田神宮と天台宗という神仏二重の教線によって結び付いていた可能性をも示唆するものである。

この他に、当地と天台宗の関係を考える上で、僧良忍の存在は重要である。融通念仏の開祖で聖応大師とも呼ばれる良忍は知多郡の領主秦道武の子で、延久 5(1073) 年の生まれとされている (1132 年没)。母親の名前はわかっていないが、熱田大宮司の娘であったと伝えられている。

現在の東海市富木島[註 2)] 町貴船には宝珠寺がある。平安時代に在原業平が創建したと伝えられ、

註 1）宮殿は、本尊を安置し本堂内に祀られ、建物の背面の墨書により、宝治２年 (1248) の建立であったことが分かる。大きさは桁行１間、梁間１間、入母屋造、妻入。正面には方立、脇羽目を入れて双折桟唐戸を吊り、柱間には下部に横連子の格狭間を嵌め、柱上に頭貫を通し、先端に木鼻を出し、柱上に尾垂木付の三手先斗栱をおき、両脇には本蟇股を入れる。この宮殿は、木鼻に大仏様と呼ばれる繰形が施されている点に大きな特徴がある。さらに、柱の大面取り、蟇股、斗栱にも鎌倉時代の建築様式が認められ、しかも、建立年代が明らかな点でも貴重である。

註 2）富木島 = ふきしま : 富田・木庭（こんば）・姫島の３村の合成地名

室町時代に曹洞宗に改宗されたことが記録にある。旧地名は知多郡富田郷であり、東海市の紹介では、「平安時代末に融通念仏宗の開祖である聖応大師良忍上人が、その父である藤原道武の帰依によって正法山一心院を建立し、藤原家累代の墓所 (正法塚 / 市指定) としたといい、藤原道武は業平塚 (市指定) の脇に開基を在原業平とする寺院 (宝珠寺) を復興し、業平等の菩提塔を建立したといわれています。」とある。この宝珠寺近くには地元で「業平塚」と呼ぶ五輪塔が集められた場所があり、現在では鎌倉期の特徴を持った五輪塔７基が残っており、その地が移転前の宝珠寺の位置であるという。ここに現れる藤原秦氏兵曹道武の詳細は不明であるが、今昔物語巻第 28 には官職・官位共に同じの「近衛舎人左近将曹・秦武員」なる人物が登場することから、同族である可能性もある。近衛府の将曹や衛門府の志の唐名を兵曹と言い、位階は従七位下に相当するようである。この宝珠寺や業平塚のある場所は、大田川支流の渡内川左岸で、北に延びる荒尾谷の入り口を睥睨する地でもある。

良忍の出自にまつわる歴史的事実を介し、天台という属性と熱田大宮司と当地の縁故関係が伏線として敷設されていた上に、観福寺の存在や熱田社領としての支配関係がより強固に確立されていったと理解することも可能であろう。

このような地域の伝承も含め、古窯やその製品と中央の歴史との関係、とりわけ寄進地系荘園の動向や有力寺社勢力との関係、また院政の動向が濃厚に反映された歴史的背景については、既に『権現山古窯址』(1965) の報告書に於いて久永春男氏がさまざまな可能性を考察されている。多少長くなるが、報告書そのものの稀少性やそこに提示された内容の重要性を鑑み、第六章全文をここに引用しておくこととした。(以下引用)

第六章　権現山古窯址の歴史的背景

1

社山古窯と論田古窯とは同一意匠の巴文軒丸瓦、宝相花唐草文軒平瓦、杏葉唐草文軒平瓦を出土し、伴出した行基焼はともに社山様式であつてその時期もひとしく、あきらかに同一寺院の瓦を手分けして焼いたことが推定されるが、山茶碗と山皿の作りには作り癖にちがいがあり、別個の工匠の手になるものとみとめられた。(註 1)

権現山古窯は社山古窯と同一意匠の蓮華文軒丸瓦を出土しているが、伴出した山皿はすべて高台をもたず、行基焼第二型式（石根様式）になりきつているとともに、その、山皿と山茶碗の作りは、社山古窯のそれとも論田古窯のそれとも作り癖を異にし、権現山古窯の工匠

軒瓦の種類と文様				社山古窯	権現山古窯	論田古窯	熱田神宮寺	観福寺	安楽寿院
軒丸瓦	第１類	蓮華文	大形	○					
	第２類			○					
	第３類ａ		胡桃浮彫　小形	○	○				
	第３類ｂ		胡桃沈刻　小形	○	○				
	第４類	巴文	右廻り　大形	○					
	第５類		左廻り　大形	○		○			
軒平瓦	第１類	唐草文	大形	○					○
	第２類	宝相花唐草文	小形	○		○	○		
	第３類			○					
	第４類			○		○			
	第５類	杏葉唐草文		○		○	○	○	

は前二者とはまた別の人物とみとめられる。

権現山古窯がその山皿の様式が示すごとく、社山古窯および論田古窯よりも年代的に多少降るものであるとすると、権現山古窯における瓦の生産は、社山古窯製の瓦で葺いた建築の補修のためであつたとみなされる。しかし権現山古窯がいちはやく高台をつけた山皿の製作をうちきつただけであつて、実際は社山古窯と同一時期に並行して煙を上げていた窯であり、社山古窯と論田古窯との関係と同じく、やはり同一寺院から発注された瓦を社山古窯と権現山古窯とが分担して焼いたと解釈することもできる。その拠り所は権現や馬古窯出土の蓮華文軒丸瓦が社山古窯出土のそれと意匠が同じであるだけでなく、その原型も同一のものを用いたのではないかと思われるほどに似ていて、若干の年月を隔てての模作とは考えがたいことである。

社山古窯出土の軒丸瓦・軒平瓦は多種類で、複数の組合わせが考えられるが、論田古窯出土瓦はその中の一組の組合わせを示すごとくであり、権現山古窯出土の軒丸瓦は論田古窯のそれとは別の組合わせに属しているようであることは注意を引く。

熱田神宮の神宮寺および木田の乾布生地で発見されている瓦は論田古窯型の組合わせのようで、将来、軒丸瓦第５類（左廻り巴文）が追加発見されるならば、論田古窯型の組合わせは熱田神宮の神宮寺および観福寺で用いるための製作であつたことになる。

権現山古窯の蓮華文軒丸瓦は、図文の類似からすれば、論田古窯型組合わせに含まれているところの宝相花唐草文軒平瓦と組合わされてよさそうである。しかし論田古窯・熱田神宮寺・観福寺では未だ蓮華文軒丸瓦の発見例がないし、社山古窯出土瓦中から論田古窯型組合わせを引きさると後にこの蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦(軒平瓦第１類)とが残つて、そこに一組の組合わせが成立する。そしてこの唐草文軒平瓦と原型が同一とみなされる瓦が京都の安楽寿院で発見されていることは注目される。すなわちもしこの両者が論田古窯型組合わせとは別の一組の組合わせを構成するものだとすると、権現山古窯における瓦の生産は安楽寿院に納入するためであつたことになろう。

しかしこの軒丸瓦・軒平瓦の組合わせを基礎にしての、瓦窯とその瓦を使用した寺院との関係についての推定は、現在私たちの把握している資料の範囲での一つの試論にとどまり、将来、論田古窯・熱田神宮寺・観福寺・安楽寿院の使用瓦の調査が進むと、あるいは社山古窯焼成瓦のすべてが一様にこれらの三寺院に納入されているというような場合もないとは限らない。

そこで現段階では、権現山古窯における瓦の生産の歴史的背景をもとめるにも、社山・論田・権現山諸古窯と熱田神宮寺・観福寺・安楽寿院との総体的関係としてあつかうべきであろう。そして安楽寿院の場合、知多半島にはその所領野間内海庄があり、さして隔たつていない時期に、その荘内に大御堂寺が建立され、その瓦は同じ荘内の奥田字下平井所在の窯で焼かれている事実がある。しかるに何故に安楽寿院の瓦が所領外の社山古窯で焼成されたかを解くためには、大御堂寺建立の時期とその経緯をたどつてみることもまた必要であろう。

2

野間の大御堂寺の創建については、尾張志（註２）は天文三年三月の勧進帳に承暦年間 (1077～1081) 白河院建立とある旨を記しているが、吾妻鏡の文治二年閏七月二十二日の条に

> 前廷尉平尉康頼法師恩沢に浴し、阿波国麻殖保々司に為すべきの旨仰せられる。故左典厩（義朝）の墳墓尾張国野間庄にあり。没後を訪ひ奉るに人なし。ただ荊棘の掩ふ所たり。

而してこの康頼任中その国に赴く時、水田卅町を寄附し、小堂を建て、六口の僧をして不断念仏を修せしむ云々。よつて件の功に酬ゆる為、此の如し。

とあり、また建久元年十月二十五日の条に、

尾張国御家人須細治部大夫為基を以て案内者となし、当国野間庄に至り、故左典厩の廟堂を拝し給ふ。この墳墓荊棘に掩はれ、薜蘿を払はざるかの由、日來は関東に於て遙かに遣懐し給ふの処、仏閣扉を排き、荘厳の粧眼を遮る。僧衆座を構へ、転経の声耳に満つ。二品（頼朝）之をあやしみ、疑氷を解く為に濫觴を尋ねらるゝの処、前廷尉康頼入道国を守るの時、水田三十町を寄附し、以降一伽藍を建立し、三菩提を祈り奉る云々。此事康頼入道の殊功に謝する

為に、兼日一村を賜ふと雖も、彼任国は往年の事なり。行業定めて廃絶せしか、潤餝を加ふべきの由思食されし処、鄭重の儀親しく之を覧、弥々禅門の懇志を憐み、更に古塚の締構を感じ給ふ。又数十許輩の龍像を屈し廿五三昧の勤行を修せられ、口別綿衣二領、曝布十端を施し給ふ。

と記されていることから推して、むしろ平康頼の創建とする猪飼英一氏の説（註３）は正しいと思う。

この前廷尉平尉康頼法師というのは、安元三 (1177) 年に後白河法皇とその近臣達がおこなつた鹿ヶ谷の謀議に加わつて、平清盛に逮捕され、法勝寺の執行俊寛や藤原成経と共に喜界ガ島に流刑された検非違使尉平康頼その人である。彼はゆるされて召還された後は、平家物語によれば、

康頼入道は東山双林寺にわが山荘のありければ、それに落つゐて先おもひつづけけり。

ふる里の軒のいたま（板間）に苔むしておもひしほどはもらぬ月かな

やがてそこに籠居、うかりし昔を思ひつづけ、宝物集という物語を書けるとぞ聞えし。

とあるが、このように８年後に頼朝によつて阿波国（徳島県）麻殖保々司に任ぜられるという後日談があつたのである。

では彼が大御堂寺を建立したのはいつ頃であろうか。

源義朝が野間で長田忠致に謀殺されたのが平治 2(1160) 年の正月であり、鹿ヶ谷の謀議が露見したのが安元 3(1177) 年の６月であるから、その間には 17 年の歳月が経過している。そして吾妻鏡は文治２年条には「康頼任中赴其国時」と漠然と書いているが、建久元年条には「前廷尉平尉康頼入道守干国之時」「彼任国者往年事也」とやや具体的に記しており、康頼がこの時期に国司あるいは目代として尾張に赴任したことがあつたようで、その時のことである。

平治元 (1159) 年 12 月９日～ 26 日の平治の乱の直後（12 月 27 日）に、平清盛の弟の頼盛が尾張守に任ぜられるが、これは源義朝と縁故の深い熱田大宮司一族などに対するおさえの意味が含まれていたであろう。そして頼盛は応保 3(1163) 年１月に、清盛の五男重衡と交替し、重衡は仁安元 (1166) 年 12 月に頼盛の二男保盛と交替する。保盛は仁安 3(1168) 年 12 月まで在任するが、この９年間は当時北面の武士であつたろう康頼の尾張赴任は考え難いし、またかりに目代にでも任ぜられたとしても、国司たる平氏一門にとつて不倶戴天の敵であつた源義朝の霊を慰めるために、その墓側に寺を建て、広大な田地を寄進するような行為はなしえなかつたろう。

平保盛と替つて尾張守となつたのは藤原家教である。そしておそらく同時に宣旨があつたのではないかと想像されるが、尾張国は後白河法皇の近臣で、後に鹿ヶ谷の謀議者の一人となつた藤原成

親の知行国となる。後白河法皇は 29 才で天皇に即位した年に平治の乱で崇徳上皇派を一掃することができ、譲位の翌年平治の乱に遭うや、その後始末にあたつて摂関家領の一部を没収して、摂関家を弱体化した。その後、二条天皇を擁する天皇親政派との間に表裏の対立が続いたが、永萬元 (1165) 年に二条天皇がまだ 2 才の六条天皇に譲位し、まもなく没したのを機会に、仁安 3 年 3 月平滋子（建春門院）が生んだわが子憲仁親王を即位させた。すなわち高倉天皇であり、時に 8 才であつた。今ようやく後白河法皇の思いのままの政治が可能な世になつたのである。

しかし翌年 12 月、藤原成親の目代右衛門尉政友が、延暦寺領の美濃国平野荘の神人と争い、これを獄に投じたことから、延暦寺の大衆が日吉の御輿をあついで内裏におしかけるにいたり、ついに藤原成親は知行国守の地位を解任され、また藤原家教も国司を解任された。

そして明けて嘉応 2(1170) 年正月、さきに平治の乱後 3 年間尾張守をつとめた平頼守が尾張権守となり、正安 5(1175) 年正月まで在任するが、一方藤原家教に交替して藤原範能が嘉応元 (1169) 年 12 月から翌年 12 月まで尾張守をつとめ、また承安 4(1174) 年 3 月には後白河法皇の近臣平信業が尾張守であつたことが知られており、この時期には尾張権守と尾張守とが並んで任命されている。そして承安元年から 3 年までの 3 年間と、安元元年から 2 年までの 2 年間は、尾張守が誰であつたか詳かでなく、その翌年の安元 3 年には藤原盛頼がその任にあつたことが知られているが、この年は鹿ヶ谷の謀議発覚した年である。そこで康頼が尾張守に任ぜられたとすると前記の正安元～ 3 年・安元元～ 2 年の 5 カ年のうちということになり、目代であつたとすると、嘉応 2(1170) 年から安元 2(1176) 年にかけての 7 年間が可能性が強いことになる。

その当時関白平清盛を頂点とする平氏一門は、「この一門にあらざらん人は、皆人非人なるべし」と自負する勢力にまで成長するにいたり、承安元年 12 月には清盛の娘の徳子（15 才）を、11 才の高倉天皇の女御として入内せしめ、清盛は天皇の外戚となつた。かつては後白河法皇がその武力に依拠し、対立者の打倒に利用した道具であつた平氏一門が、いまや院政のおそるべき対立勢力に転化するにいたつた。

かくて情勢は後白河法皇をめぐる近臣たちならびに平氏一門から疎外された受領層と、平氏一門との対立へと発展した。こうした情勢の推移のなかで、かつて平氏一門を打倒しようとして敗死した源義朝の菩提を弔うために、その墓側に寺を建てうる雰囲気も醸成されえたことであろう。

しかしその際、野間に在住していた長田忠致父子の動向はいかがだつたろうか。平治物語は、忠致父子の義朝謀殺は「相伝の主」に対する裏切りとして、当時の武士の道徳から逸脱した行為とみなされ、平氏一門から冷遇されたと記しているが、後に源頼朝が東国で旗揚げすると、忠致父子は平氏につかずに鎌倉へ馳せ参じているところからすると、平氏一門にうとまれていたのは事実であろう。

次に長田父子が荘官の地位にあつたろう野間内海荘は、鳥羽上皇が保延 3(1137) 年に安楽寿院を建立するとまもなく施入されたらしく、保延 6 年の庄々所済日記には田畠 157 町 5 反 3 畝と記されている。

そして安楽寿院領は後に鳥羽上皇から八条院に伝領されるが、安楽寿院領 14 箇所の荘園中野間内海荘だけは一時後白河法皇に伝領され、建久 2(1191) 年の後白河法皇御領注進目録には長講堂領として記載されている。後白河法皇が六条殿に長講堂を建てたのは寿永 2(1183) 年のことであるが、その際に野間内海荘が八条院から寄進されたのか、それともその以前から後白河法皇領とな

つていたのかは明らかでない。しかし承安元年から安元２年にかけての時期には、たとえ八条院領であつたとしても後白河法皇の後見にまつところが多かつたにちがいない。そうした時期に法皇の近臣の一人である平康頼が尾張守あるいはその目代としてこの地に来て、義朝の菩提を弔う寺を建てたとしても、長田忠致父子はことさらに反対しえなかつたろうし、平清盛に訴える気にもならなかつたであろう。

しかし康頼が寄附した水田三十町という面積は相当な広さであつて、正平 9(1354) 年の知多郡における熱田社領６カ所の田畠の平均面積にひとしいことは注目される。その水田の所在地は記されていないが、もしそれが野間内海荘外の土地であつたとすると、その当時康頼はその 30 町の水田の領家職をたもつていたのであろうか。とまれこのように広い土地を施入して６人の僧を養うという行為が、康頼の義朝に対する単純な同情心から出たとは考え難い。しかし康頼が義朝と何か深い縁故があつたとすれば吾妻鏡はそれを伝えたであろう。そうした縁故はまつたくなかつたとすると、この大御堂寺の建立には当時一般的であつた死霊の祟りをおそれる思想（註 4）とともに、後白河法皇とその近臣たちの平氏打倒の願いもこめられていたのかも知れない。

さて、大御堂寺建立にあたつて、瓦を焼いた下平井古窯の所在地美浜町奥田はやはり野間内海荘内の地である。生産に当つて軒瓦の意匠は都から移入されたであろうが、荘園内での自給生産の一例としてよいであろう。

3

正平 9(1354) 年４月の熱田社領注進目録によると、当時知多郡には熱田社領が６カ所あつた。

御幣田郷	田畠	539 段 020 歩
大郷郷	田畠	338 段 150 歩
乙河御薗	田畠	443 段 130 歩
英比郷	田畠	220 段 000 歩
生道郷	田畠	149 段 160 歩
木田郷	田畠	210 段 180 歩

このうち御幣田郷については、吾妻鏡の建久 2(1191) 年８月７日の記事によつて、それよりも以前からの熱田社領であること、かつて上西門院を本所とし、建久２年当時は後白河法皇がそれを掌握していたことがわかる。上西門院統子は後白河法皇姉で、准母としてあがめられ、住居をともにしたことが多く、文治 5(1189) 年に没した後、その遺領は後白河法皇が継承したのである。

御幣田郷がいつどのような経緯で上西門院に寄進されたかは明らかでない。しかし平治の乱にあたつて女婿の源義朝に味方した熱田大宮司氏はその直後に三河の所領を一挙に失つている。平頼盛が尾張守として支配する下で、その尾張の所領を保ち、身を守るには、あらゆる手段を用いたにちがいなく、上西門院への寄進はけだしこの時期とみなしてはいかがであろうか。

ところでこの御幣田郷がいずこであるか、現在つまびらかでない。他の５カ所の熱田社領は逆に位置はほゞ明らかである（註 5）が、それが御幣田郷とならんで建久２年当時から熱田社領であつたか否かを語る文献がない（註 6)。

しかし社山古窯で焼いた杏葉唐草文軒平瓦が、熱田神宮の神宮寺と木田の観福寺とで並行して使用されている事実から、木田郷はすでに鎌倉時代前半には熱田社領であつたことが推定される。すなわち社山古窯出土の軒丸瓦・軒平瓦の様式ならびに伴出した行基焼きの様式が鎌倉時代後半には降らないことと、同じ窯で焼成した同じ文様の瓦を分配して使用するような親近さは、その当時にあつては、両寺建立が同一勢力によつて行なわれた場合以外には考えられないからである。

ただしこの場合、木田郷の沙汰人が、僧任賢のような熱田大宮司氏一族である場合と、熱田神宮

を領家として下司の職にある寄進者＝土豪である場合と考えられるが、いずれにしろそのような在地領主によつて観福寺は建立されたものであろう。

吾妻鏡によると、任憲は御幣田郷の沙汰権をあくまでも取戻したい理由の中に「是先人亡骨在所也」と父祖の墓があることを挙げている。任憲が頼朝の口添えによつて御幣田郷の沙汰権を取戻した後、父の恩を偲びその菩提を弔うために、その所領内に寺を建てるというような場合もありえないことではない。

また領家である熱田神宮の神宮寺の瓦を納める際に、それと並行して荘官が自身の一族の菩提寺を建立したという考えられるが、この場合は社山古窯所在地加木屋が、当時は木田郷であつたことが前提となる。もし加木屋が木田郷外だつたとすると、すなわち自己の所領外だつたとすると、瓦の代価として莫大な米や布を支払わねばならなかつたろうし、それほど広くない荘園の荘官としてそれはけだし無理であろう。

熱田大宮司一族の場合は、木田郷の二倍半の面積をもつ御幣田郷をも領有しているし、その所領外に瓦を発注することも必ずしも不可能ではなかつたろう。しかし加木屋が木田郷の一部であつたか、あるいは木田郷には含まれていなかつたにしても、他の熱田社領に属していたとすると、荘園領主からその荘園内の窯業工匠への発注というかたちでは、はなはだ低廉に自給されたことになる。

さて近世に木田荘の名を冠していた村々は木田村と横須賀村との二村だけであり、加木屋村は荒尾荘に属していた（註 7)。荒尾荘は渡内・寺中・加家・平島・清水・富田・姫島・加木屋・吉川の諸村を含んでいるが、荘名のおこりは、尾張国神明帳所載の「従三位荒太天神」のある清水を中核とする荒尾谷北部地域の古地名に発するもので、中世に在地豪族荒尾氏の勢力の拡大につれて加木屋・吉川までその名を冠するにいたつたようである（註 8)。しかし加木屋はその区域内に本郷と呼ぶ字もあり、古くから一郷を形成していたもようで、木田郷の本郷とみなすことが無理とすれば、所在不明の御幣田郷がこの加木屋である可能性もなしとしない。

ここで注意すべきは社山古窯がまた京都の安楽寿院の瓦をも焼成していることである。まず何故に安楽寿院がこのような遠隔地へ、しかもその荘園でもない土地の工匠に瓦を発注したかが問題であろう。そして乾元大宝鋳造の後、銭貨の鋳造が打ち切られて久しく、もつぱら米や布が流通手段として用いられたこの時代には、行基焼きの工匠が独立した自営手工業者として、遠隔地の京都へ、瓦のように重くかさばる商品をみずから運び、その代償としての米や布をまた運んで帰るということは不可能である。そうすると、発注にあたつても荘園領主を媒介としたであろうし、製品の運搬もまた荘園領主を介しておこなわれたと考えるほかなく、その場合、同じ窯で焼成した他種類の瓦の発注者たる熱田大宮司氏をおいては考えられない。

こうした諸条件から推すと、加木屋は当時熱田社領のいずれかに郷に属していた可能性が濃厚である。

それにしても安楽寿院の瓦を、何故に、安楽寿院領であつて、しかも瓦生産の技術を有する野間内海荘で焼かずに、熱田社領で焼いたのであろうか。それはおそらく熱田大宮司氏が、その荘園をすすんで上西門院に寄進し、本所と仰がねばならなかつたのと同じような環境がなお当時存在して、熱田大宮司氏はその保身のために安楽寿院の瓦をその領内で製造させ、輸送し、献納したのではないかと推定される。そうだとすると、その時期は、縁故の深い源頼朝の権威があなどり難い力として確立されるよりも以前である可能性が強い。すなわち上西門院の没年（1189 年）を上限とし、

後白河法皇没年(1192年)を下限とするところの時期―後白河法皇が熱田社領の本所の権利を握り、また安楽寿院領から野間内海荘をきりはなして長講堂領に編入し、おそらく安楽寿院領全体を後見していたでもあろう時期―がもつとも可能性があることになろう。そしてまたこの時期は社山古窯の―またひいては権現山古窯の稼働年代の一時点でもあることになる。

（久永春男）

《註》

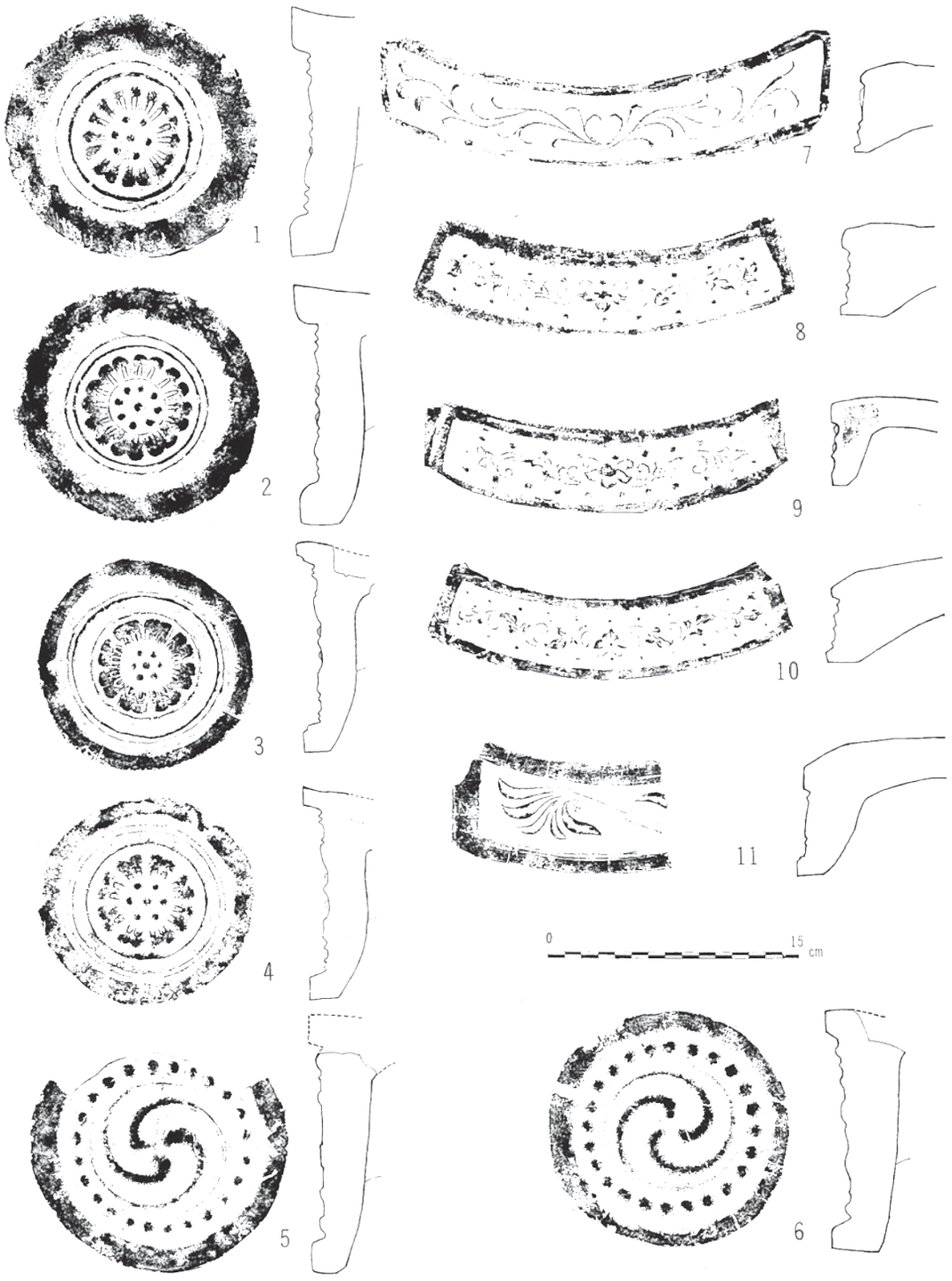
1. 杉崎章・楢崎彰一・田中稔・久永春男「社山古窯」（横須賀町史別冊『横須賀の遺跡』）1956 年
2. 深田正韶『尾張志』天保年間（1180 ～ 1844）
3. 猪飼英一『野間内海荘』1965 年
4. 保元の乱後 20 年経つた安元 3(1177) 年に、敵方として戦没した藤原頼長に正一位太政大臣を贈り、讃岐の配所で没した崇徳上皇に院号を贈って慰霊し、寿永 3(1184) 年には両者を祭神とする粟田宮を建てたことなどが想起される。
5. 太田亮『尾張』1926 年
6. 三宝院文書に、熱田大宮司忠広が国衙領英比郷北方に家人等を遣わして濫妨するのを停める文和 2(1353) 年 8 月 10 日付の教書案がある。その翌年 4 月に書かれた熱田社領注進目録中の英比郷 220 段が、もしこの英比郷北方のことだとするとこの目録中には建久 2 年以後の所領も含まれていることになる。
7. 太田亮『尾張』前出。
8. 木田もついには荒尾氏の勢力圏内に入り、木田城は荒尾小太郎の居城であつたと伝えている。なお荒尾を古くは荒太と記したとすると、奈良朝遺文に記載されている「愛智郡荒大郷」とのつながりもまた考えられないでもない。

（引用以上）

この論考で久永氏は所在不明の御幣田郷について、木田郷とともに熱田社領であり且つ注進目録では木田郷の二倍半の面積が掌握されていることや、加木屋地区には本郷と呼ぶ字もありそこを木田郷の本郷とみなすことが無理とすれば、御幣田郷が加木屋である可能性もあると述べている。

確かに熱田社領である木田郷に隣接し、瓦生産の窯が集まる加木屋周辺を御幣田郷に比定する説には傾聴すべきものがあるが、注進目録の記載順に地理的な配慮があったとすれば、御幣田郷は大郷郷の北に位置することになる。その場合、いまひとつの可能性としては、第１章第２節で述べた如く、荒太神社を擁する渡内川周辺から荒尾町にかけての地域を挙げることができよう。狭小な加木屋谷に比して渡内川左岸には、なだらかな段丘面と小規模な沖積地が広がっていることなどから、耕作地として開発された面積は広かったであろう。

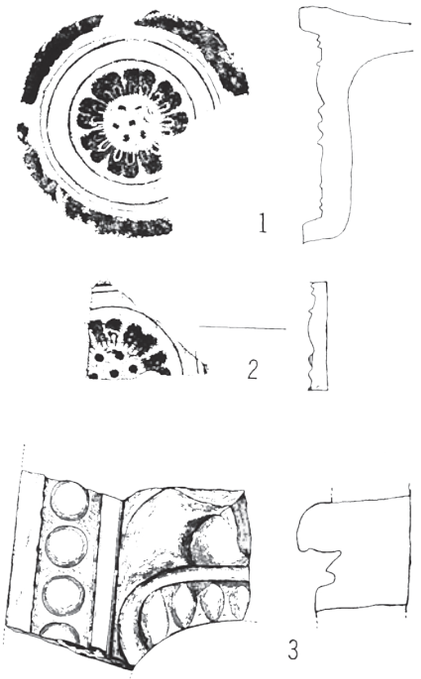
とまれ、そのいずれの場合にも河川を下れば大田の集落に行き着くわけであり、御幣田・大郷・木田の各郷は知多郡における熱田社領の主要部分を構成していたことが再認識されるのである。



※縮尺 1/4

1. 軒丸瓦第１類、2. 軒丸瓦第２類、3・4. 軒丸瓦第３類、5. 軒丸瓦第４類
6. 軒丸瓦第５類、7. 軒平瓦第１類、8. 軒平瓦第２類、9. 軒平瓦第３類、
10. 軒平瓦第４類、11. 軒平瓦第５類

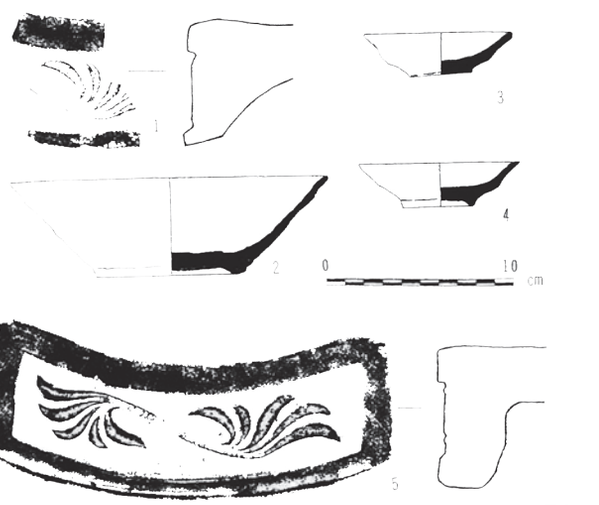
社山瓦窯跡出土遺物



※縮尺 1/4

1・2. 蓮花文軒丸瓦、3. 鬼瓦、5. 丸瓦

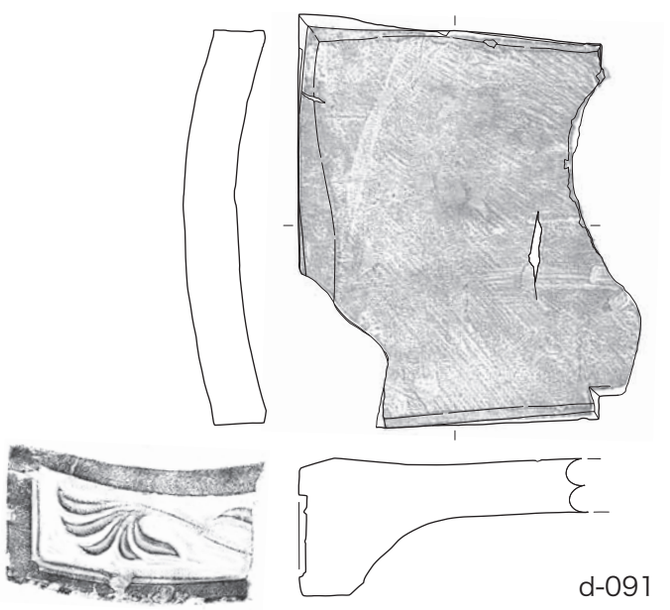
権現山古窯跡出土遺物



※縮尺 1/4

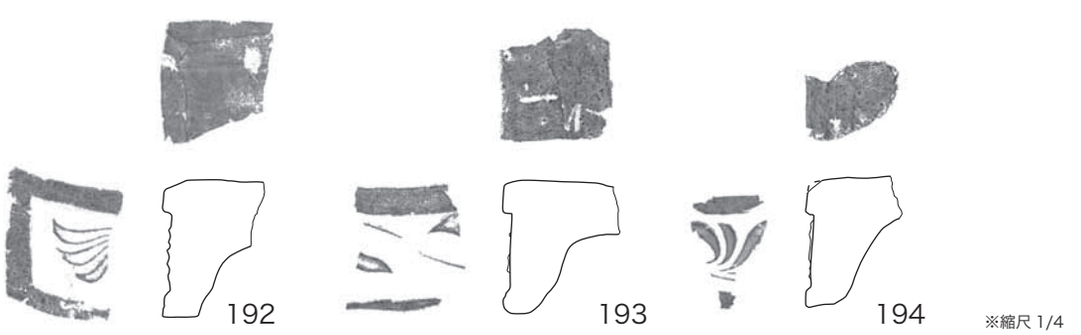
1-4. 論田古窯跡出土、5. 観福寺出土

杏葉唐草文軒平瓦と伴出遺物



※縮尺 1/4

今年度調査出土遺物（畑間遺跡 1 地点）



※縮尺 1/4

平成 20 年度調査出土遺物（畑間遺跡 3・4 地点）

付載２

関連歴史年表

西暦	年号	主な出来事		当地方関係の出来事
1135	保安	平忠盛、海賊の首領を捕らえた功で子清盛従四位下に叙す		
1136				
1137		安楽寿院の建立　興福寺僧徒、春日神木を奉じて入京強訴		藤原範雅、熱田大宮司に就く
1138		京都大火		
1139				
1140				
1141		鳥羽上皇、出家する　崇徳天皇法王の意で近衛天皇に譲位		此の頃、三河守藤原顕長銘の壺が渥美で焼かれる
1142				
1143		源為義、内大臣藤原頼長に臣従する		
1144				
1145	久安			
1146		平清盛、正四位下に叙し安芸守となる		
1147				
1148				
1149				
1150		左大臣藤原頼長、氏長者となり、兄忠通と不和		
1151	仁平	藤原頼長、内覧となる		
1152				
1153				
1154	久寿	源為朝、九州で乱行、父為義、官を解かれる		
1155		後白河天皇即位		熱田大宮司家藤原季範没　範忠大宮司に
1156	保元	保元の乱		大宮司某、家子・郎党を与力として義朝に派兵
1157		大地震（兵範記）		
1158		後白河上皇の院政始まる	《尾張守》	
1159	平治	平治の乱	平頼盛（清盛弟）	源頼朝母由良御前没
1160	永暦	源義朝、野間にて殺害　頼朝伊豆に流刑		義朝、智多に落ちる途次、氷上社に大刀一口を献上
1161	応保			範雅、大宮司に再任
1162				前大宮司範忠、周防へ配流
1163	長寛		平重衡（清盛五男）	
1164				この頃重源により再建された東大寺の瓦、伊良湖で焼く
1165	永万			
1166	仁安		平保盛（頼盛二男）	
1167		平清盛太政大臣となる		大中臣安長、長福寺（七寺）を復興し大般若経奉納
1168		清盛出家	藤原家教、藤原成親	
1169	嘉応	後白河上皇出家	藤原範能	尾張国知行国主藤原成親の配流を求め延暦寺の大衆強訴
1170		藤原秀衡鎮守府将軍となる	平頼盛（尾張権守）	
1171	承安	清盛の女徳子入内し建礼門院を称す		
1172		宋・明州の使者、法皇・清盛に礼物を贈る		範忠、清盛に属し大宮司職に還補
1173				
1174		法王・平氏一門厳島に参詣	平信業	
1175	安元			
1176				範忠、大宮司職を孫の忠兼に譲る
1177	治承	鹿ヶ谷の謀議　京都大火　俊寛ら流刑　大地震　白山噴火　彗星	藤原盛頼	藤原師高を尾張に配流し討つ
1178		彗星出現		
1179		清盛院政を停止し後白河法王幽閉　京で大地震		太政大臣藤原師長愛智郡井戸田（名古屋市瑞穂区）に配流
1180		以仁王の令旨　源頼朝伊豆にて挙兵　厳島・紀伊熊野で地震		
1181	養和	清盛没　後白河法王院政再開		伊勢・美濃両国水主雑船を尾張墨俣渡へ回漕命令
1182	寿永	院宣を下し諸国荘園より兵糧米の徴収		
1183		義仲倶利伽羅峠に平氏の軍を破る　霧島山噴火		
1184	元暦	源義仲、源範頼・義経の軍に敗れ粟津に敗死		頼朝、鶴岡八幡宮若宮の隣に熱田大明神を勧請し社壇を新造
1185	文治	壇ノ浦の戦　平氏滅亡　文治の京都大地震		
1186		頼朝、荘園の兵糧米停止を奏上		尾張国の地頭停止
1187		義経、陸奥の藤原秀衡のもとに逃れる　大地震		
1188		宣旨により藤原基成・泰衡に義経追討を命ず		
1189		藤原泰衡、義経を衣川にて追討。頼朝、泰衡を討つ。		鶴岡八幡宮末社熱田社祭
1190	建久	頼朝入京し法王に謁見　右近衛大将を辞し鎌倉に帰る		頼朝上洛の途中三河を経て知多郡野間の頼朝墓に詣で熱田社に奉幣
1191		栄西帰国し臨済宗をひろめる　建久２年の強訴　鎌倉で地震		御幣田郷は以前から熱田社領の記載（吾妻鏡）野間内海荘長講堂領に
1192		頼朝、征夷大将軍となる		
1193		源範頼、頼朝に殺される		
1194		幕府、守護の国衙領侵犯を禁ず	《守護》	幕府、伊勢神宮及び熱田社に神馬・神剣を奉献
1195		源頼朝、東大寺再建供養に臨席	小野成綱	頼朝、上洛の途次熱田社に奉幣
1196		九条兼実、関白を罷免され九条家一族排斥される		
1197		島津忠久が薩摩・大隅両国家人の奉行人に		頼朝、母方の従兄弟藤原信綱を尾張国海東郡地頭職に補す
1198				
1199	正治	頼朝没　子頼家が家督相続　鎌倉で大地震		将軍頼家、尾張三河遠江の伊勢神宮領６カ所の地頭廃止
1200		梶原景時、上洛を企て駿河で敗死		
1201	建仁	諸国大風雨　下総葛西で海嘯（津波）		式部僧都寛傳、頼朝供養の為三河国瀧山寺内に禅院建立
1202		鎌倉で大地震		
1203		北条時政、執権となる		
1204	元久	頼家、北条時政に殺される　諸国地頭の非法を禁止　京で大地震		
1205		時政陰謀露見し失脚　子の義時が執権となる		
1206	建永	幕府、頼朝の恩賞地は大罪を除き没収せず		
1207	承元	幕府、武蔵国荒野の開墾を命令		
1208				
1209		諸国の国衙、守護人の怠慢により群盗蜂起		
1210		幕府、武蔵国の大田文を作る　彗星出現し土御門天皇祈祷し譲位		
1211	建暦	再度東海道に新駅増設		
1212				
1213	建保	鎌倉で大地震		
1214		栄西、実朝に茶を勧める　鎌倉で大地震		
1215				
1216		実朝、渡宋を計画し、陳和卿に造船を命令　鎌倉で大地震		熱田社の御戸開かず、消失の怪異により軒廊御卜を行う
1217				
1218				
1219	承久	実朝横死し、源氏滅亡		
1220				
1221		承久の乱	小野盛綱	木曽川を挟み京方と鎌倉方が合戦し京方が敗れる
1222	貞応	六波羅探題設置		
1223		新補地頭の得分率を定める		
1224	元仁	親鸞、浄土真宗を開く		
1225	嘉禄	幕府、評定衆を設置		
1226		頼経、征夷大将軍となる（摂家将軍の始まり）		
1227	安貞	道元帰国し、曹洞宗を開く（永平寺）　大地震天変地異続き改元		
1228				
1229	寛喜			
1230		諸国に大飢饉、餓死者多し		

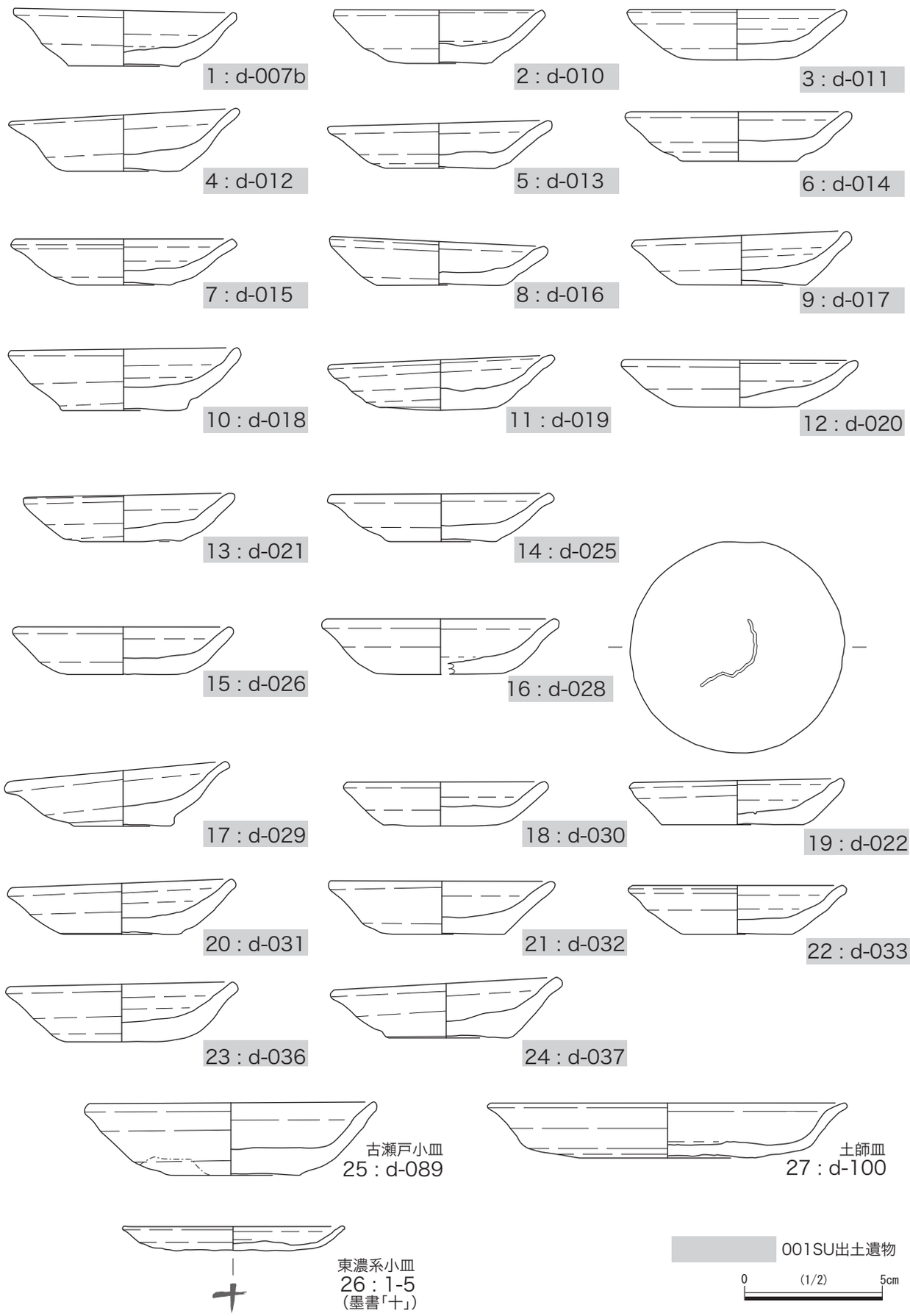
図　　版

遺構 No.	調査区	Gr	遺構名	法量（cm）			平面	断面	埋土	出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ					
001	HM11-1	8F20c	SU	116	112	15	円	皿	10YR3/2 黒褐色砂（埋土）	多数	第 13 図
002	HM11-1	8F19b,20b	SK	(294)	(78)	19	―	皿	10YR3/2 黒褐色砂で埋土下半は 10YR4/2 灰黄褐色シルトに漸移する		
003	HM11-1	8F20b	SK	(39)	(24)	13	(円)	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
004	HM11-1	8F20b	SK		36	10	楕円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
005	HM11-1	8F20b	SK	109	48	7	円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
006	HM11-1	8F20b	SK	94	93	19	楕円	U	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
007	HM11-1	8F20c	SK	122	72	14	楕円	U	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
008	HM11-1	8F19f,19g,20f,20g	SB	262	213	24	不整形	皿	10YR2/2 黒褐色砂質シルト	d-101 青磁ほか	第 14 図
009	HM11-1	8F20c	SK	100	62	14	楕円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
010	HM11-1	8F20c	SK	(118)	(42)	14	―	皿	10YR3/3 暗褐色砂	d-091 瓦	
011	HM11-1	8F20c	SK	80	52	15	楕円	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
012	HM11-1	8F20c	SK	40	34	17	円	U	10YR3/2 黒褐色砂		
013	HM11-1	8F20c,20d	SK	(93)	(81)	13	―	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
014	HM11-1	8F20c	SK	(107)	(75)	10	円	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
015	HM11-1	8F20c	SK	(69)	(21)	10	―	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
016	HM11-1	8F20b	SK	32	27	12	円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
017	HM11-1	8F19c,20c	SK	48	36	13	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
018	HM11-1	8F20d	SK	(213)	(122)	18	―	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
019	HM11-1	8F20d	SK	48	38	15	円	凹	10YR3/3 暗褐色砂		
020	HM11-1	8F20d,20e	SK	64	43	17	円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
021	HM11-1	8F20e	SK	139	107	24	楕円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
022	HM11-1	8F19e,20e	SK	59	45	22	楕円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
023	HM11-1	8F19e	SK	84	49	20	不整形	U	10YR3/3 暗褐色砂		
024	HM11-1	8F19e,20e	SK	110	46	33	不整形	U	10YR3/3 暗褐色砂		大量の焼土塊を含む
025	HM11-1	8F20e	SK	(198)	(55)	18	―	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
026	HM11-1	8F20e	SK	131	96	26	円	U	10YR3/3 暗褐色砂	d-095 砥石	
027	HM11-1	8F20f	SK	67	61	16	円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
028	HM11-1	8F20f	SK	66	61	25	円	U	10YR3/2 黒褐色砂	d-098 割石	
029	HM11-1	8F19f	SK	(158)	(73)	55	(円)	凹	10YR5/2 灰黄褐色シルト		
030	HM11-1	8F19e,20e	SK	72	62	22	円	凹	10YR3/2 黒褐色砂		
032	HM11-1	8F20f	SK	69	52	32	円	U	10YR2/3 黒褐色砂		
033	HM11-1	8F19f,20f	SK	179	82	29	不整形	凹	10YR3/2 黒褐色砂		
034	HM11-1	8F20f	SK	84	75	30	円	U	10YR3/2 黒褐色砂	d-096 陶丸	
035	HM11-1	8F20f	SK	77	64	32	円	U	10YR3/2 黒褐色砂		
036	HM11-1	8F20f	SK	52	46	34	円	凹	10YR3/2 黒褐色砂		
037	HM11-1	8F19g,19h	SK	78	67	17	円	U	10YR2/3 黒褐色砂		
038	HM11-1	8F19g	SK	(35)	(26)	22	円	U	10YR2/3 黒褐色シルト		
039	HM11-1	8F20f	SK	108	57	41	―	凹	10YR3/2 黒褐色砂		
040	HM11-1	8F20e	SK	87	73	25	楕円	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
041	HM11-1	8F20f,20g	SK	99	53	13	不整形	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
042	HM11-1	8F20g	SK	24	23	29	円	U	10YR3/2 黒褐色砂		
043	HM11-1	8F19f	SK	70	62	15	円	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
044	HM11-1	8F19f	SK	69	42	23	不整形	U	10YR3/2 黒褐色砂		
045	HM11-1	8F19f,19g	SK	44	38	13	円	皿	10YR3/2 黒褐色砂		
046	HM11-1	8F19g	SK	43	37	30	円	U	10YR3/2 黒褐色砂		
047	HM11-1	8F19g	SK	39	30	29	円	U	10YR3/2 黒褐色砂		
048	HM11-1	8F19e,20e	SK	42	36	17	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
049	HM11-1	8F19g	SP	46	40	19	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
050	HM11-1	8F20g	SP	35	33	16	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
051	HM11-1	8F20f	SP	41	31	34	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
052	HM11-1	8F19f	SP	30	26	19	円	U	10YR4/2 灰黄褐色砂		
053	HM11-1	8F19g	SK	54	52	32	円	U	10YR3/2 黒褐色砂		
054	HM11-1	8F19f	SK	29	24	12	円	U	10YR3/2 黒褐色砂		
055	HM11-1	8F19d	SK	41	29	－	円	U	10YR3/2 黒褐色砂と 10YR4/2 灰黄褐色砂の斑土		
056	HM11-1	8F19d,20d	SK	66	39	－	円	凹	10YR3/2 黒褐色砂と 10YR4/2 灰黄褐色砂の斑土	加工さいころ	
057	HM11-1	8F19d,20d	SK	63	50	－	円	U	10YR6/4 にぶい黄橙色粘土と 10YR5/2 灰黄褐色シルトの斑土		大量の焼土塊を含む
001	HM11-2	8E17j	SU	90	85	－	―				土器集積範囲
002	HM11-2	8E19i	SU	57	40	－	―				土器集積範囲
003	HM11-2	8E18j	SK	88	60	26	隅丸方形	凹	10YR4/3 にぶい黄褐色粘土と 10YR3/3 暗褐色シルトと 10YR2/3 黒褐色土の斑土		第 26 図
004	HM11-2	8E18j	SX	(91)	(64)	25	楕円形	U	5YR4/4 にぶい赤褐色砂および 7.5YR4/4 褐色焼土		焼土範囲
005	HM11-2	9E1i	SM	70	43	－	不整形		貝層		
006	HM11-2	9E3h	SX	(103)	(64)	44	隅丸方形	凹	2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土		タタキ？
007	HM11-2	8E18i,18j,19i,19j	SX	(392)	(124)	42	長方形	凹	10YR7/4 にぶい黄橙色粘土		タタキ？
008	HM11-2	8E18j,19j	SM	126	90	－	不定形	―	貝層		貝層範囲
009	HM11-2	8E18j	SM	80	41	－	楕円	―	貝層		貝層範囲
010	HM11-2	9E1i	SD	109	24	44	溝状	U	10YR3/3 暗褐色砂		
011	HM11-2	9E2i	SK	313	(24)	25	方形	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
012	HM11-2	9E1i	SK	(200)	(120)	50	不整形	U			
013	HM11-2	9E2h,3h	SK	(165)	(154)	29	不整形	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
014	HM11-2	8E17j	SM	112	45	－	長楕円	―	貝層		貝層範囲
015	HM11-2	8E18j	SK	77	42	33	楕円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
016	HM11-2	8E19i,19j	SK	101	60	59	楕円	凹	10RY4/4 褐色混貝砂		
017	HM11-2	8E18j	SK	104	47	43	不整形	U	10YR3/4 暗褐色砂		
018	HM11-2	8E17j,17k,18j,18k	SK	(173)	(88)	21	長楕円	U	10YR2/3 黒褐色砂	d-020・027・028	墓壙
019	HM11-2	9E1i	SK	37	34	10	円	皿	10YR4/4 褐色砂		
020	HM11-2	8E19j	SK	(80)	(49)	47	楕円	凹	10YR4/2 灰黄褐色砂		
021	HM11-2	8E18j	SK	72	71	54	不整形	凹	10YR4/4 褐色砂		
022	HM11-2	8E18j	SK	82	32	24	長楕円	U	10YR4/4 褐色砂		
023	HM11-2	8E20i	SK	121	89	27	溝状	U	10YR5/4 にぶい黄褐色砂		
024	HM11-2	8E18j	SK	110	81	31	不整形	U	10YR4/4 褐色混貝砂		
025	HM11-2	8E18j	SK	178	79	25	長楕円	U	10YR3/3 暗褐色砂	d-019 壺	墓壙、第 25 図
026	HM11-2	8E19i,19j	SK	82	39	49	不整形	凹	10YR4/4 褐色砂		
027	HM11-2	8E19j	SK	89	86	19	円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
028	HM11-2	8E17j	SK	75	60	29	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
029	HM11-2	8E17j,18j	SK	80	36	38	不整形	凹	10YR3/3 暗褐色砂		
030	HM11-2	8E18j	P	22	17	40	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
031	HM11-2	8E18i,18j,19i,19j	SK	111	78	50	不整形	凹	10YR3/3 暗褐色砂		
032	HM11-2	8E19j	SK	(44)	(34)	19	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
033	HM11-2	8E19j	P	14	11	38	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
034	HM11-2	8E19j	P	16	15	27	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		

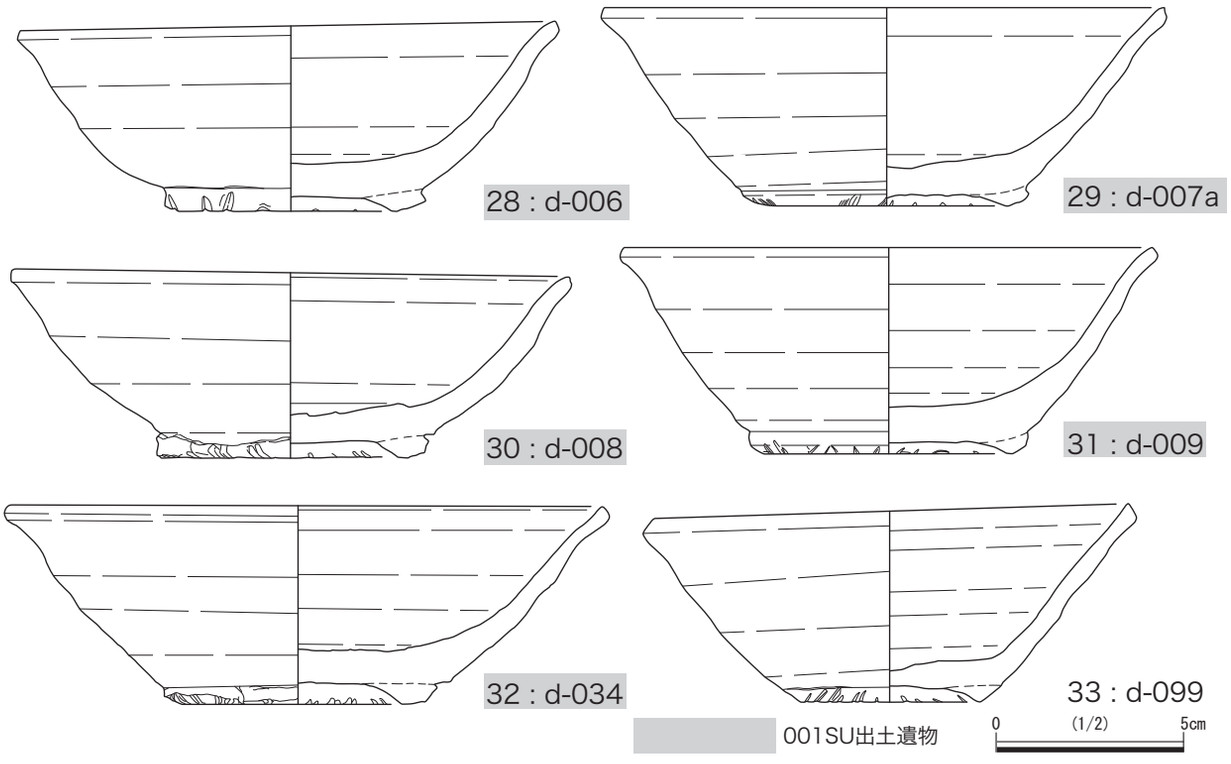
遺構No.	調査区	Gr	遺構名	法量（cm）			平面	断面	埋土	出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ					
035	HM11-2	8E17j	SD	203	50	25	溝状	U	10YR3/3 暗褐色砂		
036	HM11-2	8E17j	SK	(105)	(32)	－	(円)	U	10YR4/2 灰黄褐色砂		
037	HM11-2	8E18j	SK	95	70	45	不整形	U	10YR3/3 暗褐色砂		
038	HM11-2	8E19j	SK	148	64	23	不整形	凹	10YR3/3 暗褐色砂		
039	HM11-2	8E19j	SK	(38)	(36)	21	円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
040	HM11-2	8E19j	SK	87	38	31	楕円	U	10YR3/3 暗褐色砂		
041	HM11-2	8E19j	SK	101	48	46	楕円	凹	10YR3/3 暗褐色砂		
042	HM11-2	8E18j	SM	(86)	(34)	－	(円)	ー	純貝層		
043	HM11-2	8E20i, 9E1i	SK	(135)	(30)	28	(円)	U	10YR3/4 暗褐色砂と 10YR4/3 にぶい黄褐色砂の斑土		
044	HM11-2	8E19j	SK	156	83	21	長楕円	U	10YR3/3 暗褐色砂	d-022 小型壺	墓壙、第 25 図
045	HM11-2	8E20i, 9E1i	SK	129	76	17	不整形	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
001	RI11-3		SM						貝層		上層貝層範囲
002	RI11-3	8B7r,8r	SZ	157	87	20	長楕円	U	10YR4/3 にぶい黄褐色砂	d-110 山皿	第 61 図
003	RI11-3	8B11r	SK	57	50	10	円	皿	10YR3/3 暗褐色砂	d-119 ～ 121 小皿	
004	RI11-3	8B11r,11s	SX	237	138	－	ー				工房址？
005	RI11-3	8B11r	SK	(108)	(55)	14	不整形	皿			
006	RI11-3		NR						10YR3/2 黒褐色砂		自然流路化した溝？、第 63 図
007	RI11-3	8B9q,9r	SK	194	182	25	円	皿	10YR3/3 暗褐色砂と 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトの斑土		
008	RI11-3	8B8r,9q, 9r	SK	227	140	19	不整形	皿	10YR3/3 暗褐色砂と 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトの斑土		
009	RI11-3	8B9q,10q	SK	113	60	24	長楕円	U	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
010	RI11-3	8B11q,11r	SK	209	107	15	不整形	U	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
011	RI11-3	8B11q	SK	115	70	21	楕円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
012	RI11-3	8B11r	SK	58	47	18	円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
013	RI11-3	8B10r	SK	187	165	22	円	皿	10YR3/3 暗褐色砂と 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトの斑土		
014	RI11-3	8B10t	SK	(183)	(100)	18	長楕円	皿	10YR3/3 暗褐色砂		
015	RI11-3	8C11f,11g,12f,12g	SM	(170)	(163)	－	不整形	凹	貝層		
016	RI11-3	8C11d	SX 石組	84	68	－	方形	皿	10YR6/4 にぶい黄橙シルトと 10YR4/2 灰黄褐色砂の斑土		石組み、第 59 図
017	RI11-3	8C11c	SX 石組	98	94	－	方形	皿	10YR6/4 にぶい黄橙シルトと 10YR4/2 灰黄褐色砂の斑土		石組み、第 59 図
018	RI11-3	8C11d	SX 甕	132	58	30	瓢箪	U	焼土・炭		竈状遺構
019	RI11-3	8C12f,12g	SM	(198)	(89)	－	(長方形)	凹	貝層		
020	RI11-3		SX						北セクション参照		流路（区画溝？）、第 63 図
021	RI11-3		SD	(1829)	(144)	14			10YR3/3 暗褐色砂		流路（区画溝？）、第 63 図
022	RI11-3	8C9a,9b, 10b	SK	(319)	(185)	34	楕円	U	混土貝層		廃棄土坑？
023	RI11-3	8C11c,11d	SZ	165	104	14	長方形	皿	10YR3/4 暗褐色砂	d-407 短刀（副葬品）	第 62 図
024	RI11-3	8C9b,9c	SD	(740)	(126)	26			10YR3/3 暗褐色砂		流路（区画溝？）
025	RI11-3		SD	(802)	(114)	26			10YR3/3 暗褐色砂		流路（区画溝？）
026	RI11-3		SD	(2250)	(92)	18			10YR3/4 暗褐色砂		流路、第 63 図
001	HH11-4	1E12o,12p,13o,13p	SB	475	451	24	方形	凹	セクション図参照		第 46 図
002	HH11-4	1F13c,14c	SD	(768)	(162)	42		U	7.5YR2/2 黒褐色粗砂		周溝、第 41 図
003	HH11-4	1F13c,14c	SZ				方形？				方形周溝墓、第 41 図
004	HH11-4	1E12r,13q,13r	SD	(874)	(105)	27			7.5YR2/2 暗褐色砂		第 43 図
005	HH11-4	1E12s	SD	(142)	(111)	47			7.5YR2/2 黒褐色粗砂		方形周溝墓か、第 42 図
006	HH11-4	1E12s,12t	SD	(217)	(73)	50			7.5YR2/2 黒褐色粗砂		方形周溝墓か、第 42 図
007	HH11-4	1E13t	SD	(437)	(84)	28			7.5YR3/4 暗褐色粗砂と 7.5YR3/3 暗褐色砂の斑土		
008	HH11-4	1E12r,12q,13r	SD	697	96	24			7.5YR3/4 暗褐色粗砂と 7.5YR3/3 暗褐色砂の斑土		
009	HH11-4	1E13s,13t	SK	247	161	38	不整形	U	7.5YR3/4 暗褐色粗砂と 7.5YR3/3 暗褐色砂の斑土		
010	HH11-4	1E13r	SK	(87)	(62)	31		U	7.5YR2/3 黒褐色砂と 7.5YR3/4 暗褐色砂の斑土	d-238	
011	HH11-4	1E11p, 11q,12o, 12p,12q	SD	(1242)	(65)	29		U	10YR5/4 にぶい黄褐色砂と 10YR3/4 暗褐色砂の斑土		
012	HH11-4	1E12o,12p,13o,13p	SX	(578)	(439)	－	不整形	凹	10YR4/4 褐色砂と 10YR5/3 にぶい黄褐色砂のラミナ層		皿状構造の砂層
013	HH11-4	1E13r	SK	113	108	61	円	U	7.5YR2/2 暗褐色粗砂	d-254 甕	
014	HH11-4	1F14c	P	35	34	19	円	U	7.5YR3/4 暗褐色粗砂と 7.5YR3/3 暗褐色砂の斑土		
015	HH11-4	1F14b	P	(28)	(27)	57	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
016	HH11-4	1F13b	P	29	28	44	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
017	HH11-4	1F13b	P	30	26	55	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
018	HH11-4	1F13c	P	27	26	52	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
019	HH11-4	1F13b	P	40	36	29	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
020	HH11-4	1F14b	P	27	26	34	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
021	HH11-4	1F13b	P	33	32	36	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
022	HH11-4	1F14a	P	32	30	17	円	U	7.5YR3/4 暗褐色砂		
023	HH11-4	1F13a	P	46	35	53	円	U	7.5YR3/4 暗褐色砂		
024	HH11-4	1F13a	P	33	31	33	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
025	HH11-4	1F13a	P	32	31	28	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
026	HH11-4	1F13a	P	53	49	32	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
027	HH11-4	1F13a	P	47	38	26	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
028	HH11-4	1F14a	P	(27)	(26)	29	円	U	7.5YR2/2 黒褐色砂と 7.5YR3/4 暗褐色砂の斑土		
029	HH11-4	1F12a	P	46	35	23	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
030	HH11-4	1F12a	P	70	59	54	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
031	HH11-4	1F13a	P	47	43	46	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
032	HH11-4	1F13a	P	58	42	27	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
033	HH11-4	1F14a	SK	(107)	(33)	21	瓢箪	U	7.5YR3/4 暗褐色砂		
034	HH11-4	1E14t, 1F14a	P	(32)	(29)	19	円	U	7.5YR3/4 暗褐色砂		
035	HH11-4	1E13t	P	33	29	43	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
036	HH11-4	1E13t	P	32	30	51	円	凹	7.5YR2/2 暗褐色砂		
037	HH11-4	1E13t	P	38	37	29	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
038	HH11-4	1E13t	P	33	32	27	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
039	HH11-4	1E13t	P	40	37	24	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
040	HH11-4	1E12s,12t,13s,13t	P	37	36	33	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
041	HH11-4	1E13s	P	47	41	33	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
042	HH11-4	1E13r	P	43	41	39	円	U	7.5YR2/2 黒褐色砂と 7.5YR3/4 暗褐色砂の斑土		
043	HH11-4	1E12s	P	56	55	50	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
044	HH11-4	1E12r	P	40	38	52	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
045	HH11-4	1E13r	P	37	35	33	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
046	HH11-4	1E13r	P	56	39	48	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
047	HH11-4	1E12p	P	44	34	30	円	U	7.5YR2/2 黒褐色砂と 7.5YR3/4 暗褐色砂の斑土		
048	HH11-4	1E12o	P	37	36	34	円	U	7.5YR2/2 暗褐色砂		
001	HM11-5	10D5k,5l, 6k,6l	SK	(171)	(38)	27	不整形	U	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
002	HM11-5	10D3m,3n	SK	(109)	(90)	23	楕円	U	10YR3/2 黒褐色砂と 10YR4/4 褐色砂の斑土		第 35 図
003	HM11-5	10D3o	SE	(78)	(72)	16	円	凹			近代の井戸
004	HM11-5	10D3o	SK	(60)	(58)	12	楕円	U	10YR4/3 にぶい黄褐色砂		
005	HM11-5	10D5k,6k	SM	(308)	(60)	－	不整形		貝層		上層の純貝層

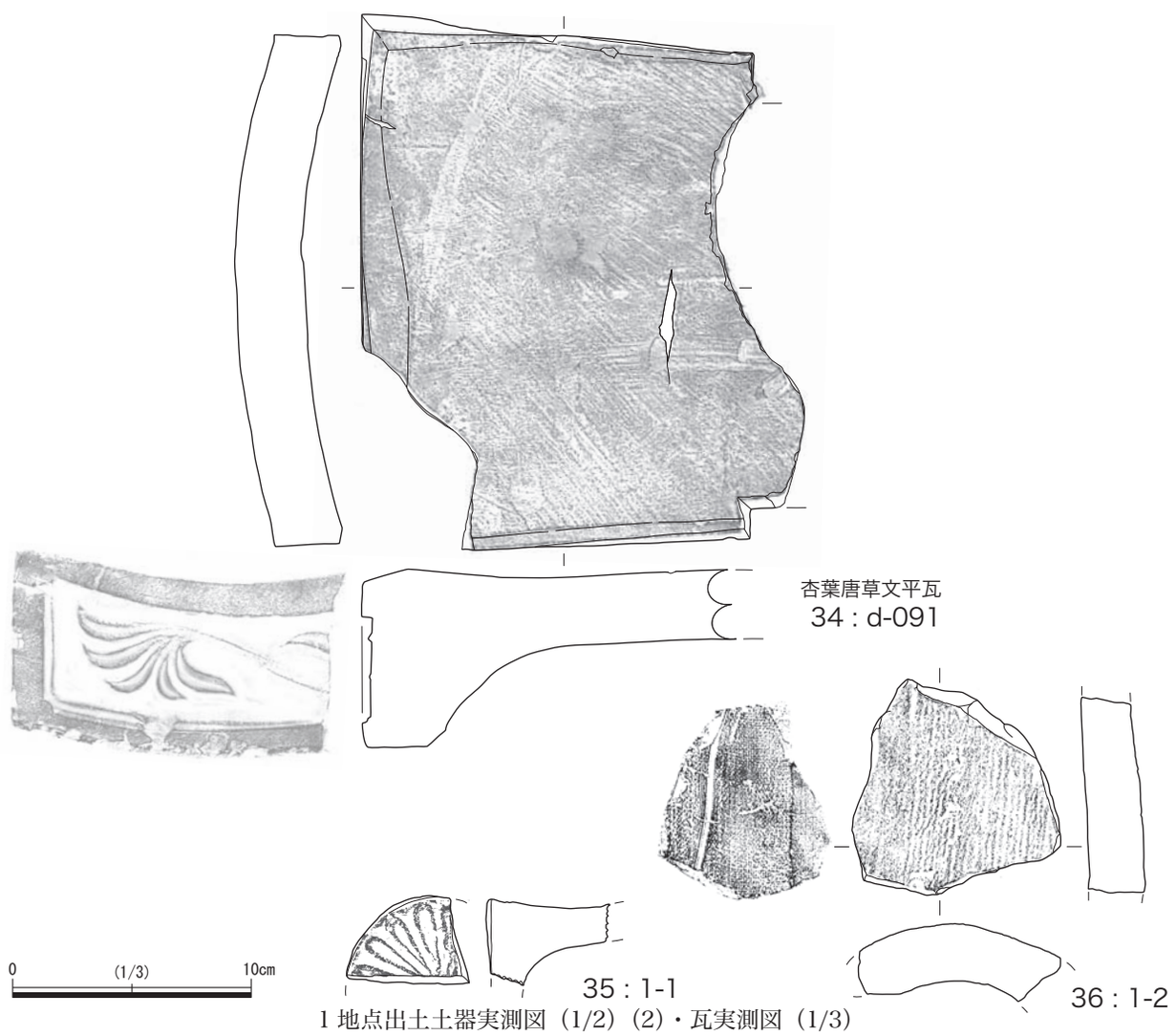
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
1	d-007b	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	7/12	(7.9)	(2.1)	4.0	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	3 型式新	
2	d-010	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	7.5	1.9	3.7	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	3 型式	
3	d-011	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	5/12	(7.7)	1.8	(4.2)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	3 型式	
4	d-012	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	11/12	8.1	2.3	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	3 型式	
5	d-013	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	8.0	1.7	4.0	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	3 型式	
6	d-014	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	6/12	(7.8)	1.8	4.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	4 型式	
7	d-015	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	7/12	(7.8)	1.7	(3.8)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	3 型式	
8	d-016	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	7.7	1.8	4.6	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	4 型式	
9	d-017	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	7.7	2.0	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/3 にぶい橙	4 型式	
10	d-018	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	11/12	(8.2)	2.3	4.5	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	7.5YR7/6 橙	3 型式	
11	d-019	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	7.9	2.0	4.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙	3 型式	
12	d-020	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	8.3	1.8	4.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	4 型式	
13	d-021	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	7.3	1.8	4.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	4 型式	
14	d-025	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	6/12	7.9	1.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	3 型式	
15	d-026	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	3/12	(7.6)	1.7	(4.5)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を少量含む	10YR7/6 明黄褐	4 型式	
16	d-028	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	3/12	(8.2)	2.0	(4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を少量含む	10YR7/6 明黄褐	4 型式	
17	d-029	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	8/12	7.9	2.3	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/6 明黄褐	3 型式	歪み大
18	d-030	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	4/12	(7.2)	1.6	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/6 明黄褐	4 型式	
19	d-022	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	完形	7.5	1.7	5.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	6a 型式	
20	d-031	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	11/12	8.0	2.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/6 明黄褐	3 型式	
21	d-032	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	11/12	8.0	1.9	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/6 明黄褐	3 型式	
22	d-033	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	4/12	(7.6)	1.8	(4.0)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/3 にぶい黄橙	3 型式	
23	d-036	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	10/12	8.0	2.2	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/6 明黄褐	4 型式	
24	d-037	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	小皿	4/12	8.1	2.2	4.6	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR8/3 浅黄橙	4 型式	
25	d-089	HM11-1	8F20f		古瀬戸	小皿	6/12	10.3	2.7	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白		灰釉
26	1-5	HM11-1	8F20f	008SB 床面	東濃	小皿		(8.0)	1.9	(4.0)	ナデ	ナデ、糸切底		10YR7/1 灰白	中世	墨書「+」
27	d-100	HM11-1	8F20f	035SK		土師皿	5/12	(12.9)	2.0	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙		
28	d-006	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	山茶碗	完形	14.2	5.0	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	粗い砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	3 型式	
29	d-007a	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	山茶碗	11/12	14.9	5.3	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	3 型式新	
30	d-008	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	山茶碗	完形	14.7	5.1	6.6	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	3 型式	
31	d-009	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	山茶碗	6/12	(14.0)	(5.5)	(6.6)	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y7/2 灰黄	3 型式新	
32	d-034	HM11-1	8F20c	001SU	常滑	山茶碗	9/12	15.8	5.3	6.1	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台、板状圧痕	礫を含む	5Y7/1 灰白	3 ～ 4 型式	
33	d-099	HM11-1	8F20f		常滑	山茶碗	完形	12.7	5.3	4.7	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	6a 型式	
34	d-091	HM11-1	8F20c	010SK	常滑	杏葉唐草文平瓦	－	長さ 22.5	幅 18.5	重さ 2.42kg	タテナデ、ヨコナデ、ケズリ、面取り	コビキ（斜め）	砂粒を含む	5Y7/1 灰白		布目あり
35	1-1	HM11-1	8F20g	地山直上	不明	瓦（丸瓦瓦当）	1/10	(4.2) ≒ 8.4					2.5Y7/1	灰白	中・近世？	いぶし部分有り 菊花文
36	1-2	HM11-1	8F20g	地山直上	常滑	丸瓦	1/10		厚さ 2.2 ～ 2.5		布目	縄目	ち密	5Y7/1 灰白	平安末	表面一部に自然釉
37	d-094	HM11-1	8F19f		知多	加工さいころ		1.2	1.2	厚さ 0.8	布目	縄目			平安末～	自然釉、古瓦
38	1-3	HM11-1		001SU	常滑	加工さいころ							緻密	10YR7/2 にぶい黄橙		古瓦 重さ 12.2g
39	1-6	HM11-1		056SK	常滑	加工さいころ			2.1			縄目			平安末～	古瓦
40	1-4	HM11-1	8F20g	008SB	常滑	加工さいころ									中世	山茶碗
41	d-102	HM11-1	8F19f		常滑	陶丸		2.15						2.5Y7/2 灰黄	中世	ヘラ記号「十」
42	d-003	HM11-1	8F20h		瀬戸	卸皿	2/12	(14.9)	3.7	7.8	ロクロナデ、卸目	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白		灰釉
43	d-002	HM11-1	8F19g		瀬戸	片口鉢	4/12	(36.7)	12.0	13.6	輪積み成型後皮ナデ	輪積み成型後皮ナデ、指オサエ、回転ヘラケズリ	砂粒を含む	5YR5/4 にぶい赤褐	9 型式	
44	d-083	HM11-1	8F20d			羽釜	口縁 3/12	(39.2)	(16.5)	－	ナデ	指オサエ、ナデ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙		

1 地点出土遺物観察表（1）

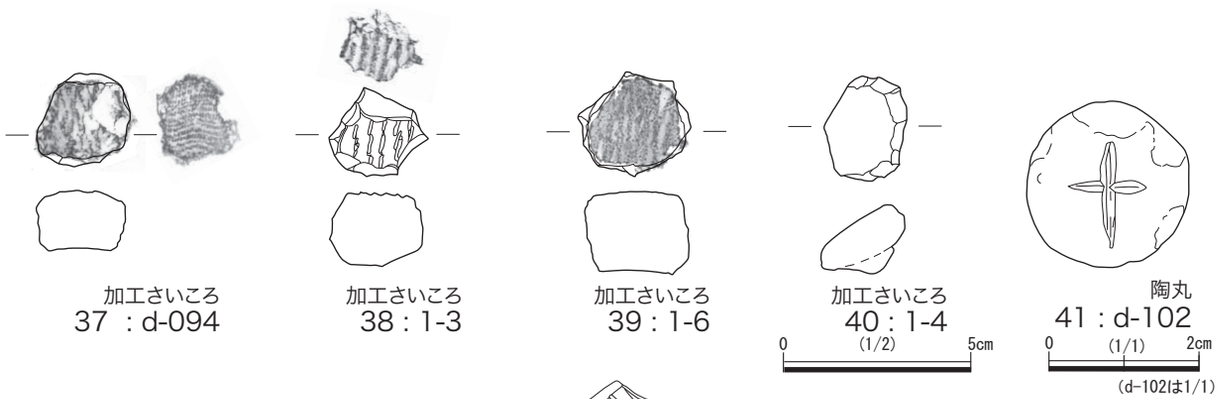


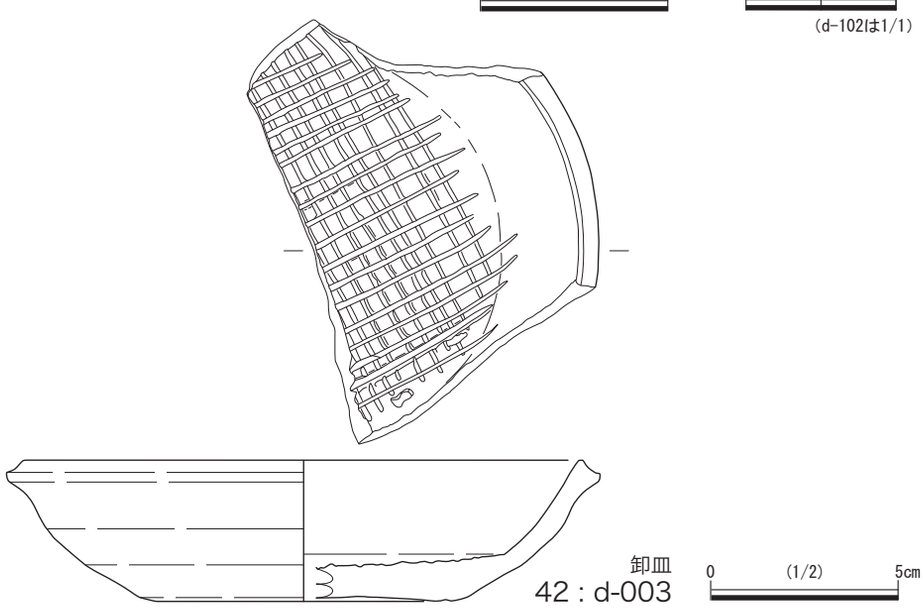
1 地点出土土器実測図（1/2）（1）

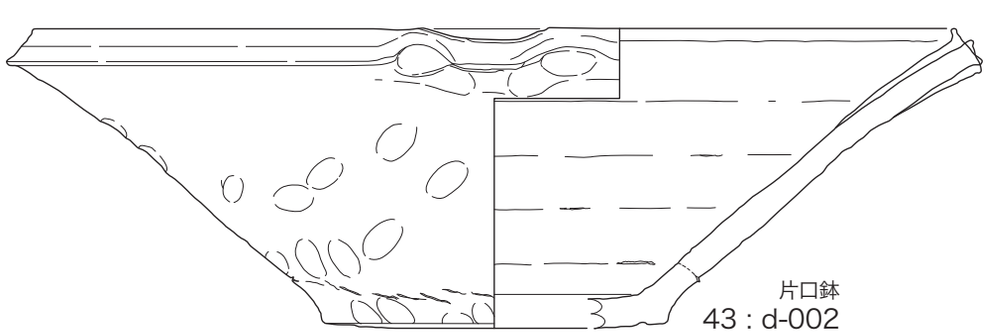


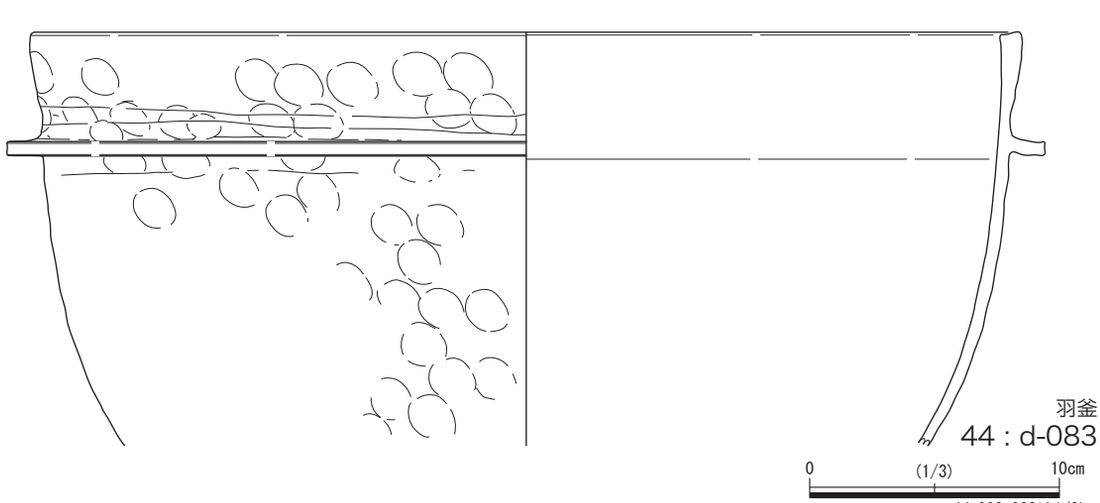


1 地点出土土器実測図（1/2）（2）・瓦実測図（1/3）





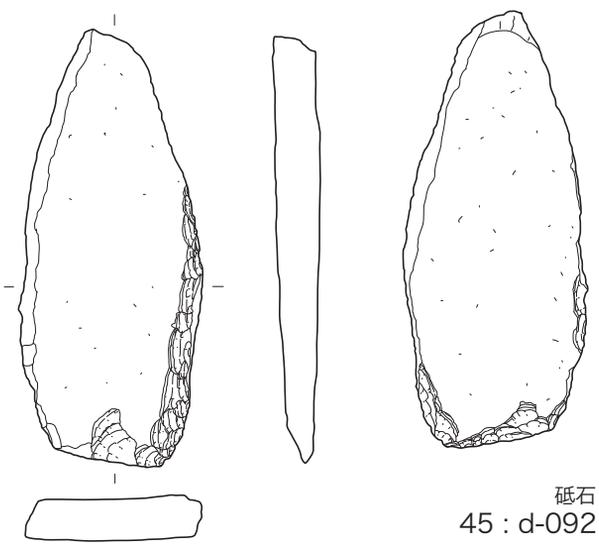




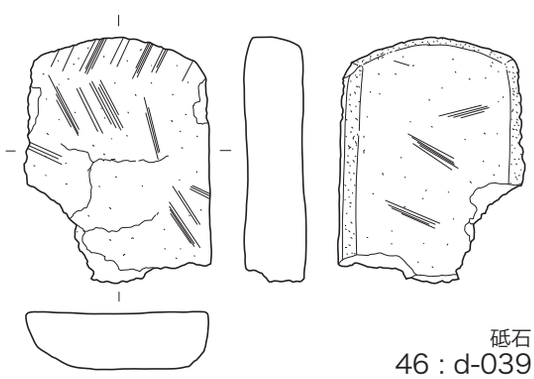
1 地点出土土製品（1/2、d-102 のみ 1/1）・土器実測図（1/2、d-002・083 のみ 1/3）(3)

番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考	砥面の形状
45	d-092	HM11-1	8F20g	砥石	凝灰質泥岩	11.41	4.80	1.22	113.00		C
46	d-039	HM11-1	8F20f	砥石	凝灰岩	(6.44)	4.91	1.70	74.70	下半部折損	C
47	d-066	HM11-1	8F20f	砥石	緑色凝灰岩	(8.75)	(4.57)	2.23	118.30	上半部折損、切り出し痕、笏谷石？	C
48	d-077	HM11-1	8F20e	砥石	緑色凝灰岩	12.12	5.29	2.48	175.60	切り出し痕？、赤色の付着物？、笏谷石？	B・C
49	d-095	HM11-1	8F20e	砥石	泥質凝灰岩	(6.21)	2.92	0.79	24.40	上半部折損	C

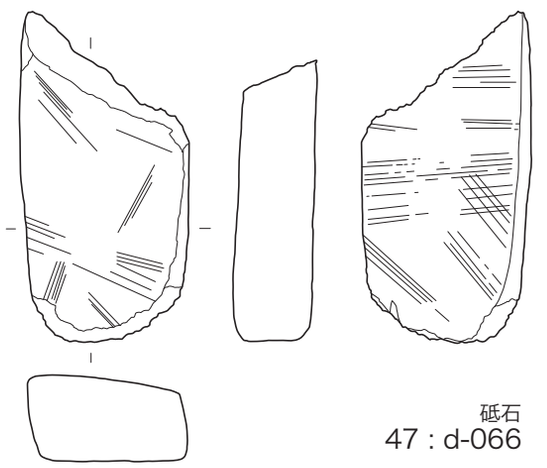
砥面の形状
A：内反する弧状
B：外反する弧状
C：平坦
D：内外反する弧状



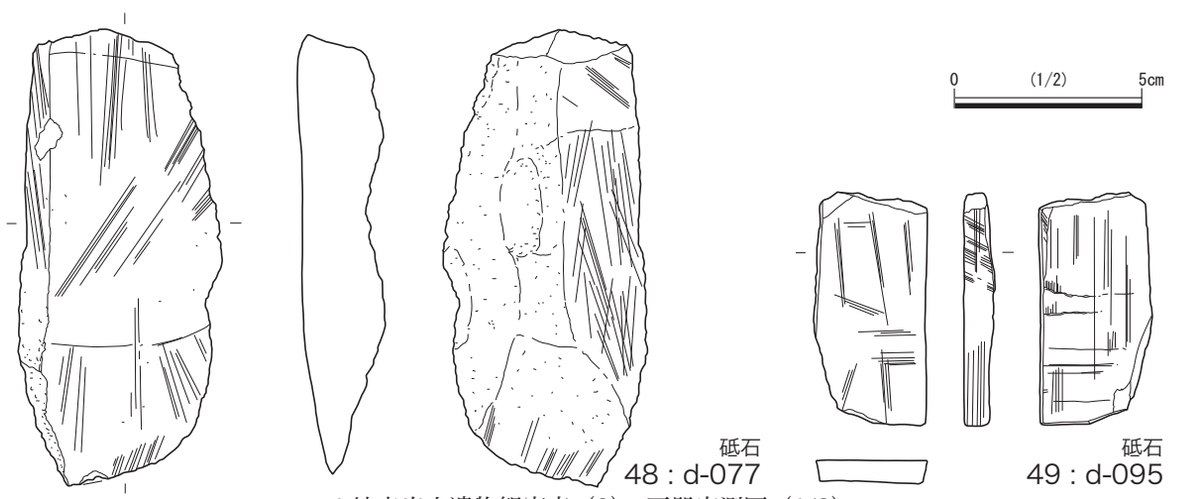
砥石
45 : d-092



砥石
46 : d-039



砥石
47 : d-066

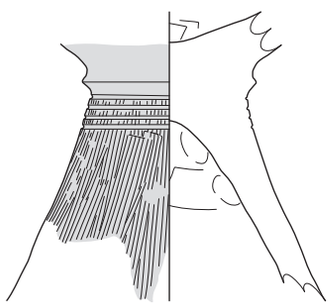


砥石
48 : d-077

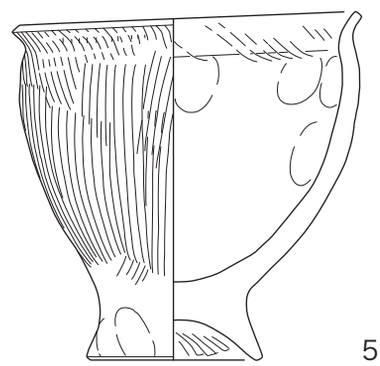
砥石
49 : d-095

1 地点出土遺物観察表（2）・石器実測図（1/2）

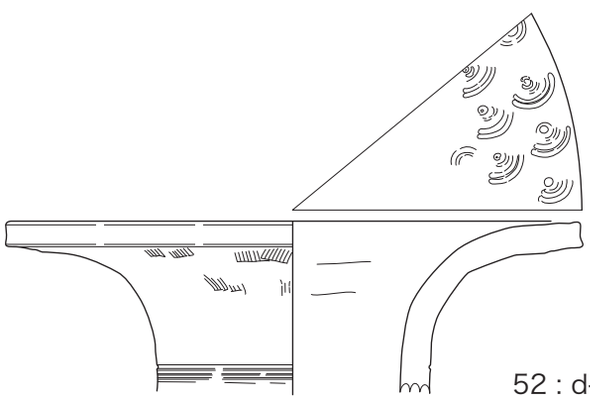
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
50	d-001	HM11-2	8E18j	地山直上	土器	高坏脚部	-	-	(7.7)	-	指オサエ、板ナデ	ナデ、タテハケ、直線文 4 条	砂粒、礫を含む	10YR7/6 明黄褐	弥生後期	外面赤彩
51	d-017	HM11-2	8E19j		土器	小型台付甕	10/12	9.0	9.3	4.7	ハケ後ヨコナデ、指オサエ後ナデ、ナデ後ハケ	ヨコナデ、ハケ、ナデ後指オサエ	砂粒、礫を含む	10YR8/4 浅黄橙	中世	
52	d-020	HM11-2	8E18i	018SK	弥生土器	壺	口縁 3/12	(22.8)	(6.8)	-	口縁内側に扇状紋（コンパス）、ヨコナデ	ハケ頸部にクシ描直線紋	砂粒を含む		弥生後期	
53	d-022	HM11-2	8E19j	044SK	弥生土器	小型壺	2/12	(5.2)	11.3	4.9	ナデ、しぼり痕	ナデ、ハケ	砂粒、礫を含む	10YR7/2 にぶい黄橙	弥生中期	副葬品
54	d-027	HM11-2	8E18k	018SK	弥生土器	（台付）甕		(19.5)	(20.0)	-	板ケズリ	指オサエ、板ナデ、ヘラケズリ	砂粒を含む		弥生後期	
55	d-028	HM11-2	8E18j	018SK	弥生土器	高坏	8/12	15.3	14.6	(11.0)	指オサエ、ヨコナデ、板ケズリ	ヨコナデ、指オサエ、ミガキ	砂粒を含む		弥生後期	外面全体に赤彩あり、黒斑あり
56	d-007	HM11-2	9E1i		土器	山皿	6/12	(7.9)	2.1	5.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/1 灰白	中世	



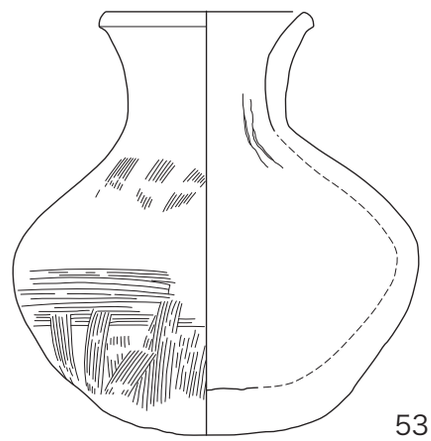
(赤彩)
50 : d-001



51 : d-017

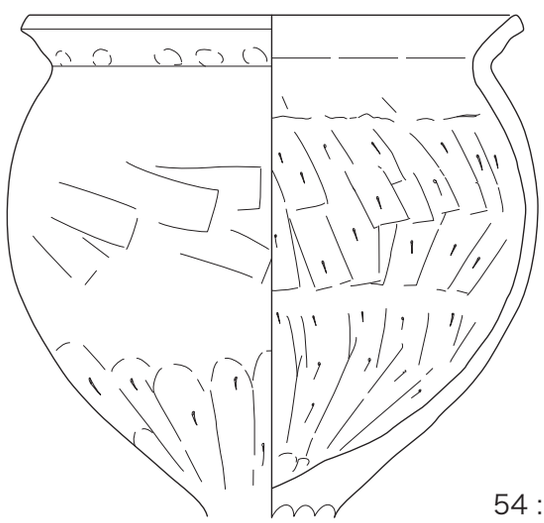


52 : d-020

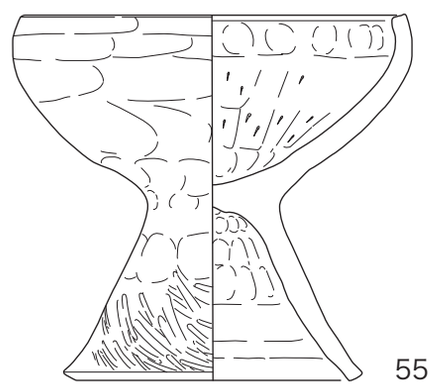


53 : d-022

0　(1/2)　5cm



54 : d-027

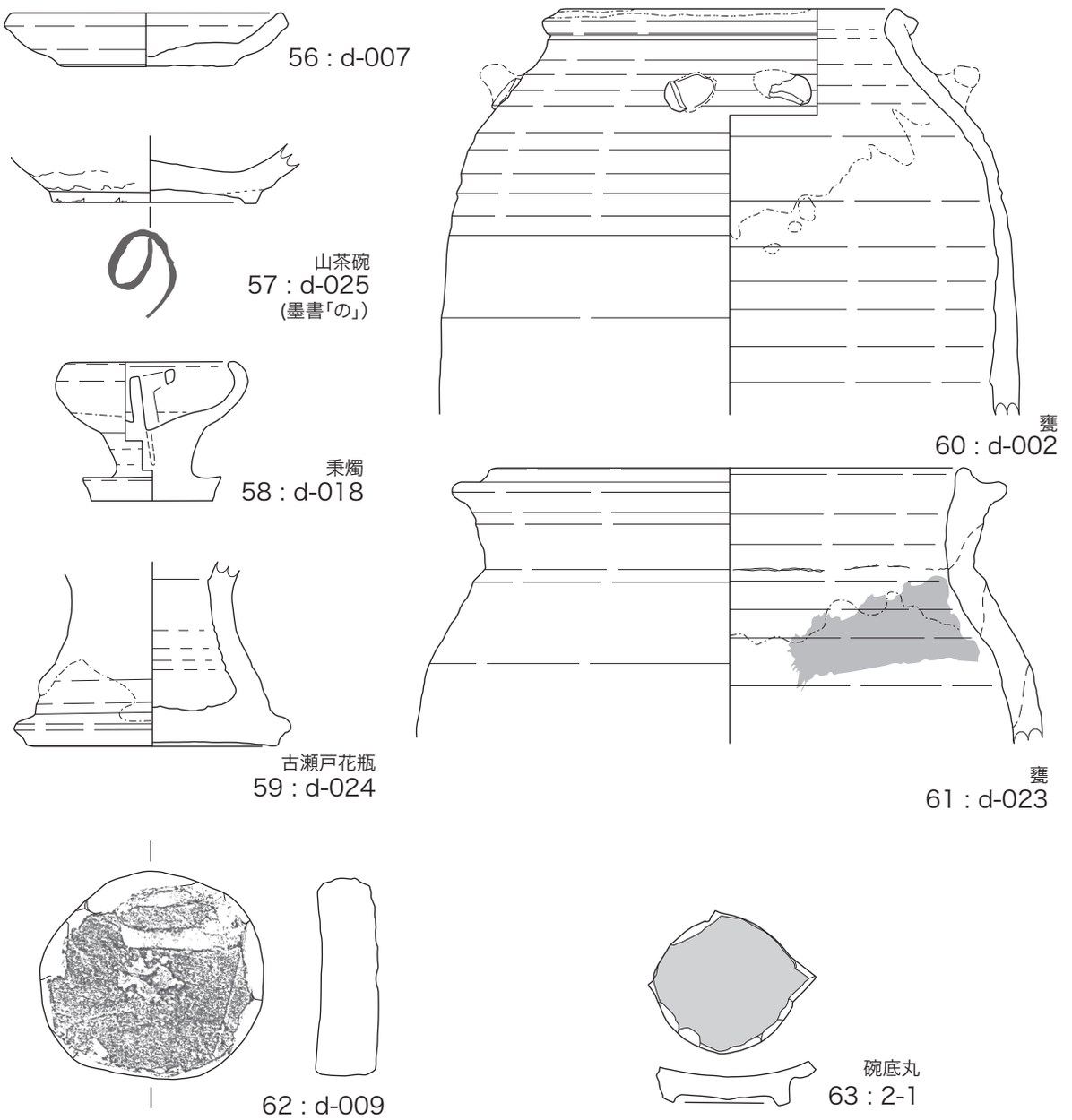


55 : d-028

0　(1/3)　10cm
(d-020・027・028は1/3)

2 地点出土遺物観察表（1）・土器実測図（1/2、d-020・027・028 のみ 1/3）(1)

番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
57	d-025	HM11-2	8E18j		常滑	山茶碗				6.0	ナデ	ナデ、糸切底		10YR7/2 にぶい黄橙	中世	墨書「の」
58	d-018	HM11-2	8E17j		土器	秉燭	完形	4.8	4.2	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切後板？	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白	近世	鉄釉底部に付着物
59	d-024	HM11-2	8E17j		古瀬戸	花瓶	底部 12/12	－	5.5	7.1	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄	中世	灰釉底部墨痕？
60	d-002	HM11-2	9E1i		土器	甕	5/12	(9.8)	12.1	－	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR6/1 褐灰	近世	錆釉、鉄釉
61	d-023	HM11-2	9E1i		土器	甕	4/12	(13.9)	(8.2)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	粗い砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	近世	錆釉
62	d-009	HM11-2	9E2i		？	加工円盤	1/1	5.6 ～ 6.0	1.7			10YR3/1	2.5Y7/2		近世？	平瓦 84.3 g
63	2-1	HM11-2		023SK	瀬戸美濃	加工円盤				3.5				内：2.5YR1.7/1（釉）外：2.5Y8/1	戦国・近世	天目碗底丸



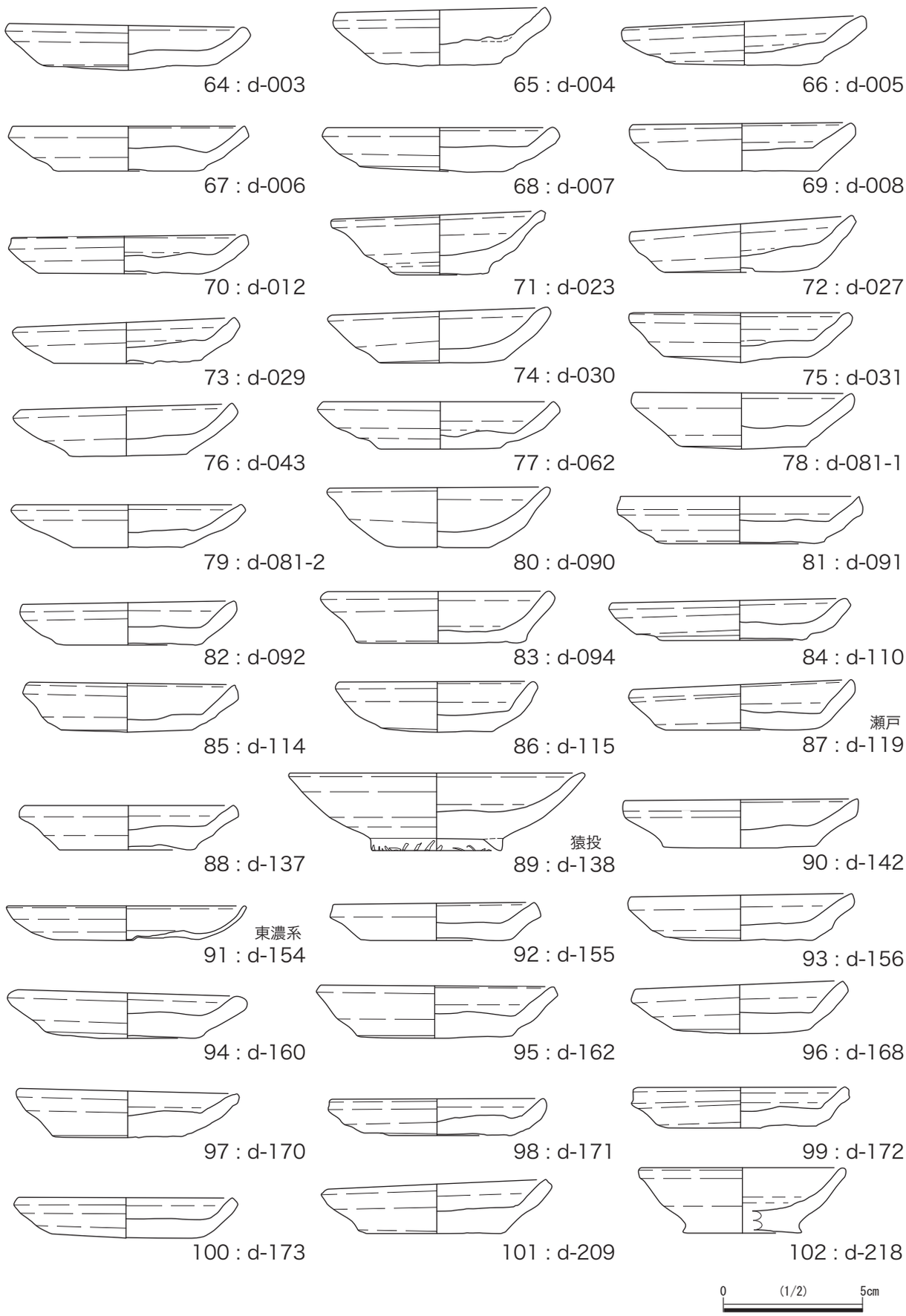
2 地点出土遺物観察表（2）・土器実測図（1/2）（2）

番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
64	d-003	RI11-3	8B10q		常滑	山皿（平）	11/12	8.4	1.7	6.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/1 灰白	6a 型式	
65	d-004	RI11-3	8B10q		常滑	山皿	5/12	7.5	2.2	4.4	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR6/3 にぶい黄橙		かまくそ付き
66	d-005	RI11-3	8B11q		常滑	山皿	8/12	8.5	1.8	5.7	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	6a 型式	
67	d-006	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	5/12	(8.3)	1.6	5.4	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	2.5Y8/2 灰白		
68	d-007	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	7/12	8.0	1.6	5.5	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切後指ナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白	6a 型式	
69	d-008	RI11-3	8B8t		常滑	山皿	7/12	7.8	1.8	5.4	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	5Y8/1 灰白		
70	d-012	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	7/12	8.2	1.4	6.1	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	6a 型式	
71	d-023	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	7/12	7.4	2.3	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	3 型式	
72	d-027	RI11-3	8B8t	貝層中	常滑	山皿	完形	8.0	2.1	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	10YR7/1 灰白		歪み大
73	d-029	RI11-3	8B9t		常滑	山皿	完形	7.8	1.7	5.3	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	5Y7/1 灰白	6a 型式	
74	d-030	RI11-3	8B9t		常滑	山皿	8/12	7.8	2.0	4.5	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切後指ナデ	砂粒、礫を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	3 型式	
75	d-031	RI11-3	8B9t		常滑	山皿	完形	7.2	1.8	5.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を多量に含む	2.5Y7/1 灰白		
76	d-043	RI11-3	8B9t		常滑	山皿	11/12	7.6	2.0	4.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切後指ナデ	礫を含む	2.5Y7/1 灰白		
77	d-062	RI11-3	8B11q		常滑	山皿	9/12	8.3	1.7	4.3	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	6a 型式	
78	d-081-1	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	9/12	7.8	2.1	4.5	ロクロナデ、指オサエか	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	5Y8/1 灰白		かまくそ付着
79	d-081-2	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	5/12	(8.0)	1.5	(4.0)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕か	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白		
80	d-090	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	5/12	7.8	2.2	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切後指ナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	3 型式	
81	d-091	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	6/12	(8.6)	1.7	(6.1)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙		
82	d-092	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	完形	7.6	1.6	5.3	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR6/1 褐灰		
83	d-094	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	完形	7.9	1.9	6.1	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/3 にぶい黄橙	4 型式	
84	d-110	RI11-3	8B8r		常滑	山皿	完形	8.3	1.5	5.3	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	6a 型式	
85	d-114	RI11-3	8B9t		常滑	山皿	10/12	7.5	1.9	4.7	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	2.5Y8/1 灰白		
86	d-115	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	11/12	6.9	1.8	4.0	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切後指ナデ	礫を含む	5Y7/1 灰白	6a 型式	
87	d-119	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	11/12	7.8	1.8	5.4	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	礫を含む	2.5Y7/2 灰黄	瀬戸 7 型式	
88	d-137	RI11-3	8B9t		常滑	山皿	6/12	(7.5)	1.6	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒、礫を含む	2.5Y7/2 灰黄		
89	d-138	RI11-3	8B9t		猿投か	碗（小皿）	2/12	(10.5)	2.8	(4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y6/1 黄灰	2 型式	
90	d-142	RI11-3	8B9t		常滑	山皿	9/12	8.3	1.8	5.5	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	2.5Y8/2 灰白		
91	d-154	RI11-3	8B9s		常滑	山皿	4/12	(8.4)	(1.2)	(5.2)	ロクロナデ	切り離し後回転ナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白	東濃系	
92	d-155	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	7/12	7.2	1.4	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	礫を含む	5Y7/1 灰白	6a 型式	
93	d-156	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	11/12	7.9	1.7	5.3	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	5Y7/1 灰白		
94	d-160	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	11/12	8.0	1.8	5.7	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	5 型式	
95	d-162	RI11-3	8B11s		常滑	山皿	11/12	8.3	1.9	5.6	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	5Y7/1 灰白		
96	d-168	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	6/12	7.4	1.9	4.9	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒、礫を含む	10YR7/2 にぶい黄橙		
97	d-170	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	完形	7.8	1.8	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒、礫を含む	5Y7/1 灰白	6a 型式	
98	d-171	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	完形	7.6	1.4	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	礫を含む	2.5Y8/2 灰白		
99	d-172	RI11-3	8B11r		常滑	山皿	完形	7.4	1.5	5.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	5Y8/1 灰白		
100	d-173	RI11-3	8C11e		常滑	山皿	6/12	7.7	1.5	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/1 灰白	6a 型式	
101	d-209	RI11-3	8C11e		常滑	山皿	10/12	7.8	2.0	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	6a 型式	
102	d-218	RI11-3	8C9b		常滑	山皿	5/12	(7.2)	2.4	(4.3)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	3 型式	
103	d-236	RI11-3	8C12e		瀬戸	石皿	10/12	11.4	2.8	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白		灰釉、鉄釉文様あり
104	d-240	RI11-3	8C10b		常滑	山皿	5/12	(8.0)	(1.5)	(4.5)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	2.5Y7/2 灰黄		内面付着物
105	d-256	RI11-3	8C9b		常滑	山皿	7/12	7.7	1.5	4.8	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y6/2 灰黄	6a 型式	
106	d-271	RI11-3	8C12g		瀬戸	小皿	5/12	(9.5)	2.4	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、削出高台	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄		灰釉底部にトチン痕
107	d-296	RI11-3	8C11d		瀬戸	山皿	7/12	8.2	2.0	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/2 にぶい黄橙	6a 型式	
108	d-307	RI11-3	8C9c		猿投	灰釉皿	4/12	(10.2)	(2.7)	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/3 浅黄	H-72?	灰釉
109	d-326	RI11-3	8C10b		瀬戸	小皿（灰釉）	完形	9.2	2.4	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	7.5YR8/3 浅黄橙	古瀬戸	灰釉
110	d-332	RI11-3	8C9b		常滑	山皿	7/12	(8.3)	2.2	4.8	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	5Y7/1 灰白	4 型式	
111	d-344	RI11-3	8C10a		常滑	山皿	10/12	7.5	1.9	5.0	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	5 型式	
112	d-345	RI11-3	8C10a		常滑	山皿	1/12	(8.7)	3.1	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	2 型式か？	

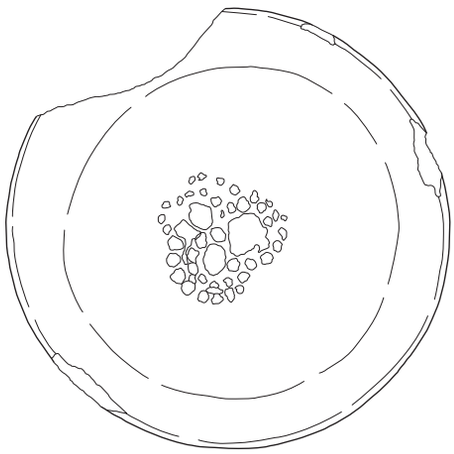
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
113	d-364	RI11-3	8C9b		常滑	山皿	完形	8.2	1.9	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	3 型式新	
114	d-377	RI11-3	8C10d		常滑	山皿	完形	8.0	2.0	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	礫を含む	7.5YR8/1 灰白		内面かまくそ付
115	d-389	RI11-3	8C9b		常滑	山皿	6/12	8.8	1.6	4.8	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	5 型式	
116	d-398	RI11-3	8C12f		常滑	山皿	10/12	(8.4)	2.2	4.4	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	3 型式	
117	d-402	RI11-3	8C11f		瀬戸	石皿	9/12	11.4	2.1	6.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、削出高台	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白	近世	長石釉底部に三又トチン痕
118	d-014	RI11-3	8B8t	貝層中		かわらけ	6/12	8.6	1.9	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含まない	5YR6/8 橙		
119	d-082	RI11-3	8B11r			かわらけ	7/12	8.4	2.0	4.7	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR8/6 黄橙	6a 型式か	歪み大
120	d-100	RI11-3	8B10t			かわらけ	完形	4.7	1.5	－	指オサエ後ナデ	指オサエ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙		手づくね
121	d-120	RI11-3	8B11r			かわらけ	8/12	8.1	1.8	5.1	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	5YR6/6 橙		
122	d-121	RI11-3	8B11r			かわらけ	11/12	8.3	1.5	5.7	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	5YR7/6 橙		
123	d-123	RI11-3	8B11r			かわらけ	完形	7.8	2.2	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙	6a 型式か	歪み大
124	d-124	RI11-3	8B11r			かわらけ	7/12	(8.1)	1.8	(5.2)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR8/6 黄橙	6a 型式か	片口皿か？
125	d-125	RI11-3	8B11r			かわらけ	7/12	8.7	1.4	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/4 にぶい黄橙		
126	d-126	RI11-3	8B8t			かわらけ	7/12	9.6	1.7	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含まない	7.5YR7/6 橙		内外面煤付着
127	d-233	RI11-3	8C11f			からわけ	10/12	8.3	1.7	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	5YR7/6 橙		内外面煤付着
128	d-399	RI11-3	8C12g			かわらけ	11/12	8.0	1.6	5.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	7.5YR7/6 橙		
129	d-374	RI11-3	8C9d			かわらけ	4/12	(10.6)	2.4	(5.6)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR6/6 明黄褐		
130	d-408	RI11-3	8C11g			かわらけ	6/12	(7.6)	(1.0)	(5.5)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	10YR8/4 浅黄橙		
131	d-410	RI11-3	8C12f			かわらけ	6/12	8.1	1.6	－	指オサエ、指ナデ	指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白		手づくね
132	3-4	RI11-3	―	調査区清掃		かわらけ	8/12	10.4	2.6	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒を含む	7.5YR6/6 橙		内外面煤付着
133	d-253	RI11-3	8C11d			かわらけ	9/12	4.2	1.0	－	ナデ	指オサエ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙		手づくね
134	d-369	RI11-3	8C9d			かわらけ	完形	5.2	1.2	－	ナデ	指オサエ	砂粒を含む	7.5YR7/4 にぶい橙		手づくね、指痕
135	d-042-2	RI11-3	8B9q		常滑	山茶碗	底 12/12	－	(3.2)	7.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄	1b または 2 型式か	
136	d-078	RI11-3	8B11r		常滑	山茶碗	完形	14.1	4.6	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	粗い砂粒を含む	5Y7/1 灰白	5 型式	内面煤付着
137	d-143	RI11-3	8B9t		常滑	山茶碗	5/12	(12.5)	4.7	5.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切	礫を含む	2.5Y7/1 灰白	8 ～ 9 型式	
138	d-167	RI11-3	8B10r		常滑	山茶碗	10/12	15.1	5.5	6.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒、礫を含む	5Y7/1 灰白	3 型式	
139	d-182	RI11-3	8C12e		常滑	山茶碗	4/12	(14.7)	5.2	(6.5)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	6a 型式	
140	d-294	RI11-3	8C9d		東濃	山茶碗	3/12	(11.2)	3.8	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR6/2 灰黄褐 長石粒	10YR5/3 にぶい黄褐	室町？	糸切底、ヘラ描き？
141	d-315	RI11-3	8C9c		常滑	山茶碗	底 12/12	－	(2.2)	8.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒、礫を含む	7.5YR6/3 にぶい褐	2 型式	底部
142	d-341	RI11-3	8C11a		東濃	山茶碗	3/12	(12.7)	3.5	(4.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y8/3 淡黄		16c?	糸切底、漆塗布
143	d-343	RI11-3	8C10a		常滑	山茶碗	完形	12.5	4.1	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、板状圧痕	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	第 11 型式	東濃系
144	d-356	RI11-3	8C9c		常滑	山茶碗	底 12/12	－	(3.1)	(7.1)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	10YR7/1 灰白	2 型式	
145	d-362	RI11-3	8C9c		常滑	山茶碗	5/12	15.2	5.3	6.0	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白		
146	d-363	RI11-3	8C9b		常滑	山茶碗	5/12	15.4	5.8	6.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒、礫を含む	5Y8/1 灰白		
147	d-368	RI11-3	8C9d		常滑	山茶碗	底 12/12	－	(2.5)	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	5Y8/1 灰白	2 型式	
148	d-395	RI11-3	8C11d		常滑	山茶碗	1/12	(15.6)	4.8	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切後指ナデ、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白	2 型式	
149	d-409	RI11-3	8C11f		常滑	山茶碗	7/12	－	(2.7)	6.3	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/3 浅黄	O-53?	底部線刻？
150	3-1	RI11-3	8C8b	020SX	常滑	山茶碗	6/12	(15.2)	5.6	(6.6)	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台	砂粒、礫を含む	5Y7/1 灰白		
151	3-2	RI11-3	8C8b	020SX	常滑	山茶碗	9/12	15.2	5.7	6.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1 灰白		
152	3-3	RI11-3	8C10a	地山直上	瀬戸	山茶碗	8/12	(13.7)	5.0	5.3	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、糸切り痕	小石長石	2.5Y7/1 灰白		籾高台、糸切底
153	3-5	RI11-3		調査区清掃	瀬戸	小皿	5/12	(11.8)	3.0	6.4	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ		内：2.5Y8/2 外：5Y6/4		灰釉
154	d-329	RI11-3	8C10b		中国	青磁碗	2/12	(14.0)	(5.5)					内：5Y6/1 外：5GY6/1	宋代	片切彫花文
155	d-299	RI11-3	8C11g		中国	青磁碗				(5)				内：2.5GY 外：10Y6/2 胎土：2.5Y7/4	宋代	蓮弁文
156	d-086	RI11-3	8B9s		常滑	加工さいころ			厚さ 2.2		布目	自然釉付着			平安末～	古瓦
157	d-195	RI11-3	8C10b		常滑	加工さいころ								2.5Y6/2 灰黄	中世	片口鉢高台部分
158	d-019	RI11-3	8B10r		瀬戸か	花瓶	胴 6/12	－	(5.9)	－	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR7/4 にぶい黄橙		小型半割
159	d-001	RI11-3	8B10q		瀬戸美濃	擂鉢	3/12	(33.9)	13.2	(15.0)	ロクロナデ、櫛目 15 本	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	礫を含む	2.5Y7/3 浅黄	近世	
160	d-133	RI11-3	8B9t		瀬戸	擂鉢	6/12	31.4	13.6	11.9	ロクロナデ、櫛目 11 本	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	礫を含む	2.5Y7/4 浅黄		鉄釉

3 地点出土遺物観察表（2）

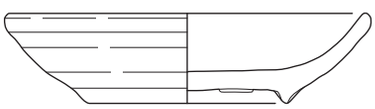
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
161	d-140	RI11-3	8B9t		常滑	平瓦	1/5	厚さ 1.6			布目	縄	10YR7/2 にぶい黄褐		鎌倉前期	
162	d-099	RI11-3	8B9s			土錘		穴径 0.25	長さ 3.4							重さ 1.2 g
163	d-242	RI11-3	8C10b			土錘		穴径 0.3	長さ 3.6							重さ 4.5 g
164	d-322	RI11-3	8C9b			土錘		穴径 0.4	長さ 6.1							重さ 9.5 g
165	d-312	RI11-3	8C9c			陶錘		穴径 1.5	長さ 7.0							（重さ 54.7 g）
166	d-313	RI11-3	8C13f			陶錘		穴径 1.0	長さ 5.8							重さ 29.8 g
167	d-015	RI11-3	8B11r		常滑？	加工円盤				3.9	ナデ	糸切			中世？	碗底丸
168	d-033	RI11-3	8B9t		常滑	加工円盤	1/1	4.8 ～ 5.1	1.4			5YR6/6	7.5YR8/4		近世？	41.5 g内面に炭化物、表面・周辺が研磨仕上げ
169	d-108	RI11-3	8B8t		常滑か	加工円盤	12/12	5.5 ～ 6.4	1.3 ～ 1.5				5YR6/6 陶器	表：10YR7/4 裏：7.5Y5/2	中～近世	57.7 g甕？
170	d-111	RI11-3	8B8t		常滑	加工円盤	1/1	6.4 × 7.4	1.1		5YR4/2	5YR5/2	2.5YR5/3		近世	甕 77.4 g加工途上半製品の可能性あり内面施釉？
171	d-117	RI11-3	8B8t		常滑	加工円盤	1/1	5.8 × 6.7	0.9 ～ 1.2			5Y4/3 施釉？	2.5YR6/4(2.5Y6/1) 2 層構造		近世？	甕 64.8 g
172	d-136	RI11-3	8B9t		瀬戸？	加工円盤								10YR4/3 にぶい黄褐色		碗底丸糸切底
173	d-174	RI11-3	8B11f		常滑	加工円盤	1/1	3.2	1.1			10YR7/4 斑 7.5YR3/3	7.5YR7/610YR7/4 層状		近世？	甕 16.0 g全体を研磨して仕上げ
174	d-176	RI11-3	8C11e		瀬戸	加工円盤	1/2	4.8	1.0		7.5YR4/3	7.5YR4/3	2.5YR8/2		近世	擂鉢 21.8 g
175	d-188	RI11-3	8C10c		常滑	加工円盤	1/1	2.8 ～ 3.1	1.1		2.5YR5/4 研磨	5YR5/2	2.5YR6/6			15.2 g
176	d-204	RI11-3	8C9b		常滑	加工円盤	1/2	(5.1)	0.8			7.5YR5/2	10R5/6		近世か	甕 15.8 g
177	d-205	RI11-3	8C9b		常滑	加工円盤	1/1	4.3	1.0 ～ 1.4		2.5YR6/6	10YR5/3	7.5YR6/6		近世か	甕 29.2 g
178	d-215	RI11-3	8C9c		常滑	加工円盤	12/12	5.3 ～ 5.7	1.4			表：7.5YR6/3	2.5YR6/6		中～近世	甕 52.7 g
179	d-219	RI11-3	8C10b		不明	加工円盤	1/1	3.2	1.5			10YR4/1	2.5Y7/2		不明	平瓦 19.3 g周囲研磨仕上げ
180	d-226	RI11-3	8C13e		中国	加工円盤								内：N8/ 外：7.5GY7/1	宋代？	青磁高台掻き取り
181	d-227	RI11-3	8C13e		瀬戸美濃	加工円盤				4.6				内：7.5YR2/1（斑） 外：2.5Y8/1	中～近世？	碗底丸
182	d-234	RI11-3	8C11e		常滑	加工円盤	1/1	3.2 ～ 4.0	1.2				2.5YR6/4	5YR3/1	近世か？	甕 22.6 g
183	d-241	RI11-3	8C11e		常滑	加工円盤	1/1?	4.6 ～ 5.2	1.4		7.5YR7/4	7.5YR6/3	10YR8/2		近世？	甕 43.9 g
184	d-252	RI11-3	8C8b		常滑	加工円盤	1/1	5.3 ～ 6.5	1.5			10YR4/2	2.5YR5/3		近世？	甕 76.1 g加工途上か
185	d-262	RI11-3	8C11a			加工円盤	1/1	3.7	1.0 ～ 1.4			10YR8/4	5YR7/6		近世？	甕 22.5 g表面・周辺研磨仕上げ
186	d-266	RI11-3	8C10d		瀬戸美濃	加工円盤				4.6				内：5Y7/2（釉） 外：5Y8/1	中～近世	碗底丸
187	d-277	RI11-3	8C12f		瀬戸美濃	加工円盤				4.0				10YR2/1（天目釉） 2.5Y7/2（斑）	戦国・近世	天目碗底丸
188	d-278	RI11-3	8C12f		常滑	加工円盤	10/12	4.4 ～ 5.7	1.5			7.5YR3/1 7.5YR5/3 斑	2.5YR5/6		近世？	甕？ 55.3 g線刻
189	d-282	RI11-3	8C10e		常滑	加工円盤	1/1	5.8 ～ 6.1	1.0			7.5YR5/4	7.5YR7/6		近世？	甕 57.0 g
190	d-292	RI11-3	812d		不明	加工円盤	1/1	3.9 ～ 4.2	1.4			10YR3/1	2.5Y7/1		不明	平瓦 36.4 g
191	d-300	RI11-3	8C10d			加工円盤	12/12						7.5Y8/1 灰白	5Y3/1 オリーブ黒	近世？	平瓦 96.6 g
192	d-334	RI11-3	8C9b		瀬戸？	加工円盤				4.0	ナデ、指ナデ	糸切		5Y6/1 灰	中世	碗底丸、糸切底
193	d-349	RI11-3	8C11a		瀬戸美濃	加工円盤				4.5	指ナデ	糸切、板目		2.5Y7/1 灰白	中世	碗底丸
194	d-361	RI11-3	8C9b		常滑か？	加工円盤	12/12	4.1	厚さ 1.2 ～ 1.6				7.5YR7/4 にぶい橙	表：2.5Y6/6 裏：2.5Y3/3	中～近世？	36.0 g甕破片か
195	d-381	RI11-3	8C10d		瀬戸	加工円盤				3.2	指ナデ	糸切、ナデ、板目		5Y7/1 灰白	中世	碗底丸
196	d-390	RI11-3	8C9b		不明	加工円盤				5.0	指ナデ	糸切底		10YR5/3 にぶい黄褐	中・近世	碗底丸高台外れ
197	d-403	RI11-3	8C11e		瀬戸	加工円盤				5.0	指ナデ	糸切、板目		10YR7/1 灰白	中世	碗底丸高台外れ
198	d-151	RI11-3	8B9g		常滑	紡錘車	1/1	5.2	1.0 ～ 1.2		10YR7/4	10YR6/6	7.5YR6/4		近世か	63.2 g
199	d-298	RI11-3	8C11g		瀬戸	陶片	底 1/7				2.5Y4/1 釘描き文字		2.5Y6/2		室町？	祖母懐壺底部
200	d-407	RI11-3	8C11d	023SZ		短刀		身幅 2.5	長さ 31.3						鎌倉？	副葬品木質鞘付着重さ 182.4 g
201	d-016	RI11-3	8B8t			羽口	2/10	内径 2.5			平滑			10YR7/2 にぶい黄橙	中世～戦国	先端にガラス質付着
202	d-194	RI11-3	8C11a			羽口	1/3	内径 2.5			平滑	平滑、ヒビあり	粗い砂粒を含む	7.5YR6/6 橙	中世～戦国	付着物なし
203	d-146	RI11-3	8B9t		常滑	土管		長さ (30.9)	幅 (10.1)	厚さ 10.1	指オサエ、粘土輪積痕	板ナデ	長石を含む			近世赤物

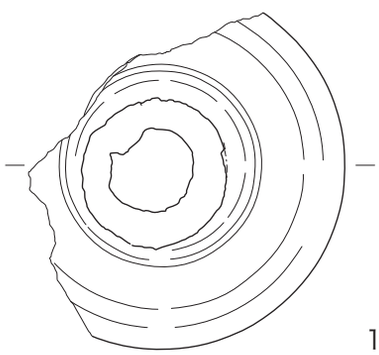


3 地点出土土器実測図（1/2）（1）

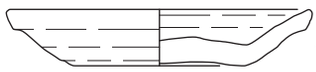


石皿
103 : d-236

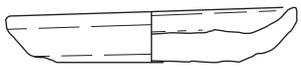




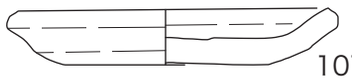
古瀬戸
106 : d-271



104 : d-240

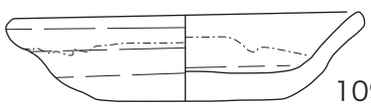


105 : d-256

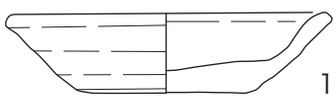


瀬戸
107 : d-296

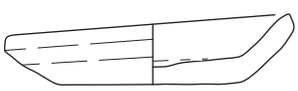
灰釉皿
108 : d-307



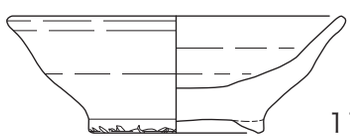
109 : d-326



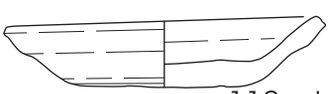
110 : d-332



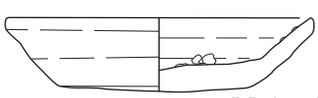
111 : d-344



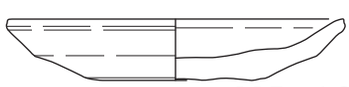
112 : d-345



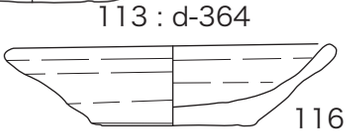
113 : d-364



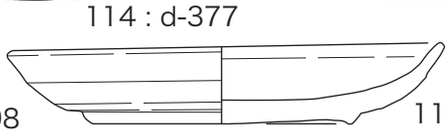
114 : d-377



115 : d-389



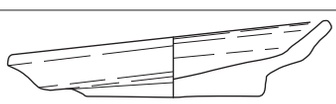
116 : d-398



石皿
117 : d-402

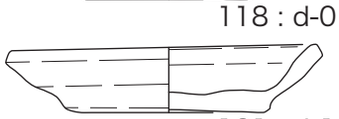
以下かわらけ

118 : d-014

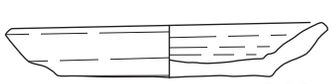


119 : d-082

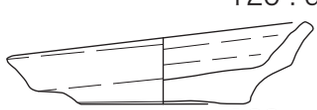
120 : d-100



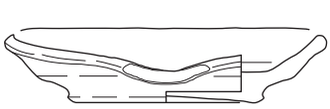
121 : d-120



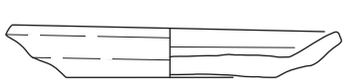
122 : d-121



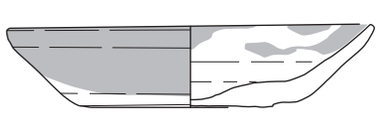
123 : d-123



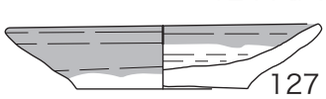
124 : d-124



125 : d-125



126 : d-126

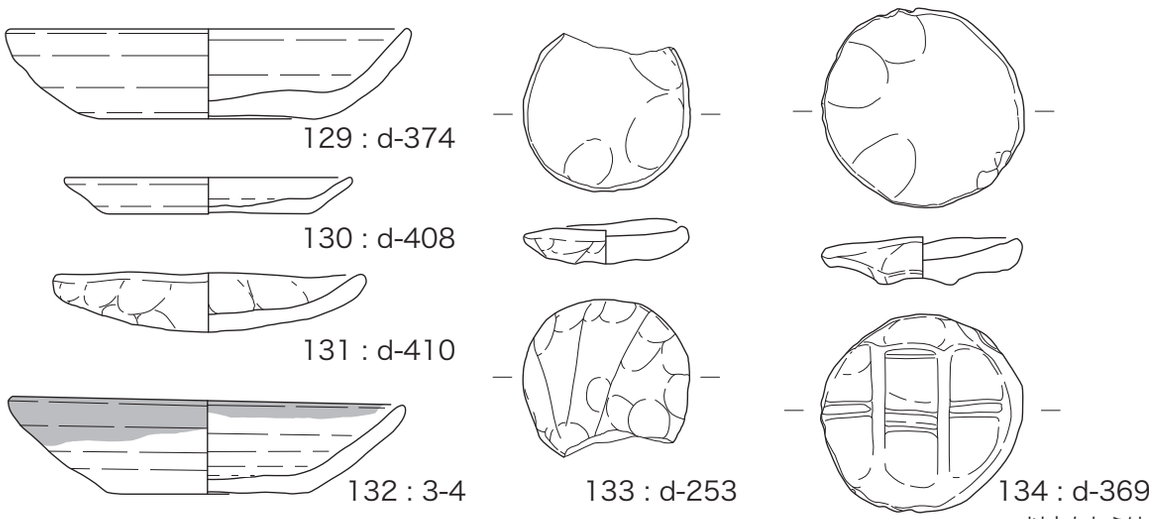


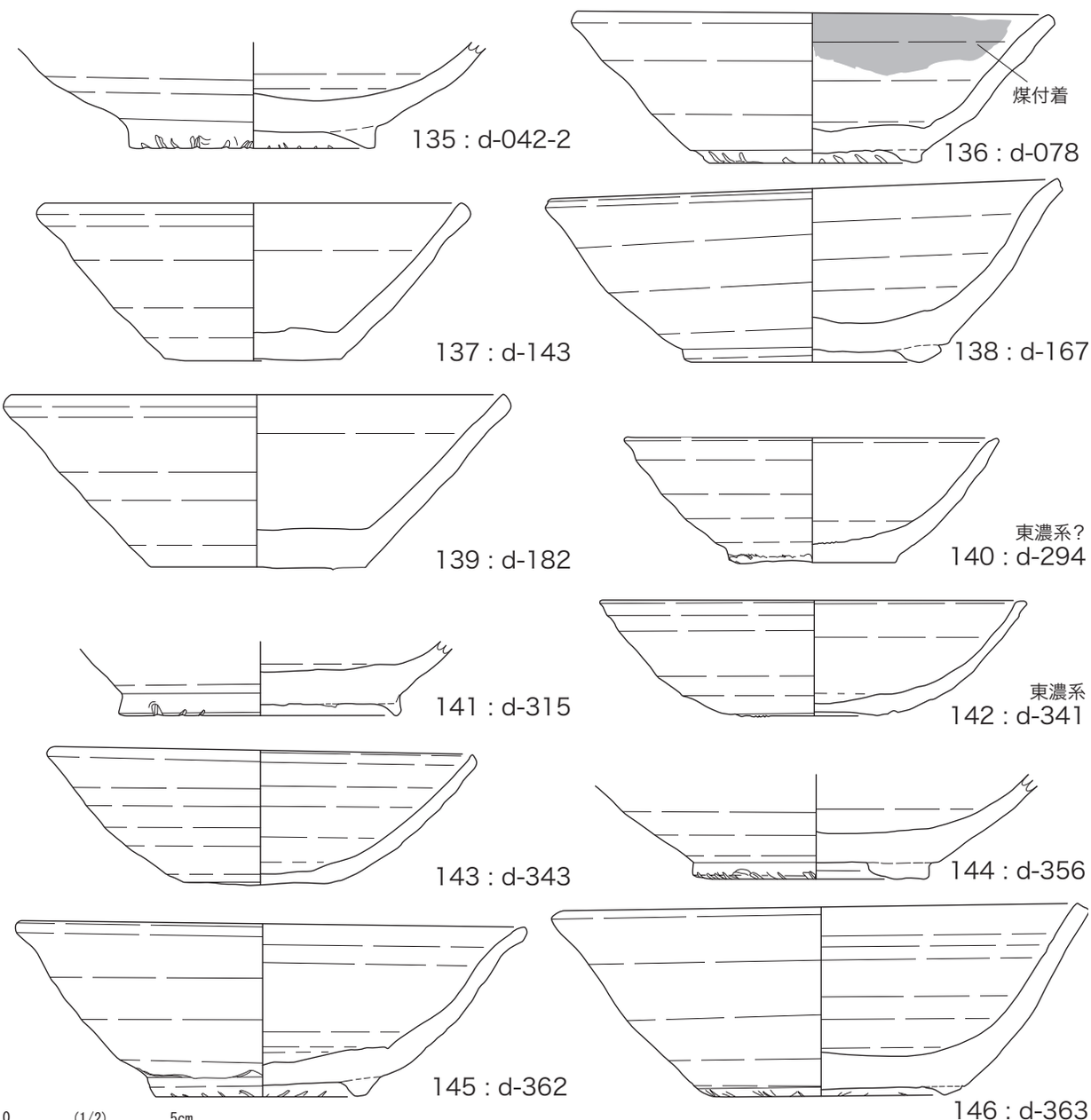
127 : d-233

128 : d-399

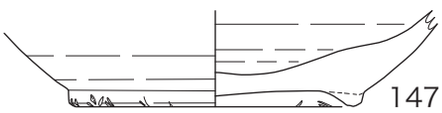
0　(1/2)　5cm

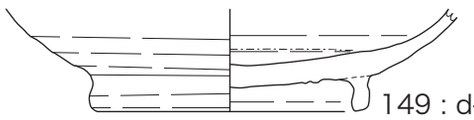
3 地点出土土器実測図（1/2）(2)

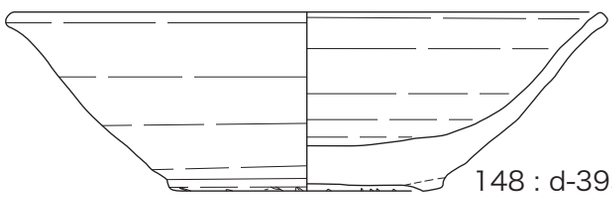


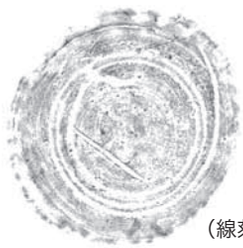


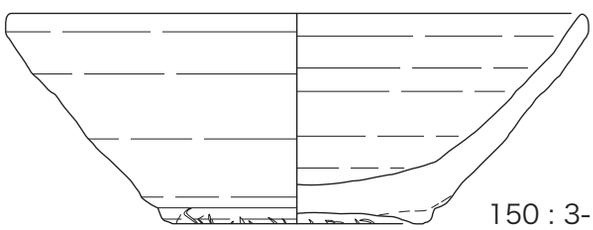
3 地点出土土器実測図（1/2）(3)

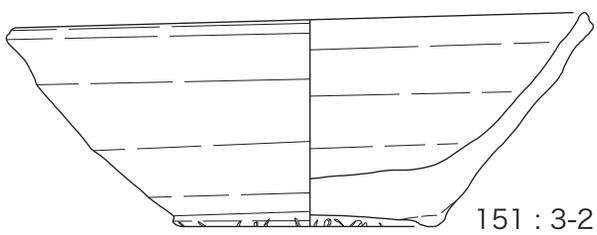

147 : d-368

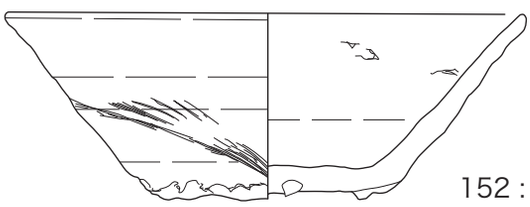

149 : d-409

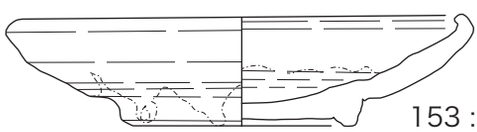

148 : d-395

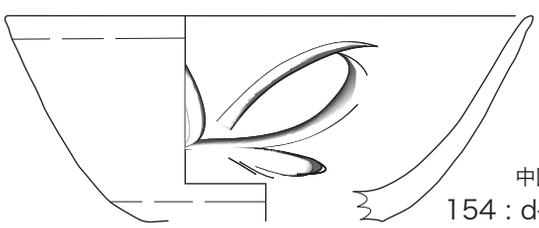

（線刻か?）

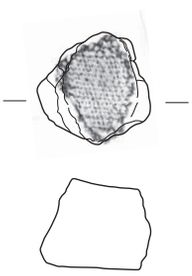

150 : 3-1

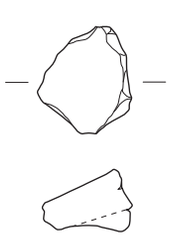

151 : 3-2

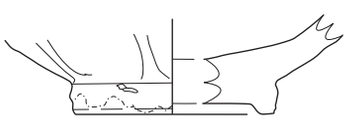

152 : 3-3

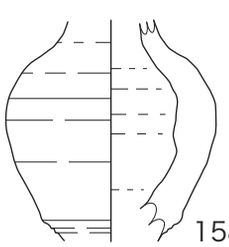

153 : 3-5

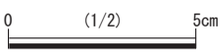

中国青磁
154 : d-329


加工さいころ
156 : d-086

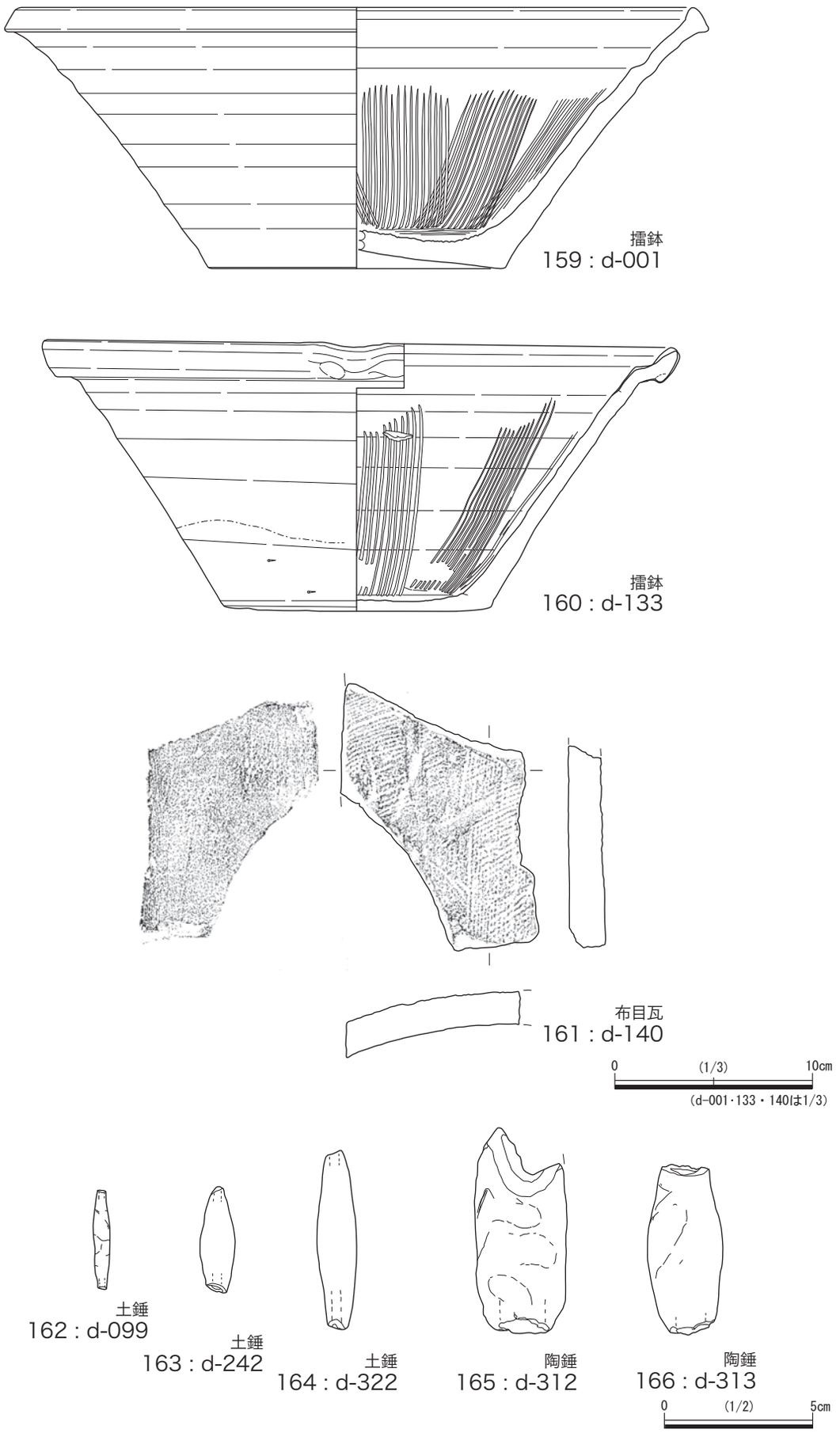

加工さいころ
157 : d-195


中国青磁
155 : d-299

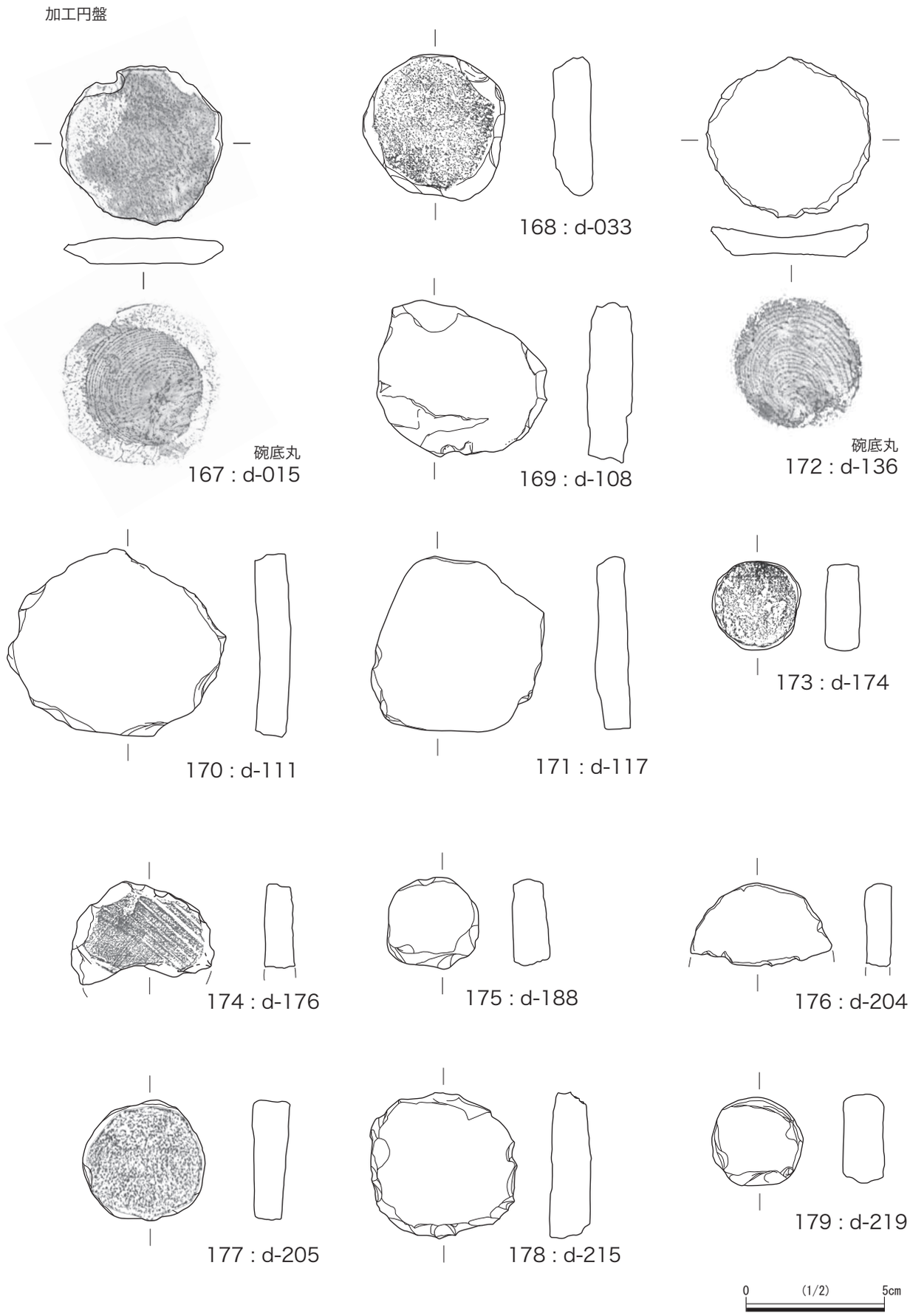

花瓶?
158 : d-019



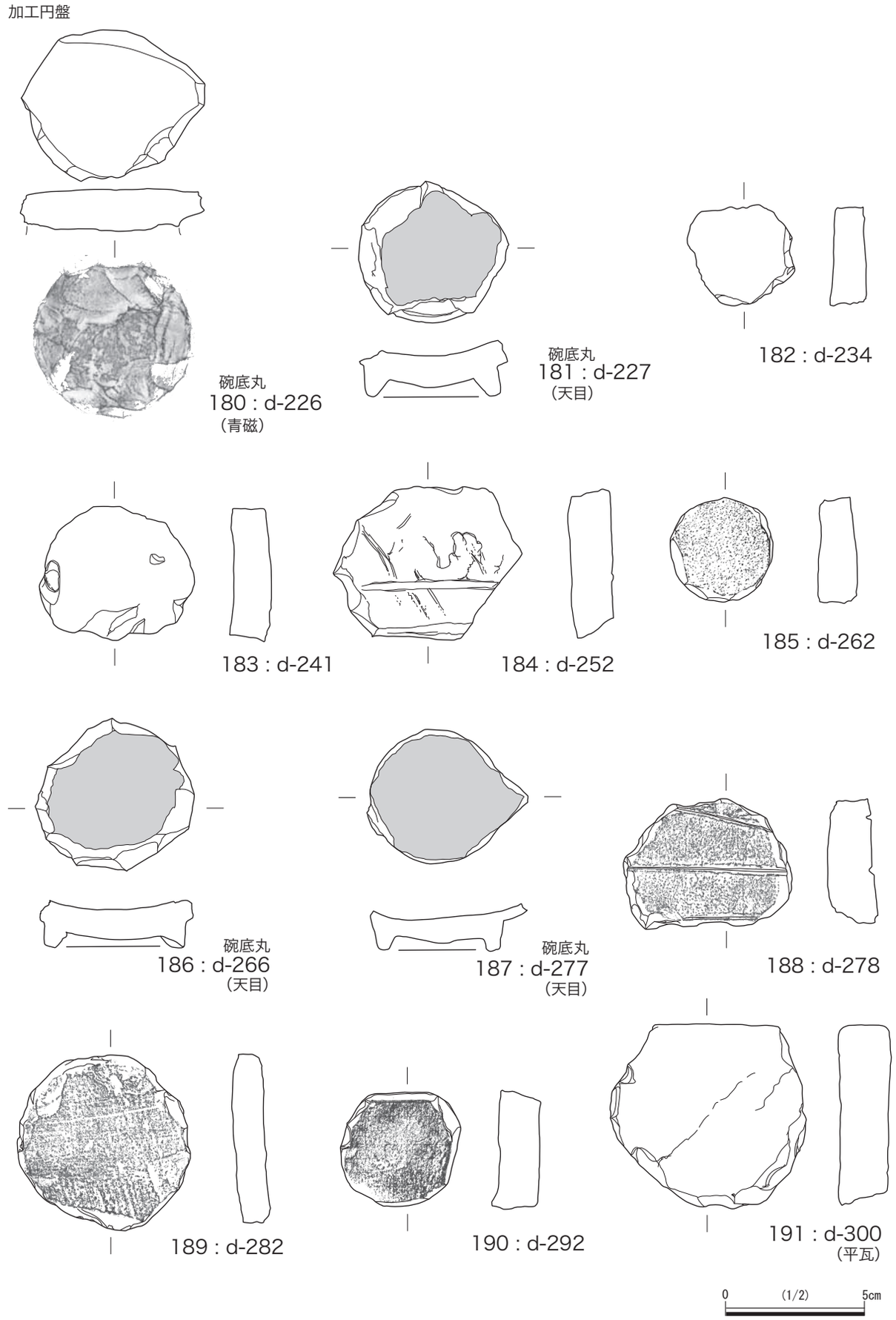
3 地点出土土器実測図（1/2）(4)



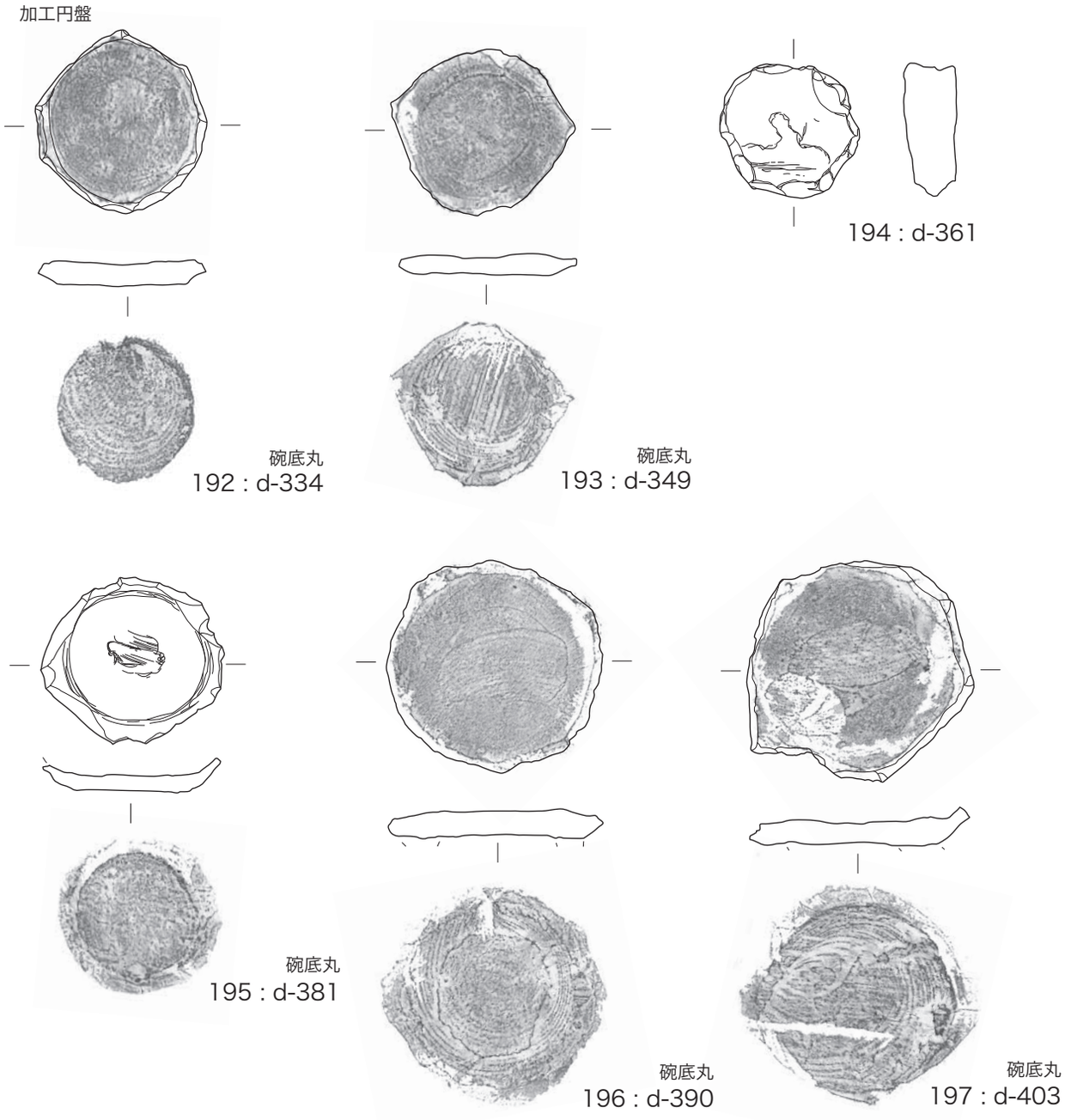
3 地点出土土器実測図（1/3）(5)・瓦実測図（1/3）・土製品実測図（1/2）(1)



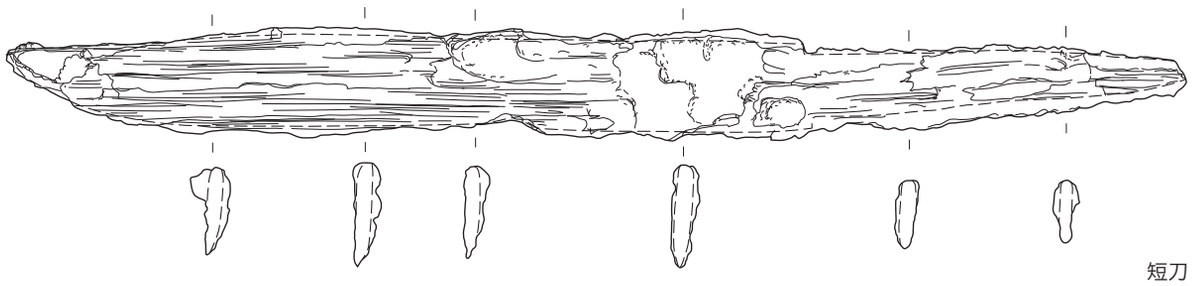
3 地点出土土製品実測図（1/2）(2)



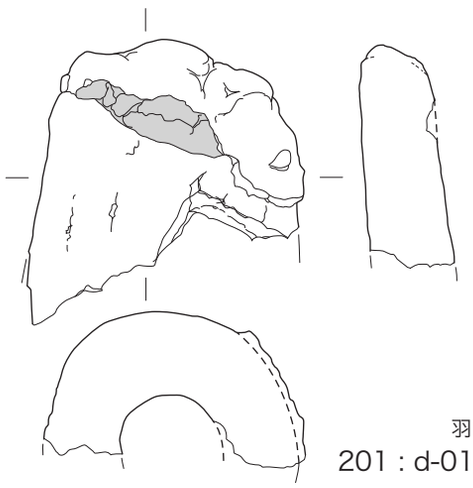
3 地点出土土製品実測図（1/2）（3）



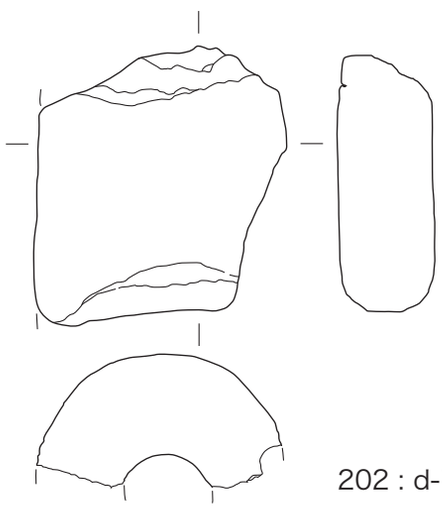
3 地点出土土製品実測図（1/2）(4)



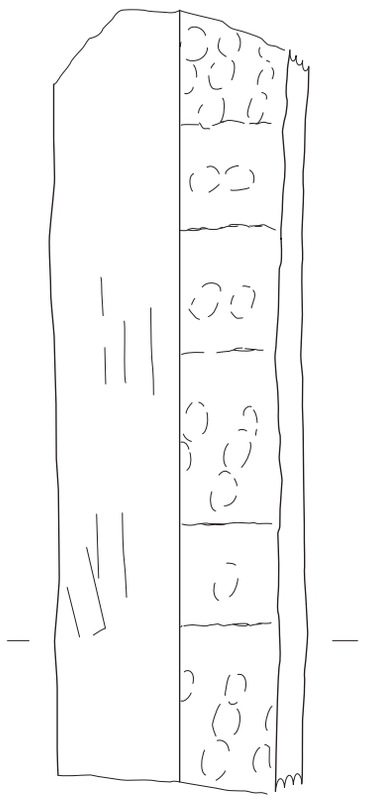
短刀
200 : d-407
(023SZ副葬品)

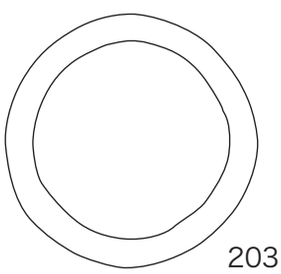


羽口
201 : d-016



羽口
202 : d-194





土管
203 : d-146

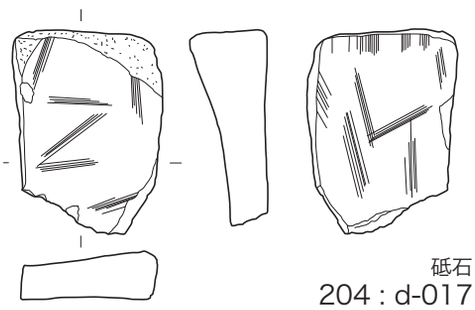
0　(1/2)　5cm

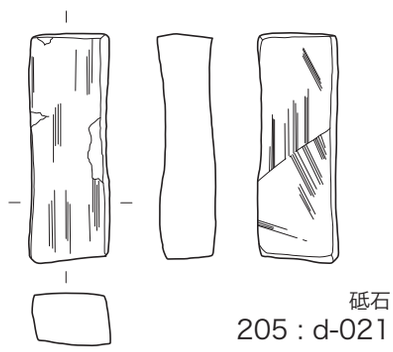
0　(1/3)　10cm
(d-146は1/3)

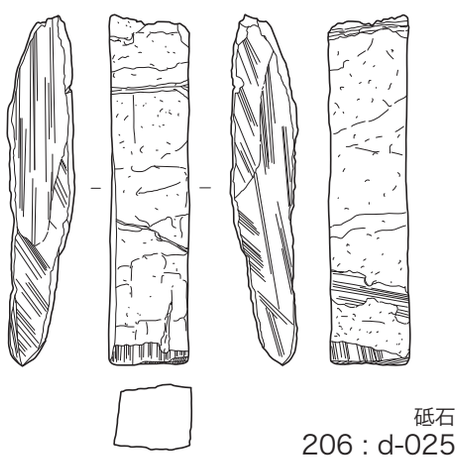
3 地点出土鉄製品実測図（1/2）・羽口実測図（1/2）・土管実測図（1/3）(4)

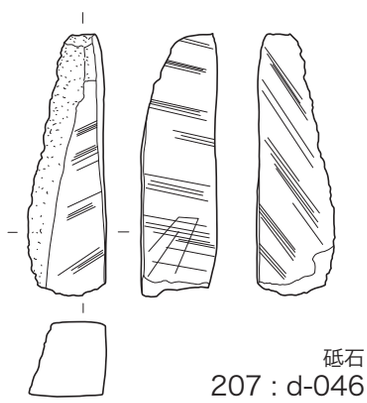
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	砥面の形状
204	d-017	RI11-3	8B10r	砥石	緑色凝灰岩	(5.38)	(3.86)	(2.07)	53.50	切り出し痕、破片、笏谷石？	A・C
205	d-021	RI11-3	8B11s	砥石	緑色凝灰岩	6.07	2.12	1.44	34.70	笏谷石？	C・D
206	d-025	RI11-3	8B11s	砥石	凝灰質泥岩	(9.30)	2.02	1.65	52.50	上部欠損	C
207	d-046	RI11-3	8B10q	砥石	緑色凝灰岩	(6.73)	(2.02)	1.99	35.30	下半部折損、笏谷石？	C
208	d-104	RI11-3	8B8t	砥石	緑色凝灰岩	(8.29)	2.72	3.02	76.80	上半部折損、切り出し痕、笏谷石？	B・C
209	d-141	RI11-3	8B9t	砥石	凝灰岩	(3.32)	(3.00)	(2.96)	45.10	破片、三河白？	A？
210	d-196	RI11-3	8C12a	砥石	緑色凝灰岩	(8.71)	(2.67)	2.14	67.80	上部折損、切り出し痕、笏谷石？	A
211	d-239	RI11-3	8C11g	砥石	砂岩	(6.05)	2.99	3.14	86.30	下半部折損	A
212	d-305	RI11-3	8C13g	砥石	片麻岩	(9.89)	4.75	1.66	107.00	上半部欠損	C
213	d-359	RI11-3	8C9c	砥石	緑色凝灰岩	(7.06)	4.38	2.96	102.00	下半部折損、切り出し痕、笏谷石？	A
214	d-382	RI11-3	8C11d	砥石	緑色凝灰岩	(9.39)	(6.65)	3.74	259.00	破損	C
215	d-037	RI11-3	8B9q	打製石斧	チャート	8.25	6.02	3.35	189.10	刃部角約 60 度	

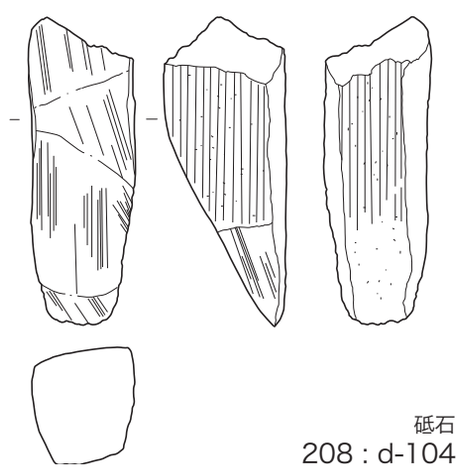
砥面の形状
A：内反する弧状
B：外反する弧状
C：平坦
D：内外反する弧状


砥石
204 : d-017

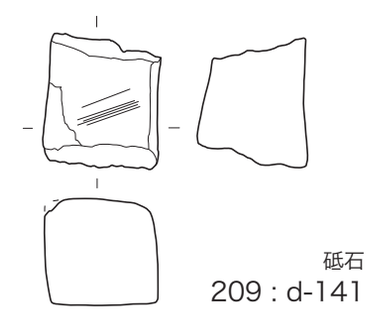

砥石
205 : d-021


砥石
206 : d-025

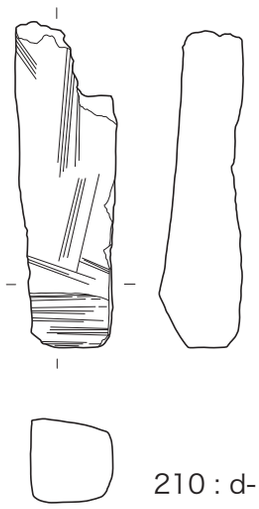

砥石
207 : d-046


砥石
208 : d-104

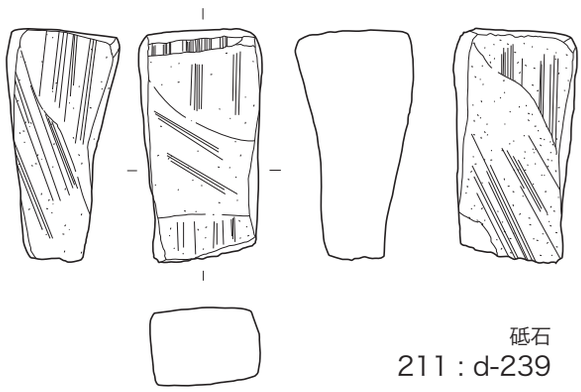
0　(1/2)　5cm


砥石
209 : d-141

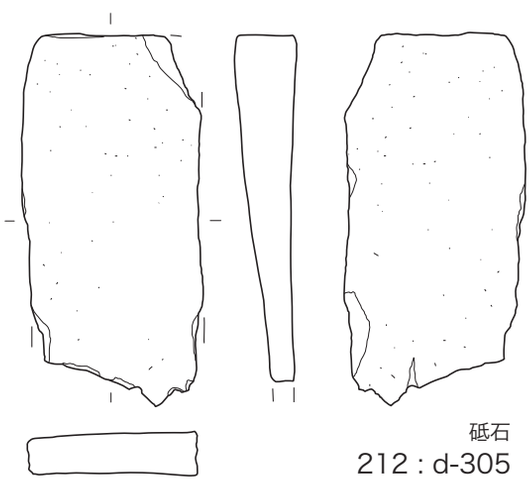
3 地点出土遺物観察表（2）・石器実測図（1/2）（1）



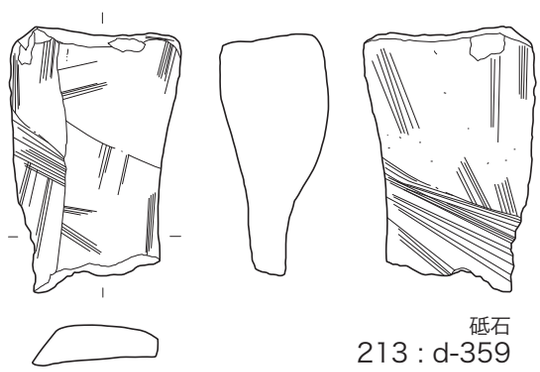
砥石
210 : d-196



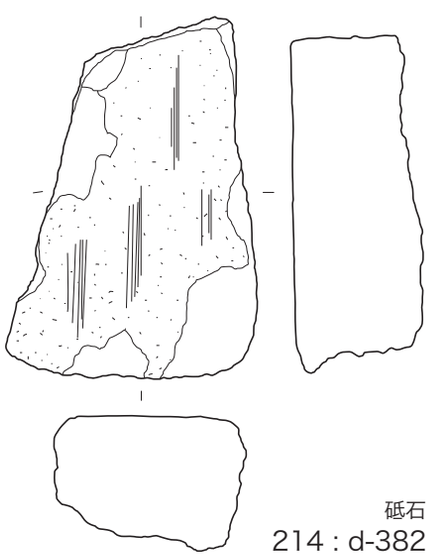
砥石
211 : d-239



砥石
212 : d-305



砥石
213 : d-359



砥石
214 : d-382

打製石斧
215 : d-037

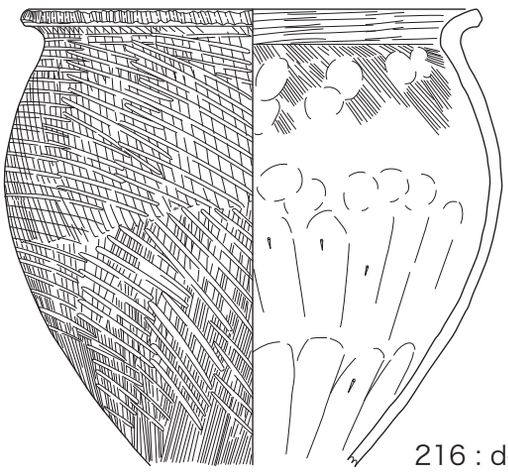
0　(1/2)　5cm

3 地点出土石器実測図（1/2）(2)

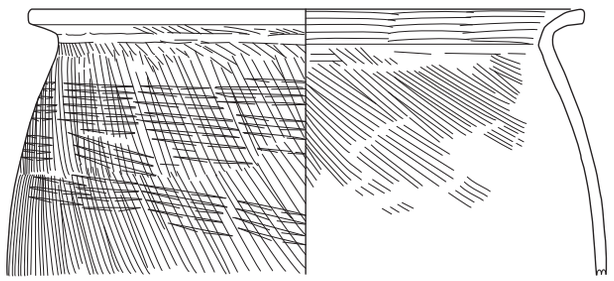
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
216	d-026-1	HH11-4	1E12p 1E13p 1E13q			甕	5/12	(17.8)	(18.3)	−	ヨコハケ、指オサエ、ケズリ（下半）	上半：粗いタテハケ後タタキ下半：細いタテハケ後タタキ	砂粒を含む		弥生中期	内面下半スス付着
217	d-026-2	HH11-4	1E13q			甕	9/12	22.1	(10.6)	−	ハケ、ヨコハケ	ハケ、タタキ、指オサエ	砂粒を含む			弥生中期
218	d-027	HH11-4	1E12q			壺		胴径 (41.0)			ナデ、指オサエ	ハケ、ヘラ描き		10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期	半竹文様土器棺
219	d-002-1	HH11-4	1E12q			壺		最大胴径 54.4	(42.5)	8.9	指オサエ、ヘラケズリ	胴部下半にハケ、板ナデ	砂粒を含む		弥生中期	黒斑あり土器棺
220	d-002-2	HH11-4	1E12q			壺		−	(9.0)	−	指オサエ		砂粒を含む		弥生中期	土器棺蓋か？
221	d-022	HH11-4	1E12r			壺	4/10	胴径 (40.0)		9.5	ナデ	ハケメ、ナデ消し		7.5YR5/6 明褐色	弥生中期	土器棺
222	d-035	HH11-4	1E12r			壺		−	(15.5)	7.6	ハケ、ナデ、指オサエ	ハケ	礫を少量含む		弥生中期	土器棺
223	d-182	HH11-4	1F12t	002SD		壺		−	(15.3)	(7.8)		下半下にヘラケズリ、上にハケ	砂粒、長石を含む		弥生中期	内面ハクリ著しい
224	4-1	HH11-4		009SK		壺	1/10	19.6			ヘラナデ、指オサエ	ヘラナデ、ヘラケズリ、貝殻刺突		10YR6/4 にぶい黄橙色	弥生中期	受口状口縁 貼付隆帯あり
225	d-044	HH11-4	1E13p			壺	2/10					クシ、ヘラ		10YR4/2 灰黄褐色	弥生中期	
226	d-192	HH11-4	1E12r			壺	口縁 4/12	(26.4)	49.0	8.8	指オサエ、ハケ	口縁端部に凹線 4 条頸部にクシ刺突、ハケ	砂粒を含む		弥生中期	黒斑あり 内部にハクリあり
227	d-124	HH11-4	1F14a			甕		(27.0)	(22.0)	−	口縁内側にヨコハケ 胴部にタテハケ、指オサエ	口縁端部にタタキ 口縁下部にヨコハケ指オサエ 胴部にタテハケ後タタキ	砂粒を含む		弥生中期	スス付着
228	d-190-1	HH11-4	1E13c			甕	口縁 4/12	(24.8)	(11.5)		−	口縁内側にヨコハケ胴部にヘラナデ、指オサエ	口縁端部にヘラキザミ胴部にタテハケ後ヨコハケ	砂粒、長石を含む	弥生中期	不規則な半竹波状紋あり
229	d-190-2	HH11-4	1E13q	004SD		甕	口縁 3/12	(22.4)	(12.4)	−	口縁内側にヨコハケ胴部にタテハケ、指オサエ	口縁端部にハケ口縁下部にヨコハケ胴部にタテハケ後タタキ	砂粒を含む		弥生中期	
230	d-138	HH11-4	1E12p			甕		(22.0)	(23.8)	−	板ナデ、ナデ、指オサエ	ナデ、指オサエ	砂粒を含む	7.5YR6/4	弥生中～後期	黒斑あり
231	d-207	HH11-4	1E12p	001SB		甕	9/12	23.6	(25.0)	−	ヨコナデ、指オサエ、板ナデ	口縁端部にヘラキザミ、ナデ、ミガキ	砂粒を含む	2.5Y6/4	弥生中期	
232	d-197 d-198	HH11-4	1E12r	004SD		甕	11/12	21.0	(21.5)	−	指オサエ	口縁端部にヘラキザミ胴部にヘラナデ	砂粒を含む		弥生中期	
233	d-206	HH11-4	1E12p 1E13p	001SB		甕	9/12	28.8	(29.6)	−	ヨコハケ、ヨコナデ、板ナデ	ヘラ刺突、板ナデ、ハケ、ヘラケズリ	砂粒を含む		弥生中期	
234	d-240	HH11-4	1E12p			甕	口縁 4/12	(24.8)	(15.5)	−	口縁端部に貝刺突、板ナデ	貝条痕	砂粒を含む		弥生中期	貝殻条痕
235	d-220	HH11-4	1F13c	003SZ		台付甕		−	(12.7)	7	板ケズリ、ナデ	ハケ、タタキ	砂粒を含む		弥生中期	黒斑あり
236	d-208	HH11-4	1E13s			台付甕（脚）	底径 9/12	−	(7.5)	8.5	ナデ	板ナデ、指オサエ	砂粒を含む長石、雲母を少量含む		弥生中期	
237	d-195	HH11-4	1E12r	004SD		壺	9/12	11.4	27.4	7.2	ヨコナデ、指ナデ、指オサエ、ハケ		砂粒、長石を含む		弥生中期	凹線文
238	d-183	HH11-4	1F14c			細頸壺		(7.8)	23.1	5.6	指オサエ、ハケ	口縁に凹線 4 条、羽状にクシ刺突→クシ描直線紋	砂粒、長石を含む		弥生中期	凹線文
239	d-209	HH11-4	1E13t			壺	口縁 3/12	(15.6)	(6.0)	−	ヨコナデ	口縁端部にヘラキザミ、頸部にクシ描条線	砂粒を含む長石、雲母を少量含む		弥生中期	
240	d-149	HH11-4	1E12p			壺		−	(20.8)	−	板ナデ、指オサエ	ミガキ、ヨコナデ	砂粒、長石を含む	5YR5/6	弥生中期	黒斑あり
241	d-189	HH11-4	1F14c			甕	3/12	(15.4)	(16.8)	−	ハケ、ナデ、指オサエ	ハケ、ナデ	砂粒を含む	5YR5/8	廻間式か	
242	d-243	HH11-4	1E12o			無頸壺	口縁 11/12	6.6	9.2	-3.8	ナデ、指オサエ	ハケ、さざ波状クシ描条線（4 方向）、横条線（8 単位）	砂粒、長石、磯を含む		弥生中期	穿孔黒斑あり
243	d-094	HH11-4	1F14c			S 字甕	1/10	15			ナデ	ハケメ		内 :10YR3/1 外 :10YR6/4	古墳前期	
244	d-096	HH11-4	1F14c			高坏					ハケ、ヘラ	ヘラミガキ		7.5YR6/6 橙色	古墳前期	脚部穿孔 2 ヶ 1 組 4 ヶ所あり
245	d-114	HH11-4	1E12r	004SD		丸小鉢	6/10	11.8	5.8	5.0	ヘラミガキ	指頭痕、輪積痕	緻密	7.5YR5/4 ～ 10YR6/4	弥生中期	平底系
246	d-156	HH11-4	1E13r	004SD		丸小鉢	完形	12.3	7.6	5.6	指オサエ後板ナデ	輪積み後指オサエ	砂粒、礫を含む	7.5YR8/4 浅黄橙	弥生中期	
247	d-158a d-158b	HH11-4	1E12r	004SD		丸小鉢	3/10							7.5YR7/6 橙	弥生中期	丸底
248	4-2	HH11-4	1E12r	検 5		丸小鉢				5	ヘラミガキ、ナデ	輪積痕		10YR7/4 ～ 10YR2/1	弥生中期	焼成ムラにより黒変
249	4-3	HH11-4	1E12r	検 5		丸小鉢				4.4	ヘラナデ	輪積痕		7.5YR6/6 橙色	弥生中期	底面より輪積痕
250	4-4		1F13c	地山直上		小型鉢					ハケメ、ヘラナデ、板ナデ	ハケメ、ヘラナデ		10YR7/4 にぶい黄橙色	弥生中期	底面に米粒圧痕
251	d-238	HH11-4	1E13r	010SK		甕形土器	完形	10.8	9.1	5.2	指オサエ、ヨコナデ	指オサエ、ヨコナデ	砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	古代	煤付着
252	d-121	HH11-4	1E12r			縄文土器	1/12	(25)			指ナデ	巻貝凹線	10YR5/4	にぶい黄褐	縄文後期	凹線文系
253	d-135	HH11-4	1E12t			縄文土器			厚さ 0.6		指ナデ	条痕地文	輝石を含む	内 :10YR4/4 外 :7.5YR5/4	縄文後期	凹線文系
254	d-139	HH11-4	1E12t			縄文土器						貝殻条痕		10YR5/4	縄文晩期	雷Ⅱｃ式
255	d-105	HH11-4	1E13t			土玉		3.0 ～ 3.4			手づくね			10YR8/4 一部 5YR7/6 に発色	不明	穴貫通 重さ 32.2g
256	d-233	HH11-4	1E12c			土玉		3.0 ～ 3.8			手づくね				不明	穴貫通 重さ 43.1g
257	d-147	HH11-4	1E13r			ミニチュア土器（甕）	4/12	(3.1)	3.5	2.1	指オサエ	指オサエ	砂粒を含む	5YR7/6 橙	弥生中期	
258	d-084		1E12t			土錘		穴径 0.2	長さ 4.0							手づくね 重さ 2.3g
259	d-052		1F13a			土錘		穴径 0.35	長さ 5.0							手づくね 重さ 4.8g

4 地点出土遺物観察表（1）

番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位遺構	産地材質	器種	残存率	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
260	d-018	HH11-4	1E13q			土錘		穴径 0.5	長さ 3.3							手づくね 重さ 5.3g
261	d-059		1F12a			土錘		穴径 0.5	長さ 6.1							手づくね 重さ 24.2g
262	d-011	HH11-4	1E9r		常滑	山皿	6/12	(8.5)	2.7	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	N8/ 灰白	2 型式	
263	d-099	HH11-4	1F13b		常滑	山皿	完形	9.4	3.3	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	1a 型式	
264	d-079	HH11-4	1F13a		常滑	山皿	4/12	(10.2)	3.1	(5.5)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台、線刻？	砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	1b 型式	底面線刻？
265	d-109	HH11-4	1E13q		常滑	山皿	完形	8.7	2.3	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	砂粒、礫を含む	10YR7/2 にぶい黄橙	2 型式・社山段階	
266	d-172	HH11-4	1F14c		常滑	山皿	5/12	(9.0)	3.0	4.2	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	粗い砂粒を含む	10YR7/1 灰白	2 型式	
267	d-174	HH11-4	1F13a		常滑	山皿	完形	8.2	1.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	2 型式	
268	d-057	HH11-4	1F14a		猿投	灰釉碗底部	底部 6/12	－	(1.6)	7.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/3 浅黄	百代寺型式か	墨書？
269	d-075	HH11-4	1F13a		常滑	山茶碗	4/12	(16.8)	4.7	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	10YR6/3 にぶい黄橙	1b 型式	
270	d-077	HH11-4	1F13a		常滑	山茶碗	完形	16.4	5.0	7.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切後指ナデ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/4 浅黄	1b 型式	
271	d-078	HH11-4	1F13a		常滑	山茶碗	1/12	(15.7)	4.6	(7.2)	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y6/3 にぶい黄	2 型式	
272	d-081	HH11-4	1E13t		常滑	山茶碗	底 12/12	－	(2.3)	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	粗い砂粒を含む	2.5Y8/3 淡黄	1b 型式	灰釉
273	d-098	HH11-4	1F13b		常滑	山茶碗	8/12	15.4	5.0	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	1a 型式	
274	d-128	HH11-4	1F13a			山茶碗	11/12	－	(2.8)	7.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	礫を含む	2.5Y8/2 灰白	1b 型式	
275	d-227	HH11-4	1F14b		常滑	山茶碗	9/12	16.0	5.0	8.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切、貼付高台	礫を含む	2.5Y7/2 灰黄	1b 型式	
276	d-260	HH11-4	1E14t		伊勢？	鍋	1/12	22.0	－	－	ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐 指痕、ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙			外面：ス 内面：炭化物
第 47 図	d-254	HH11-4	1E13r		常滑	甕					ナデ、指オサエ			7.5YR4/3 褐色		16C、焼け歪み大きい



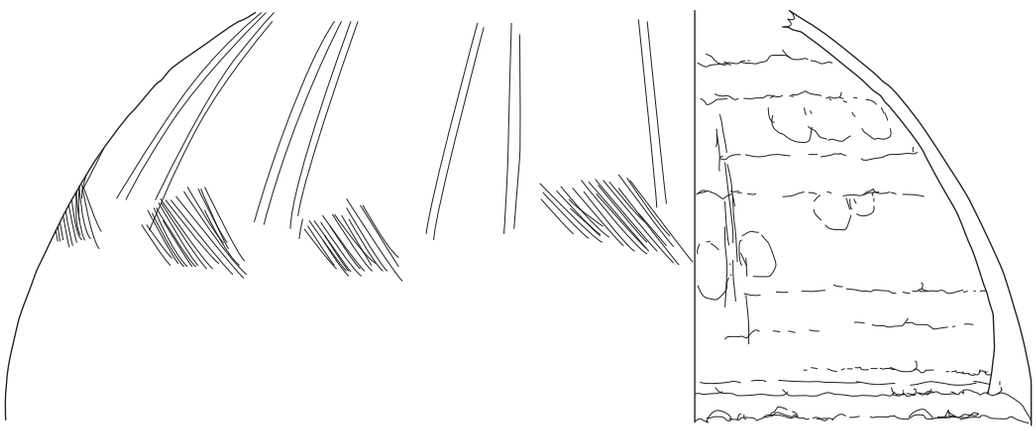
216 : d-026-1



217 : d-026-2

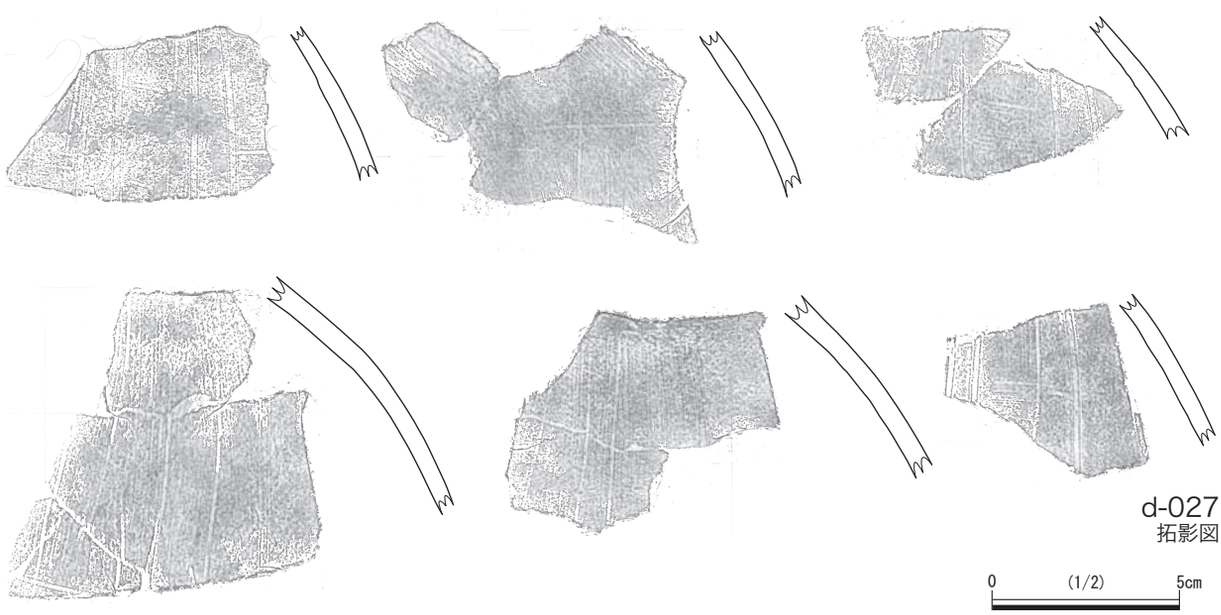
0　(1/3)　10cm

(d-026･027上半は1/3)



土器棺

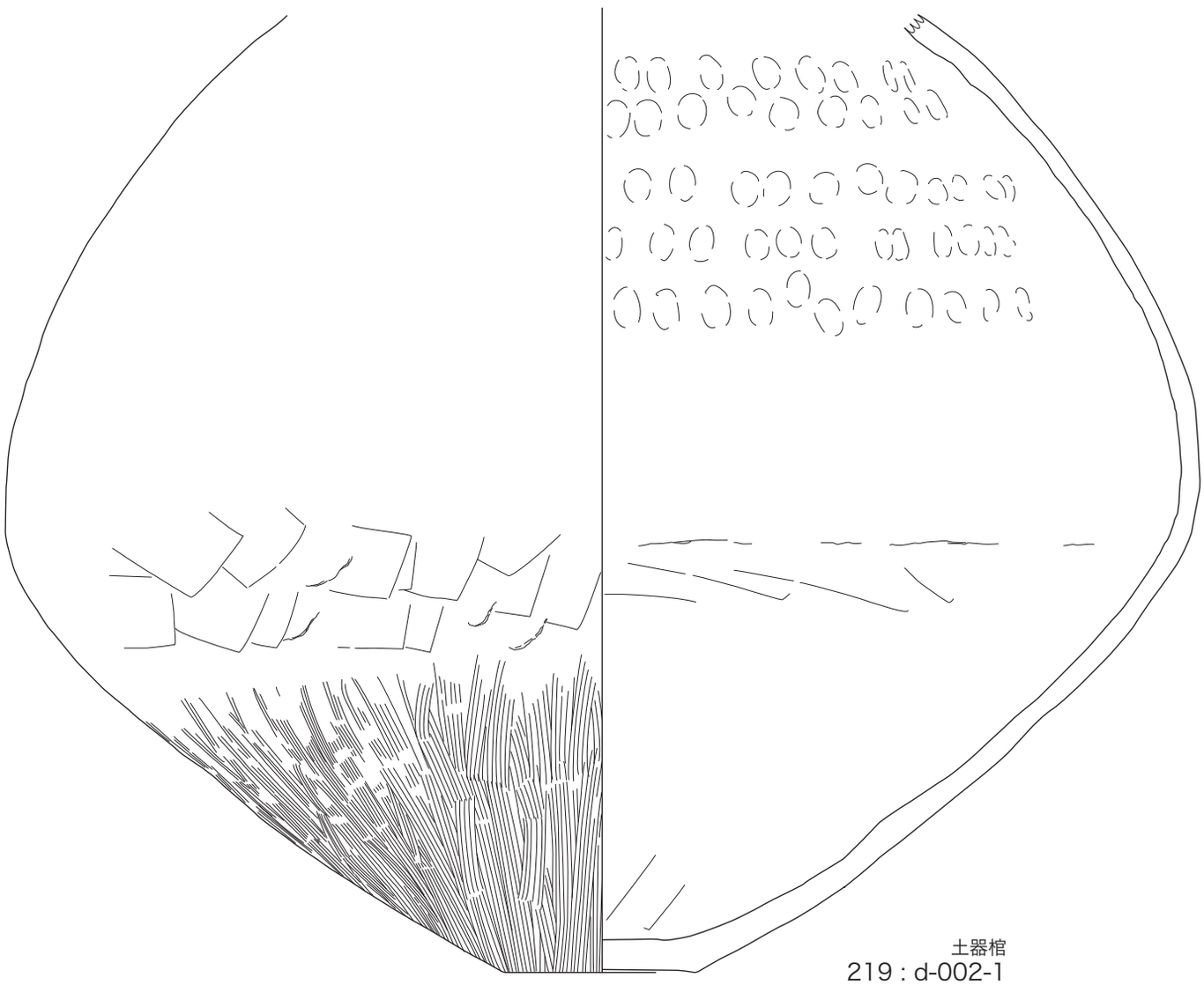
218 : d-027

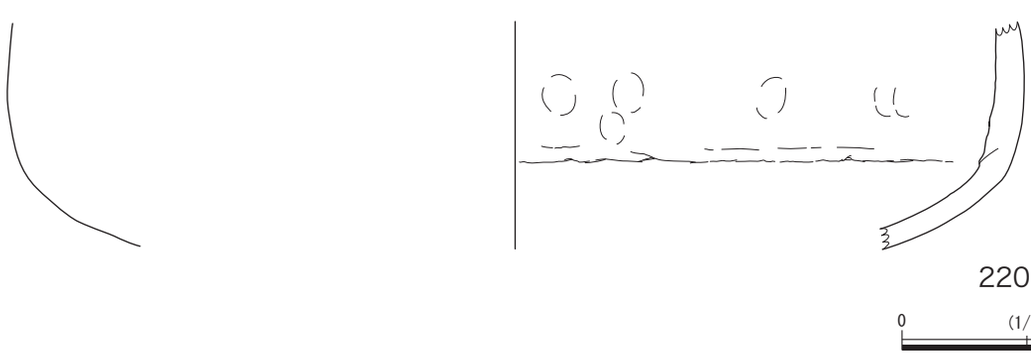


d-027
拓影図

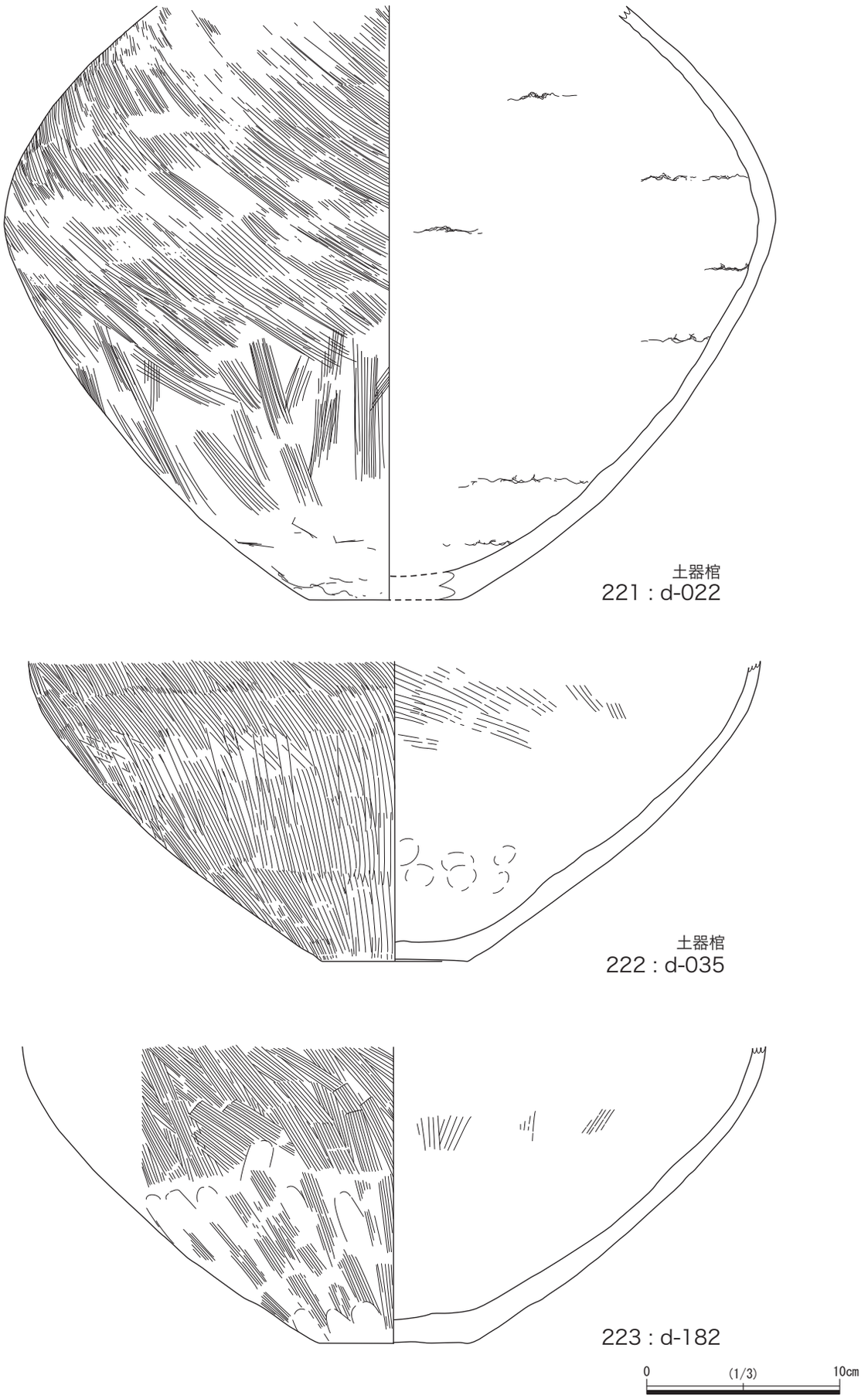
0　(1/2)　5cm

4 地点出土土器実測図（1/3）(1)

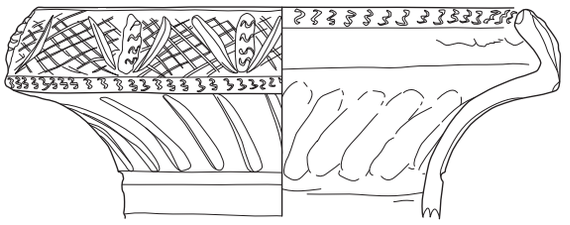




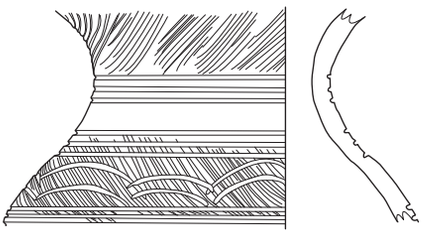
4 地点出土土器実測図（1/3）(2)



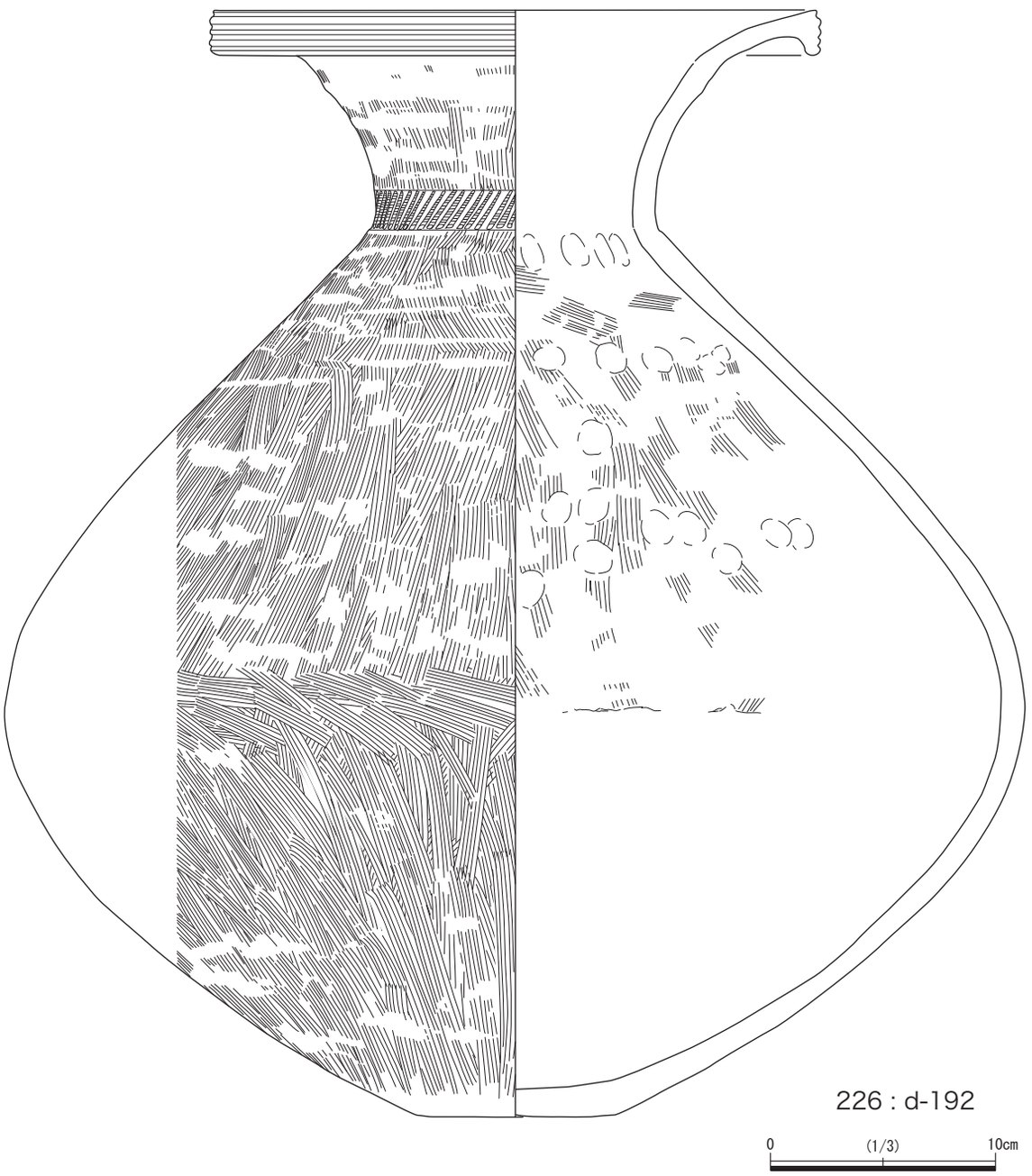
4 地点出土土器実測図（1/3）(3)



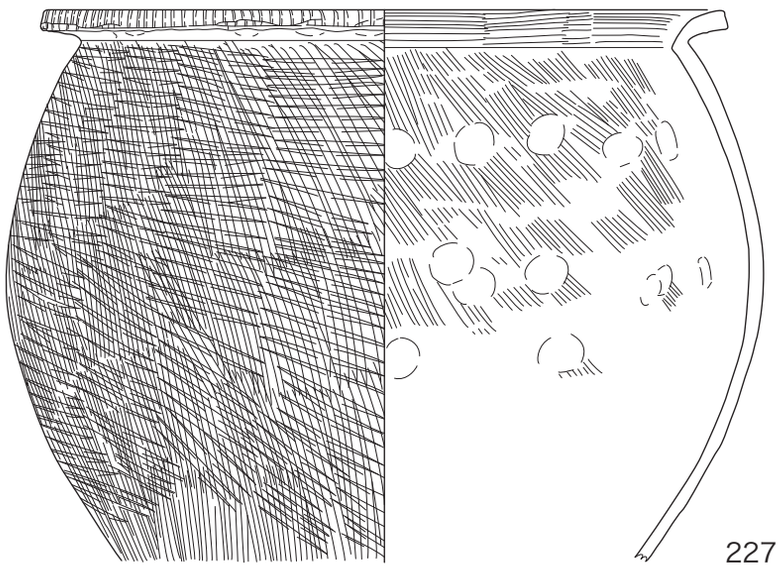
224 : 4-1



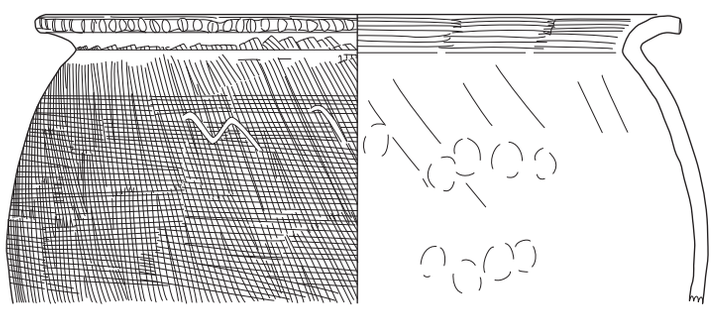
225 : d-044



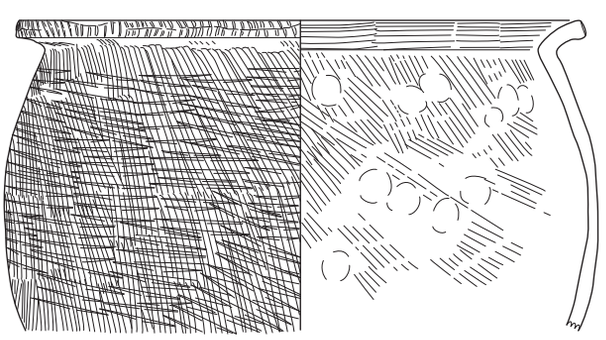
4 地点出土土器実測図（1/3）(4)



227 : d-124



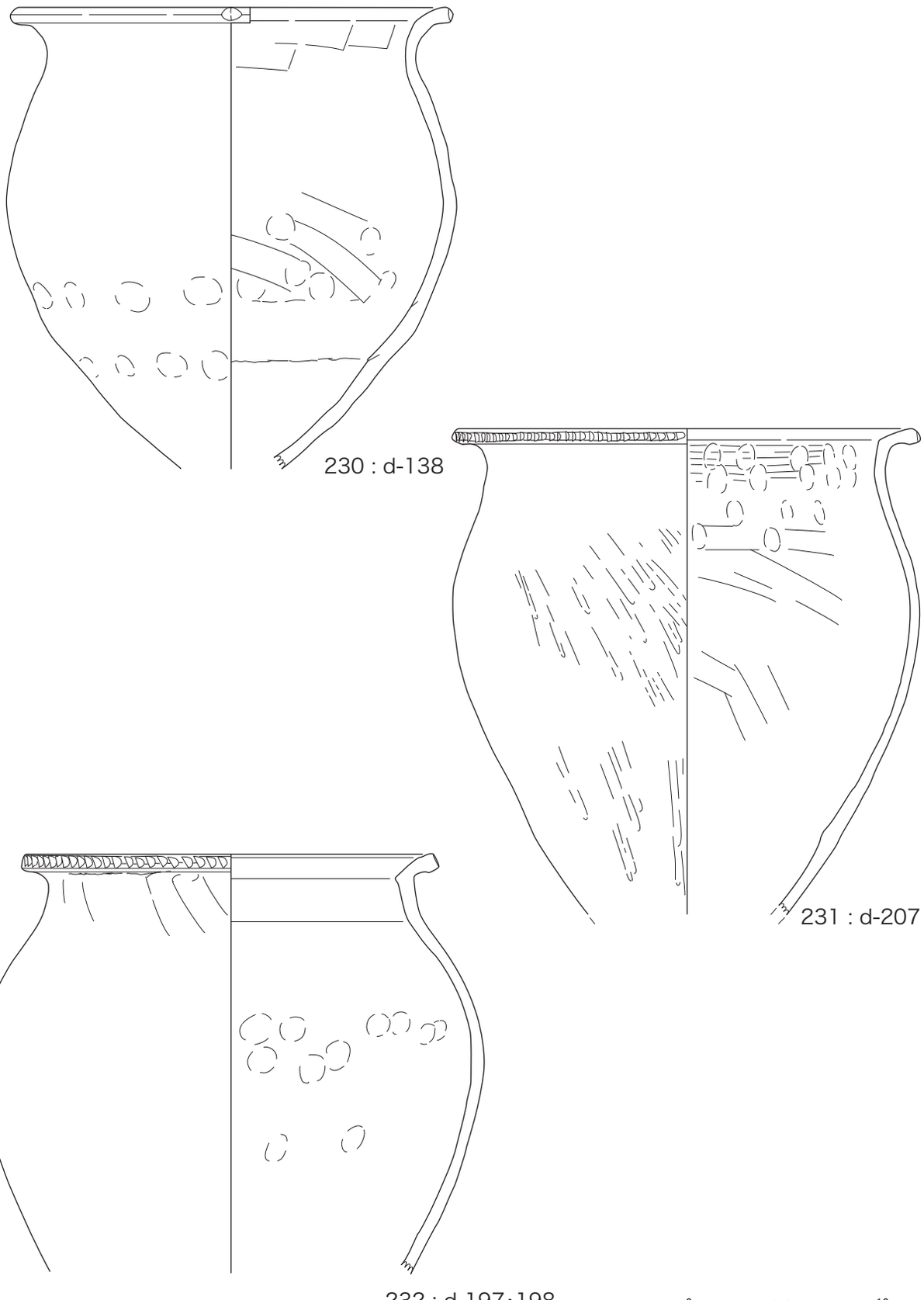
228 : d-190-1



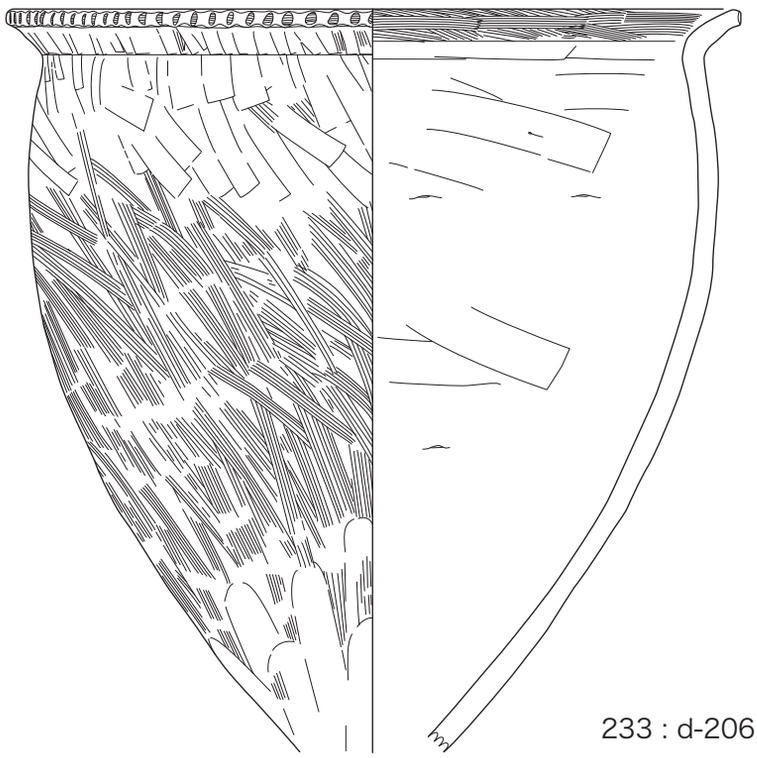
229 : d-190-2

0　(1/3)　10cm

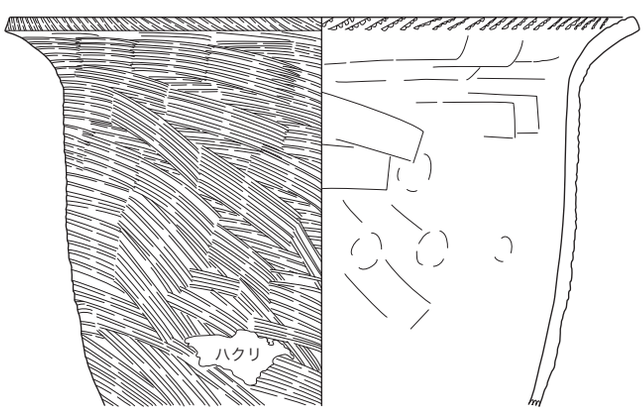
4 地点出土土器実測図（1/3）（5）



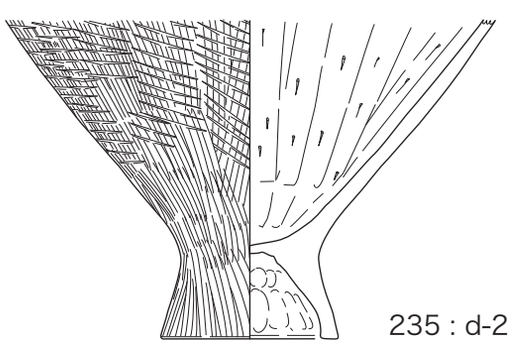
4 地点出土土器実測図（1/3）(6)



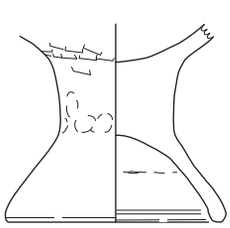
233 : d-206



234 : d-240



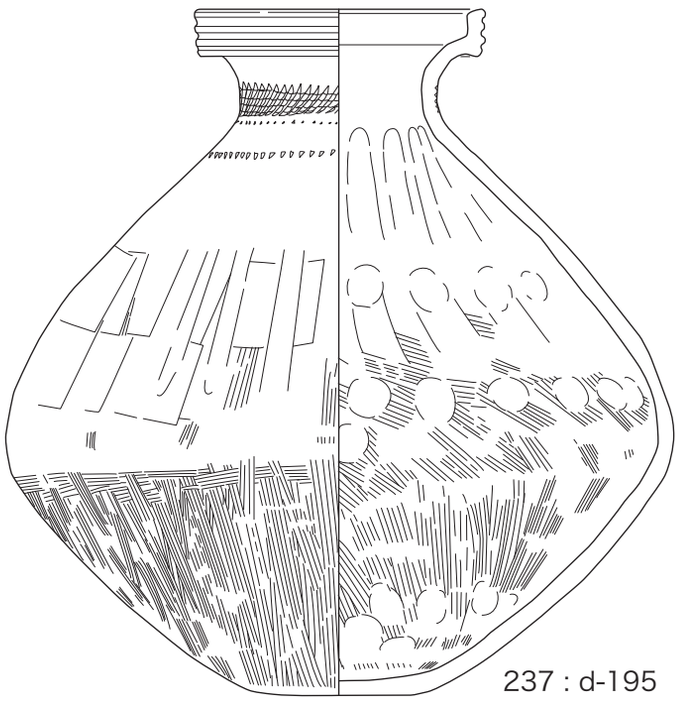
235 : d-220

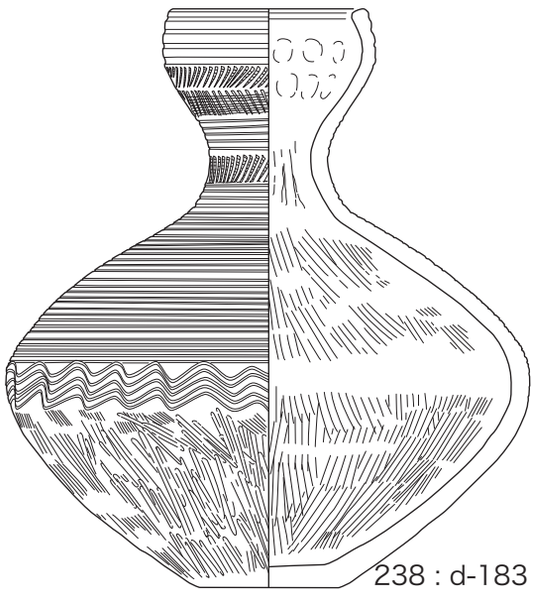


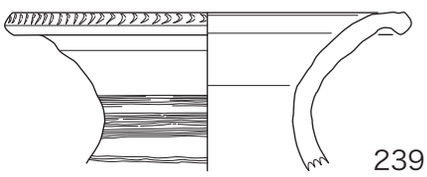
236 : d-208

0　(1/3)　10cm

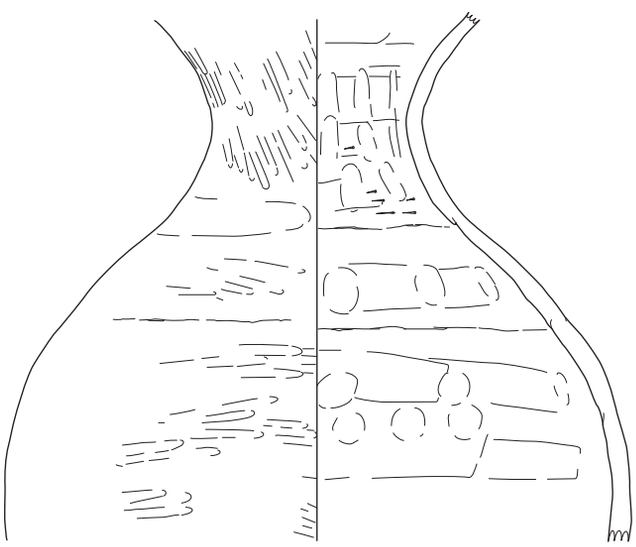
4 地点出土土器実測図（1/3）（7）

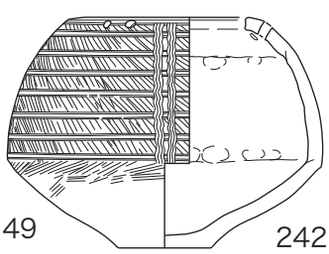

237 : d-195

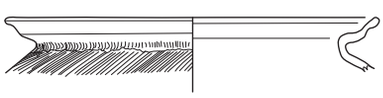

238 : d-183

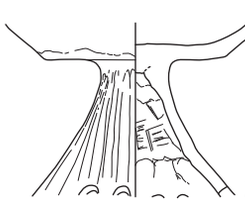

239 : d-209

241 : d-189


240 : d-149

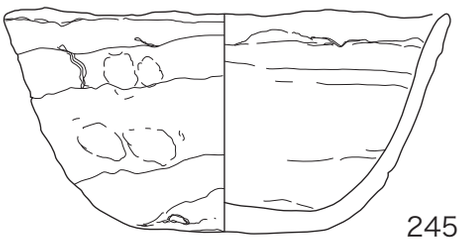

242 : d-243

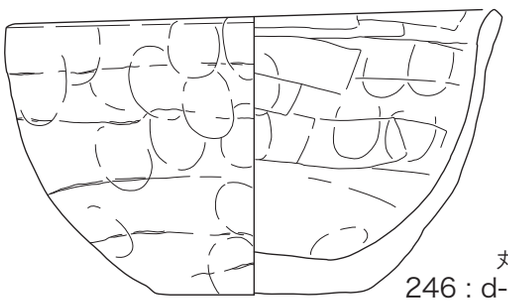

243 : d-094

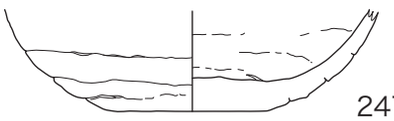

244 : d-096

0　(1/3)　10cm

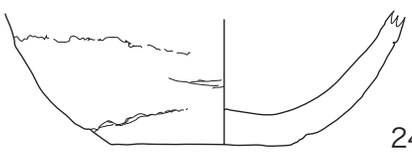
4 地点出土土器実測図（1/3）(8)

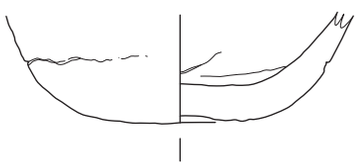

丸小鉢
245 : d-114


丸小鉢
246 : d-156

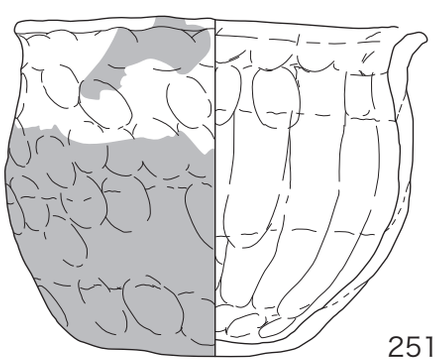

丸小鉢
247 : d-158a

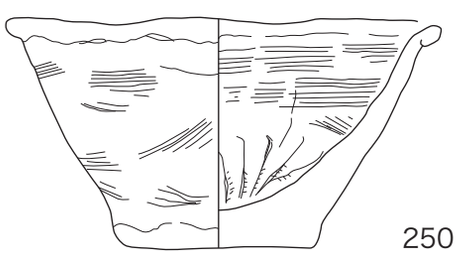
丸小鉢
247 : d-158b

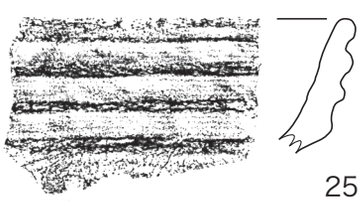

丸小鉢
248 : 4-2

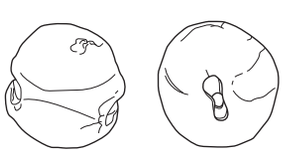


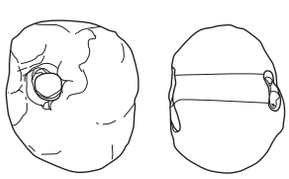
丸小鉢
249 : 4-3

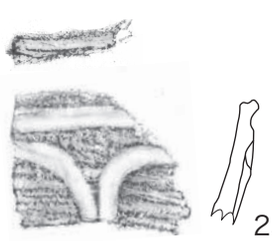

251 : d-238

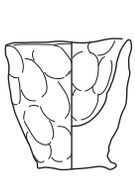

小型鉢
250 : 4-4


縄文土器
252 : d-121


255 : d-105


256 : d-233


縄文土器
253 : d-135


257 : d-147

258 : d-084

259 : d-052

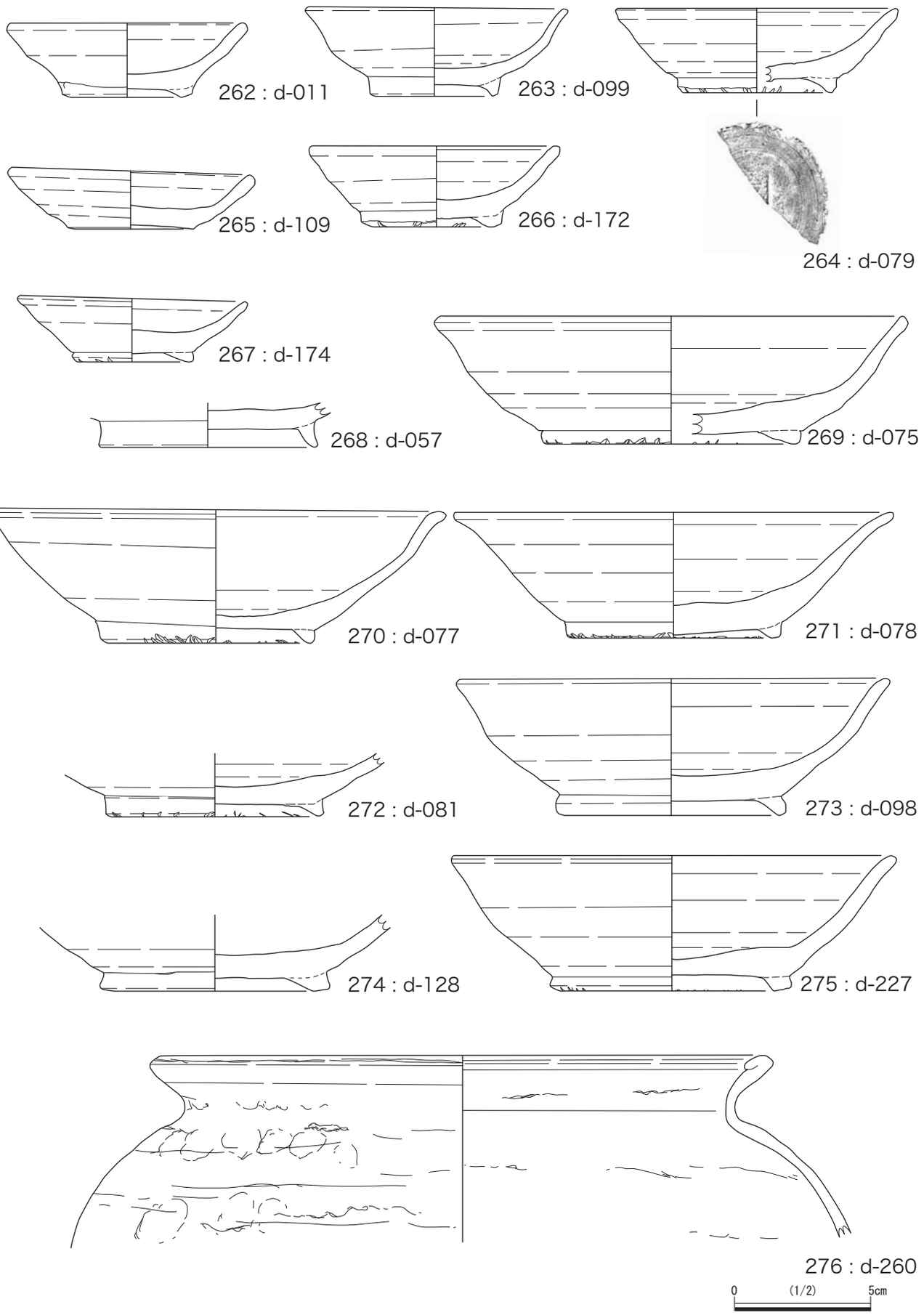
260 : d-018

261 : d-059

縄文土器
254 : d-139

0　(1/2)　5cm

4 地点出土土器実測図（1/2）(9)

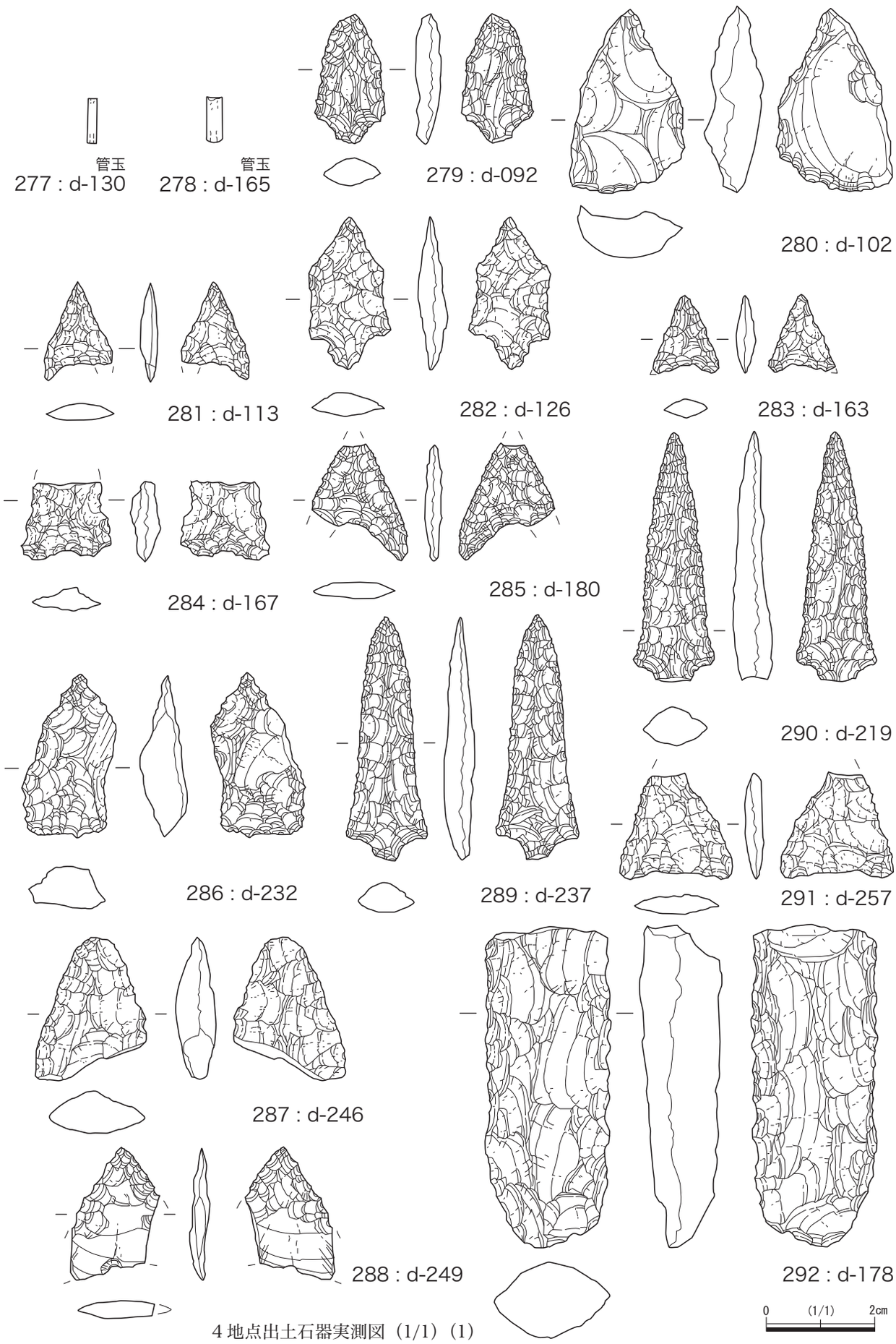


4 地点出土土器実測図（1/2）（10）

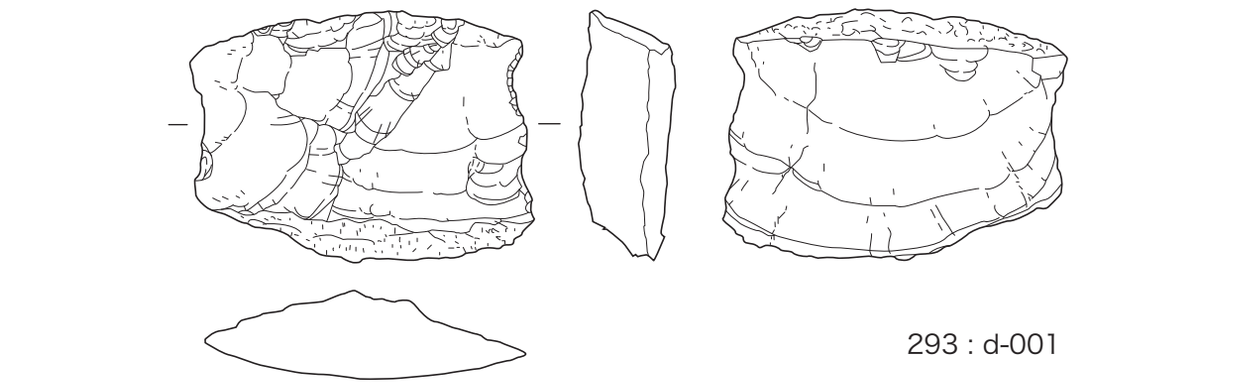
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位 遺構	産地 材質	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	時期	備考
277	d-130	HH11-4	1E12p	住居址 床面	溶結凝 灰岩	管玉	100%	1.9	8.5		7.5GY5/1 緑灰色	弥生中期	0.10g
278	d-165	HH11-4	1E12p	住居址 床面	溶結凝 灰岩	管玉	99%	3.4	8.0		7.5GY4/1 暗緑灰色	弥生中期	0.15g

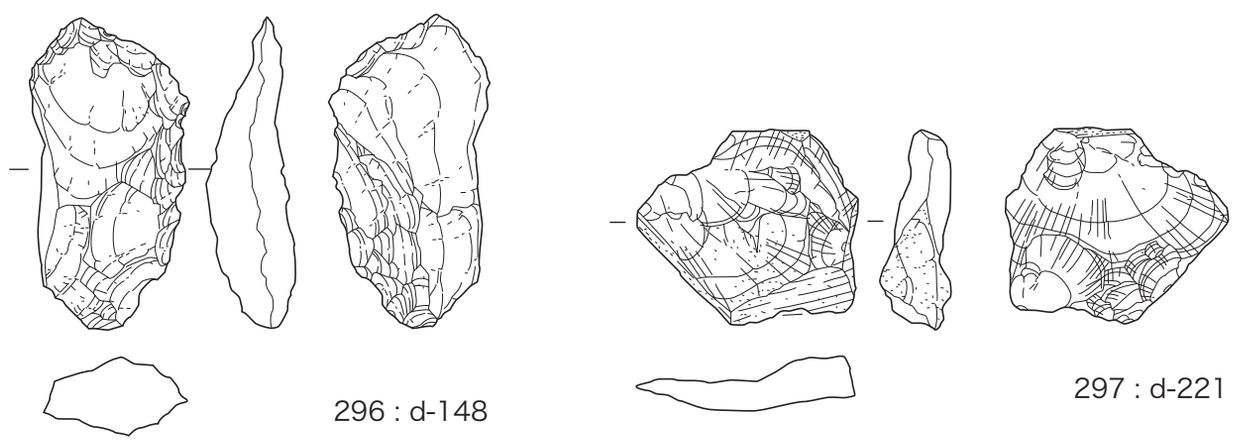
番号	遺物番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
279	d-092	HH11-4	1F13b	有茎石鏃	チャート	2.36	1.28	0.49	1.48	先端部欠損、先端角約 44 度
280	d-102	HH11-4	1E13t	石鏃	チャート	3.34	2.02	0.92	6.59	未製品
281	d-113	HH11-4	1E12r	石鏃	下呂石	1.79	1.27	0.30	0.45	右脚部欠損、先端角約 45 度
282	d-126	HH11-4	1E12p	有茎石鏃	下呂石	2.76	1.49	0.51	1.51	五角形鏃、先端角約 60 度
283	d-163	HH11-4	1E12p	石鏃	下呂石	1.42	1.20	0.36	0.40	
284	d-167	HH11-4	1E12p	石鏃	下呂石	(1.48)	(1.62)	(0.53)	0.94	上部折損、右脚部欠損、瘤
285	d-180	HH11-4	1E13q	石鏃	黒曜石	(2.08)	1.85	0.28	0.71	先端部欠損、先端角約 25 度、諏訪星ヶ台？
286	d-232	HH11-4	1E12p	石鏃	チャート	2.94	(1.71)	0.77	3.73	右半部折損、先端角約 66 度
287	d-246	HH11-4	1E12o	石鏃	下呂石	2.63	2.17	0.73	2.95	右脚部折損、未成品？、先端角約 42 度
288	d-249	HH11-4	1E12p	石鏃	チャート	2.40	(1.66)	0.31	1.10	右脚部折損、未成品？、先端角約 70 度
289	d-237	HH11-4	1E12o	有茎石鏃	チャート	(4.46)	1.49	0.51	2.62	茎部折損、先端角約 48 度
290	d-219	HH11-4	1F14c	有茎石鏃	安山岩	(4.54)	1.46	0.65	2.81	茎部折損、先端角約 25 度
291	d-257	HH11-4	1E13p	石鏃	下呂石	(1.95)	0.20	0.37	1.29	先端部欠損、先端角約 50 度
292	d-178	HH11-4	1E13t	打製尖頭器	安山岩	(5.86)	2.20	1.48	24.82	上半部折損
293	d-001	HH11-4	1E12p	UF	チャート	3.40	4.47	1.20	20.56	原礫面あり、転石？
294	d-115	HH11-4	1E12s	UF	チャート	3.29	3.37	0.78	7.85	原礫面あり
295	d-051	HH11-4	1E13b	RF	チャート	(2.69)	(2.68)	(0.52)	3.58	上半部折損
296	d-148	HH11-4	1E13r	RF	下呂石	4.15	1.91	1.07	7.79	
297	d-221	HH11-4	1E12q	RF	黒曜石	2.59	3.08	1.01	5.58	節理面あり、諏訪星ヶ台？
298	d-242	HH11-4	1E12o	UF	チャート	4.12	3.29	0.53	10.86	原礫面あり
299	d-071	HH11-4	1E13a	剥片	下呂石	3.82	1.66	1.32	5.16	原礫面あり
300	d-072	HH11-4	1F13a	剥片	チャート	4.08	1.65	6.45	2.62	
301	d-082	HH11-4	1F13a	剥片	下呂石	3.28	2.02	1.40	8.45	
302	d-125	HH11-4	1E12p	剥片	下呂石	(2.96)	1.66	0.73	3.92	上半部折損、転石
303	d-134	HH11-4	1E13t	剥片	下呂石	2.63	6.63	1.06	15.71	原礫面あり、転石
304	d-151	HH11-4	1E12p	剥片	下呂石	2.44	3.15	4.29	2.78	
305	d-155	HH11-4	1E12p	剥片	下呂石	5.00	1.68	0.66	7.16	原礫面あり
306	d-162	HH11-4	1E12p	剥片	チャート	3.30	4.86	0.68	10.75	
307	d-166	HH11-4	1E13p	剥片	溶結凝灰岩	6.53	2.53	0.51	8.94	
308	d-169	HH11-4	1E13p	剥片	チャート	2.69	2.23	0.72	4.59	原礫面あり
309	d-259	HH11-4	1E11p	剥片	チャート	4.61	1.88	1.51	13.15	原礫面あり
310	d-108	HH11-4	1E13t	石核	下呂石	3.43	4.32	2.84	48.08	原礫面あり、転石
311	d-122	HH11-4	1E12t	石核	チャート	3.44	2.86	2.46	16.11	
312	d-230	HH11-4	1E13q	石核	下呂石	3.15	5.01	2.23	34.41	原礫面あり、転石
313	d-091	HH11-4	1F13a	敲石	塩基性岩	(6.69)	(7.12)	(3.99)	306.50	上半部折損、磨製石斧の転用
314	d-111	HH11-4	1E13q	敲石	濃飛流紋岩	9.26	4.61	3.69	240.50	
315	d-127	HH11-4	1E12q	敲石	チャート	7.56	4.22	3.37	161.40	転石
316	d-179	HH11-4	1E13t	敲石	安山岩	11.2	5.2	2.5	220.50	
317	d-250	HH11-4	1E12p	敲石	砂岩	12.1	4.4	4.6	304.50	砥面あり
318	d-251	HH11-4	1E13p	敲石	塩基性岩	12.0	6.6	4.7	614.00	磨製石斧の転用
319	d-256	HH11-4	1E12o	敲石	チャート	11.4	5.2	4.4	475.00	
320	d-116	HH11-4	1E12s	磨製石斧	塩基性岩	(6.25)	(5.73)	(2.92)	158.50	装着による凹み？、破片資料
321	d-212	HH11-4	1F13c	磨製石斧	塩基性岩	9.71	4.08	2.83	194.50	
322	d-170	HH11-4	1E13c	磨石類	砂岩	(9.24)	6.51	2.72	251.50	上部欠損
323	d-041	HH11-4	1E13p	石錘	濃飛流紋岩	5.12	5.89	1.80	780.00	打ち欠き
324	d-213	HH11-4	1E12t	浮き	軽石？	6.97	6.01	2.61	38.57	骨？
325	d-214	HH11-4	1E12p	磨石類？	軽石	7.46	5.61	3.00	34.85	
326	d-216	HH11-4	1E12q	磨石類	軽石	8.32	5.31	4.10	74.60	浮きの未製品？
327	d-234	HH11-4	1E12o	砥石	砂岩	(9.21)	(8.37)	2.28	186.50	石皿？
328	d-023	HH11-4	1E12r	石皿	片麻岩	14.4	10.2	5.2	1109.00	被熱？
329	d-145	HH11-4	1E12s	石皿	砂岩	26.85	11.95	5.21	1537.00	被熱あり
330	d-210	HH11-4	1F14a	石皿	花崗岩	29.5	11.7	6.41	3800.00	裏面に板状に剥落

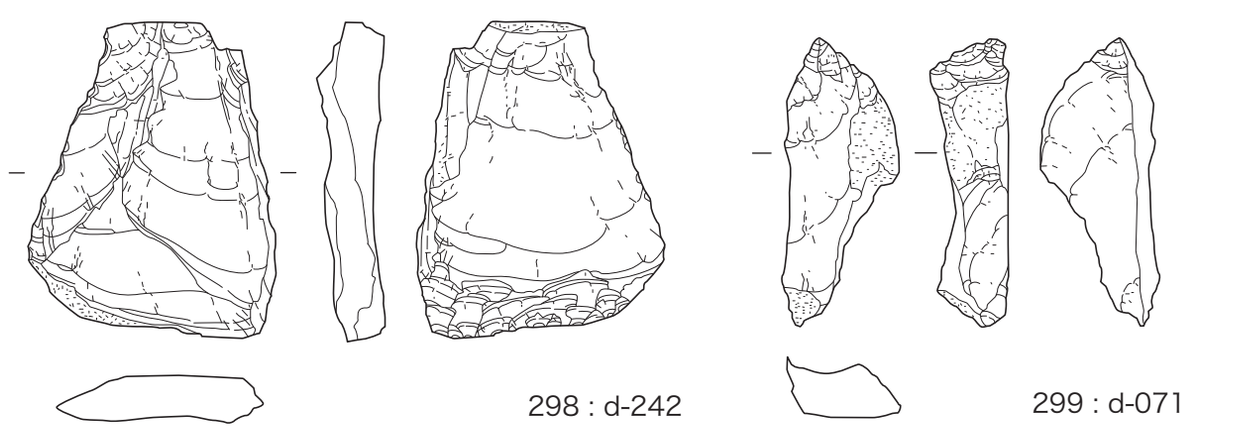
4 地点出土遺物観察表（3）



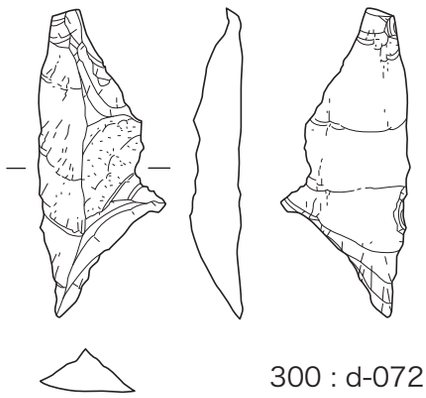
4 地点出土石器実測図（1/1）（1）



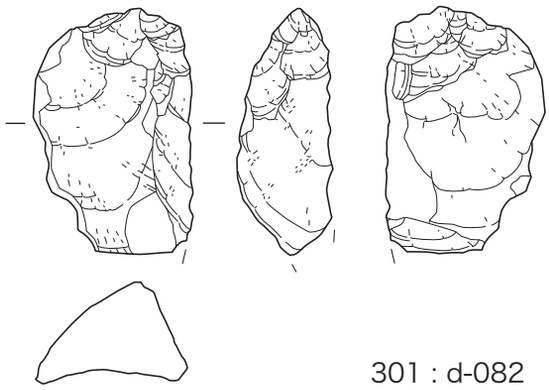




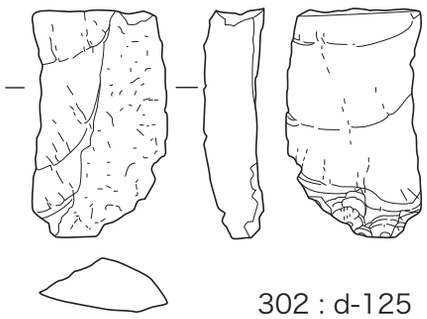
4 地点出土石器実測図（1/1）(2)



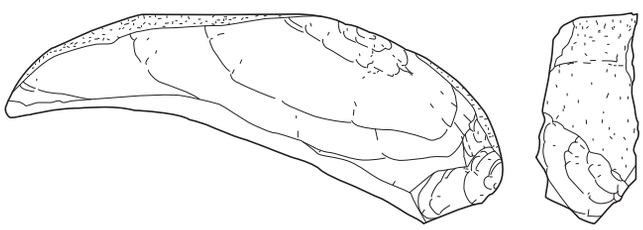
300 : d-072

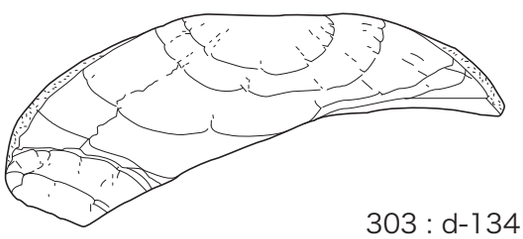


301 : d-082

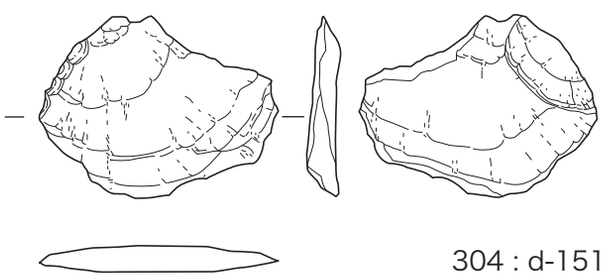


302 : d-125

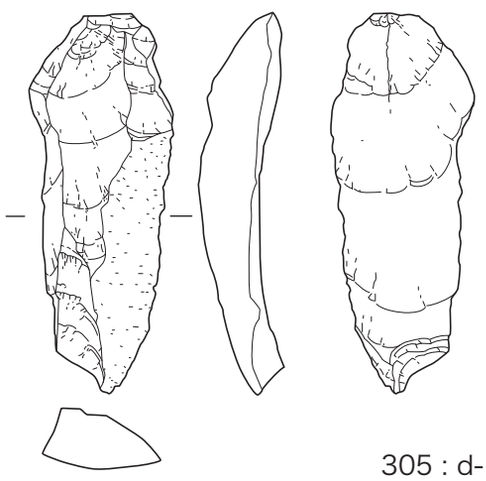




303 : d-134

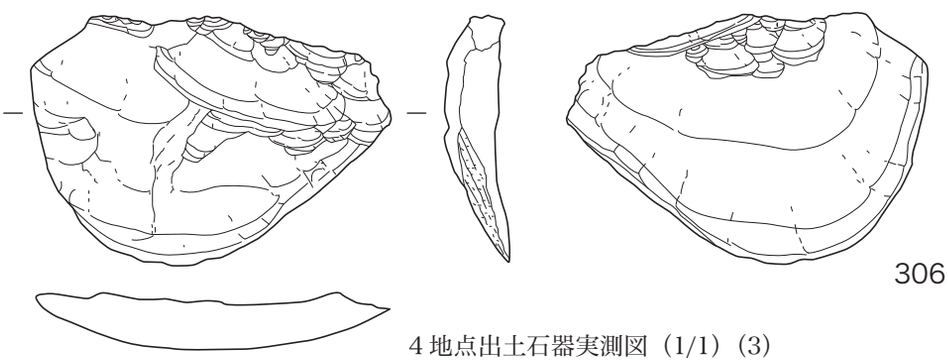


304 : d-151



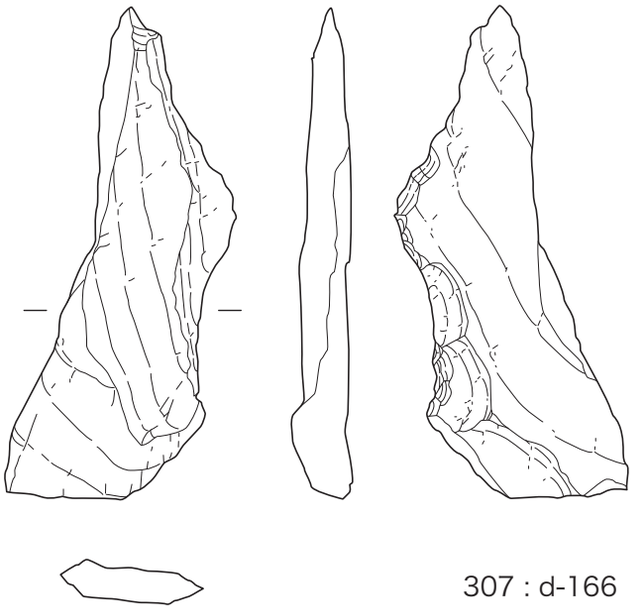
305 : d-155

0　(1/1)　2cm

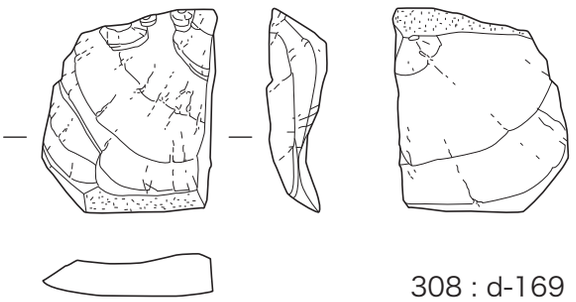


306 : d-162

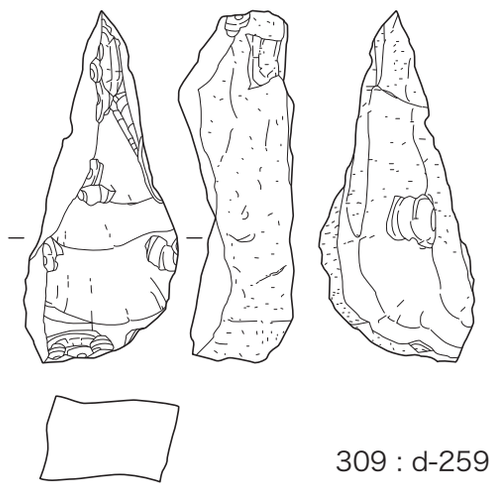
4 地点出土石器実測図（1/1）(3)



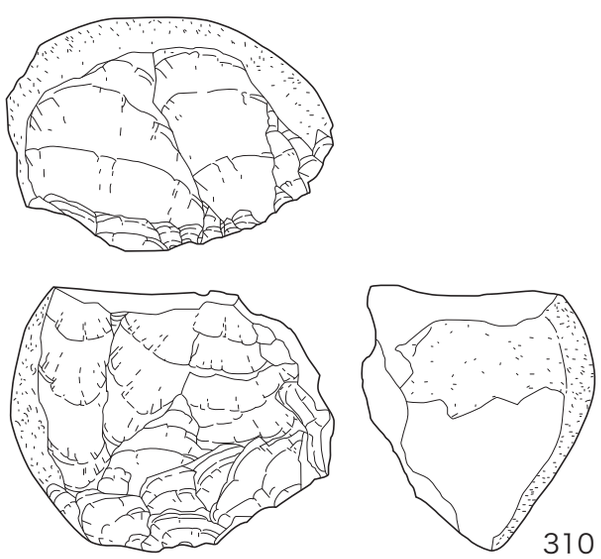
307 : d-166



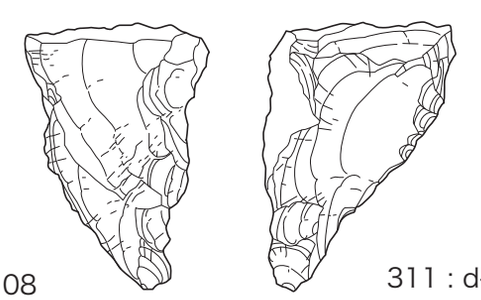
308 : d-169



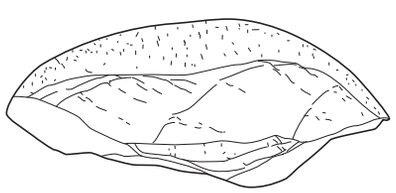
309 : d-259

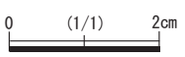


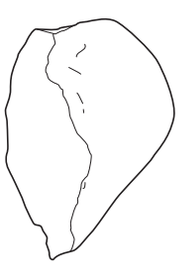
310 : d-108

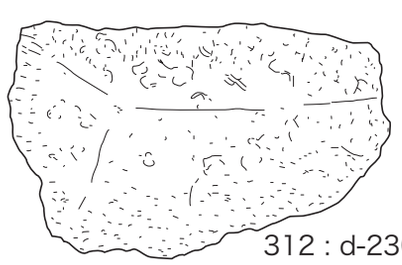


311 : d-122



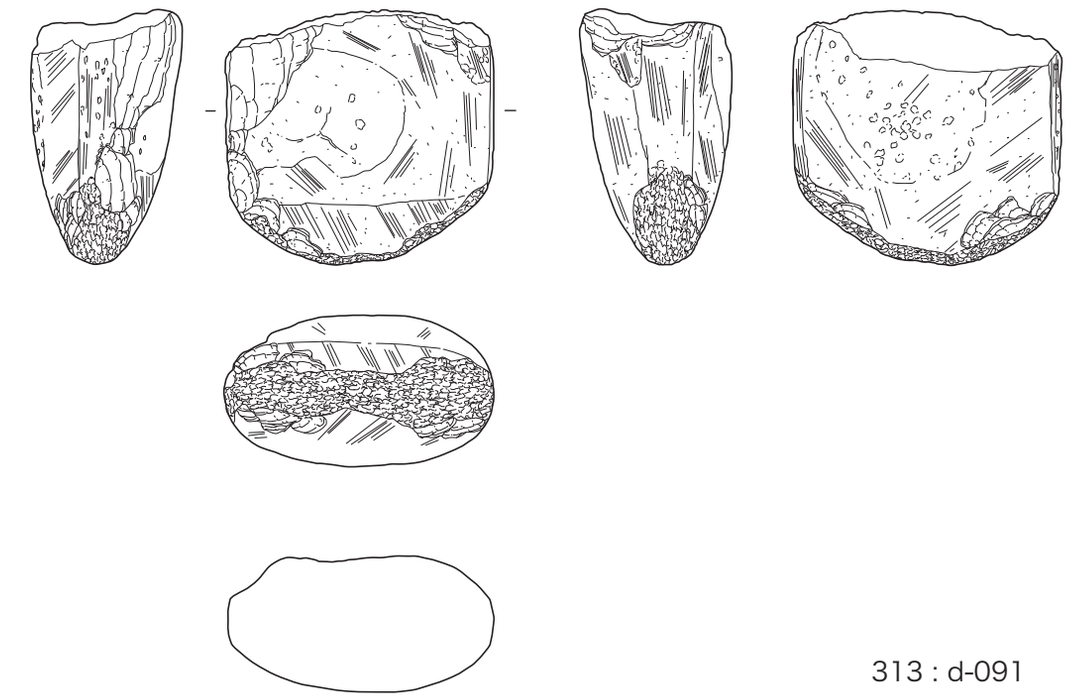


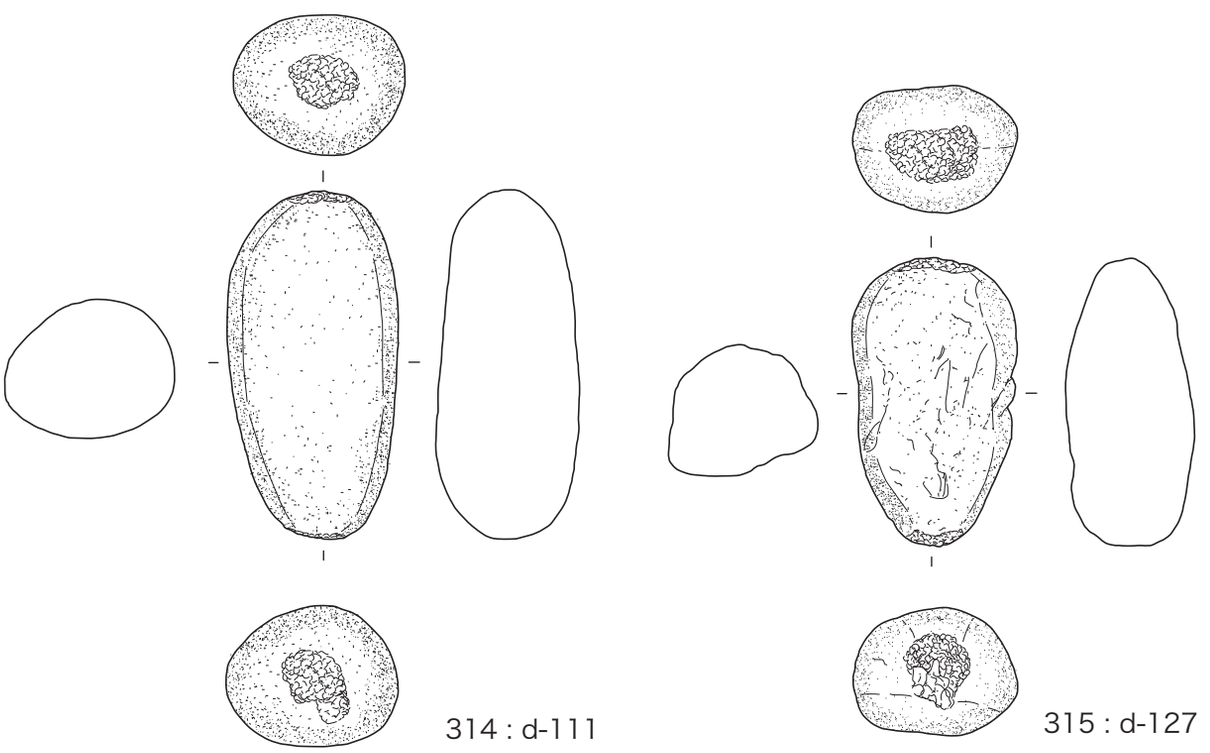




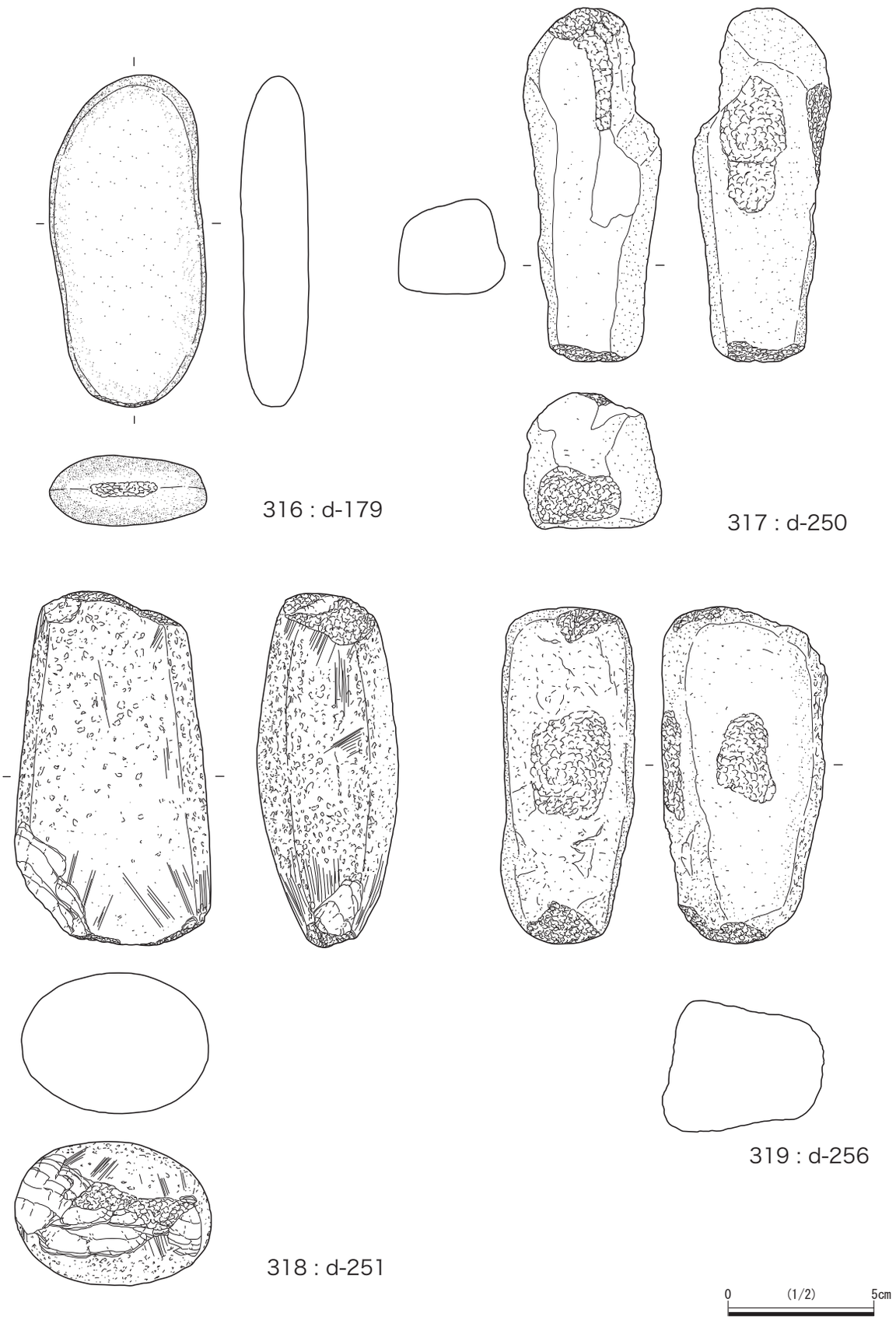
312 : d-230

4 地点出土石器実測図（1/1）(4)

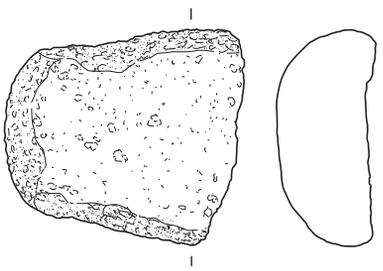




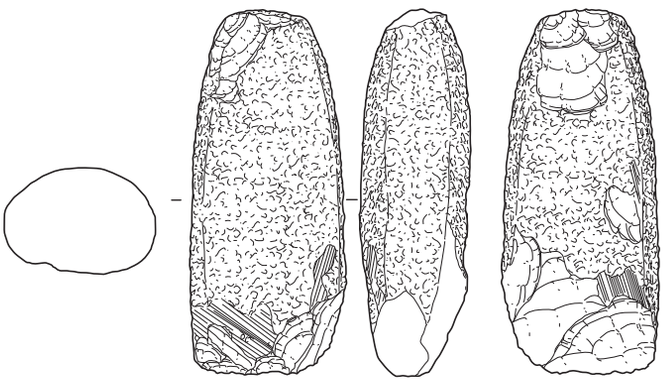
4 地点出土石器実測図（1/2）(5)



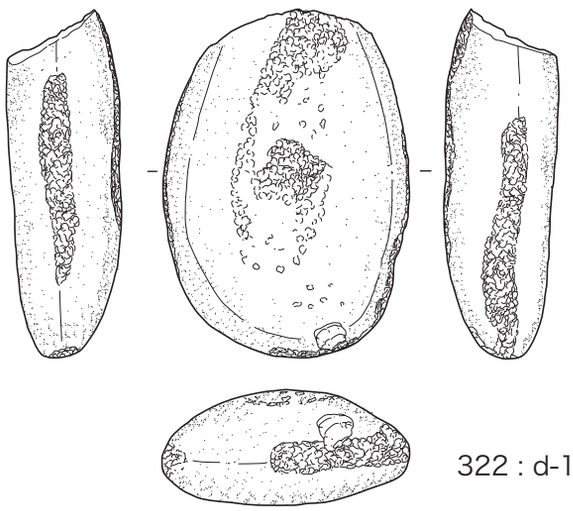
4 地点出土石器実測図（1/2）(6)



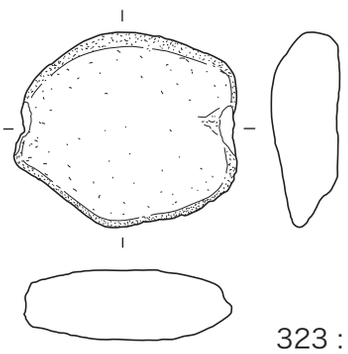
320 : d-116



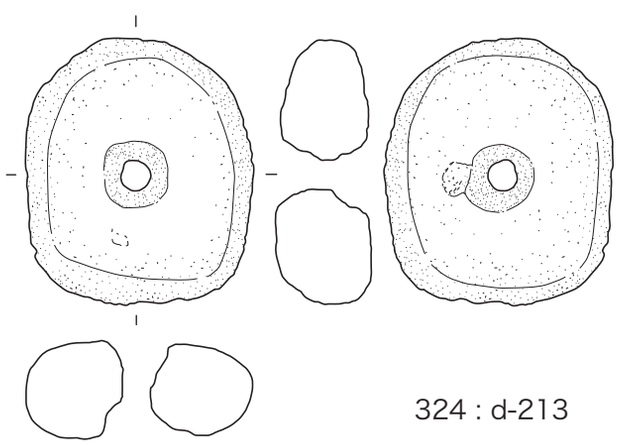
321 : d-212



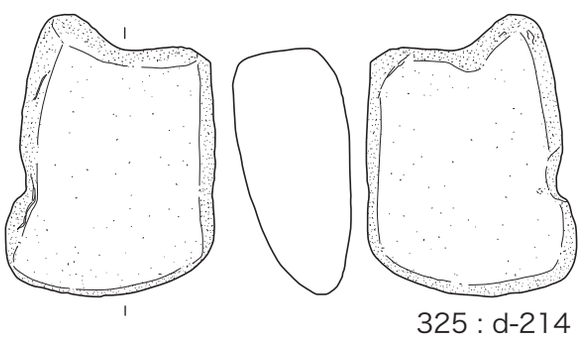
322 : d-170



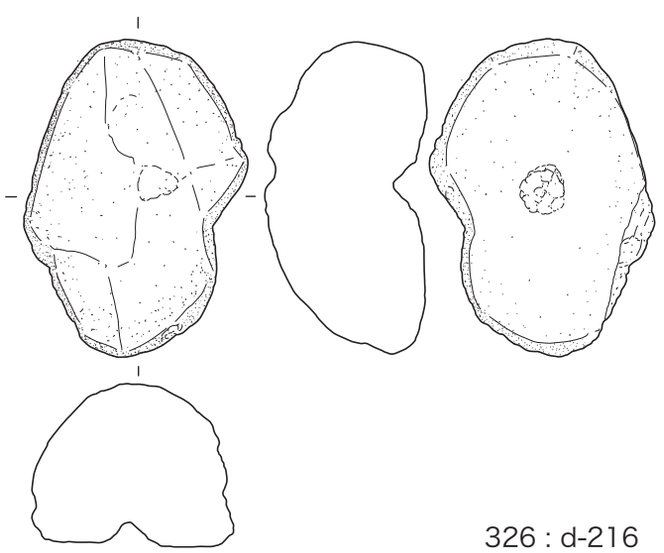
323 : d-041



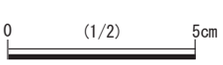
324 : d-213



325 : d-214

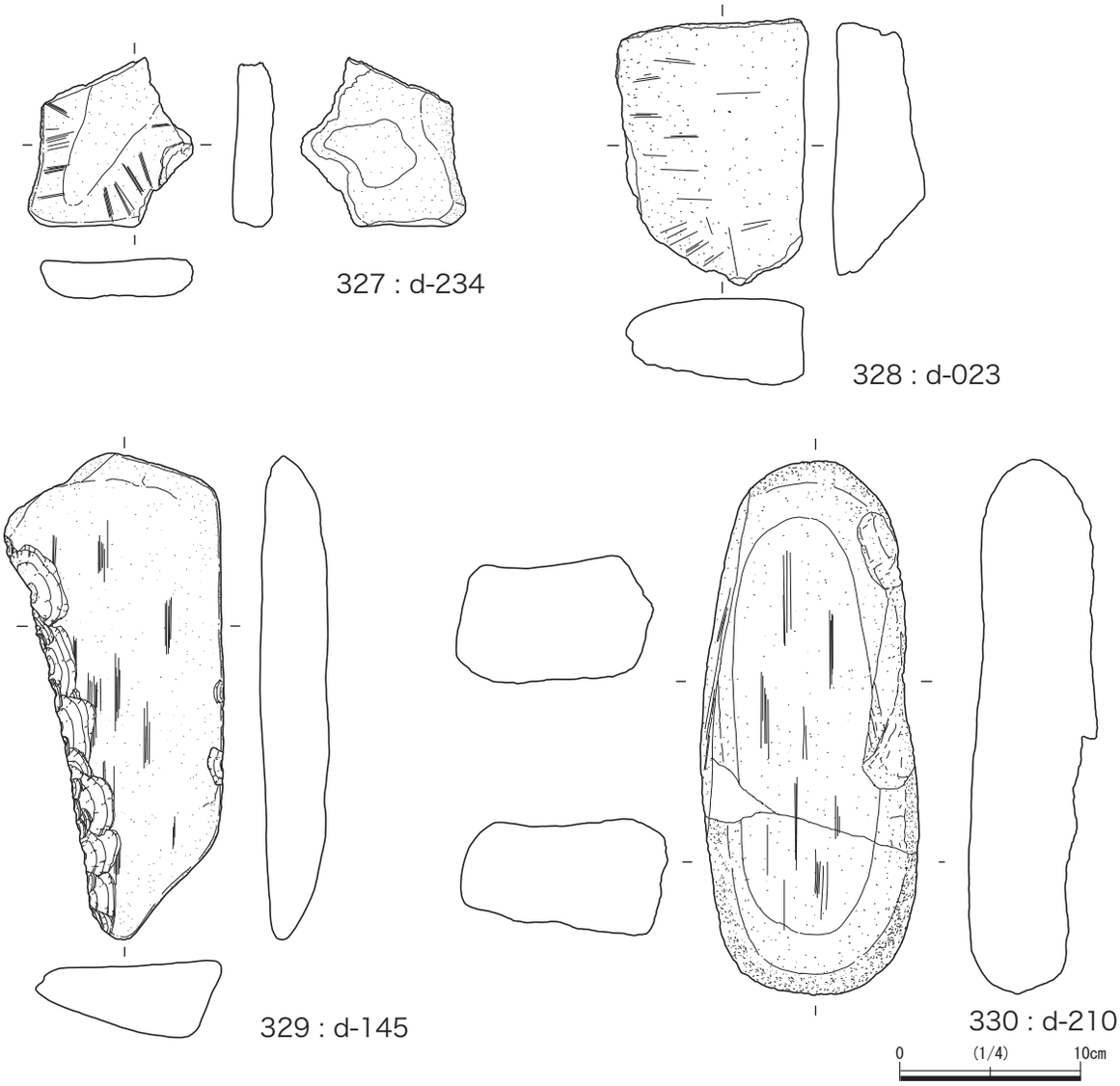


326 : d-216



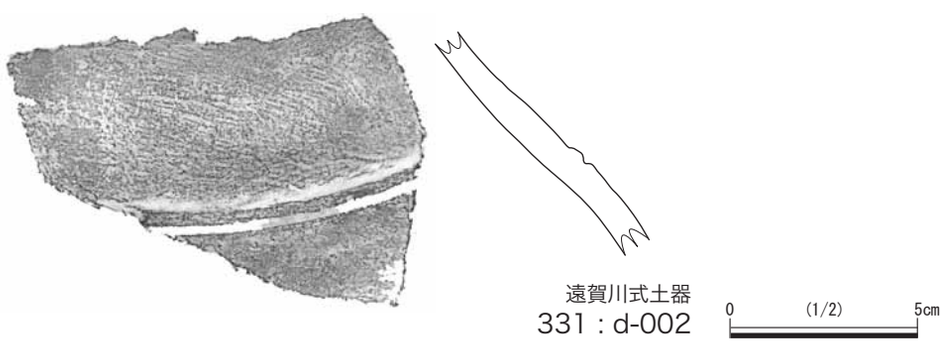
4 地点出土石器実測図（1/2）(7)

4 地点



5 地点

番号	番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位 遺構	産地 材質	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	色調	時期	備考
331	d-002	HM11-5	10D3a			壺					ヘラミガキ	ヘラミガキ、 ヘラケズリ		内：黒色 外：10YR7/4 にぶい黄橙色	弥生前期	削り出し突帯 遠賀川式土器



4 地点出土石器実測図（1/2）(8)、5 地点出土遺物観察表・土器実測図（1/2）

1 地点全景

008SB 住居址様遺構

024SK 出土焼土塊

1 地点主要出土遺物

2 地点全景

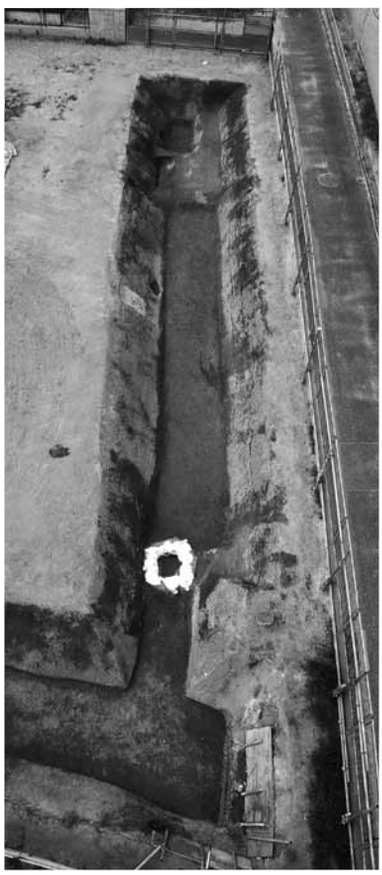
007SX 検出状況

006SX 検出状況

2 地点主要出土遺物

4 地点 004SD 出土の弥生土器

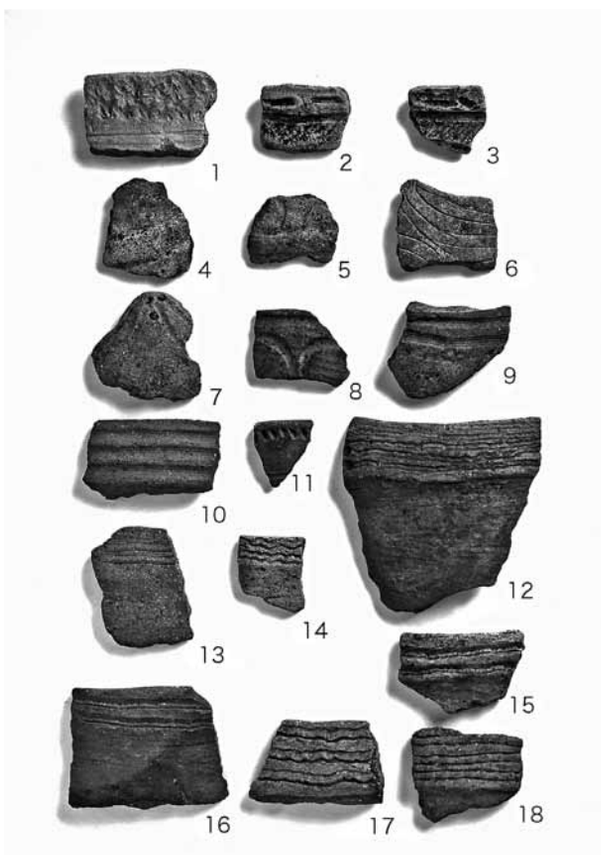
4 地点出土の弥生土器



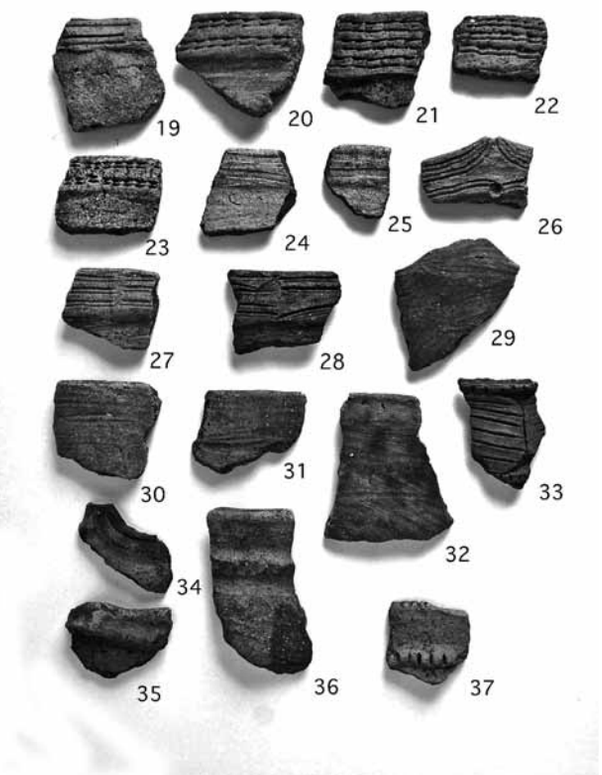
5 地点南北トレンチ

5 地点東西トレンチ

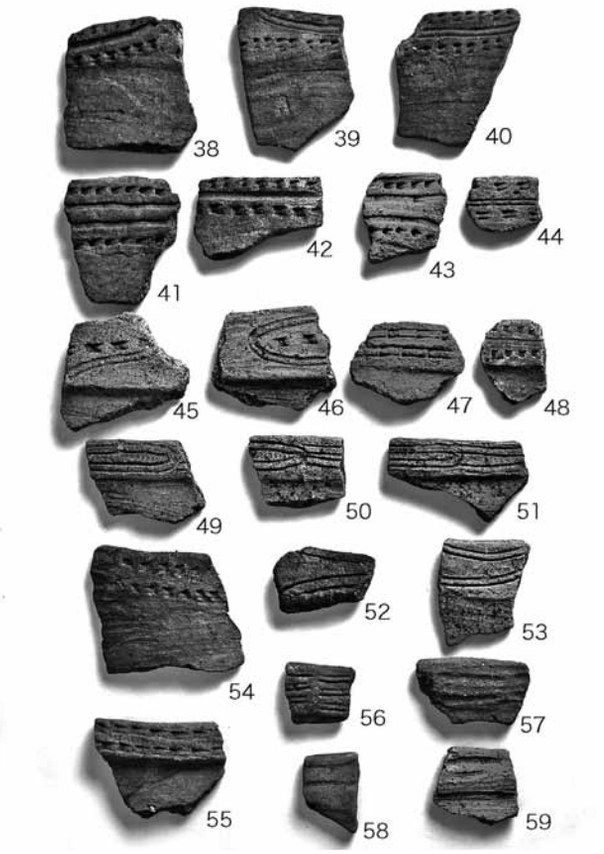
5 地点出土の遠賀川式土器（d-002)



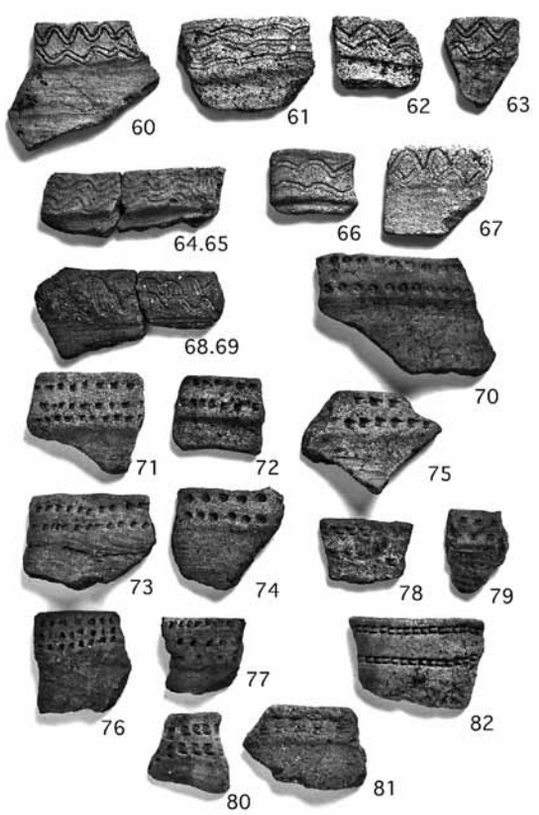
東畑遺跡出土の縄文土器 1



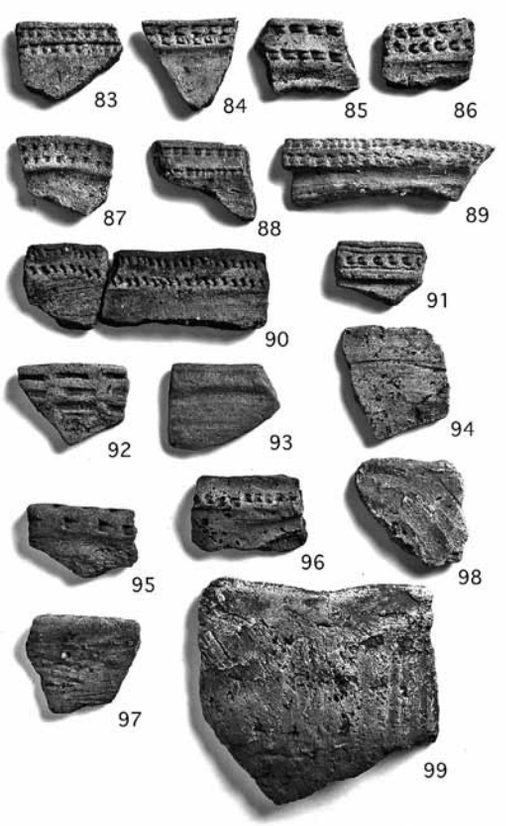
東畑遺跡出土の縄文土器 2



東畑遺跡出土の縄文土器 3



東畑遺跡出土の縄文土器 4



東畑遺跡出土の縄文土器 5

龍雲院遺跡出土の短刀 長さ約 32㎝（d-407)

報告書抄録

ふりがな	はたま・ひがしはた・りゅううんいんいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宮澤浩司・坂野俊哉・花井晶子・西野順二・堀木真美子・パレオ・ラボほか
編集機関	国際文化財株式会社
所 在 地	〒452-0901　愛知県清須市阿原神門95-1　　Tel 052-408-0245
発行機関	愛知県東海市教育委員会
所 在 地	〒476-8601　愛知県東海市中央町1丁目1番地　　Tel 052-603-2211
発行年月日	2013年3月29日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ハタマ　ヒガシハタ 畑間・東畑・ リュウウンインイセキ 龍雲院遺跡	アイチケン　トウカイシ 愛知県東海市	23222	43050	35　1　10	136　53　42	20120628ー20130131	2,037㎡	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑間遺跡 （1地点）	集落跡	中世	土坑・ 住居址様遺構・ 雨乞い遺構	山茶碗・かわらけ・ 瓦・宋銭・砥石	まじない遺構
畑間遺跡 （2地点）	集落跡	弥生・中世・ 近世	土坑墓・土坑・タタキ？	弥生土器（小型台付甕・壺）山茶碗・山皿・古瀬戸・近世陶器	弥生時代の土坑墓
畑間遺跡 （5地点）	集落跡	弥生・中世・ 近世	土坑・貝層	弥生土器（遠賀川式）・土師皿	遠賀川式土器
東畑遺跡 （4地点）	集落跡・墓	弥生・中世	住居址・方形周溝墓・土器棺列・土坑・溝	弥生土器・丸小鉢・各種石器・山茶碗・山皿	弥生期の土器棺列
龍雲院遺跡 （3地点）	集落跡・墓	中世・近世	溝群・土坑墓・土坑・貝層	山茶碗・山皿・かわらけ・中国青磁・砥石・短刀・鐵滓・近世陶器	中世の土坑墓

愛知県東海市
畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告

平成25年3月15日　印刷
平成25年3月29日　発行

編　　集　国際文化財株式会社　西日本支店
〒452-0901 愛知県清須市阿原神門95-1
TEL 052-408-0245
発　　行　愛知県東海市教育委員会
〒476-8601 愛知県東海市中央町1丁目1番
TEL 052-603-2211
印刷･製本　アインズ株式会社
〒453-0804 愛知県名古屋市中村区黄金通2-50
TEL 052-482-2700　　RKCビル5F